
新宿のネコ

ShellieMay

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新宿のネコ

【Nコード】

N8461T

【作者名】

ShellieMay

【あらすじ】

そいつに声を掛けたのは、ほんの気紛れだった…。

何でも屋の柴健司が、新宿の公園で拾った未成年のホームレス『ネコ』…。

成り行きで一晩面倒を見た事で、手離せない存在になってしまった！？

しかし、名前も年齢も、何も明かそうとしない『ネコ』には、ある秘密があつて…。

相変わらず少し…ダークっぽくなってますが…。(^ー^;)

今回は、少しファンタジーも入ってます！？
年の差、体格差、じれじれの激甘ラブ…

拾う

其奴に声を掛けたのは、ほんの気紛れだった。

思いの外仕事が上手く行つて、柄にも無く浮かれていたのかも知れない。

昼過ぎ、仕事に出向く時に見掛けた同じ場所で、夜迄同じ態勢で寝入っている奴が居る…しかも若い…。

「ねえ、君幾らだい？」

脂下がった男が声を掛けても、全く起きる気配が無い。

「ねえ、君…3万でどう？一晩なら、5万出すけど…。」

そう言いながら臍を撫で回す男に嫌悪感を感じ、思わず言葉が口を吐いて出る。

「おいっ！何してる！？」

Tシャツの下に手を入れ様としていた気の弱そうなサラリーマンは、ビクリと手を引いた。

「いつ、いやっ、私は何も…。」

「…何してる？」

ポケットに手を入れたままズイと近付くと、サラリーマンは鞆を抱えたままアタフタと駆け出した。

男が去つても尚、ベンチに丸まってスヤスヤと寝続ける其奴に、俺は頭の上から声を掛けた。

「おい…。」

狸寝入りか…それとも、もしかして逝つちまってるんじゃない…。

「おいっ！？」

寝ているベンチを蹴り上げると、ようやく反応して睨がゆっくりと開いた。

「こんな所で、寝てんじゃないよー！」

「…あんた…誰？」

まだ覚めきっていない瞳で俺を見上げて、気だるそうに尋ねて来る。

「こんな所で寝てると襲われるぞ、お前!？」

「あんだ、サツかよ？」

ようやく起き上がり、ガリガリと頭を掻きながら欠伸をすると、もう一度俺を見上げた。

もう11月だというのに、半袖のTシャツにブカブカの薄い綿のジヤケットを羽織り、Gパンにスニーカーという薄汚れた出で立ち。クシャクシャの髪には枯れ葉が絡まり、顔もなんとなく薄汚れて…ドラムバツクを胸に抱えていた。

ホームレス…いや、そこまではいかないまでも、家出中なんだろうか？

無然と見下ろす俺を見上げる顔がニヤリと笑う。

華奢な首に小さな顔…小さな鼻と口に比べ、印象的なアーモンド型の黒目がちな大きな目…何となくアンバランスな…。

「…って訳でも無さそうだな？」

「え？」

「サツじゃ無いんだろ？」

「ああ。」

「じゃあ、買いたい訳？」

「…お前、ウリ専か？」

「別に…今日寒いし、外で寝るの厳しいかなって思っただけ。」

「…幾ら？」

「買うの？下手だよ…きつと…。」

そう言うつと、足を投げ出しケラケラと笑った。

「別に、そういうつもりは無い。」

「そ…じゃあな、オッサン。」

もう一度ウーンと言って伸びをすると、洋服をパンパンと叩き立ち上がる。

その臍が思いの外小柄なのに、俺は驚いた。

「これから、どうする？」

「ん？そうだな…雨降るっばいしき、ベンチも木の上も濡れるしね。」

ビルの駐車場か、非常階段にでも潜るよ。」

「木の上？」

「ああ、夏は最高に気持ち良いんだ！嫌な奴に襲われる事も無いし……ってか、オッサン何喋らせてんだよ！？」

そう言つて、俺を見上げて又ケラケラと笑った。

「お前、幾つだ？」

「……やっぱ、サツなの？」

「違つつつたろ？幾つだ？」

「んゝ18？」

「嘘だろうが！16か？17か？」

「18にしとこうよ……面倒臭いからさ。」

「全く……飯は？」

「はあ？」

「腹減つて無いかつて聞いてんだ！」

「……奢つてくれんの？」

「ああ……ついでに、ねぐらも提供してやる。」

「……何で？」

「何でつて……。」

「見返り、何要求すんのさ？上手く無いって言つたろ？」

「ガキに見返り要求する程、落ちぶれてねえよ！それに、俺はゲイじゃねえしな。」

「……ふうん。ま、いつか。奢らせてやるよ、オッサン！」

「違つたろ！？ご馳走して下さいだろうが！？」

「いいじゃん！ご馳走したいんだろ？」

見上げる瞳が悪戯そうな光を放ち、鼻に皺を寄せてクシャリと笑った。

黙つて歩き初めた俺の後を、ヒョコヒョコ付いて来るそいつに、俺は尋ねた。

「何食いたい？」

「……温かいのがいいな。」

そう言つて、空を見上げて鼻をならした。

「…やっぱ雨降るよ…。」

馴染みのラーメン屋に連れて行き明るい光の下で見るそいつは、色白で…何だか華奢な女子高生の様だった。

「お前、名前は？」

「…人に名前聞く時は、自分から名乗るのが礼儀って、親から教わんなかったのかよ？」

「年上の…しかも今から食事を奢って貰って、ねぐらまで提供してくれる大人に向かって暴言吐く奴に言われたかねえな。」

「アハハ、全くだ!!」

そうひとしきり笑うと、小首を傾げて俺を上目遣いに見上げた。

「…ネコだよ。」

「何？」

「だからあ、名前。ネコだよ。」

「本名か？」

「さあね。オッサンは？」

「…柴だ。柴健司。」

小首を傾げたまま大きく見開かれたアーモンド型の目が、パチクリと瞬き…次の瞬間涙を溜めてプククと笑い出す。

「学生時代の渾名ってさあ…やっぱり…。」

「ああ…『柴犬』だよ。」

俺は顔を背けて、げんなりしながら答えた。

名前を告げると何時も同じ反応をされる…全く、親ももう少し考えて名付けてくれれば良いものを…。

最も今じゃ、狂犬になっちまったが…。

「柴犬とネコってさあ、凄い組み合わせじゃん！」

そう言つて笑い続ける俺達の前に、湯気を上げるラーメンが置かれた。

頂きますと手を合わせ、意外と上品に麺を啜り美味いと笑った。ひとしきり麺を啜りネコが溜め息を吐いた時、俺は尋ねた。

「家出中か？」

「まあ…そんなところ。」

「何時から？」

「ん？」

「夏からか？」

「何だよ、身上調査？ウザイの嫌いなんだけど…。」

「お前なあ。」

「じゃあ、柴さんは？歳幾つ？」

「…32。」

「意外…ホントにオッサンじゃん！」

「うるせえよ。」

「何してる人？」

「何って…まあ、色々…。」

「堅気じゃ無いんだろ？ヤの付く職業？」

「何でそう思う？」

「だって…。」

鉢に残ったスープを全て飲み干すと、手を合わせながらネコは言った。

「リーマンって感じじゃねえもん。何か匂いが違うだろ？」

「そうか…。」

煙草に火を点けると、ネコはあからさまに眉をひそめた。

「嫌いか？」

「いや…基本平気なんだけど、ちょっと風邪気味でさ…。」

ケホケホと乾いた咳をして、ネコは笑った。

「俺の部屋、煙草臭いぞ？」

「そんなの我慢するさ。一晩だけだし。」

「……じゃあ、そろそろ行くぞ。」

俺達が揃ってラーメン屋を出ると、霧雨の様な雨が降っていた。

「走るぞ、ネコ！」

「…近く？」

「ああ、あの角を曲がったビルの上の2階だ。」

走り込んだビルの上の入口で、遅れて付いてきたネコが激しく咳き込む。

「大丈夫か、お前？」

「…風邪気味だって…言っただけ…ねえか…」

喘ぐ様な息遣いをしながら壁に手を付き、怨めしそうな顔で見上げられ、思わず謝罪の言葉を口にすると、いいよと言ってニヤリと笑われた。

階段を上り入口のドアを開けると、

「何だよ…ココ…」

と、ネコは目を丸くした。

「俺の自宅兼事務所だ。」

もう一度ドアに書いてある字に目を走らせ、

「柴さん…サラ金屋？」

と、窺う様に尋ねる。

「違う…何でも屋。」

「何でも屋？」

「そう…人探しから素行調査、ボディガードから交渉事迄、何でもやる。」

「ふうん…でも…」

「何だ？」

「やっぱ、『ハッピーライフ』ってさあ…有り得なくねえ？」

そう言うのと、無然と睨み付ける俺を尻目に、ネコは腹を抱えて笑い出した。

「…確かに…サラ金と間違っただけで来る客もいるが…」

「ほらあ、そうだろう？ 胡散臭いサラ金みたいだもん！」

「？」

何となく違和感を覚えた俺に、ネコは気付いて舌を出し話を続ける。
「横文字にしたかった訳？」

「何となく付けたただけだ。」

「『幸せな生活』かあ…贅沢な名前！でも名前ってさあ、大切だよ？客の入りに影響するし…。」

「じゃあ、どんなのがいい？」

「自分で考えるよぉ〜！」

入口で言い合う俺の横をすり抜けると、お邪魔しますと言って入り込み、ネコは応接セットのソファに座った。

「苦手なんだ…こういうの…。考えてくれたら泊めてやる。」

何だよと言いながら空咳をして、テーブルの上に置かれた吸殻が山盛りの灰皿を遠ざける。

余程煙草が嫌いらしい。

「横文字がいいならさあ、『柴コーポレーション』とか『オフィス柴』とかの方が良くねえ？」

「何の会社かわかんねえだろ？」

「あ、それ言う？今だってわかんねえだろ？それに、仕事内容だってコレって決まって無いんだろ？」

「…そうだな。」

「そうだなって…そんな安直に変えちまって良いのか？」

「別にかまやしない…。」

「ふうん。」

ネコは立ち上がると、傍に放り投げてあったコンビニの袋に、ゴミを集め出した。

「何だ、掃除してくれんのか？」

「…ゴミ袋出して…後、掃除機か箒！それから、雑巾！」

手際良くゴミを集め窓を開けると、ネコは精力的に働き出し、小一時間もすると部屋は見違える様に綺麗になった。

「掃除してくれる人、居ねえのかよ？」

「基本1人の事務所なんでな。」

そうじゃなくてさあと文句を垂れながら、ドツカリとソファに座り込んだネコにペットボトルの水を放り投げてやると、上手そうに

音を立てて飲んだ。

「シャワー使うか？」

「後でね…柴さん、先に入りなよ。」

そう言いながら、自分のバッグを引き寄せ中から透明のボトルを出し、ザラザラと掌に中身を出して口に放り込んだ。

「…お前、ジャンキーか？」

「ジャンキー？…ああ、違うよ…これ普通の鎮痛剤だし。」

「…それにしちゃ、量凄くねえか？」

「そう？効かねえもん…良く寝れるしね。」

「鎮痛剤を、眠剤代わりに使うんじゃないよ。それより、どっか悪いのか？」

「風邪気味って言ったろ？頭も痛くなるし、熱も少し出るし…あちこち痛むんだよ。」

「病院は？そもそも、風邪気味なら風邪薬だろ？」

「病院なんて、行けると思う？それに風邪薬よりコッチが効くから、鎮痛剤に頼ってんだって！そうか…依存してるって事は、ジャンキーか…。」

そう言いながら空咳をするネコに、俺は先にシャワーに入る様に命じた。

ハイハイと意外な程素直にシャワー室に続く洗面所に消えたネコに、タオルも何も渡して無い事に気付いて、俺は自分のＴシャツとスウェットのパンツ、バスタオル等を持って洗面所のドアを開けた。

「ネコ、これタオルと着替え…。」

そこには、洋服を全て脱ぎ去ったネコが居た。

華奢な肩に腕、細いウエストの上には、少し膨らんだ胸…そして、その下は…

「…柴さん。」

「…。」

「柴さん。」

「えっ!？」

「洗濯機、使ってもいい？洋服や下着、洗っちゃいたいんだ。」

「あ…ああ…後で、俺のと一緒に回して置くから…放り込んで置け。」

「わかった。」

ネコは脱ぎ去った洋服や、バッグの中に入っていた汚れ物を洗濯機に放り込み、シャワー室の中に消えて行った。

何なんだ、一体！？

確かに、自分の性別についてネコが語った事は一度も無かったが…それにしても、あの口の悪さは、少年だと思っただろう！？

悶々と思い悩む俺の背中に、再び声が掛かる。

「…柴さん。」

「なっ、何だ！？」

ブルブルのTシャツをワンピースの様に着こなし、洗い髪にバスタオルを掛けたネコが、スウェットのパンツを手にとって戻って来た。

「駄目だよコレ、目一杯絞ってもデカ過ぎて…。」

「ああ…必要無さそうだな。」

パンツを受け取る俺に、濟まなそうな笑みを浮かべると、ネコは静かな声音で尋ねた。

「…出て行った方が良いたら、洗濯物濡れる前に引き上げるけど？」

「別にかまやしない…。」

「…そう。」

俺がシャワーから出た時、ネコは事務所のソファ―に自分の薄い綿のジャケットを被り、バッグを枕に寝入ろうとしていた。

「そんな所で寝たら、風邪が悪化するぞ！コッチで布団に入れ。」

「だって、ベッド1つきりじゃねえか。」

「…お前さへ気にならないなら、一緒に入れてやるから。」

「良いの？…そうか…柴さん、ナイスバティーで乳のデカイ姉ちゃんが好きっぽいもんね。」

「そうだな。」

「じゃあ、遠慮無く…。」

そう言つてネコは、寢室のベッドに潜り込んだ。

ネコの躰を押しやりながら布団に入った俺は、寝る態勢を取る様に蠢くネコに尋ねた。

「お前、本当の名前は？」

「…ネコだよ…ノラ…ネコ…。」

布団の中で丸まりながらスウと寝入るネコに、俺は溜め息を吐いた。

逃げる

朝、腹と胸の辺りがジンワリと温かい…懐かしい温かさに目が覚めた。

母親が猫好きで、幼い頃から家のそこかしこに猫の居る生活をして来た。

猫を馴れさせるのも飼うのもお手の物だし、未だに外で猫に逢うと必ず向こうから擦り寄って来る。

しかし、人間のネコに迄懐かれるとは思わなかった。

布団の中で丸まりながら寝入るネコは、本物の猫の样だった。

そういえば、顔も猫っぽい。

猫が寝入るのを見るのは昔から好きだ…寝る事がこんなに幸せそうな動物はいない。

寝入るネコの頬を、指の背でそつと撫でる。

朝日で金色に光る産毛の手触りと、まだ10代の肌の張りの心地好さに、そのまま顎の下に指を滑らせ撫でてみる。

流石にゴロゴロと喉を鳴らす事は無いが、ネコは撫でられる程に喉を上げ、手を引こうとするとその手を追って顔を擦り寄せた。

全く猫そのものだな…柔らかい髪をクシャクシャにして頭を撫でながら思っていると、ネコはクシャンと小さくくしゃみをして、続いてケホケホと乾いた咳を繰り返した。

慌てて布団を掛けてやり、ベッドを出て着替えると、俺はネコの耳許で囁いた。

「ネコ…。」

「…ん…。」

「朝飯買つて来るから…お前、好きなだけ寝てろ。」

「…んー…。」

微睡むネコの頭をもう一度撫でると、俺は朝飯を調達に出た。

確かに好きだけ寝てるとは言った…言ったが、昼を過ぎ夕方になっても一向に起きる気配の無いネコに、俺は苛立ちと焦りを感じていた。

度々ベッドの中を覗きに行き声も掛けたが、少し微睡むだけで直ぐに深く寝入ってしまう。

本当は具合が悪いのでは無いかと思ったのは、夜の7時を過ぎてからだった。

寝入るネコの腋に体温計を挟み熱を計ると、38度を越えている。

「ネコ…ネコ…苦しいか？病院連れて行ってやるから、少し待てる。」

「……柴…さん…や…だ…。」

咳き込みながらもネコが抵抗するのを見て、俺は苛立ちながらペットボトルの水を与えた。

「全く…具合悪いなら、何でさっさと言わない!？」

ノロノロと起き上がりながらペットボトルの蓋を開け、ゴクリと喉を鳴らしながら水を飲み、バッグを引き寄せながらネコはゴメンと謝った。

「大丈夫だよ…薬飲んだら…落ち着くしさ。そしたら、ちゃんと出て行くから…」

そう言つて、又薬のボトルからザラザラと錠剤を出して口に放り込んだ。

「そついうことを言ってるんじゃない!」

「怒るなよ、柴さん…何熱くなってんだよ?」

「そつだ…何を熱くなってる?」

「性別、バレちまったから?」

「…そつなのか?」

「それにさあ…。」

ケホケホと咳き込みながら、ネコは水を飲み干した。

「病院行つても、言われる事はわかってんだ…。」

「何処が悪い？難しい病気か？」

「別に…風邪だよ。ただの風邪。」

「嘘だろ！？」

「……大丈夫だって、アンタには迷惑掛け無いよ…柴さん。」

ベッドの奥に座ったネコは、妙に醒めた暗い瞳を見せてニヤリと笑った。

「…腹減ったろ？」

「別に…タベラーメン食わせてくれたじゃん。」

「…待ってる、粥でも炊いて来るから。後、今夜も雨だ…泊まっ
け。」

そう言つてネコの返事を待たずに、俺は寢室を出て行つた。

粥なんて久し振りだと喜んだネコは、それでも茶碗の半分も食べ
れずにご馳走様と言つて再びベッドに潜り込んだ。

息を上げ喘ぎながら丸まって寝ようとするネコに、腕を差し出して
声を掛けた。

「ネコ、それじゃ疲れが取れない。手足伸ばして寝るんだ、ほら…。」

「

腕枕をして体勢を変えてやると、フウと息を吐きながら潤んだ瞳で
見上げられる。

「苦しいんじゃないのか？」

目を閉じるネコに、再び諭した。

「病院行こう、ネコ。医療費の事なんて、心配するな。」

「…やだ…此処がいい…柴さんの所がいい！」

そう言つて、細い腕を伸ばして抱き付いて来る。

ネコの軀をそつと抱き込んでやると、小さな軀は俺の腕の中にスッ
ポリと収まった。

「…柴さん…。」

と胸の中で呼び掛けられる声が、まるで『ニヤーン』と鳴いている
様に聞こえる。

胸に顔を擦り寄せて甘えるネコを撫でてやり、此処に居ていいから

と言ってやると、やがて安心した様に少し穏やかな息遣いで微睡みだした。

ネコが深く寝入るのを見届けると、俺は携帯を取り出し、知り合いの医者往診を頼み込んだ。

しばらくして訪ねて来た医者は、ベッドの上のネコを見下ろし、眉をひそめた。

「…この子と、どういう関係だ？」

「…タベ、公園で拾った。」

「お前なあ。」

新宿の繁華街の中に診療所を持つこの男は、松田研一。

俺とは、中学からの腐れ縁だ。

「俺…前に診た事があるんだ。」

「ネコをか？」

「そうそう…名前聞いても、野良猫としか答えなくてな。その時も確か…。」

そう言うて松田は診察を始め、聴診器を当てると溜め息をついた。

「明らかに悪化してるな。」

「何の病気なんだ？」

「肺炎だ。俺が診たのは夏の終わり…9月の下旬だったかな？男と一緒にやって来て診察を受けた。」

「男？家族か？」

「俺も最初はそう思ったが…客だったみたいだな。病状がわかった途端、捨てられた。」

「捨てられたって、どういう事だ!？」

声を荒げる俺を、松田は事務所の方に引き摺って行った。

「言葉通りだよ。ドロシしたんだ。で、俺はお京に電話して引き取らせた。」

「…そういう事が。」

「お前も直ぐに連絡しろ。あの子は、お京の所の常連らしいからな。」

「なあ…肺炎って、鎮痛剤で治るのか？」

「はあ？何を言っている？」

「ネコは、具合が悪くなると掌一杯の鎮痛剤を飲む。」

「ああ…熱は引くからな…後、胸の痛みも激しいんだろう。」

「そうか…。」

「お京に電話するぞ？入院手続きも取らないと…。」

松田が携帯で電話をし始めると、寝室のドアが開き洋服に着替えたネコが立っていた。

「ネコ、何してる！ちゃんと寝ないと、熱が…。」

「…嘘つき。」

肩で息をしながら壁に寄りかかり、怨めしそうな目だけを此方に向けてネコは言った。

「…ネコ。」

「俺達に否が有るような言い方は、止めてもらおう！」

松田がイライラしてネコに言い放つ。

「何も知らない癖に！」

「所詮親と喧嘩したとか、下らない理由だろ！？とつとと家に帰って、入院させて貰え。」

「…帰れる所なんて…。」

「甘えるな！だったら、大人しく施設に入ってる！お前みたいな奴が…売りやったり薬やったりする若者が徘徊するから、この街が荒れて行くんだ！」

「松田、言い過ぎだ。」

「…大っ嫌い！！」

「何だと！？」

「大人なんて…みんな大っ嫌い！！」

「ネコ…。」

俺がソファから立ち上がると、フラフラしながらネコは靴を履き入口に向かった。

「…捨てるなら…優しい言葉なんて掛けるな！」

振り返ったネコの瞳から涙が流れる。

「えっ？」

「餌やったり、構ったりするなよっ!!」

ドアを開けたネコに、松田が静かな声音で言った。

「お前：このままの放って置いたら、確実に死ぬぞ？」

「…放つとけよ！」

ネコは、暗い廊下を駆け出して行った。

「それでえ？大の大人が2人も居て、そのまま行かせたって訳!?」
来るなり事務所のキッチンで勝手に珈琲を淹れると、幸村京子は遥か上から声を掛けた。

170センチを越える長身のこの女も又、中学からの腐れ縁：若い頃はレディースのヘッドをしていたが、今じゃ新宿署生活安全課少年係の刑事だ。

「お前の所の常連だつて？」

「そう：野良猫ネコちゃん。去年の夏頃に初めて会ったの。新宿御苑の木に登ってる子供が居るっていう通報があつてね。」

京子はケラケラと笑い、珈琲を口にした。

「柴：あの子は松田の言う様な酷い子じゃ無いわよ。」

「わかつてる。」

「名前も住所も、親の事も何も話さない。でも、売りも薬も、グループにも属して無い：ただ街を徘徊してるだけの子供よ。」

「普通補導されたら、ビビって話すだろう？」

「話さないのよ：留置場に泊まらせても、平気で中の掃除する様な子なの。」

「…で、お前が面倒見てるのか？」

「えっ？」

「何度も補導されているなら、身元保証人が居なければ出れないだろ？」

「参ったわね…ネコちゃんには、私の情報屋って事で目溢し願ってるのよ。」

「情報屋？」

「ああいう子達だけのネットワークが有るのよ。その中で、ヤバそうな噂を拾って持って来て貰うの。」

「危険じゃ無いのか!？」

「危険だよ、当然…でも、児童相談所送りになって養護施設に入っても、直ぐに逃げ出すの…まるで、何かから逃げ出してみたいにね…。」

「…。」

「柴、あの子はちゃんとした家の子よ。親も育児放棄とかしてない…親の事も愛してるし、尊敬もしてる。他の子達とは違うわ。」

「ああ…。」

「一度だけ話をしてくれたの。父親は亡くなって、母親は多分入院してるだろうって。自分は…。」

「何だ？」

「母親の言い付けを守っていると聞いたのよ。」

「…。」

京子は立ち上がると、ガラリと窓を開け放った。

「好きな人が出来たって、喜んでただけだね…。」

「好きな人？」

「片思いだって…大きな手の指の長い人だって…何処の誰かもわからないけど、公園で時々見掛ける人が気になって、好きになったって言ってたわ。淡い…初恋なんじゃないかしらねえ…。」

秋の夜風が部屋の籠った空気を吹き飛ばし、その風の音がニヤーンと猫の鳴き声に聞こえた。

翌日から、昔の仲間や街の情報屋を駆使してネコの情報を集めた。ネコが言った様に、中途半端に手を出すのは間違っているとわかつ

ている…だが、このまま放って置けば確実に命が危ない、それに最後に見せたネコの涙が忘れられそうになかった。

京子にも身元引き受けを条件に、情報を流す様に頼み込んだ。グループにも属して無い割には、中性的な魅力も有りネコは結構な有名人だった。

「決まったネグラは、持たないみたいですね…お京姐さんの言う様に、ウリもヤクもやらないそうで、それが面白く無いって奴も居るみたいです。」

「主に、新宿と渋谷を徘徊してるみたいすね…雨の時以外は、殆ど公園に居るって話す。」

「総長、俺、妙な話を聞きました。」

ネコが出て行つて一週間、事務所に昔の仲間が情報を持って集まってくれた。

「どんな噂だ？」

「妙な奴等に追われてたらしいんです…どう見ても、堅気じゃ無い奴等らしいんですが。何かに、巻き込まれてるんじゃないでしょうか？」

「場所は？」

「歌舞伎町の外れ辺りだそうです。」

「何処の組かわかるか？」

「流石にそこまでは…。」

「今の居どころについて、何か情報は？」

「…申し訳ありません。」

「そうか…引き続き、宜しく頼む。」

「あの…総長、そのネコってガキと、どういう…。」

何も答えず、煙草を片手に紫煙を吐きながらひと睨みすると、男達はコソコソと事務所を後にした。

「柴あ、アンタ昔に戻ったんじゃないの!？」

入口で出て行つた男達の背中に手を振っていた京子が、ズカズカと入って来るとドスンとソファに座った。

「伝説の総長様よりも、私としては食らい付いたら離さない、切れるの刑事さんの顔の方が良いんだけど？」

「…両方共、昔の話だ。それより、何か情報が入ったのか？」

「渋谷で見掛けたって子が居てね…かなり具合悪そうしてたって。」

「…そうか。」

「ねえ、柴。アンタ、ネコちゃん見付けて…その後どうするの？」

「…。」

「松田に散々文句言われたわよ！お前達協力してる様だが、彼奴どうするつもりなんだって…。」

「…そうだな。」

「自己満足の為なら、会わせないわ。」

「…。」

「彼女を、これ以上傷付けたく無いのよ。」

「…ああ。」

「引き取るの？」

「そのつもりだ。」

「それから？」

「此処に住まわせて、仕事をさせる。」

「それから？」

「それからって…。」

「それから、どうするの！？」

「…。」

「あのね、柴…わかってる？犬猫じゃない、人間なのよ？」

「…。」

「それから先の覚悟が出来たら、連絡して。」

「何か有るのか？」

「3日後に渋谷で一斉取り締まりが有るわ。渋谷に居れば、多分捕

まるでしょうね。」

「連絡してくれ！」

「だから、ちゃんと…。」

「ああ、面倒見るぞ。」

そうじゃなくなると、京子は首を振りながら溜め息を吐いた。

探す

俺は、ネコの事をどうしたいのか…京子に言われ、仕事中もずっとその事を考えていた。

浮草の様な生活では無く、定住させて仕事をさせ…落ち着く迄は、此処で一緒に暮らせば良い。

仕事は此処の事務でも良いし、俺の口利きが有ればアルバイト位は幾らでも探せるだろう。

その先は、と京子は問う…鋭いな…正直何も考えていなかった。

昔から、お前は考え無しだと松田に怒鳴られ通した。

刑事を辞めたのも、俺の実家の事であらぬ疑いを掛けられ、同僚や上司と揉めた事が原因だった。

全くの事実無根である事を自分で調べ上げて証明し、上司に辞表を叩き付けた。

好きな仕事だっただけに、その後の落ち込みは相当なもので…事務所を立ち上げ、最近やっと浮上して来た所だったのだ。

ネコと出会って懷に抱いて…癒し感があった。

それだけで、探し出して面倒を見よう等と思うだろうか？

『嘘つき』とネコに言われた事がショックだった。

『此処がいい…柴さんの所がいい！』と素直に抱き付いて来たネコを可愛いと思った。

『…捨てるなら…優しい言葉なんて掛けるな！餌やつたり、構ったりするなよっ！』と叫んだネコの言葉に、胸がえぐられる思いがして…。

俺はネコをどうしたい？

そして…ネコはどうしたいと思っているのだろうか？

4日後、京子からネコが見付かったと連絡が入った。

指定された西新宿6丁目にある東京医科大学病院のロビーで、京子は俺を待っていた。

「様子は、どうなんだ？」

「かなり危険だったみたい…渋谷じゃ無くて、新宿駅西口地下広場で発見されたのよ。」

「新宿に居たのか。」

「2日前にね…ホームレスだか行き倒れだか見分けがつかずに、通報が遅れたらしいんだけど…運ばれた時は虫の息だったらしいわ。年齢が若くて、身元を示す物が何も無いって事で、ウチに照会が来たって訳。」

「そうか…。」

「柴…本当に引き取るのね？」

「ああ。」

「今度捨てたら、児童虐待で引つ張るわよ!？」

「おっかねえな。」

「冗談抜きで…。」

「大丈夫だ。」

「わかったわ、付いて来て。」

連れて行かれた病棟の個室で、ネコは酸素マスクや点滴、色々な機械に繋がれていた。

「治るのか？」

「少し時間が係るそうだけど、大丈夫よ。」

「そうか…。」

安堵する俺に、京子は書類を渡して言った。

「取り敢えず、柴の妹って事にしてあるわ。書類書いて出して置いてね。私は、必要な物揃えて来るわ…下の売店で買えるそうだから。」

「ああ、宜しく頼む。」

京子が出て行くと、俺はベッドの横に有るパイプ椅子に座り、ネコの頬を指でそつと撫でた。

ピクリと反応したネコは、俺の方に向けて寝返りを打ち、うつすらと目を開けた。

「ネコ…大丈夫か？」

酸素マスクの下でくぐもった声は聞き取れず、俺が頭を撫でてやるとネコはそのまま目を閉じた。

それから毎日俺は病院通いを続け、ようやく今週末に退院しても良いと医者に告げられたのは、12月の中旬だった。

ベッドの上で医者を見送ったネコに、俺は今後の事を切り出した。

「ネコ、退院した後の生活だな…。」

「柴さん…医療費…。」

「心配するなと言ったろう？」

「でもさ…保険入ってねえし、個室だし、1ヶ月も入院してたし…凄いや、きつと…。」

不安そうに窺うネコに俺は言った。

「俺は、案外金持ちなんだ。」

「やっぱり嘘つきだな、柴さん。金持ちなら、あんなボロビルに住んで無いって。」

「確かに…でも、金持ちなのは本当の話だ。実家が、だがな…だから心配するな。それより、退院後の生活の話だ。」

「…駄も元気になったしさ、大丈夫だって。少しずつ、返すよ…仕事探してさ。」

「どうやって仕事を探す？」

「…。」

「住む場所も無い、保証人も居ない未成年を雇う所なんて、無いだろうが？」

「そりゃ、そうだけど…。」

「ウチに來い、ネコ。」

「でもさ…これ以上、迷惑掛けらんないよ。」

「今更だろうよ？金も、俺の所に来て駄で返せば良いだろう？」

「…駄で？」

訝しげな視線を送るネコに、俺は慌てて訂正した。

「馬鹿野郎！労働だ、労働！事務所で働けて事だ。」

「ああ…ソツチね。」

クスリとネコは笑い、少し寂しげに肩を上げた。

「でもさ…身元もわかんねえ奴雇って、アンタ平気なのかよ？」

「じゃあ、話してくれるのか？」

「…。」

途端にバツの悪そうな顔をして、ネコは俯いた。

「名前も駄目か？」

「…駄目だよ。」

「お前が頑なに自分の身元を隠すのと、お前が怪しい奴等に追われているのは、何か関係が有るのか？」

「何でそれを…ああ、そうか…アンタ、元デカだったんだよな。」

「お京に聞いたのか？」

「オキヨウ？」

「幸村刑事だ。」

「ああ、そうそう…京子さんだもんな。」

「なあ、ネコ…俺の仕事、ボディーガードもするって言っただろう？」

俺ならお前の事を、奴等から守ってやれるぞ？」

「…無理だよ…筋者だって、気付いてんだろ？」

「なら尚更だ。見付かった時、お前どうするつもりだ？」

「それは…。」

「ソツチ方面のコネも持つてるんだ。安心しろ。」

「本当に？」

「ああ…表から裏迄顔が広くなきゃ、何でも屋なんか出来ねえからな。」

「危なくねえの？」

「お京から聞いて無いのか…自分で言うのも何だが、俺は結構強いんだぞ？」

大きな目を見開いた後、ネコはクシャリと顔に皺を寄せて笑った。

「なあ、柴さん…何で…引き取ってくれんの？」

「それは、お前が…」

「え？」

「…お前が言っただろう？」

「…何か…言っただけ？」

「…あの日…俺の所がいいと…お前が言っただろう…」

「っ！？柴さんっ！？」

俺の言葉に真っ赤になって俯くネコに、俺は尋ねた。

「俺の所がいいんだろ？」

しばらく考えあぐねて、コクンと頷くネコの頭を撫でてやる。

「宿無しじゃ無くなるんだ…もう、無理して男言葉使っんじゃねえよ。」

「…やっぱり、無理があつた？」

「まあな。」

「そっか…」

ネコはベッドの上で正座すると、手を付いて俺に頭を下げた。

「柴さん、お世話になります。」

「おうよ。」

「何か、気が抜けちゃったよ。」

そう少女らしく笑うネコに、俺は再び尋ねた。

「お前、今年幾つになる？」

「言わなきゃ駄目？」

「其位なら良いだろう？」

「…16。」

「じゃあ、家を出たのは！？」

「…14。」

「名前…教える。」

「だから…」

「下の名前…呼び方だけでいいから。」

「…絶対に秘密なの！！人前で呼ばないって、約束してくれる？」

「ああ。」

「絶対だよ!？」

「わかった、約束する。」

「『ナオ』っていうの…。」

「そうか…いい名だ。」

そう言つて、ネコの頭を引き寄せ、背中に手を回して抱いてやる。

「長い間…辛かったな、ナオ。」

そう声を掛けると、

「その名前で呼ばれるの…2年振りだよ…。」

そう言つて、ネコは俺の胸で泣いた。

退院の日、俺に荷物を預けると、京子とネコは2人で出掛けて行つた。

夕方、ネコを探すのに骨を折った奴等への礼と、ネコの退院祝いを兼ねた食事会の席に現れた時、全員が呆けた顔をして2人を迎えた。

「総長…此方が…その、ネコさんですか？」

「…ああ。」

「何よ、揃いも揃つて！何か言う事無い訳!？」

京子が腰に手を当てて怒鳴ると、ネコはクスクスと笑い、

「皆さん、本当にお手数をお掛けして、申し訳ありませんでした。」と、深々と頭を下げた。

「あ…イヤイヤ、俺達は何も…。」

「そうです、総長の命令は絶対なんで…。」

と口々に言つと、俺の隣の席にネコを誘つた。

「どう、柴？ネコちゃん、可愛いでしょう？」

得意気な京子が、ニヤリと笑つて俺を覗き込んだ。

ざんばらだった髪は綺麗にカットされ、Ｔシャツに黒のVセーター、赤いチェックのスカートにスパッツという出で立ちは、渋谷辺りの女子高生そのものだ。

「素材が良いから、何着せても似合うのよ…！ っいつい張り込んだわよ。必要な物は、一通り揃えといたから。」

そう言つて、京子は俺が預けた現金封筒をそつと返した。

「済まなかつたな。」

「良いわよ、いつでも言つて！ 女同士の買い物つて、楽しいから！ ね、ネコちゃん？」

ハイと答えながら、俺を窺う様に見上げるネコに、

「良く似合う…！ 良かったな、ネコ。」

と言つて頭に手を置くと、嬉しそうに頷いた。

「アンタ達、ネコちゃんは私の妹分でもあるんだからね！ 手え出したら、承知しないよっ！？」

「わかつてますつて、お京姐さん！！ 総長にも、散々言われてるんつすから！」

「総長？」

ネコが、不思議そうに首を傾げると、座に座つた1人が語る。

「そうです。此の方は、関東連合の歴代総長の中でも飛び抜けた、伝説の総長なんですよ！！！」

「関東連合つて？」

「それはねえ。」

耐ハイのジョッキを片手に、京子がズイっと顔を出す。

「関東最大の暴走族の名前よ。」 柴は、そのヘッドやってたの。」

「柴さん、族してたんだあ！」

目を見張るネコに、俺は苦笑いを漏らした。

「昔の話だ。」

「強かつたのよ。喧嘩番長で、迎える相手を千切つては投げ、千切つては投げ…」

「お前も一緒だろうが？ レディースのヘッドしてたんだからな。」

「京子さんも！？」

「コイツは鎖振り回してたんだ…」

「…よくそれで、刑事になれたね？」

「その腕を見込まれたって事かしら？」

「さあな。」

フフンと笑う京子に、ネコは無邪気に問いかけた。

「京子さんと柴さんって、恋人同士なの？」

俺と京子は酒を吹き出し、他の奴等は水を打った様に静まり返る。

「じよっ、冗談じゃ無いわよ！こんな奴！？」

「ネコ…えらい誤解だ。」

「そうなの？」

「そうよ！コイツとは、中学の時から腐れ縁で、元同僚だっただけの事よ！」

「ふうん。」

ネコが意味深に笑うのを見て、俺はトイレに立った。

帰って来ると、座敷の入口で帰り支度の京子と鉢合わせた。

「どうした、もう帰るのか？」

「嫌な奴等が来たからね…アンタもネコちゃん連れて、とっと帰んなさいよ！」

座敷の中には、派手な数人の女達が乱入し、俺が入るとすかさず両側から腕を絡めて席に誘う。

その様子を見て、ネコは何も言わずにそっと下座に移動した。

「柴さあん、久し振りじゃない！どうしてたのお？」

「色々とな。」

「噂で聞いたわよ。あの子なんでしょ？探してた子って。」

「ああ…。」

ネコは下座に座っている奴等と何やら談笑し、メニューを見ながら注文をしていた。

「可愛い子ねえ…妬けちゃうわ。」

「あら、まだ尻の青いガキじゃない！柴さん、あんなの好みなのお？」

「マリちゃん、失礼よ。ごめんなさいね、柴さん。マリちゃん近頃

柴さんが来て下さらないから、お冠なのよ。」

「だあって、柴さんはみんなの物なのにい！」

「ネコちゃんと仰るのね。さっきご丁寧にご挨拶頂いたのよ？」

「そうか。」

「でさあ、柴さん…あの子、事務所で飼うのお？」

下座で一心不乱に銀杏の皮を剥いていたネコの手がピクリと止まり、一緒に居た奴等が女を睨み付ける。

俺は何も言わずに立ち上がると、買い物袋をかき集めて言った。

「ネコ、帰るぞー！」

ネコは黙って立ち上がり、一同に頭を下げて大股で部屋を出る俺の後を慌てて追い掛けて来た。

「柴さん…柴さん、どうしたの？」

「…何でも無い！」

「みんなまだ飲んでたのに、置いて来て良かったの？」

「ああ、大丈夫だ。」

「何か…怒ってる？」

小走りで付いて来るネコが小さく咳き込むのを聞いて、俺は慌てて歩を止めた。

「大丈夫か！？」

「…平気だよ。」

「悪かった、今日退院したばかりなのに、無理させたな。」

「何謝ってるの？変なの、柴さん。」

「だがな…。」

「今日は、楽しい事ばかりだったよ？ありがとう、柴さん！」

「…そうか。」

事務所兼自宅に帰り着くと、荷物を下ろして寝室のドアを開けた。

「さて、これからどうするか…。」

「何が？」

「お前の部屋を確保しないとな。隣の部屋も借りるかな…。」

「何で？私、此処でいいよ？」

「そういう訳にも行かないだろ？」

ネコは、いきなり俺の腰に手を回し、真剣な表情で見上げた。

「…此处がいい。」

ネコの瞳から涙が溢れた。

「…ネコ。」

「柴さんの所がいい！」

貰う

腕の中でネコが抱き付いて穏やかな寝息を立てる…俺はその背中と腰を抱き寄せた。

素直に人恋しいと感情を溢れさせるネコに、戸惑いながらも受け入れた俺は、その腕の温もりにそれ以上の想いが沸き出しそうになるのを抑え込もうとしていた。

それにしても、この抱き心地は堪らない。

しっとりとした肌の柔らかさ、腕に添う躰の軟らかさ、腕の中に収まる大きさといい、若い躰から立ち上る芳香といい…。

頭の中で警鐘が鳴る…ネコは16歳の未成年で、そんなつもりで抱かれている訳では無いのだ。

ヤバイな…そう思った時には、もう遅かった。

布団の中で寒いと懷に抱き付いて来る様に、寝室の暖房をわざと切る大人の小狡さを企てている自分がいる。

微睡むその頬を撫でると、手を追って顔を擦り寄せて来るその仕草に口許を綻ばせた。

「…おはよう、柴さん…もう起きてたの？」

「ああ…寒くなかったか？」

「暖かかったよ…柴さん、体温高いの？」

胸に顔を擦り寄せられゾクリと背筋に走る感覚に慌て、気付かれまいとネコの鼻を摘まんで答えた。

「さあな。」

酷いと笑いながら腕をすり抜け、寝室を出て洗面所に向かうネコを見送り、溜め息を吐いた。

俺は…いつ迄耐えられるだろう？

師走の慌ただしい空気は、商店街から少し離れたこのビル迄風に乗

ってやって来る。

クリスマススイブの土曜日、事務所の応接セットでのんびりとネコと共に遅めの朝食を取っていると、突然入口のドアが開いて黒服の男達がドヤドヤと入って来た。

どう見ても堅気に見えないその一団に、ネコは飛び上がって事務所の窓を開け放ち、空中にダイブした。

「ネコっ!？」

慌てて窓に駆け寄ると、下に停めてあった黒のセダンのボンネットに跳ねたネコは、転がる様に逃げようともがいていた。

「何だ？何があった？」

黒服の1人が、同じ様に窓から身を乗り出し下を覗き込んだ。

「クソッ!!飛び降りたんだ!!」

「飛び降りたって…此処は2階だろうよ？あーあ、ボンネット凹ませやがって…」

俺が入口を飛び出し階段を駆け降りると、セダンの横で黒服の男達に羽交い締めになれたネコが大暴れしていた。

毛を逆立てた猫の様に正面から捕まえ様とする男を蹴り上げ、後ろから羽交い締めにした男の腕に噛み付いている。

「待て、待てっ!!離してやってくれ!!」

男達が腕を弛めた途端、後ろの男の喉を引っ掻き、身を翻して逃げようとするネコを抱き締める。

「ネコっ、ネコ…落ち着けて!此奴等、お前を捕まえに来た奴等じゃ無い!大丈夫、大丈夫だから…」

フーッと息を荒げるネコを何とか落ち着かせ事務所に上がると、背後に黒服の男達をズラリと従えた男がドツカリとソファァーにふんぞり返っていた。

「やっと帰って来たか。」

「…来るなら、一報寄越してからにしてくれ。」

ビクビクと震えるネコを見詰めてニヤリと笑った男は、ヒョイヒョイと手招きをする。

「来いよ、仔猫ちゃん。」

「…おい。」

「良いじゃねえか…コツチは、車をお釈迦にされたんだ。」

そう睨み付けると、もう一度ネコを呼んだ。

「来るんだ、仔猫ちゃん！」

ネコは俺の顔と目の前に座る男の顔を見比べ、不安そうに男の前に立った。

「車をお釈迦にしたお仕置きをしないとなあ？」

男はそう言って自分の膝を叩き、ネコにそこに座る様に指示した。恐る恐る膝に座りながらも目だけは男を睨み付け、男に顎を引き上げられ親指で唇に触れられると、ネコは思い切りその指に噛み付いた。

「オイツ！？」

黒服達が熱り立つのを制した男は、ネコと目を合わせて思いきり大きな笑い声を上げた。

「いいなあ、健司！！この気の強さ、気に入った！！」

「…いい加減にしろよ、兄貴。」

俺の言葉を聞いた途端、ネコは噛み付いていた指を離して振り向いた。

「ネコ、それは俺の兄貴だ。」

みるみるネコの大きな瞳が涙で潤み、兄貴の膝の上で大粒の涙を流しながら声を上げて泣き出した。

「いい加減、可愛い物を見たら泣かす迄弄くる癖、治せよ。」

「いやあ、堪らんだろうよ！？こんなに可愛くちゃ尚更なあ？」

そう言って泣きじゃくるネコの髪をグシャグシャにして撫でると、キュウツと抱き締める。

慌てて奪い返して同じ様に膝に乗せると、ネコは俺の首に腕を回して顔を埋めて泣き続けた。

「抱き心地も良いじゃねえか。」

「うるせえよ…で、何のようだ？」

「いや、今度の正月はコッチに来ないかと思つてな。」

「行かねえよ…わかつてんだろぅが？」

「まあな…じゃあ、温泉旅行なんてどうだ？」

「断る。自分達だけで行つてくれればいいだろう？」

「つれねえなあ…。」

兄貴はニヤニヤと俺達の様子を見ると、

「一緒に暮らしてるのか？」

と聞いた。

「ああ…。」

「じゃあ、2人で行つて来い。予約はしておいてやる。」

「…。」

「その子を泣かした詫びだ。どうだ、仔猫ちゃん？」

何も言わずに怯えるネコの代わりに少し考えさせると兄貴に伝えると、明日返事を寄越せと大挙して押し掛けた一団は帰つて行つた。

勿論、帰りがけにネコの髪をグシャグシャにする事は忘れない…。

「怖い思いさせて悪かったな。」

泣き止んだネコは、膝に乗ったまま微かに震え続けながらも首を振つた。

「柴さんのお兄さんつて…ヤクザ？」

「そうだ。あれでも組長でな。」

「だから、ツテが有るんだ。」

「そう…俺とは腹違いの兄貴なんだが、何だかんだと可愛がつてくれてる。」

「実家が、お金持ちつて…。」

「兄貴の事だ。」

「そうなんだ…。」

「嫌か？」

ふるふると首を振りながら、ネコは少し強張った笑顔を見せた。

「車も、あの人達も…平気？」

「ああ、気にするな。それより、お前駄平気なのか!？」

「…多分。」

上着をめくり上げて駄と腕とを確認する。

骨は折れては居ないようだ、肩や腕、腰が赤くなって腫れていた。
「もう二度と窓から飛び降りたりするなよっ！！たまたま下に車が
有ったから良かったが、地面に激突してたら死んじまう所だったん
だぞ！？」

「…うん。」

「全く…肝が冷えたぞ…絶対だからなっ！？」

「…わかった…ごめんなさい。」

ネコの駄に湿布を貼ってやりながら、俺は優しく尋ねた。

「温泉どうする？」

「2人で？」

「何だ、不満か？」

「怖い人達、来ない？」

「多分な…。」

「来るかもしれない？」

「ん…。」

「来るんなら…ヤダ。」

余程怖かったのか、ブルリと震える。

「そつだ、京子さん達も誘う？」

俺が眉を寄せるのを見て、ネコは不味い事言っただろうかと不安な表情を見せた。

「別に構わないが…基本ヤクザと刑事が同席するのは不味いからな。」

「

「じゃあ、族の皆さんは？」

「…馬鹿騒ぎしたいのか？」

「…うん…怖いだけ。」

「ネコ…大丈夫だから…兄貴の組の奴等は、お前を守ってくれる。」

「本当？」

「ああ…その内に事情を話すから…打ち身に良く効く温泉を頼もう。」

「
ウンと頷いたネコは、その前に話さなきゃね…と、小さく呟いた。

クリスマスプレゼントにと携帯ショップに連れて行き、ネコに機種を選ばせる間に、俺は自分の機種変更の手続きを取っていた。

「どれにするの、柴さん？」

「さて、どうするかな？」

「一緒のがいいな…。」

「一緒の？」

「ウン…駄目？」

同機種の色違いを2台手続きしている間に食事をし、帰り道にある雑貨屋で歩を止めた時、ネコは不思議そうに俺を見上げた。

「…ストラップ、選んで来い。」

「良いの!？」

「ただし、2本だ。」

「2本？」

「…一緒のが良いんだろ？」

ネコは嬉しそうに頷くと、店の中に走って行った。

家に帰り、初めて携帯を持つネコにあれこれと教えると、流石に若者だけあって直ぐに操作を飲み込んだ。

「柴さんから貰うばかりで、私から何にもプレゼント無いよ…。」

俺の携帯にストラップを付けながら、パジャマ姿のネコが申し訳無さそうに俺を窺う。

「…そんな事は、無いんだがな…。」

ベッドの上に座った俺が呟くと、ネコは俺の所に這って来て再び窺う。

「私、何にも上げてないよ？」

「飯作ったり掃除したり…事務所の事も手伝い始めたろう？」

「クリスマスプレゼントの話だよ!」

「何か、贈りたいのか？」

「って言っても、たいした物は上げれないけどね…。」

そう言うネコに、俺は這ったままの躰を起こさせ、布団の上に座らせた。

「目、閉じてろよ。」

「何？」

「良いから…。」

正座をして目を閉じたネコをやんわりと抱くと、俺は顎を引き上げてその唇に軽くキスをした。

「…しうわはん…。」

唇を重ねたまま、ネコが話を始めたので、俺は仕方無く唇を離す。

「…何だ？」

「…柴さんってさあ…恋人居ないの？」

俺は顎を上げたまま目を閉じたネコの顔を見詰め、ハアと溜め息を吐いた。

「お前…この状況で、このタイミングで、それを聞くかあ？」

薄目を上げたネコは、目を開けても良いと判断したのか、真剣な眼差しで俺を見上げて言った。

「だって…大切な事だよ？」

「…萎えた。」

「だって…。」

赤くなりながら、ネコは力説しだす。

「お付き合いしてる人居たら、その人に申し訳無いし…こういう事って…恋人同士しかしちや駄目なんだよ…。」

「…居ねえよ、恋人なんて。見てたら、わかんたろうが…。」

「だって…柴さん格好良いし…モテるだろうしさ。この前だって…。」

「

「この前？」

「綺麗なお姉さん達が…言ってたし…。」

「…気にしてたのか？」

「柴さん、私が来てから夜飲みにも行つて無いし…何か…悪いなつて。」

赤くなつて下を向き、モジモジと恥じらうネコの頭に手を乗せて、俺は言った。

「俺は、自分がしたい様にしか行動しない男だ。お前が、そんな事で気に病む必要は無い。それよりも…だ。」

「何？」

「嫌じゃ無かつたか…さっきの？」

再び真つ赤になつたネコは、しどろもどろで答えた。

「い、嫌じゃ…無いよ…し、柴さんの事…好き…だし…でもさあ…。」

「なら、今度こそ目を閉じてろ。」

「…え…。」

「クリスマスプレゼント貰うんだからな？」

「…あ…うん。」

「…喋んなよ。」

大人の狡さを駆使して、俺はもう一度目を閉じたネコの唇を奪う。軽く啄む様なキスをして、頑なに歯を食い縛るネコの鼻を摘まんだ。息苦しさにより口を開けた途端、舌を侵入させて貪る。

「…ンンッ。」

迎え入れた舌に逃げ惑うネコの舌と臍を、しっかりと抱き締めて絡ませる。

空気を求めて喘ぐ口を覆い尽くし、再び鼻を摘まんでやると、ようやく鼻で呼吸を始めた。

強張っていたネコの臍が、ふにやりと力を抜き俺の腕に添う。

舌を絡めピチャリという水音に僅かに震えるネコの臍と、上気した顔の眦に涙の雫が溜まつた時、口唇を味わい尽くした俺はゆっくりとネコを解放した。

「…柴さあん…。」

トロンとした瞳で見上げるネコを布団に入れてやり何時もの様に抱

き寄せると、やがてネコは穏やかな寝息を立て始めた。
大人って奴は…全く…。

翌日、ドラッグストアで湿布を買った俺が家に戻ると、京子がベッドの枕元に座りネコの頭を撫でていた。

「来てたのか？」

「ネコちゃんに、クリスマスプレゼント渡しに来たのよ。それより…ちよつとコツチに来なさいよ。」

京子は俺を事務所に引き摺ると、襟元を締め上げた。

「しいゝばあゝっ!？」

「何だ!？あのアザか？あれは昨日、ネコが窓から飛び降りて…。」
「それは聞いたわよっ!！」

「じゃあ何だ!？」

「アンタ…クリスマスプレゼントって、ネコちゃんの唇奪ったって!？」

「あ…。」

「あ、じゃ無いでしょ!？全く…。」

「喋ったのか？」

「喋ったわよ!！」

「全部？」

「全部…って、アンタその先も遣っちゃったなんて事!？」

「それは無い。」

「アンタねえ…。」

京子は襟元を離すと、疲れた様にソファーに座り込んだ。

「仮にも、この間迄警察官だったんでしょ？」

「…もう違う。」

「マジなの!？」

驚いた様に見詰めた京子は、ハアと溜め息を吐いて言った。

「無茶な事するんじゃないわよ!？ネコちゃんには、嫌な事された

ら金蹴りして、私に直ぐ連絡する様に言っといたわ。」

「そうか。」

「そんなつもりで引き取ったとは…私もまだまだ読みが浅いわね。」
そう言って、京子は苦笑した。

バレル

「凄いよ、柴さん！露天風呂も有るんだって！？」

小さなロビーに置かれてあるパンフレットを見て歓声を上げるネコを見詰め、連れて来て良かったと安堵する。

昼過ぎに東京を発ち、レンタカーを走らせて南房総の宿に着いたのは、夕方にはまだ早い時間だった。

小さいが設備の整った料理旅館：本館には客室の他、宴会場や大浴場や露天風呂もあり、広い庭に離れも数戸建っている。

「柴様のお部屋は、離れをご用意させて頂いております。」

「そうですか。」

「本日のお食事は、お部屋の方に運ばせて頂きますが、明日からはどういたしましょう？」

「は？」

「明日からは、皆様と一緒に宴会場の方で宜しいですか？」

…なる程、そう言う事か。

「いえ、ずっと部屋の方でお願いします。」

「承知致しました。」

「あの…明日からは、何名来る予定なんでしょうか？」

「佐久間様ですか？約20名と…当日変動が有るかもしれないと言う事で、本日より正月三箇日は、貸し切り頂いておりますから、どうぞごゆっくりお寛ぎ下さい。」

につこりと笑う支配人に愛想笑いを送ると、仲居が荷物を持って離れまで案内してくれた。

「うわぁ…。」

高級な数寄屋造りの日本家屋に入ると、玄関間につき12帖の和室、小さな次の間に続いて8帖のベッドルームが有り、洗面所に内風呂の他に広縁の向こう側には専用の露天風呂まで有った。

「…凄いな。」

「いつもは、佐久間様にご利用頂いております。露天風呂、内湯共に、源泉掛け流しの黒湯でございます。」

「黒湯？」

「此処の湯は、ナトリウム炭酸水素塩泉でしてね。コーヒー色の黒湯で、入浴中のトロつとした肌触りと浴後の爽快感が特徴なんですよ。『美肌の湯』として評判が高いんですが、飲めば慢性消化器病、糖尿病、通風、肝臓病などに効果があるんです。飲む温泉は、本館の方に用意しております。今回は佐久間様より、こちらの奥様がお怪我をなさっているという事でしたので……。」

「おつ、奥様あ！？」

「はい……美肌効果の他、保湿効果、冷え性、神経痛、痛風、リウマチ、打ち身、捻挫、筋肉痛、運動麻痺などにも効果的だとお伝え致しましたら、是非にという事でございました。浴衣は、こちらにをご用意致しました。女性用の浴衣は、全柄用意せよとのご要望でしたので、10枚ございます。どうぞ、好きなだけお召しになって下さい。」

「……ありがとうございます。」

「お食事は、何時頃にご用意致しましょう？」

「ネコ、腹減ったか？」

首を振ったネコを見て7時に夕食を頼むと、仲居は承知しましたと退室した。

「露天風呂入るか？」

「……奥様って言った。」

「ああ……兄貴が、そう説明したんだろ。」

「絶対怪しいと思われてる！」

「何が？」

「だって……。」

ネコは立ち上がり、ベッドルームのドアを開けると、中に置かれてあるキングサイズのベッドを指差した。

「此処、スイートルームって事でしよう！？」

「そうだな。」

「…変だよ、やっぱり。」

何が言いたいのかは、わかるが…此処は納得させて、これから先の事を考えさすチャンスかもしれない。

俺は足を投げ出して座ると、少し涙目になって膨れるネコを呼び寄せた。

「こつち来い、ネコ。」

手を差し伸べてやると、ネコは素直に俺の手を取り股の間に座り込んだ。

自分に背中を預ける様に座らせて腰を抱き込んでやると、クスンと頭をもたげてくる。

「お前が気に入らないのは何だ？」

優しく聞いてやると、ネコはモジモジとして呟いた。

「柴さん…援交親父だと思われてるよ…きっと。」

「そうだな。」

「嫌じゃ無いの!？」

「今更だろう? 街で歩いていても、思う奴はそう思う。」

「…嫌だよ…柴さんが、そんな風に思われるの…。」

「俺の事か？」

「…ウン。」

「お前は？」

「私は…そう思われるの慣れてるし…。」

クスリと笑いながら、寂しい瞳でネコは俺を見上げた。

「でも…やっぱり、これは良くない様な気がする…。」

「何が？」

「家で一緒に寝てるから、今迄何とも思わなかったけど…やっぱり変だよな? 一緒の部屋に泊まるのも、本当は変なんだよ…。」

「それこそ今更だろ? それとも、別々がいいのか？」

「…。」

「一緒にじゃなくていいのか？」

「…一緒にいいけど。」

「なら素直に、気持ちのまんま居ればいい。余計な事は気にするな。」

俯いて俺の手を弄びながら頷くネコに、俺は尋ねた。

「お前、これからどうしたい？」

「どうしたいって？」

「これから先の生活も、お前自身の事も…。」

「…わかんない。」

「住む場所と仕事は手に入れた。次は何がしたい？」

「別に無いよ…逃げなくていいって、柴さん言ってくれたから。」

「それだけ？」

見上げたネコが、甘える様に言った。

「柴さんと一緒に居れたら、それでいい。」

…可愛い過ぎるだろう…。

ネコの背中を支える様に抱き、その場に寝かせ、その身に覆い被さる。

「…もつと望め、ネコ。」

「え？」

「俺は、お前が望む事…何でもしてやるから。」

「私が望む事？」

「そう…お前の望み…欲しい物は何だ？」

「何も無いよ…柴さんに、いっぱい貰ったよ？」

俺はネコの首筋に顔を寄せ、耳許に囁いた。

「…もつと食欲になれ…ネコ。」

「だって…柴さん、欲しい物も、して欲しい事も…全部くれてるよ？これ以上、何を望むの？」

俺は堪らなくなつて耳朶に軽く歯を立てると、ピクリとネコの体が跳ねる。

そのまま顎のラインに唇を這わせ、ゆっくりと顔を離してネコを見下ろした。

「…お前、俺の事…どう思ってる？」

大きく見開かれた瞳が俺を見上げ、微かに揺れる。

「俺に…どうして欲しい？」

ゆっくりと顔を近付け、唇が触れる瞬間、

「…ナオ…。」

と呼び掛けた。

息が吸い込まれた瞬間、舌を口腔内に侵入させ上顎を撥り舌を絡めて軽く噛む。

息を上げ上気したネコの腰を抱き寄せ、首筋に唇を当てた時、俺の肩口のシャツを握り締め微かに震えていたネコが、小さな掠れた声を上げた。

「…柴さん…胸…。」

「…ん？」

「…胸…苦しい…。」

慌てて身を離すと、喘ぐ様な息をして、震えながらネコが泣いている。

「大丈夫か！？」

浅い息を繰り返して、涙を流すネコを抱え上げてベッドに運び、力を抜く様に諭して鼻を摘まんで口から息を送り込んでやる。

「どこか痺れてるか？」

フルフルと首を振ったネコの額に手を当てて、隣に寝てもいいかと聞くと、コクンと頷いた。

隣に横たわり腕枕をしてやると、いつもの様に懷に潜り込んで来る。

「…話せるか？」

「…ウン。」

「怖かったか？」

ネコはしばらく考えてコクンと頷いて言った。

「…怖くて…胸が痛くて…悲しかった。」

「悲しい？」

「…ウン。」

「何故？」

「…わかんない。」

そう言つてネコは俺の背中に手を回し、胸に顔を擦り寄せて泣き始めた。

そつと背中を撫でてやると、やがてそのまま寝息を立てる。

欲しがっているのは…貪欲なのはネコでは無い…この状況を変えたい、進展させたいと考えているのは、自分なのだ。

ネコは…このままで満足しているというのに…。

怖い思いをさせたにも係わらず、嫌われてはいない様だが…悲しかったとはどういう事か？

何か、悲しませる様な事を言っただろうか？

夕食後に、部屋の露天風呂では無く、わざわざ本館の露天風呂に行ったネコが戻つ来た時、部屋には1人の来客があつた。

「帰つて来た、帰つて来た！」

と喜ぶと、入口で立ち竦むネコを肩に担ぎ膳の前に座ると、そのままネコを自分の胡座の中に座らせた。

「止めろつて、兄貴！怯えてるだろうが！？」

怯えて半泣きで逃げようともかくネコを、後ろから抱き締めると、

「やっぱり仔猫ちゃん、抱き心地いいな…。」

そう言つて顎を捉えると、顔を引き上げた。

「温泉旅行はどうだ、仔猫ちゃん？」

怯えるネコは、唸り声を上げて兄貴を睨み付ける。

「お礼を貰わなきゃなあ？」

「兄貴、何を…。」

嫌な予感がして兄貴の隣に歩を進めた時、低い声で兄貴がネコに尋ねた。

「…名前を教える、仔猫ちゃん。」

青くなつて怯えるネコは、顎を捉えた兄貴の手を引き剥がすと、滅

茶苦茶に暴れ出す。

その耳許に顔を近付け、兄貴は静かに言った。

「お前の名前：オトベナオ…っていつのか？」

ビクツと痙攣したネコはガクガクと震え出し、短い息を吐きながら空気を求めて喘ぎ出す。

「ネコっ！？」

兄貴の腕から奪い返し、抱き上げてベッドに運んでやると、腕の中に潜り込んで声を上げて泣き出した。

「心配するな、ネコ…俺が守ってやると言っただろう？」

パニックを起こしたネコは、唸り声を上げては泣き続け、とうとう最後は意識を飛ばした。

「…寝たか？」

「ああ…どうやって身元を調べた？」

「あの目だ…どこかで見た記憶があつてな…昔の写真を引っ張り出して探し出した。」

そう言つて、兄貴は懐から一枚の写真を出した。

そこには、どこかのパーティー会場で撮られた女性の姿が写っている…振り袖姿の瓜実顔の美人。

20歳位だろうか…全体的に大人しい和風美人なのだが、目だけは黒目がちのアーモンド型の勝ち気な瞳…。

「誰だ？」

「恐らく、あの子の母親だ。名前を…榊沙夜と言つ。」

「榊…って、あの榊組か！？」

「そうだ。沙夜は、榊の娘で…22年前に駆け落ちした。相手は当時榊組の顧問弁護士をしていた、音戸という若いが遣り手の男だった。」

「詳しいな。」

「当時、ちょっと関係があつてな…沙夜は、もしかしたら俺の嫁に来ていたかもしれない女だったんだ。」

「どういう事だ？」

「榊組は特殊な理由で、どこの会にも所属していない単体の組だ。元々は神官の家系らしくてな、それが生き残る為に数代前の当主が組を起こした。」

「神官が、ヤクザに？」

「榊は…榊の女は、特別な力があるとされて来た。昔の神託みたいな物が出るってな…それが時代が変わると、榊の女と交わると…運氣が上がるって話になって行っただ。」

「何だよ、それ！？」

「実際、色々実績が有ったから噂が広まったんだろうが、組を立ち上げる前から、榊の女は特殊な育て方をされて来たらしい。」

「育て方？」

「生まれた時から、逃げ出さない様に座敷牢で育てるんだ。俺も沙夜と最初に会ったのは、座敷牢の牢越しだった。」

「！？」

「その写真は、俺との婚約を祝うパーティーで撮った…恐らく、初めて外に出た時の写真だな。」

「破棄したのか？」

「というか、された側だ。この直後、沙夜は弁護士と逃げ出した。」

「よく抗争にならなかったな？」

「…知ってたからな…このパーティーで沙夜に言われた。自分の事を抱いてもいいと…その代わり、嫁には行けないとな。あの目で言われた…。」

「惚れてたのか？」

「どうか…印象的ではあったが…。」

「それで？」

「榊とは、島を半分佐久間に貰い受ける事で手打ちをした。元々は榊が組を存続する為に希望した縁組みだった。佐久間の後ろ楯が欲しい為のな。その後榊の跡取りの長男が病死して、今又先代が組を仕切っている。」

「…。」

「2年程前、沙夜が実家に戻った。未亡人としてな。その頃、今は結構有名になった代議士先生の、妙な噂が流れた。」

「どんな噂だ？」

「自分が代議士になれたのは、榊の女の力があつたからだというんだ。」

「!？」

「事の真意はわからない。だが、噂を真に受けた連中も大勢居る。勿論榊は、沙夜が出て行つてからずっと行方を探し続けていた。」

「。」

「沙夜が娘を産んだらしい事は、部外者の俺の耳にも届いてる。だが2年前に実家に戻つたのは、沙夜1人だ。これは間違い無い。健司、仔猫ちゃんとどういふ経緯で出会つた？」

「ネコは。俺が新宿の公園で拾つた。」

「拾つた？」

「ネコは、路上生活をしていた。新宿署の少年係の。京子の所の常連で、その縁もあつて引き取つた。」

「お前の、女なんだな？」

「いや。まだ、そんな関係じゃ無い。だが、大切な女だ。」

「ふん。」

兄貴は俺を見詰めて、鼻を鳴らした。

「まあ。厄介な拾い物をしたもんだが。拾つちまつた猫は、野良にはさせれないからな。」

「兄貴。」

「だが、知らなかったとはいえ、榊の承諾無くあの子を佐久間の身内が囲つてゐるんだ。これは事だぞ？」

話す

『音戸乃良』と書いて『オトベナオ』…ネコは、そう布団の中で告白した。

そうか…『音戸』は『ネコ』と、『乃良』は『ノラ』と読める。

だから野良猫だったのかと聞くと、コクンと頷いた。

小さな頃から住居を転々とし、学校には行けなかったと言った…勉強は、親が見てくれていたらしい。

逃げ回っていたのだ…当然、住民登録等出来ない生活だったのだろう。

それでも、両親の婚姻届けと、自分の出生届けは、きちんと出してくれてるんだってと、ネコは嬉しそうに笑った。

そんな当たり前の届け出でこんな笑顔を見せる程、家族の生活は緊張の連続だったのだろう。

「そうなのかな…でも、それが普通だと思ってたから…お父さんもお母さんも、いつも笑ってたし…夜寝る時には、お父さんが私を挟んでお母さんの事ギューってして寝てたんだあ。」

「だから、抱かれて寝るの好きなのか？」

「ん…お父さん細くって、柴さんみたいに大きく無くって、力も…喧嘩も弱かったけど、ギューってしてくれる時は、力強かったんだよ。」

そう言つてモゾモゾと腕の中で動いて俺を見上げると、ネコは照れた様な笑顔を見せる。

「柴さんの声…ちょっとだけ、お父さんに似てる…」

ネコは…俺に父性を感じていただけたのかなかもしれない…そう思うと、俺の胸は疼いた。

「父親は、亡くなつたらしいな？」

「…あの日の事…思い出したく無い…」

ブルリと身を震わせ、涙声のネコは俺の胸に顔を埋めた。

「お前が、家を出たのは？」

「…お父さんが、死んだ日。」

「…もしかしたら、変な奴等が訪ねて…。」

「そこまで言つと、ガクガクと震え出した。」

「ネコ…一度しか聞かない…話してくれないか？」

震える躰が段々と丸まり、ネコは自分の腕に齒を立てて唸り声を上げた。

「…落ち着いたらいい…ゆっくりでいいから…。」

俺は声を掛け続けて、その躰を撫で続けた。

どの位の時間が流れただろう…ようやくポツリポツリと小さな声が語り出した。

「…あの日…夕食の買い物をした帰り道で、知らない男が声を掛けて来たの。音戸さんの娘かつて聞いた。以前お父さんと一緒に働いていた、お父さんに会つて話したい事が有るつて言つたから…家に…。」

「連れて行つたんだな？」

「私がバカだったの…絶対知らせちゃいけなかった…男は家に連れて行つた途端、私に…襲いかつて…着てる物全部…。」

「！？」

「お母さん、叫んで止めようとしてくれた…でも、他にも男の人入つて来たの。その内変な親父が私の上に乗つかつて躰を触つて来た。私、嫌で…大暴れしたら、お父さんも帰つて来て…お父さん怒つて男達に掴み掛かつて…だけど反対にボコボコにされちゃった。」

ネコは啜り上げながら、一言一言思い出しながら話し続ける。

「お父さんも捕まつて、変な親父が又私に触り出した時、お母さんが…お母さん、自分が変わるつて…子供より自分の方がいいだろうつて、着てる物全部脱いで親父に言つたの。親父が私の事放したから、私お父さんの所に飛んで行つた。お父さん…私の事抱き締めて…震えてた。」

「…それで？」

「…お母さん、お父さんと私を部屋から出してくれって言ったの…でも、男達は許してくれなかった。お父さん、畜生畜生って…私の事抱き締めて泣いてた。」

そうか…代議士の噂で出た榊の女というのは、沙夜の事…彼女は、娘の身代わりを申し出たのか。

不謹慎にも、話を聞いて胸を撫で下ろす自分が居た。

それにしても、夫と娘の目の前で、妻を凌辱したというのか!?

「お母さんね…ずっと前から心臓悪くて…発作起こしたの。お父さん慌てて心臓マッサージしながら、男達に救急車呼ぶ様に言ったの。自分は弁護士だって、もしお母さんがこのまま死んだら、傷害遺棄致死で訴えてやるって叫んでた。」

「男達は、救急車呼んだんだな?」

「うん…私は、お母さんと一緒に救急車で病院に行ったの。お父さんは…車で追い掛けるからって…でも、お父さん…来なかった。」

俺は静かにネコの腰を抱き寄せて、髪を撫で続けた。

「…お母さんが病院で治療してる時…警察が病院に来て…お父さん事故で死んだって、確認して欲しいって…警察の車で連れて行かれて…冷たくなったらお父さんと会った。」

「警察は、何て言ってた?その…お父さんの死因について?」

「…交通事故ですって…駐車場に行く前の道で、飛び出して来た所を跳ねられたって…即死でしたって言われた。」

「…それで?」

「警察が…病院送ってくれた。治療終えて、病室に移ったお母さんに…言えなくて…」

グスグスと泣き出したネコの眦の雫を親指で拭き取ってやると、その手に顔を擦り寄せて来る。

「でも…お母さんわかってた…『お父さん死んだの?』って私に言ったの。頷いたら、私の事抱き締めて…今から言う事、よく聞きなさいって…絶対誰にも、話しちゃ駄目って…」

「何て言われた?」

「…今日来たみたいな男達が、私の事追って来るって…捕まったら犯されて閉じ込められるって、乃良の自由は無くなって、一生牢屋に入れらるって言ったの。お母さんが、ずっと牢屋に入れられてた事聞いてたから…凄く怖かった。このまま…家にも帰っちゃ駄目って、お母さんに会いに来て駄目って…人の沢山居る所で、逃げて逃げて生き延びるって言って、持ってたお金全部くれた。」

「…。」

「多分、お父さんも殺されたって…知らない人にも、身内だって言うて来る人にも、絶対に捕まるなって…自分の名前も、親の名前も絶対言わなくなって言われたの。言ったら、今日みたいな目に合うって…警察にも、絶対に何も言わなくなって言われた。」

「…それから、ずっと逃げ回ってたのか？」

「最初は、病院の近くをうろついてたの…そしたら、黒い大きな車が来て…お母さん乗せて行っちゃった。ナンバープレートに『新宿』って書いてあったから、東京に連れて行かれたんだと思って…。」

「ちよつと待て、お前…それ何処で起きた話だ!？」

「…仙台。」

「仙台から、電車で来たのか？」

「…お金、そんなに無いもん…。」

「…歩いて…来たのか？」

コクンと頷いたネコの軀を思わず力一杯抱き締めると、小さく苦しいと喘ぐ声がして、慌てて腕を弛める。

「お前、どうやって生活してたんだ？」

「旅の間？お寺とか神社とか探して…お掃除とか手伝うから、一晩泊めて下さいってお願いしてた。運が良ければ、お風呂も食事も、布団にも寝かせて貰えたよ?」

「…そうか。」

「東京に来て…最初はね、渋谷に居る事が多かった。若い人が沢山居て、紛れてわからないかと思って…警察にも何度も捕まったし、変な男達にも…追われて…それで…。」

縋り付くネコを抱いた手がピクリと反応するのに気付いたのか、ネコが小さく謝る。

「ごめんね、柴さん…気持ち悪いよね？」

そう言つて、軀を離そうとするのを、俺は腕に抱え込んだ。

「お前が謝る必要は無い！！悪いのは、お前じゃ無いだろう！？」
軀を固くしたネコが、フニヤリと俺の胸に軀を添わせた。

「…渋谷のね…赤十字センターでね…HIVの検査…怖くて、何度も何度も調べたんだよ。そこのお姉さん優しくして…普通だと結果は自宅に送るらしいんだけど、そこで預かってくれたの。犯れたら、いつでも調べにおいでって…無料だからって。ハンバーガーも食べれるし、お菓子もジュースも飲み放題で…雑誌とかも置いてあつて…私みたいな子…男も女もいっぱい居たの。そこで、色んな事教えて貰つたよ。」

「…そうか。」

「渋谷のホームレスの人達にも助けて貰つた…女のままだと危ないからって、男の子の格好させて貰つて…古着屋さんで、商品にならない洋服貰つたり、ホームレスに賞味期限切れのおにぎりとか差し入れてくれる人が居たり…でも、炊き出しとかに行くと、ボランティアの人達が未成年者だつて警察に連絡しちゃうの…参つたよ。」
クスリとネコは笑い、上目遣いで俺の顔を窺つた。

「その内にね、渋谷より新宿の方が襲われたりする確率が低いって聞いて…酔っ払いの親父が多いけど、若い人が少ない方が安全だつていうんで、新宿に来たの。2丁目では、男の子つて間違えて誘われる事多かつたけど…新宿で補導されて、京子さんに会つた。」

「新宿御苑で、木に登つてたつて？」

「聞いたの？何度も補導されて…その内に、路上生活してる人達にクスリ売つたり、売春斡旋してくる奴等の情報買ってくれる様になつたの。私達にしても、そんな奴等は追っ払って欲しかったから…一石二鳥だったよ。それに…いい事もあつたしね。」

「いい事？」

フフフと笑った後、ハアと溜め息を吐き、ネコは恥ずかしそうに胸に顔を擦り寄せた。

「私ね…好きな人がいたの…。」

ツキリと胸に痛みが走る…そうだ、京子が以前言っていた…ネコには、初恋の相手がいると…。

「京子さんに会う時には、その人にも会えるかもしれないって、いつもドキドキしてた。」

「…どんな奴だ？」

「スーツ着てたから…サラリーマンだと思う。いつも、遠くから見るだけだったから、顔もよくわからないんだけどね…。」

「顔もわからなくて、どこに惚れたんだ？」

「その人ね…いつもって訳じゃないけど、公園の決まったベンチにお昼頃に座ってて…その人が座ると、決まって猫がね…寄って来るの。餌もやらないし、抱き上げたりもしないのに、猫の方からその人に擦り寄って行くんだよ…不思議でしょ？」

「…。」

「柴さんみたいに躰も手もおつきくて、指が長くて…足元にじゃれついた猫を撫でるの…柴さんがするみたいに…。」

そう言って、俺がネコの頬を撫でる手に顔を擦り寄せる。

「優しい人なんだなあって…あんな風に撫でて欲しいなあって、ずっと思ってた。2月頃から、寒いのにしょっちゅう姿見せる様になって…何だか、ちよつと背中が寂しそうで気になってただけけど…3月も、結構会えたんだよ…でも、4月になってパツタリ姿が見えなくなったの…ずっと待ってたんだけどね…どっか行っちゃったんだ…。あの人…どうしてるのかな…。」

ネコの頬を撫でていた手を外すと、俺は自分の口を覆った。

「…どこだ？」

「何が？」

「どこの公園だ？」

「新宿中央公園だよ？中央公園のねえ…北口の花時計ん所から入っ

て…区民ギャラリーの有る所知ってる？その外れ…あんまり人の通らない所にあるベンチでね…。」

そこまでネコが話した時、俺は堪らずその唇を奪った。

ネコは驚いた様に身を引こうとしたが、俺は腰をしっかりとホールドして離さなかった。

「…柴さんって…。」

唇を離れた時、トロンとしながらもネコは不思議そうに俺の目を覗き込んだ。

「…どうして、私にキスするの？」

眉を寄せて見下ろした俺の顔を、ネコの細い指が撫でる。

「…嫌なのか？」

「ううん…私は嫌じゃ無いよ…でも、柴さん…何で？」

訳がわからずもう一度唇を近付けると、触れる瞬間に再び言葉を紡ぐ。

「…私の為？」

「え？」

「…私…こうやって…抱いて貰えるだけで…十分だよ？」

「何…言ってる？」

「…私の…為なら…無理…しないで…。」

話し疲れたのか、そのままスウと寝入るネコに、俺は愕然とした。

ネコは…全く俺の気持ちに気付いていないのだ…今迄の俺の行為は、善意としか受け取って無いという事か！？

大人の狡さを駆使して行って来たのが裏目に出たか…俺は、込み上げる笑いを抑え切れなかった。

そうなのだ…いくら路上生活で、男に躰を奪われる事もあった生活をしていたとはいえ…ネコは子供で…恋愛とは遠い所で生きて来て…。

「ストリートに勝負した方が、良かったか…。」

言葉が勝手に口を突いて出た。

俺が、一番苦手とする手なんだが…。

「お前の初恋の相手は、此処に居るぞ。」

兄貴の組と警察の癒着が取り沙汰され、組対4課に有らぬ疑いを掛けられてくさっていた頃、よく新宿中央公園に気晴らしに行った人の居ないベンチでぼんやりしていると、決まって野良猫が擦り寄って来た。

あの時、近くにネコが居たとは……一体どこから見ていたんだろう？ネコを撫でると顔を擦り寄せる仕草は、自分がして欲しかった行為の願望だったのだ。

「ナオ。」

胸の中で穏やかな寝息を立てるネコが、クフンと鼻を鳴らして擦り寄った。

告る

穏やかに眠るネコの柔らかい唇に、啄む様にしてキスをする…ふつくらとしたその下唇を優しくくわえた時、ネコはうつすらと目を開けて少し眉を寄せた。

「起きたか？」

「…おはよう。」

「違うぞ、今日は…おめでとうだ。」

「…明けましておめでとう、柴さん。」

「ああ、おめでとう。」

「で…何してるの？」

「お前に、キスしてた。」

ネコが、少し悲し気な表情で俺を見上げるのを見て、俺は苦笑を漏らした。

「正月から、そんな悲しい顔するな。この1年が悲しい年になっちまうぞ？」

「…夕べ言っただよ？」

「だから？」

「前にも…クリスマスの時にも言っただよ…こついう事しちゃうの…駄目だよ…。」

「お前は、嫌じゃ無いんだろう？」

「柴さん…そんなの嫌だよ…。」

「ん？」

「私の為なら…要らないって言っただよ？」

真剣な瞳で詰め寄るネコが可愛くて、つい焦らす様な受け答えをしてしまう…可愛い物を弄ぶ癖は俺にも有るのかもしれない。

「ネコ…俺は、自分のしたい様にしか行動しないとわなかったか？」

「…言っただよ。」

「お前、俺がキスするのは、お前の為だけだと思ってたのか？」

ネコは再び眉を寄せ、不安な表情を見せる。

「俺がお前を抱き締めるのも、お前を撫でて甘やかすのも、お前にキスをするのも…俺がお前を愛しいと思ってるからだとは思わなかったのか？」

「…柴さん…からかつてるなら…。」

「ネコは、こんな親父は嫌か？」

「…。」

「俺は、そっちの方が心配だ…お前は、どう思ってる？」

「…好きって…言った…でもっ！」

「でも、何だ？」

話している途中から、ネコの顔中にキスを降らせると、ネコは真っ赤になつて反論を試みる。

「柴さん大人だし、モテるしっ！？」

「…お前がいい。」

「乳のデカイ女が好みって…。」

「…言ったか？そんな事？」

「私が聞いたの…そしたら、そうだなって言った…。」

「そんな事…大丈夫だ、今からデかくしてやるから…。」

ネコはワタワタと慌てながら、俺の胸に手を当てて押しやる。

「変な親父に追い掛けられてるんだよ！？」

「…守ってやると言っただろう？」

「…私…犯られちゃった事有るって…。」

「お前が悪い訳じゃ無いって言っただろ！？…それに、俺だって、初めてって訳じゃねえしな…。」

「…それ、普通だし…。」

「ネーコ、出し切ったか？」

少し笑ったネコに俺が尋ねると、ちよつと真剣な目差しで見詰められた。

「柴さん…私の…どこが好きなの？」

額にキスをして、ネコの視線から逃れる。

「お前はな…いちいち可愛くて仕方無えんだ…。」

「え？」

「…やる事なす事…その声も仕草も…すっぱり腕に収まっちゃう躰も…その目も…。」

少し躰を離してネコを見下ろすと、口を歪めて笑った。

「可愛い癖に妙に色っぽい…逃げ出した時、俺が何故探し回ったと思ってるんだ、お前は？」

「ええっ!？」

「…大体…俺の所がいいとか言って抱き付いて来て、先に俺を煽ったのはお前だろうが…あぁっ、もう、畜生っ!!全部超越しやがれっ!!！」

ネコの口唇を奪う様に舌を絡めて貪り、腰を抱いて密着させ、浴衣の上からネコの乳房を手で覆う。

「んんっ!？」

途端にネコの躰が硬直して瞼をきつく結び…唇を離すと、震えて浅い息を繰り返す。

「やっぱりそうか…お前、男に抱かれるのが怖いんだな？」

髪を撫でながら優しい声音で話し掛けると、きつく結ばれた瞼がゆっくりと開いた。

「怖がらせて悪かった…お前の嫌がる事はしないから…。」

「…本当？」

まだ震えながら、潤んだ瞳で見上げるネコの頬と顎を撫でてやる。

「ああ…諦める気は無いが、少しずつ慣らして…怖く無い様にしてやるから…。」

少し笑うと、ネコは俺の手に顔を擦り寄せた。

「キスは、平気なんだな？」

「うん…でもね…柴さんにキスされると、ドキドキしてフワフワになって…眠くなる。」

「眠くなる？」

「うん…ホワァーっとして眠くなるの…。」

俺は笑いを噛み殺しながら、ネコの軀を懷に抱いた…そうか、まだ開発する楽しみが有る様だ。

「…ナオ…俺は、お前に惚れてる…覚えとけよ？」

ネコは俺の胸に縋り付いて、コクンと頷いた。

夕方から行つ新年会に参加する様という兄貴の伝言を受けて、俺はネコを説得して宴会場に向かつていた。

「健司さん。」

突然呼び掛けられて振り返ると、2人の浴衣の男性がにこやかに立っていた。

「いらしてたんですね？気付きませんでした。」

「離れに籠っていたからな…。」

俺と背の高い方の男が話していると、互いの背後で掛け合う声があった。

「リンさんっ!？」

「ネコちゃん!どうしたの、こんな所で!？」

駆け寄り抱擁し合う2人を見て驚いている残された男達を無視し、2人の矢継ぎ早な会話が始まった。

「リンさんっ、リンさんっ、どうしたの?ここの組長さんに捕まったのっ!？酷い事されたり、苛められて無い!？」

「ネコちゃんこそ、どうしてこんな所に居るの!？…あの人に、捕まったの?」

「違うよ…私は、柴さんに拾って貰ったの。リンさん…お店は?」

「ああ、年末年始で休みなだけ。其より…大丈夫なの!？酷い事はされてない?幸村刑事は知ってるの?」

「大丈夫だよ…柴さんは、京子さんの友達で元々は刑事さんだし…。」

「幸村刑事の友人で、柴さんって…関東連合のファンクなんじゃ無

「いだろうね!？」

「フアング? 知らないけど…伝説の総長って言ってたよ?」

「ネコちゃん…君偉い人に拾われて…本当に大丈夫なの!？」

「大丈夫だよ? 柴さん優しいしね…病気も治してくれて、住む所も仕事もくれたの。それに、私…柴さんの事、好きだし…」

「ネコちゃん!？」

「鈴、大丈夫だよ。」

ネコと抱き合う華奢な青年に、俺の隣に立つ学者肌の男が声を掛けた。

「健司さんは、僕の叔父なんだ。大丈夫、心配無いよ。それより…君が、父の言ってた仔猫ちゃんかな？」

「父って…柴さんのお兄さん？」

ネコが、鈴と呼ばれた青年の腕に抱かれたまま、訝しげに窺った。

「そудだよ…君の怪我の原因を作ったね。酷い事されたりしなかった?」

「…あの人…怖い。苛めるんだもん…」

「そつかあ…苛めるかあ…」

そう笑う男の隣で、俺はネコを呼び寄せた。

「ネコ、此奴は佐久間聡だ。」

ネコがピヨコンと頭を下げると、聡の後ろから華奢な青年が挨拶をした。

「先程は失礼しました。僕は新宿で小さなバーを経営してる、伊庭鈴と申します。」

「柴健司だ。ネコと知り合いなのか？」

「そудだよ…リンさんには、いっぱいお世話になったの!」

「いえ…僕は、逃げ込む場所を提供してただけですよ。」

「そつか…世話になった。」

そう頭を下げると、鈴は目を剥いて頭を振った。

揃って宴会場に行く道々、聡の済まなそうな瞳が寄せられた。

「苛められてるんですね?」

「ああ…兄貴は可愛い物を見ると、弄くり倒して泣かせるからな。」

「…今日も、覚悟してもらわないといけないかもしれないかもしれません…」

「何か有るのか？」

「少しね…父の意に染まない事がありまして…若干フラストレーションが貯まってます。」

聡は後ろの2人を窺い見て、そう言った。

「こつちも…厄介事が発生してる。…ネコには、少し耐えて貰う事になるかもな…」

既に宴会が始まっている会場に入った途端、上座に座っていた兄貴が立ち上がり、俺達を押し退けてネコを肩に担ぎ上げた。

咄然とする下座の面々を尻目に、嫌だと叫ぶネコをさっさと上座の自分の胡座の中に抱き込んで、こちらに向かつて手招きをする。

「止めて下さい、お父さん！嫌がつてるじゃないですか！？」

「…俺は、こういう可愛いのが好みだ…」

「その子は貴方の物じゃ無いでしょう！？」

「こういう、可愛い娘が欲しかったんだ…！」

暴れていたネコが、会話を聞いて幾分落ち着いたので見て、兄貴の隣に座った俺は苦笑いしながらネコの頭を撫でてやった。

「…鈴だつて、十分可愛いと思いますか？」

「俺は、男のケツなんぞ膝に乗せたくねえぞ！？」

「例え僕に普通の嫁が来ても、貴方の膝なんかには乗せたくありませんよ。それに僕の嫁は、鈴以外に考えられません。」

上目遣いで話を聞いていたネコが、前屈みになつて聡の向こう側に座る鈴に声を掛けた。

「リンさん、結婚するのぉ？」

鈴は照れた様に笑い、聡は満面の笑みでネコに話し掛けた。

「そうだよ…鈴と僕は、結婚するんだ。」

下座がどよめき、兄貴の顔が歪む。

ネコは、ふうんと言つて不思議そうに聡に尋ねる。

「男の人同士つて、結婚出来るの？」

「普通の婚姻は、無理だね。日本の法律では、まだ許されていないんだ。」

「そうだ！結婚は出来ない！！」

頭の上から吼える兄貴に、ネコは眉を寄せる。

「だから同性同士の結婚は、年長者の籍に養子縁組をして行っんだ。」

「へえ…そうなんだ…おめでとう、リンさん！！」

「…ありがとう。」

無邪気に喜ぶネコに、兄貴が慥然として言った。

「だが、子供はどうするよ！？女じゃないと、子は産めねえだろ…。」

「何で？」

不思議そうにネコが兄貴を見上げた。

「何でって…女しか子供は産めねえだろうよ、仔猫ちゃん？」

「お孫さんが、欲しいの？」

「ああ欲しい！物凄く欲しいぞ！？」

…ネコが何を言うか…俺は予想が付いて、手で口を覆った。

案の定、ネコは満面の笑みで、無邪気に兄貴に言った。

「じゃあ、良かったじゃない！」

「え？」

「だって、息子さんが養子縁組するって事は、柴さんのお兄さんにお孫さん出来るって事でしよう！？おめでとう、良かったね！！」

一瞬静まり返った次の瞬間、宴会場は爆笑の渦に包まれた。

呆氣にとられた兄貴と、何が可笑しいのか理解出来無いネコに、下座の1人が声を掛けた。

「組長…完璧に一本取られましたな。」

「…うるせえ…ああ、もうっ！！お前は、可愛いなあ！？」

そう言っただけネコを抱き締めると、今迄大人しくしていたネコが又暴れ出した。

「そろそろ返せ、兄貴…俺の女だ。」

そう言つと、再び座がどよめく。

兄貴からネコの躰を奪い返し、自分の胡座の中に抱き込んでやると、ネコは嬉しそうに収まった。

「チキシヨー、おいっ、さっきのアレ持って来い!」

兄貴が叫ぶと、手下の1人が紙袋を持って来る。

「聡の結婚、許してやつてもいい!」

「本当ですか!」

「ただし、仔猫ちゃんが俺の言う事をきいてくれたら…だがな?」

「…何?」

ネコが、俺の袖口を掴んで小さく尋ねると、兄貴は紙袋から出した物をネコの頭に装着した。

「今日1日、仔猫ちゃんがソレを付けてくれるなら、許してやる!」

ネコは頭の上に手をやると、装着したものを触った。

「…猫耳?」

「そうだ、可愛いぞ仔猫ちゃん!」

ネコは俺を見上げて、小首を傾げる。

黒のタイツに赤いギンガムチェックのホットパンツ、黒のモヘアのセーターを着たネコに、その黒い猫耳は似合い過ぎて…。

「似合う?可笑しく無い、柴さん?付けててもいい?」

口許を押さえたまま、俺は何度も頷いた。

「…いいよ、付けても。嫌いじゃ無いし。」

「決まりだな、今日1日だぞ?」

「寝る迄でいいんでしょう?でも、お風呂の時は外すよ?」

「ああ…いいなあ…ニヤアって鳴いてみ?」

「…嫌だよ。」

「何だよ…健司には鳴くんだろ?」

「柴さんが、鳴いてって言ったらね?」

「…ネコ…あつちで、2人に祝いを言つて来たらどうだ?」

ウンと、嬉しそうにネコは聡と鈴の元に行った。

「ありゃあ、天然のタラシだな、健司?」

ニヤニヤと兄貴が俺の杯に酒を注ぐ。

「端から許してやるつもりで、ゴネて見せたのか？」

「決めちまったんだろ？彼奴は、俺が反対しても利く様な奴じゃ無い…だが、組にとっちゃあ大問題だ。跡取り息子に子供が出来ねえってのはな…。」

「方法は…有るだろう？」

「それより、手っ取り早い手が有る。」

何を言うか予想して、俺は眉を寄せた。

「元々聡は、堅気の道を選んでる…やっぱり、お前が継ぐのが一番いいんだよ。」

「俺にその気は無い…知ってるだろうが？」

「仔猫ちゃんの為でも？」

「何だと？」

「榊も、佐久間の次期組長になら、仔猫ちゃんをすんなり渡すかもしれないね。」

確かにそうかもしれないが…俺はネコを見詰め、溜め息を吐いた。

調べる（前書き）

【お詫び】

え、昔は赤十字センターでAIDSの検査もしてくれて、結果も知らせてくれたと記憶しておりますが…何せ十年前の記憶です。

（^ー^；）

現在は、HIV検査って…献血センターでは結果は教えてくれない
そうで…検査の為に献血しちゃ駄目だと謳ってます。

そりゃそうだよ。ー（3）ー

HIV検査は、保健所でやってくれるそうで…全国巡回の無料検査があるらしいです！

その場でわかる簡易検査も有るけれど、一番安心できるのは、疑いの有る日から3ヶ月以上してからの検査だそうで…2週間位で結果がわかるらしいです。

行為後直ぐにはわからない…3ヶ月経たないとキャリアかどうか確実にわからなくて…ドキドキしながら待つのは耐えられないと思います（TOT）

怖いですね…自分の身は、自分でしっかり守りましょう！

（（（（；。））））

調べる

「健司…お前、俺の跡を継ぐ気は無いか？」

兄貴がそう言い出したのは、俺が総長になってすぐの頃だった。

「冗談止めるよ！？何で俺が…」

「度胸も有る、力も統率力も申し分ねえ…何より、そのカリスマ性…極道の親分ってのはなあ、子分達に惚れられなきゃいけねえ…命懸けの仕事だからな。お前には、その器量が有る。」

年の離れた腹違いの兄貴は、親父の死後も、親父の妾だったお袋が病に倒れて死んだ後も、俺を息子の聡同様の扱いで面倒を見てくれていた。

「止める、気色の悪い…大体、跡取りなら聡が居るだろうが！？」

「お前もわかるだろう？アレは、極道には向いて無い…嫌ってるしな。」

聡が嫌っているのは…極道という職業もそうだが、艶福家としての父親に対する反抗だろう。

聡の小さな頃に離婚して以来正妻を持たない兄貴には、常に数人の愛人が居た。

それでも、聡以外に決して子供を作ろうとはしなかった。

「まだ、わかんねえだろ？」

「わかるさ…アレは極道の上に立つ器じゃねえ。」

「じゃあ、他に子供作りやいいだろう？産んでくれる女は星の数程居るだろうが！？」

「なあ、その気はねえか？」

「ねえよ…絶対にな…。」

暴走族に入っただのは、高校時代に付き合っていた女が、他の男に乗り換えて振られたという陳腐な事がきっかけだった。

自暴自棄になった『柴犬』が『狂犬』となり、狼の群れのボスになつて『牙』と呼ばれる様になった。

だが、俺が族の総長等になったのも、多分佐久間の名前による影響が大きい。

…そんな俺に、死んでも付いて行くと云ってくれる仲間が大勢いるのも事実だ。

兄貴ばかりでは無くそんな仲間迄もが、密かに俺が佐久間組に入る事を望んでいる。

もし俺が組に入ったら…俺が佐久間の組を継ぐ立場に立つと知れたら…一体何人の仲間が佐久間組に入りたいと云って来るか…。

少なく見積もっても…15、20は下らないだろう。

未成年の暴走族では無い…本物の極道の世界に、それだけの人間を引き摺り込む恐怖…。

未成年の暴走行為で、若い頃に馬鹿な事をしていたと思い出を語る事の出来る、全うな人生を仲間に送って欲しいと思う。

…何より仲間の子供達に、親が極道者だと後ろ指を指される様な思いを…自分と同じ思いをさせる訳にはいかなかった。

20歳を前にして、スッパリと族から足を洗い、専門学校を経て警察官になった時には、仲間も兄貴も、裏切られた感が強かったに違いない。

だが、それでも慕ってくれる仲間は多く、兄貴も『お前の人生だ』と言って理解を示してくれた。

跡目の話が再浮上したのは、俺が警察を辞めてからだ。

既に堅気として大学の助手を勤める聡は、組の跡目には全く興味を示さない…その上、同性と結婚となれば直系は絶える。

最近兄貴が熱心に誘うのは、佐久間の血を絶やしたく無いのか、それとも組の存続の為か？

「…ん…んっ…。」

温泉から帰って来て日常生活に戻った頃から、ネコは寝ていてうなされる事が多くなった。

夜中に風が吹く音や、特に外に居る人の話し声や足音に敏感に反応し、それらが通り過ぎるまで躰の緊張が解けない。

それは、今迄ひたすら隠していた事を話したせいだ：閉じ込め様としていた記憶が、警戒を怠らなかつた生活が、再び鮮明に甦った事に他ならない。

そしてそれは：一番思い出さなく無い記憶迄も、鮮明に甦らせてしまった。

「...や...や...だ...」

油汗を滲ませ寝返りを打ち、息を荒げて眉を寄せるネコに、静かに声を掛けてやる。

「ナオ：ナオ：大丈夫だ、安心しろ...」

本名を呼ばれる事で少し覚醒しかけ、俺の腕を確認して安心すると、ネコは再び深淵に落ちて行く。

兄貴の言った様に、俺が次期組長となれば、榊がネコを渡す事も、それ程難しい事では無いのかもしれない。

ネコの為には、それが一番いいという事も承知しているが：。

総長を辞めると自分で決めた時、後に残る奴等の事を考えて、永年の抗争相手にも終止符を打ち、仲間も組織化をしてやった事が『伝説』なんて尾鰭を付けてしまった。

そして、いつの間にか『伝説』は独り歩きをし始める：自分の全く知らない後輩迄もが、未だに俺に忠誠心を見せる：若い頃の暴走から未だに脱け出せ無い奴等が、『伝説』に縋る様に俺の回りをうろついた。

中には、佐久間組に入った奴等も居る。

正直言えば、迷惑な話だ：俺に取っては、とっくに過去の話なのだから。

だが結局放って置く事も出来ず、仕事を世話したり自分の仕事を手伝え小遣い銭を与える。

「そんな事をしているから、奴等はいつまでたつてもお前の傍から離れないんだ！！」

毎度の様に、松田が苦言を吐く。

松田の言う事は正しい：だが、堅気の世界から弾かれながらも、最

悪の道にも堕ちきれずギリギリの所で踏み留まっている仲間の何と多い事か…。

「総長に叱って貰えるから、俺達も少し頑張ってみます！」

そう言つて来る仲間を集め、事務所を立ち上げた頃から自警団を作り、新宿の街を見回るボランティアをさせている。

酔っぱらいの喧嘩の仲裁、カツアゲや落書きの見回り、ゴミの清掃…人様の迷惑にならない、ミカジメを取らない、組関係には手を出さない、絶対に法は犯さない…。

少しずつ認められ始めた活動と共に、働きを認められ正規に就職し退団する仲間も始めたのは喜ばしい限りだ。

実際に自分が活動する訳では無いが、俺が最初に組織したという事で、トラブルや事務的な事等はウチの事務所で行い、仲間達も出入りをしていた。

「柴あ、アンタの事務所つて警察関係者と族上がり、果ては組関係と賑やかだけど、いくら何でも最近は何の出入りが多過ぎるんじゃない？」

年明けから変更された『オフィス柴』と書かれたドアを開け、大勢がたむろつ事務所の中を見て、京子が大声を出した。

「原因は、アレだ。」

黒服の一団が応接セットを陣取り、ネコを構っている兄貴の後ろにズラリと並ぶ。

「又来てるんだ…。」

「最近、3日と空けずに来てる。」

「アンタを口説き落とすのを諦めて、ネコちゃん懐柔作戦に変更した訳ね。」

「だろうな。」

「手馴付けられてるの？」

「…どちらかというと、兄貴が…だな。」

「あらあら…。」

「アレは、本質も猫そのものだ。」

兄貴なりの可愛がり方を心得たネコは、ヤクザの組長に臆する事無く対応する様になった。

「美味しい物でも食べに行かないか、仔猫ちゃん？」

「行かなーい。」

「じゃあ、洋服を買いに行こう！春物の洋服：渋谷がいいか？それとも原宿か？」

「要らないよ、着る物沢山あるもん：それより、電話番号してるの。お兄さん、邪魔しないで！」

「つねねえなあ：せめて、正月にやった猫耳付けて向かえてくれりゃあいいのに：。」

「付けてるよ、アレ。」

「何だよ、持って来いよ！」

「駄目え。」

呆れた様に2人の会話を聞いていた京子が、声を潜めた。

「何：あのキャバクラみたいな会話！？」

「いつも、あんな感じた。」

苦笑した俺は、改めて事務所を見回した。

夕方からのパトロールの連絡事項や、見回る商店街のルート等を確認する為、自警団の連中と兄貴の組の奴等で、狭い事務所はひしめき合っていた。

「ネコ、お前欲しい物有るって言って無かったか？」

「無いよ、別に：。」

「ほら：電子辞書欲しいって、この前言ってたろう。」

「：別に：絶対必要って訳じゃ無いし：。」

「それ！それ買いに行こう、仔猫ちゃん！？」

「でも：電話番号は？」

「大丈夫だ。お京が来た。」

「：あ、ハイハイ。私が電話番致します。行っておいで、ネコちゃん。ついでに、何か美味しいお土産宜しくね。」

「良く言った、サーペントの！期待して待ってな！」

「いや…その渾名は、もう勘弁して下さい…一応これでも公僕なので…」

ネコは頷き上着を着ると、他に必要な物は無いかと皆に聞いて回った。

「行こう、仔猫ちゃん！」

そう言つて肩に担ぐ素振りを見せた兄貴に、ネコはピシヤリと言いつ放つ。

「担ぐの禁止つて言つたでしょ！？担ぐなら、もう一緒に出掛けてあげない！」

「わかった、わかった…なら、抱いて行こう。」

「抱くのも禁止！」

ワアワア言いながら、黒服の一団が事務所を出て行つた。

「ともあれ、怖がらずに仲良くやつてるみたいで、良かったわ。」

「可愛くて仕方無いんだろうが…あの分じゃ、又嫌われるかもな。それより、お前…何かあつたんじゃないのか？」

「…音戸沙夜さんの居場所、判明したわ。」

「どこだ？榊の自宅か？」

「ネコちゃんの言つてた通り、入院してた…心臓病らしいわ。」

「どこの病院だ？」

「成城の鷹栖総合病院。でも駄目よ…バッチリ見張りが張り付いてるらしいわ。」

「そうだろうな…お京、当分ネコには黙つててくれ…アレに言つたら、駄目だとわかつていても飛んで行くだろうからな。」

「了解。こっちは平気なの？」

「今の所はな…兄貴が大っぴらに連れ歩くつて事は、榊にバレてるんだろう。」

「大丈夫なの！？」

「牽制掛けてるつて事だ…佐久間の組長直々のな。この建物なんかも、ガードされてる。」

「え？」

「元警察官の事務所をヤクザがガードしてるなんてな…ありがたくて、涙が出るぜ。」

生活が落ち着き、兄貴にも馴れ、自警団や俺の仕事を手伝う族上がりの奴等とも上手く付き合う様になったネコの最大の敵は、松田だった。

「柴さん…私…検査受けたい。」

「検査？」

「うん…HIVの検査。」

事務所のパソコンの前に座ったネコが、パソコン画面を見詰めたまま言った。

「…お前、前に受けたって言ってなかったか？」

「ネットでね…調べたら、時間が経たないとちゃんとわからない検査も有るって…ちゃんとね…調べたいの。駄目？」

「いや…駄目って訳じゃねえが…そんなに気にしなくても…。」

「嫌なの…！」

「ネコ…。」

「…嫌なんだもん。」

「…俺の為か？」

「…。」

「だからか、最近キスも嫌がるのは？」

「…だって…粘膜感染…。」

「今更だろう？感染するなら、もう手遅れ…。」

「…嫌あ…。」

ネコが顔を覆って泣き出してしまったので、俺は慌てて隣に立つとネコの頭を抱いてやる。

「悪かった…お前の気の済む様にすればいい。多分、松田の所で詳しい検査が出来る筈だ。」

「…松田さんの所？」

「ああ…嫌か？」

ネコはしばらく考えて、頭を振った。

松田の診療所に連れて行き検査を依頼すると、松田は見下した様にネコを見詰め頭を振った。

「そら見る…やっぱリウリをしてたって事だろう!？」

何も言わずに俯くネコに変わり、俺は松田に食って掛かった。

「違う、松田!!ネコは、襲われたただけだ!」

「お前…犯られたの、一度や二度じゃ無いだろう?」

ネコの肩が、ビクリと震えた。

松田は薄いゴム手袋をはめると、採血の為にネコの腕をゴムチューブできつく縛りながら言った。

「食事や寝床を得る為に、誘った事も有るんじゃないのか?」

「松田…いい加減に…。」

ネコの腕をアルコール綿で拭き、注射器を刺してゴムチューブを外す。

「金も貰ったんだろうが?そういうのを、売春って言っただ…淫売が!」

ネコは何も言わず…自分の血が抜き取られるのを見ていた。

「松田っ!？」

「柴、いい加減に目を覚ませ!?!いつまでこんな奴の面倒見てるつもりだ!」

「大きなお世話だ!!!」

「コイツを探し回ってる男達も居るそうじゃないか!?!大方どこかの組か、ソイツの客なんだろうが?馬鹿馬鹿しい、お前はいいように騙されているだけだ!」

「いい加減にしるよ、お前…。俺の我慢にも限界が有る…。」

「こんな奴等は、大人を騙す事なんて何とも思っただろうよ…お前達はいいいように弄ばれて…。」

俺は松田の胸ぐらを掴むと、その軀を壁に叩き付けた。

「黙れ、松田…殴られ無かった事を、幸運に思っただな!」

床にへたりこんだ松田は、それでもネコを睨み付けて憎々しげに言った。

「…お前のせいで…柴も中学以来の仲間に手を上げる羽目になったぞ…。」

「まだ言うのか!？」

「…柴…お京の事…お前、どうするつもりだ?あいつは、今でも…」

「関係無いだろう!？」

ネコがビクリと痙攣する。

「結果は、2週間後だ。頼むから、とっとと新宿から出て行ってくれっ!！」

松田の悲痛な叫びが響いた。

潜る

事務所に戻っても何も言わないネコの背中を抱くと、ネコは平気だと言って俺の手を優しく叩いた。

「…済まない。」

「何とも無いよ…何で柴さんが謝るの？」

「アレは…俺の友人だ。」

ネコは俺の腕をスルリと抜けると、事務所の窓を開け空を眺めた。

「新宿って…星が見える所無いのかな…。」

「星が見たいのか？」

「…空…明るくて、星なんか見えないか…。」

しばらく黙って空を眺めていたネコの堪え切れない涙が、眦からポタリと落ちた。

「松田先生の妹さんの話、京子さんに聞いたから…柴さんが気にする事無いよ。」

母子家庭で、水商売をしていた母親を嫌った松田の妹は、今のネコと同じ歳に家を飛び出した。

松田が発見した時には、薬欲しさに路上で袖を引く生活をしていたらしい。

どれだけ更正施設に入れても脱け出せず、最後にはHIVに感染しボロボロになって亡くなった。

その後の調査で、妹に薬を教えたのも、袖を引く生活を教えたのも、共に路上で知り合い生活を共にしていた同年代の仲間達らしいという事だったが、詳しい事は何もわからなかった。

「アイツは、ホームレスも、路上でたむろう若者の事も憎んでる…。」

「…うん。」

「それ以上に、妹を救えなかった自分を憎んでるんだ。」

「帰れないのも、待つのも…どっちも辛いね。」

「済まない。」

「…柴さん…少し、出掛けて来てもいい？」

「これからか!？」

「…うん。」

「一緒に行こう。」

俺が再び上着を手にすると、ネコは首を振った。

「1人がいい。」

「…ネコ。」

「1人じゃなきゃ駄目なの。」

「…駄目だ。」

眉を寄せる俺に、ネコは曖昧な笑顔を向けた。

「大丈夫だよ、柴さん…ちゃんと帰って来るから。」

ネコは自ら俺の懐に入り込んで、背中に腕を回す。

「私の帰る場所は、柴さんの所だけだもん。」

「ネコ…お前を追っている奴等に、ここに居る事はバレてるんだ！

もし、1人で居る所を襲われたら…!？」

「…ちゃんと逃げて帰るから…ここは、安全なんですよ？」

「ああ…兄貴も守ってくれてる。せめて、誰か護衛を…。」

「駄目だよ、1人じゃなきゃ。携帯持って行くから…マナーモード

にして音は鳴らない様にするけど、電源は落とさないから。」

「…潜りに行くのか？」

何も言わず、ネコは俺を見上げた。

「出て行つちまう訳じゃねえんだな!？」

「違うよ…帰って来る…出来るだけ毎日帰るから。」

「…どうしても、行かなきゃならねえか？」

「…行きたいの…駄目？行ったら、もう置いて貰えない？」

「そうじゃねえ…だが、もしそう言ったら…行くのを止めるか？」

ネコは、小首を傾げると少し寂しそうな顔をして微笑んだ。

「…ちゃんと戻って来い…何かあったら、いや…何も無くても連絡を入れる!…いいな!？」

「うん、出来るだけ入れるから。」

「絶対だぞっ!？」

俺はネコの臍を抱き込んで唇を奪った。ネコがこのまま眠くなってくれば…そう思いながら舌を絡めて吸い上げ、口唇を貪った。

唇が離れると、ネコはスルリと腕を脱け寝室に籠り…出て来た時には、始めて来た時と同じ格好をしてドラムバッグを抱えていた。

「冗談じゃねえ!!この2月の寒空に、そんな格好で…何考えてるっ!？」

「平気だつて…心配症だな、柴さん…こんなの、普通じゃねえか？」

「…ネコ、お前…。」

来た時と同じ男言葉で喋るネコに、俺は背筋が冷たくなった。

「上着だけでも、ちゃんと暖かいのを来て行け…。」

「平気だつったる?」

「お前…わかつてねえのか?一度飼われた猫は、野良には戻れねえ…外の風は冷た過ぎるからな…。」

「…コレは、制服で戦闘服なんだ。もう一度捨てられた野良猫にならないと、潜れない場所も有るって事さ。平気だつて…京子さんにだけは、連絡しといてくれよ?じゃないと、アンタが叱られちゃうからな。」

「せめて、コレを巻いて行け…。」

俺は部屋の隅に投げてあった自分のマフラーを、ネコの首に巻いてやった。

「何しに潜りに行く?」

ネコはニヤリと笑い、質問には答えずに言った。

「2週間後の検査の結果、ちゃんと聞きに行くからさ…結果も、ちゃんと連絡するから心配すんなよ。」

「…ネコ。」

「大丈夫だつて、心配すんなよ!あ…そうだ…探したりしねえでくれよ!それこそヤバイから…。」

ニヤリと笑い、じゃあたとネコは入口のドアをすり抜けて行った。

「連絡は？」

「丸4日間…何も無い。」

「携帯は？」

「電源が切れた様だ…。」

電話の向こうで、京子が深い溜め息を吐いた。

最初の内、ネコは2日置き程で部屋に戻っていた。

明け方に戻ってシャワーを浴びると、俺の腕にスルリと入り込んで爆睡する。

俺は、帰る度に痩せ細って、疲れ切って行くネコの躰を抱き込んでやる。

夕方迄爆睡したネコは、何も食べずに又同じ格好をして出掛けて行く。

「柴…アンタ、あの子に何調べさせてんの？」

「俺がさせている訳じゃねえ…ただ、無理に止めると…出て行っちゃう覚悟だけはわかった…だから、好きにさせてるだけだ。」

「…私の事、誤解したまんまなんでしょう？」

「…。」

「言えば良かったのよ…そしたら、松田だって…。」

「…俺が言つべき話じゃねえだろ…。」

松田も昔の仲間も、京子が俺の事をずっと想っていると誤解している…確かに、そんな時期もあったし、本人から直接言われた事もある。

「柴…アタシにしときなよ…アタシならアンタの事裏切らないし、理解だって出来る…。」

「…悪いな、お京…今更お前の事を、女には…。」

「失礼な奴…。」

「俺は、ダチを失いたくねえんだ…。」

「それ、スッゴイ残酷な事って…アンタわかってる？」

「済まねえな。」

「あー…アンタって、昔からデカイ女にや興味無わよね!？」

「…ああ…俺は昔から、小さくて可愛い女が好みだからな…。」

女に振られて族に入って荒れてる頃、京子とそんな会話をした…それ以来、2人の間に恋愛を感じさせる会話や行動は一切無い。

そういう割り切りの出来るさっぱりした気性が気に入って、中学以来ずっとつるんでいるのだ。

その京子が恋をした…相手は、当時警察で俺とバディを組んでいた男…族上がりの俺達に色眼鏡を掛けない、優しい気遣いの出来るイイ奴だった。

気が合った3人でよく飲みに出掛け、色んな事を言い合って…気が付けば、2人の間に恋愛感情が芽生え恋人同士になっていた。

問題だったのは、相手の男に妻子が居た事…警察官の不倫は御法度だ…だから、2人の関係を知るのは俺だけだった。

「…柴…人事が動いてる…。」

その男が青い顔をして、俺に告白した。

『人事が動く』とは監察が動く事…他にやましい事の無いソイツの狙われる理由は、京子との不倫以外に無かった。

「何か言って来たのか!？」

「いや…まだ、証拠固めの段階だろう…。」

監察に睨まれ証拠が固まると、上からやんわりと自主退職を勧められる。

それを断れば…年金も付かない免職処分にされてしまう。

そんな時、事件は起きた…拳銃を持った凶悪犯を追跡中、無茶な行動に出たソイツの腹に、犯人の発砲した銃弾で風穴が開いた。

「いつも慎重なお前が、何やってる!?!待ってる!!すぐに救急車を…。」

「柴…いい…どうせ助からん。このまま、逝かせてくれ…。」

「お前…まさか、わざとか!?!」

「このまま殉職したら…2階級特進で、妻子に名誉と金が残してや

れる…。」

「馬鹿か、お前！？そんな事…誰も喜びやしねえ！！」

「可哀想なのは、京子だ…俺は、京子に何も残してやれない…。」

「なら、生きて残してやれよ！？諦めるな、馬鹿野郎！！」

「柴…頼む…今迄通り京子の傍に…アイツに本当の相手が見付かる迄…傍に…。」

「わかつてる！！お京は、俺のダチだ…お前に言われなくても…。」

「…頼んだ…柴…。」

そう言つて、京子の恋人は俺の腕の中で逝ってしまった。

以来京子は仕事に没頭している…最近は、少しずつ肩の力が抜けて来たが、浮いた噂はついぞ聞かない。

「何を調べてるか、検討…付いてるんでしょ？やっぱり、松田の？」
「…多分な。」

「そう…私は当分署に泊まるわ…こつちに来る可能性も有るからね。」

「ああ…頼む。」

「了解…アンタも、ちゃんと駄休めなさいよ！？」

受話器を置いて、溜め息を吐きながら窓の外を眺めた。

昨夜は冷たい雨が、今日は寒冷前線が南下し、夕方からのミゾレ混じりの雨が、夜になって本格的な雪に変わっていた。

あの薄着で…どんなに寒い夜を過ごしているだろうか？

俺は事務所の入口の鍵を開けたまま、寢室のベッドに入った。

夜半、妙な音が聞こえた気がして目が覚めた。

何か、濡れた雑巾を引き摺る様な…事務所の中を確認し、入口のドアを開けた途端に、俺は叫び声を上げた。

「ネコっ！？どうしたっ！？」

廊下の壁を背に、崩れ落ちていたネコの躰は、今水から上がって来たかの様に頭の中から爪先迄グズグズに濡れていた。

「…ただいま…柴さん。」

「何て格好だ、お前…。」

慌てて抱き上げ、風呂場に運んでやる…濡れそぼった躰は氷の様に冷え、ネコは眉を寄せてガクガクと震えていた。

「…脱がせるぞ。」

そう断って洋服を脱がせると、背中や腰、足や腕に至る迄、暴行の後が見られる。

「どうしたんだ、コレ!？」

「…ちよつと…ドジっちまった…大丈夫、腹は遣られて無いから…。」

「

「大丈夫って…。」

「ちよつとさ…前から目え付けられてた…奴等に…フクロにされて…川に捨てられたただだよ…。大丈夫…今回は…犯られなかったし。」

「

「…お前…。」

足先からぬるま湯を掛けてやり、段々と熱い湯に慣れさせて躰と髪を洗うと、抱いて布団に連れ込んだ。

「病院行かなくて平気なのか？」

「…ん…。」

「待つてろ、今湿布を…。」

「…いい…要らない…これ以上冷えたら…死んじまう…それより…来て…。」

ベッドの上で、力無く横たわった全裸のネコが、潤んだ瞳を投げ掛ける。

「…暖つためてよ…柴さん…。」

「…馬鹿野郎…真ッパで誘うな…エレクトしちまうだろうが!？」

「…悪いいな…そんなつもり…。」

「わかつてる…。」

俺はネコの隣に潜り込み、いつもの様に腕枕をして抱いてやる。

「…調べ物は…終わったのか？」

「…。」

「まだ寝るな、ネコ! 躰が暖まる迄、寝るんじゃねえ!-!」

「…ん…もう少しで…金貸して…柴さん…」
「幾ら？」

「…3000。」

「3000万か！？」

首筋で、クスリと笑うネコの息がくすぐつたい。

「3000円だよ…ハンバーガー奢るって…約束したんだ。デツカイハンバーガー…そしたら…最後の話…聞ける…」

「ネコ、寝るなって！」

俺はネコを仰向きに寝かせ、上から軀を密着させて覆い被さった。

「苦しくねえか？」

「…ヘーキ…あつた…かい…」

耳許で本当の名前を呼ぶと、俺の胸の下でネコの心臓がドキンと跳ねる。

そのまま唇を奪おうとすると、冷たい手で俺の口を塞がれた。

「駄目…口ん中…切れて…」

仕方無く首筋に唇を這わせ、鎖骨に下りて来ると、ネコは力無く抵抗した。

「…嫌だあ。」

「怖がるな…最後迄しねえから…軀暖めるだけだ…」

「柴さん…怖いよ。」

「ネコ…触ってるのは俺だから…」

スルリと軀を撫で下ろすと、触れる毎にネコは息を上げていく。

「…柴さん…何か…」

「力抜いて…感じてろ…」

「…足に何か…当たって…」

「…そっちは、気にするな。」

震えながら息を上げるネコの軀が、ほんのりと暖かみを増していく。

「柴さんっ…柴さんっ…」

切羽詰まった様な声を上げるネコの腕を、自分の首に回す様に導いてやると、俺の首にしがみつきながら、ネコは悩ましい声を上げ続

けた。

「…柴さあ…ん…。」

「お前…反則だぞ…。」

噉り泣きながら腰を持ち上げ、喉を仰け反らせるネコの首筋を甘噛みしてやると、ネコはカクカクと震えて布団に沈んだ。

「…大丈夫か？」

すっかり暖まり、しつとりと汗を滲ませる躰を抱いてやると、そのままネコは深い眠りに落ちて行った。

「柴さん…行つて来るね。」

翌日の昼過ぎ、俺から金を受け取りながら、ネコは恥ずかしそうに言った。

「帰りに、松田先生の所行つて来るね。」

あの時、何故付いて行かなかったのか…俺は後々迄後悔した。

見舞う

夕方、京子から連絡が入った。署の方に、ネコが訪ねて来たらしい。「事件のあらましが、わかったわ。松田の妹が所属していたグループも、そこに薬を流してる奴等も。あの子、全て洗い出して来たのよ。」

「…そうか。昨日ネコを襲ったのも、其奴等なのか？」

「多分ね。…ucciかり昔の事話したって、後悔してたわよ。」

「…廻されたのか？」

「それでも、渋谷の時よりマシだって、以前笑ってたわ。」

「…。」

「それより、松田の妹が家を出たのって。母親のせいじゃ無かったそうなのよ。」

「…どういう事だ？」

「母親の店で、筋物に薬を打たれて犯られたって。バラしたら店を潰すって脅されて。母親にも松田にも、相談出来なかったって。」

「何だと!？」

「仲間に打ち明けてたのよ。店のホステスの情夫でね、松田に連れ戻された時も、そのホステスがまだ店に居る事を知って、怖くて帰れなかったそうよ。」

「松田は、知らないんだな？」

「ええ。…内容が内容だけに、私から松田に話してくれって言われたわ。あの子、相手のヤクザの名前迄調べて来たのよ。…流石に驚いたわ。」

「…どこの組だ？」

「佐久間じゃ無いわ。堂本よ。」

「堂本!？」

「ただし。…当のご本人は、堀の中。薬の密売やら殺人教唆やらで、当分は出て来れそうに無い。組からも放り出されて、行き場も無い

らしいわ。」

こんな所で、堂本の名前が出て来るとは…現在組長である堂本清和…奴の細面で色白の、整った顔が脳裏に浮かんだ。

「これから松田の所に行くって…少し緊張してたわ。アンタも行くの？」

「いや…此处で待つてやろうと思う。」

「そう…結果がわかったら知らせて。」

「わかった。」

京子との電話を切つて、射し込む夕陽に目を細めた。

昨日の雪は全て溶け、春が…直ぐそこまで近付いて来ていると…あの時は思つたのだ。

2度目に京子からの電話を受けた時、俺の中でブリザードが吹き荒れた。

「柴っ！？直ぐに松田の診療所迄来てっ！！」

「どうした！？」

「ネコちゃん…拐われたわ！！」

どこをどうやって走つたのかも、覚えていない…ただ歌舞伎町にある松田の診療所に入った途端、俺は松田の首を締め上げた。

「どういう事だっ！？松田っ！？」

「止めて、柴っ！！松田は…騙されたのよ…。」

俺が手を離すと、松田は力無く荒らされた診療所の床に座り込み、俺に済まないと謝った。

「榊が、先回りして…こっちに網張つてたのよ。」

「何！？」

「1週間程前…弁護士を名乗る男が来たんだ。あの子の祖父が、心配して行方を探している。見付けたら一報欲しいと…。」

「で、ネコちゃんが来院して直ぐに、弁護士に連絡を入れたら…やつて来たのは祖父と名乗る爺さんと、黒服の厳つい男達だったそう

よ。」

「何故…何故弁護士が来た時点で、俺に知らせなかった!？」

「仕方無いだろう!？あの子の身内が探してると言われたんだ!未成年の…家出娘だ…身内に知らせるのが筋だろう!？」

俺は、力任せに診療室の壁を殴った。

「ネコは…あの家に帰ると座敷牢に入れられて…無理矢理客を取られる。ネコの母親が、自分と同じ目に合うのを案じて、敢えて奴等から逃げ回る生活をさせていたんだぞ!？」

「…そんな。」

「柴…松田には話して無かったもの。常識的に考えれば致し方無いわ。それより、今後の事を考えるべきよ!」

俺は、その場で兄貴に連絡を入れ、事の顛末を話した。

「柴…あの子は、自分で時間を稼いだ…。」

「どういう事だ?」

「あの子は、自分で祖父だと名乗る男と渡り合った。自分が今日此処に来たのは、HIV検査を受ける為だと言ったんだ。」

「!？」

「路上生活で、男と散々遊んで来た…今になってキャリアかも知れないと怖くなって、HIV検査の予約を入れていたと…俺に採血をさせて、2週間後に又来ますと言って男達と出て行った。」

「今日の検査の結果は!？」

「それは、伝えてある。」

「どうだったんだ?!？」

「…陰性だ。」

京子と俺の口から、深い溜め息が吐かれた。

「結果表は?ネコちゃんに渡してたら…。」

「それは、此処に有る。」

「なら、2週間は大丈夫って事ね…。」

「今、ネコの躰は痣だらけだからな…それが治るのも、2週間程掛かるだろう…。それまで、無事で居てくれたらいいが…。」

「まずは、作戦会議よ！佐久間さんも交えて、今後の事相談しましょう！！」

「…柴…俺に出来る事があれば…言ってくれ。」

「ああ…。」

「…済まない。」

「それは、直接ネコに言ってくれ。」

診療所を出た俺と京子は、事務所に向かった。

「どういう知り合いか、聞いていいか？」

俺は、目の前を歩く髪の毛の長い、恐ろしく綺麗な男に声を掛けた。

「学生の頃に…ナンパされたんですよ。」

「お京にか！？」

「ええ…ただし、あの人の入っていたグループに入らないかって誘いだっただんですがね…。」

「それって…。」

「そう…女に間違われたんです、俺。」

振り向いて笑った顔が、見惚れる程美しい…今でこれなら、学生時代はさぞや美少女に間違われただろう…。

「俺、結構気が短くて…それにその頃、色々あつて鬱積してたからキレちまつて。連れが止めてくれたから良かったんですが、お互いに少し怪我をして…ウチで治療したのがキツカケかな？」

「はあ。」

「何だかんだで、１０年以上の付き合いです。」

肩の下で束ねられた髪には、藤色と茄子紺の組紐が結ばれ、真っ白な白衣のアクセントになっていた。

「さて…じゃあ行きますよ、柴先生？」

目指す病室に近付いた俺達は、姿勢を正した。

入口に居た警備の男達に会釈をし病室に入る…明るい個室の中に居た男が、すかさず立ち上がる。

「診察をしますので、外に出て頂けますか？」

「あの…貴方は？」

「私は、外科の鷹栖と言います。こちらの音戸さんの手術を担当しますので、その前に症状を把握しておきたくて…聞いてませんか？」

「…はあ。」

「手術に関しては、そちらのご家族から再三申し入れがあると聞いていましたが…しかも、父と僕を指名していると…。」

「あの…先生のお名前をもう一度…。」

「鷹栖小次郎です。父は、此処の院長をしております。」

「失礼致しました！…どうぞ、宜しくお願い致します！」

「あの…クランケは、手術を承諾していないとお聞きしましたが？」

「はい…なかなか承知して頂けません。」

「それでは、その件も含めゆつくりと話をしたいので…部屋の外でお待ち下さい。」

「…わかりました。」

付き添いの男が部屋を出ると、カーテンに遮られたベッドから声が掛かった。

「先生…申し訳ありませんが…手術をする気はございません。」

意外な程ハッキリとした口調に対し、小次郎は失礼と言ってカーテンを開け放った。

ベッドに座っていた女性…確か年齢は40を少し越えている筈…だがそこに居た女性は、どう見ても30過ぎにしか見えなかった。

「音戸さん、先ずはお詫びしなくてはなりません…。」

「何でしょう？」

「今日お話しをさせて頂くのは、僕では無く彼なんです。」

小次郎に促され、俺は掛けていた伊達眼鏡とマスクを外して頭を下げた。

「柴健司と申します。音戸沙夜さんですね？」

「…はい。」

「音戸乃良さんの、お母様ですね？」

途端に沙夜の顔が引き攣った。

「私は…先日迄、乃良さんと生活を共にしておりました。」

「乃良は…乃良は、どうしています!？」

「乃良さんは…今、ご実家にいらつしゃいます。」

青白い顔が再び引き攣り、ネコと同じ…アーモンド型の黒目がちの瞳からパタパタと涙が零れ落ちた。

すかさず小次郎が脈を取り、俺に向かって頷いた。

「あの子は…貴方に、話しましたか？」

「はい。」

「全て?何もかも!？」

「はい…お聞きしました。そして、私はそれを知るべき立場にいました。」

「…どういう事でしょう?」

「私の兄は…佐久間憲一郎です。」

一瞬見開かれた大きな瞳から、柔らかな光が溢れた。

「あの方には、本当にご迷惑をお掛けしました…そう、歳の離れた弟さんがいらつしゃるとお聞きしていましたが…。佐久間さんは、お元気ですか？」

「元氣過ぎて困ります。乃良さんの事も…可愛くてしょうがない様で、構い過ぎて嫌われないか心配です。」

俺が少し笑いながら話すと、表情を緩めて沙夜は少し笑った。

「あの子が、あれからどう過ごしていたか…貴方はご存知ですか？」

俺は、ネコが仙台から上京し、渋谷、新宿で生活していた事、俺と出会ってからの事をかいつまんで話した。

「柴さん、お窺いしたい事があります。」

「何でしょうか？」

「貴方は…乃良の様子を知らせに来て下さる為だけに、此処にいらしたのですか？」

「いえ…私は…。」

俺は沙夜の痛い程の視線を浴びて、ゴクリと唾を飲み込んだ。

「私は…これから自分が起こす行動と、乃良さんの今後の事について、貴女に許しを得たくて此処に来ました。」

「乃良を…助けて下さるのですか？」

「貴女のご実家に、多大なご迷惑をお掛けするかもしれません。」

「構いません！あの子さへ無事でいてくれたら…。」

「貴女から、再びお嬢さんを奪う事になってもですか？」

「…それは、あの子の為ですか？」

「いえ…私の為でもあります。」

何も言わず窺う様に見詰める瞳に、俺は正面から向き合った。

「お嬢さんを…乃良さんを、私に頂けませんか？」

正直、もう少し驚くかと想像したが、沙夜は驚く程静かに言った。

「柴さん…それは、あの子が『榊の女』だから…という訳では無いのですね？」

「私には、正直乃良さんが何者でも関係ありません。」

「貴方、お幾つ？」

「32になります。乃良さんとは、倍も離れています。」

「あの子は、承知しましたか？」

「気持ち確かめました…が、結婚となると、まだ彼女は戸惑うかもしれません…。」

「まだ…申し込んでいらっやらないんですね？」

「…はい。」

「でも、柴さんのお気持ちは、決まっていらっしゃると？」

「はい。彼女は未成年です…先ずは、母親である貴女に窺うのが筋だろうと思いました。」

「私には、母親の資格はありません…乃良には本当に可哀想な事をしましたが…致し方無い親の思い…わかって頂けますか？」

「はい。」

「あの子の事を、想って下さっているのですね？」

「私は…乃良さんを、愛しています。」

「あの子は、貴方と一緒に居て、幸せでしたでしょうか？」

「どうでしょう…私は不器用な人間で、思い遣れて無い部分も多く、贅沢をさせてやる事も出来ません。周囲には、余り品の良く無い仲間も大勢居る…だが、乃良さんは私の所がいいと…私と一緒にいたいと言ってくれました。私にはそれで十分です…その想いに応えたい。何より、私が彼女を手放したく無いのです。」

今の思いの丈を、自分でも驚く程素直に沙夜にぶつけると、彼女は嬉しそうに微笑んで、目を潤ませた。

「…ありがとうございます。あの子の事を…宜しくお願い致します。」

「一つ宜しいですか？」

「何でしょう？」

「堅気にしか…嫁に出したくは無いですか？」

「…佐久間さんの跡を継がれるのですか？」

「…わかりません。今の状況で乃良さんを助けるには、最善の策で有る事は確かなのですが…」

「それは、貴方にお任せします。あの子と相談して、お決めになつて下さい。」

「ありがとうございます。」

「私に協力出来る事は、何でも致します。」

「…宜しく願います。先ずは、彼女の住民票や戸籍謄本を取り寄せて頂けますか？」

「承知致しました…ですが…私は出歩けません。一体どうすれば…」

「

「警察関係で、協力を仰げる所があるかもしれません。」

「警察？」

「申し遅れました…私は現在『オフィス柴』という、何でも屋を生業としていますが…前職は、警察官でした。」

「まあ！佐久間さんも、大変な弟さんをお持ちなのですね！？」

そう言うと、沙夜は朗らかに笑った。

色々打合せて部屋を出ると、小次郎が俺を見上げてニヤリと笑った。

「世話になったな。」

「いえ…いいものを見せて頂きました。さて、京子さんに早速連絡しなくては…。」

「お、おいっ!？」

「言われてたんですよ…どんな風に音戸さんのお母さんに申し込むか、逐一報告しろとね!」

小次郎は愉しそうに笑い、おめでとうと言った。

謀る

「再三の面会申し込みにも、病気を理由に蹴りやがる…全くあの強
突く爺い！？下手に出てやりやあいい気になりやがって！！」

「困りましたね…『榊の女』っていうのはタブーらしくて…上の方
でも存在は知っていても、おいそれと手を出してはならない物らし
くて…。」

「政治家なんか絡む話だからな…今迄奴等がやって来た事をバラ
されてみる…世の中ひっくり返っちまう。」

兄貴と京子が眉を寄せ合うのを見て、俺は堪らず声を上げた。

「じゃあ、どうしろってんだ！？」

「…潰すしかねえだろうな。」

「潰すって…榊をか！？新宿の街の中で、抗争するっていうのか！
？」

「じゃあどうする！沙夜に迄申し込んで、仔猫ちゃん諦めるっ
ていうのか？」

「待つて下さい！警察としても、抗争は困ります！！」

「…何か…手は？」

「今…知り合いを通して…上に掛け合って貰っています。」

「署長か？」

「ううん…もつと上に…。」

「誰だ？」

京子は気まずそうに、俺に耳打ちした。

「何だと！？」

「ちよつと…信頼出来る先輩のツテがあつてね。」

「…誰だ？」

「アンタも知ってる人…アノ時の…私のバディ。」

「…ああ。」

恋人が殉職した時、一課の刑事だった京子は、連続婦女暴行殺人事

件を追っていた。

その時の彼女のバディ…キャリアで躰の大きなギョロ目の先輩は、恐らく事情を察してくれていたのだろう…捜査でも、道場でも、京子が何も考えずに済む位、ヘロヘロになる迄彼女を扱き使った。

その後海外に研修に行き、本店の組対に入り…俺が辞める頃、どこかの署長に納まった筈だ。

「まだ付き合いがあったのか？」

「まあね…キャリアで気が合うのは、あの人位なもの。」

「で…上手く行きそうなのか？」

「春にあの人が捜査本部長になった事件…新宿署の手柄にしてもらつてるけど…裏があつてね。署長は大きな借りが有るのよ。」

「春の事件…ヤク絡みのか？」

突然兄貴が話に割り込み、京子は驚いて頷いた。

「確か、ロシアと上海が絡んだ事件だったな…堂本の所が被害にあった…。」

「堂本が？」

「何だ、お前…知らなかったのか？新宿が激震した事件だったんだぞ？確か、堂本の組から逮捕者も出た…ヤク絡みで付き合いのあった会社の社長も逮捕されたる？」

「ああ…何か…あったみたいだな。」

「あの頃、アンタ…自分の事で目一杯だったから…。松田の妹の話で出てきた情夫…その時の堂本から逮捕された奴よ。」

「…そうか。」

「…ちよつと待て…そうか…堂本か！？」

兄貴は思い付いた様にニヤニヤと不気味に笑い出した。

「サーペントの…その時の事件に深く関わった人物…面識あるか？」

「誰ですか？」

「Pant her…裏の世界でも表の世界でも、ちよつとした有名な人な筈なんだが…確か…連城…。」

「連城検事ですか？連城仁？」

「そうそう…堅気だが裏事情にも詳しく、絶対に敵に回したく無い人間だ。」

「昔、担当検事としてお会いした事がありますが…多分あちらは覚えていらつしやらないと思います。先輩は…知り合いだと思いますが…余り充てにはなりません。当時もかなり険悪でしたから…。」

「そうか…やつぱり堂本に噛ませて引つ張り出すしか無いかな？」
「どういう人物だ？」

「元検事で弁護士で、企業や有名店のオーナーだが…色んな2つ名を持つてる。通り名はP a n t h e r…俺もパーティーでチラツと拝んだだけだが…確かに黒豹だな、あれは。」

「検事としても、弁護士としても一流でね…一度も負けた事が無いのよ。」

「一度も？」

「そう…それだけの調査や取り調べをしての結果なんだけど…私達も、何度も納得する迄再調査依頼されて…でも、法廷では必ず勝つてくれる…大変だったけど遣り甲斐の有る仕事だったわ。」

「健司…お前は不満かも知れないが、堂本に協力を願ひ出るぞ！」

「兄貴!？」

「他人の女房になった昔の女と仔猫ちゃん…どっちが大事だ!？」

通学途中の電車で見掛けるお嬢様校の制服…男子高校生垂涎の高嶺の華…時任しずかと付き合い初めたのは、電車の中の痴漢を撃退した事がきっかけだった。

何の取り柄も無い普通の男子高校生と、光輝く純潔の白百合…名前の通り静かで大人しく、フワリと笑う笑顔が天使のようで…手を触れる事もおこがましく、大事に…本当に大事にしてきたのに…。

そんな彼女に、兄貴の組と対を張る堂本組の息子、堂本清和が目を付けた。

「俺の女になれ!!」

彼女の学校の校門や自宅前、俺と一緒に居る時にも堂々と口説く堂本に、初めしずかは怯えていた。

それが段々と態度が変わって来たのだ。

「思った程、怖い方では無いのかもしれない。」

「私の嫌がる事は、絶対にしない方だから……。」

それを聞いて、迂闊にも少し安心したのだ。

気付いた時、しずかの心は堂本に傾いていた……それは、坂から転がり落ちる様に……止め様が無かった。

何故と問う俺に、しずかはハラハラと涙を溢した。

「私は……誰かに、私の殻を破って欲しかったのかもしれませんが。」

そして、許して欲しいと何度も何度も詫びた。

堂本とタイマンも張ったが、同じ極道の息子でも跡取りとして育て上げられた堂本と、普通の学生として過ごして来た俺とでは、歴然とした差が有り過ぎた。

「俺は、詫びる気は欠片も無い……！しずかが、俺を選んだ……それだけの話だ！」

悔しくて情けなくて、男としての矜持を取り戻す為に組の連中に喧嘩を教わり、族に入ってがむしやらに突き進んだ結果、総長に上り詰めてフアング等と呼ばれる様になった。

あれから15年以上経つのに、目の前でニヤける優男の顔を見るとムカっ腹が立つ。

神楽坂の料亭の一室……慥然とした俺の隣で、兄貴が堂本と若頭の森田という男に話を進めていた。

「一枚噛む気は無いか、堂本の？」

「ウチに何をさせたいんです、佐久間さん？」

「榊の土地家屋……アンタとこの抵当に入ってるんだってな？」

「ええ……正確には、森田の抵当に入ってます。」

「ウチに譲ってはいくねえか？」

「何の為に？」

「ちよつとな……あの家をぶっ壊して、探したいモノがあつてな……。」

「佐久間さん：ウチとの境界線、いや：森田の所が持つ抵当物件って事は、ウチの島ですよ。そんな所で、宝探しでもおっ始めるんですか？」

「それは、P a n t h e r が来てから話そう。」

「もしかして：『榊の女』に絡む話ですか？」

堂本の隣で、森田が静かに尋ねた。

「何か聞いてるか？」

「『榊の女』が帰って来たという噂を、榊は広めている様です。あそここの収入源は、昔から『榊の女』に頼っていますから：ウチの組長にも、榊組長直々に連絡が入ったそうです。」

「成程：差し出して、抵当をチャラにして欲しいってか？」

「何考えてるんだか：出戻りに、そんな価値ありやしませんよ。」カラカラと笑う堂本の隣で、森田が眉を寄せた。

「しかし、入院中だと聞いていましたが：確か心臓が悪く『榊の女』としての務めが出来ないという話で：全快したんでしょうか？」

「いや：彼女じゃ無い。」

「は？」

「沙夜じゃねえ：新しい『榊の女』は、沙夜の娘だ。」

その時、廊下が続く障子がスパンと開け放たれた。

「：その話、詳しく窺おう。」

高級なブリティッシュスーツを着こなした長身の男が、俺達を見下ろしていた。

堂本は片手を上げてヨウと声を掛け、森田はわざわざ向き直り深々と頭を下げた。

「ご無沙汰致しております、連城さん。この度は、ご婚約おめでとうございます。」

「ありがとうございます：所で森田さん、お宅の組長に気安く声を掛けるなど伝えてくれないか？」

「申し訳ありません。」

「来月も、呼びもしないのに一家揃って出席すると連絡があった様

だが？」

「当たり前だ！黄龍が上海から招待されるのに、何故慎の所に招待状が来ない？漏れている様だから、わざわざこちらから連絡を入れてやっただけだ。」

「…じゃあ、息子だけ寄越せ。」

「馬鹿野郎、4歳の息子だけを結婚式に出席させる親がどこにいる？当然俺達も出席する！」

「…好きにしろ。」

用意された席に座ると、連城は兄貴に名刺を差し出した。

「失礼致しました…弁護士の連城です。」

「佐久間組の佐久間です。こちらは、私の弟で柴健司です。」

そう紹介され黙って頭を下げる俺に、意外な挨拶が返って来た。

「久し振りだな…柴刑事。」

「は？」

「何だ…覚えて無いか？一度挨拶を受けた…佐伯の所の女刑事と、よく連んでただろう？」

「…幸村を、覚えていると？」

「当たり前だ。共に事件を追った仲間を、忘れる筈無いだろう…それにお前達は、異色で結構有名だったからな。」

「異色で有名なのは、お前だろうP a n t h e r？俺の友人の中でも、3本の指に入る。」

「黙れ、堂本…お前に友人呼ばわりされる覚えは無い。」

「じゃあ、何でお前この場に来たんだよ？」

苦笑する森田の隣で、口を尖らせて子供の様に拗ねる堂本に、連城はサラリと言った。

「佐伯から連絡があったからに決まっているだろう？だから、弁護士としてやって来たんだ。」

「話の内容は？」

「佐伯から、概ねは…『榊の女』の救出と、榊組の壊滅が望みだと？」

「そうなのか！？佐久間さん、潰すのか？榊を？」

「その積りだと言ったら、どうする…堂本の？」

「佐久間組長、そうなると島の取り合いで互いの上が出て来ます。今の均衡が崩れる恐れが有る…それでも、榊を潰すんですか？」

森田が、思案顔で尋ねて来る。

「互いの上が文句を付けない様に、折半するって事でどうだ？」

「…佐久間さん…ウチはいい。黙って座っていて島が増えるんだからな。だが、それで自宅に何のメリットが有る…『榊の女』か？」

兄貴はニヤリと笑うと、堂本に身を乗り出して声を潜めた。

「沙夜は元々、俺の女房になる筈だった女だからな…娘共々返して貰おうってだけの話だ。」

じつと兄貴を見詰めていた堂本が、ゆっくり俺に視線を向けた。

「柴…お前…何故この場に居る？佐久間組に入った訳じゃねえだろう？」

「ああ…俺は、堅気だ。」

「じゃあ何故だ？お前には、関係の無い話だろうが？」

「関係は有る…ナオは…俺の女だ。」

「ナオ？女？誰の事だ？」

「今、榊に囚われている女だ。音戸乃良…俺の女だ。」

「『榊の女』がか！？その為の画策か！？」

「それがどうした？お前達極道の手慰み者や、悪徳政治家の邪な思いの為に利用されていい様な女じゃ無い。あれは…俺の女だ。」

ハッキリと言い切った俺にその場は静まり返り…連城が静かに俺に尋ねる。

「柴刑事…いや、刑事は廃業したんだっただな。柴…その娘、歳は幾つだ？」

「…16です。」

「…この話、引き受けよう。佐久間さん、何を計画していますか？」

「堂本の許可があれば…榊の屋敷を解体して、座敷牢から奪還する積りだったんだが…。」

「あー、好きにしてくれ。俺達は、高みの見物とさせてもらう。」
堂本は立ち上がると、ニヤリと笑った。

「佐久間さん、島の件…後日ゆっくり話し合いましょう。それから、柴…。」

「何だ？」

「手に入れたら会わせろ…しずかとどっちがいい女か、とくと見分してやる！」

「大きなお世話だ！」

馬鹿笑いする堂本と、一礼する森田が退室すると、俺達はその後の計画について話し合った。

「柴…お前、乃良さんを取り戻してどうするつもりだ？」

兄貴を先に帰らせると、差し向かいで杯を上げながら連城が聞いた。
「結婚するつもりです…ナオさへ承知してくれたらですが。」

「組は？跡を継ぐのか？」

「…思案中です。」

「お前には、無理だな。」

「何故ですか？」

「組を束ねるには、もっと狡猾でなければ無理だ。それに、理不尽な上の命令に、お前は耐えられんだろう？」

「…。」

「警察も、指定広域暴力団も…検察の様な組織も…全て伏魔殿だからな。お前には無理だ。」

「そうでしょうか？」

「真っ直ぐ過ぎて傷付きやすい…そんな男には、精々族のヘッドが社長が関の山だ。」

「…。」

「それよりは、惚れた女を守ってやれ…若くして苦労しているなら尚の事だ。己の選択を間違えて、惚れた女を傷付ける様な事はするな。」

「経験者ですか？」

連城は、寂し気に笑って言った。

「ああ…本当に長く苦勞を掛けたが…ようやく贖罪を経て手に入れる。」

杯を見詰める瞳が、優しく瞬いた。

助ける

榊組長の自宅…広い座敷に上げられた俺と兄貴は、その閑散とした屋敷に息を飲んだ。

広い敷地ではある…建物も古く堂々としているが…。

座敷に向かう廊下を進むと、伸び放題の庭木にジャングルと化した雑草、庭に面した廊下は雨露で腐り落ちている箇所もあり、掃除も行き届いていない有り様で…。

何より驚いたのは、人の気配が感じられない事だ。

案内して来た老女が退室すると、屋敷内を吹き抜ける風の音と鳥のさえずり…遠くから、敷地外で行われている工事の音がする。

「偉く荒れて…人の気配もねえな？」

「以前は、こんな事は無かったんだがな。格式の有る…。」

先程の老女が、湯呑み茶碗を運んで来た。

「榊組長は？」

「程無くおみえになりますんで、今しばらくお待ち頂けますかねえ…。」

少し間延びした話し方でヒョコリと頭を下げると、老女は再び出て行った。

「…お前、榊が来ても…。」

そう兄貴が言い掛けた時、縁側の廊下とは反対側の襖が開いて、1人の老人が入って来た。

土色の顔をし、痩せた頬と窪んだ目…神経質そうな瞳が俺達を睨み付ける。

「お久し振りで、榊さん。お躰の調子は如何です？」

頭も下げずに、兄貴は榊大善に挨拶をした。

「…何、たいした事は無い。貴方の所と違って我々の様な弱小の組は、色々と気苦労も多くてね。」

ピリピリと青筋を立てながら対応する大善は、兄貴から俺に視線を

向けた。

「佐久間さんの弟だな？」

「柴健司です。」

「…孫が、世話になつたそうだな？」

顔を窺うように覗き込まれ、口端が引き上げられた。

「榊さん…その事も含めて、アンタに話があつて来たんだ。」

兄貴が足を崩して片膝を立てた。

「…沙夜を返して貰おうと思つてな。」

「何だと!？」

「驚く事たあねえだろう？沙夜は、今もつて俺の婚約者だ。あれから22年…そろそろ嫁に貰つてもいい頃合いだろうが？」

「しかし…あの話は…。」

慌てる大善に、兄貴はくつろぎながらニヤリと笑つた。

「解消は、されてねえよなあ？そんな話は無かつた…だから俺は2年もの間、操を立てて独身を貫いてるんだぜ？」

「だが、沙夜は結婚して…。」

「亡くなつたんだつてなあ、気の毒に…アンタの所にいた弁護士、音戸つつたか？まあ、亭主がいるつてんなら仕方ねえが、亡くなつた後アンタの所に引き取つてるんだろう？胸患つて、入院してるつて言うじゃねえか？俺は…聞いてねえよ、榊さん？」

「…佐久間。」

「あの話は、アンタの所から是非にと持つて来たんだ。今更反故になんか出来ねえよなあ？それに…沙夜が出て行つた後、俺に島を半分渡すと手を打つた席で、アンタと当時組長だったアンタの息子が言つたんだぜ？」

「…な…何を？」

「沙夜を必ず連れ帰る…そして、俺の所に連れて来ると…煮るなり焼くなり好きにしてくれてな。」

ギラギラとした瞳を投げ掛けて、喉の奥から絞り出す様な声が吐かれた。

「…わかった…沙夜はお宅に渡そう。」

「そうかい…じゃあ、沙夜の娘も返して貰おう。」

「アレは駄目だ…！」

「何言ってる？沙夜の娘だ…俺が連れ帰る。」

「アレは『榊の女』だ…！榊の財産だ…！お前の娘では無いだろう！？」

「ああ…まだな。だが、沙夜の娘で…結婚すれば俺の娘だ。正統な…正妻の産んだ佐久間の跡取り娘だ。お前達が…こんな今にも潰れそうな組がどうこうしていい女じゃねえぞ…！」

「断るっ…！」

「極道の理屈は、通用しねえってか？」

「アレは、榊のモノだ…！」

「仕方ねえな…。」

兄貴が目配せし、俺は携帯を取り出すと通話ボタンを押して、一言お願いしますと相手に伝えた。

程無くして3人分の足音が廊下に響き、障子が開かれたそこには、老女に案内された沙夜と連城の姿があった。

「沙夜っ…！」

沙夜は何も言わずに兄貴の隣に座り、兄貴は自分の敷いていた座布団をそっと沙夜に押しやった。

「榊大善さんですね？私、弁護士をしております連城仁と申します。」

俺の隣に座った連城は、大善に名刺を差し出しながら話を続ける。

「本日は、そちらの音戸沙夜さんの代理人として、お話をさせて頂く為に参りました。」

「代理人？」

「はい。こちらにいらっしゃる、音戸乃良さんの身柄を引き取りに参りました。」

「何…？」

「未成年である乃良さんを、保護者である沙夜さんが引き取る…何

の問題も無いと思いますが？」

「…だが、沙夜は入院中だ。身内である儂が面倒を見ても、不都合は無いと思うが？」

「しかし沙夜さんより、こちらには預けたく無いと…こちらに預けると、乃良さんの身に危害が及ぶとのご心配で、柴健司さんの元で預かって頂きたいというご依頼なのです。」

憎々しげに目の前に座る面々を睨み、青筋を立てた大善が怒りに震えながら言った。

「…全て…お前達の画策か！？」

「何の話だ？」

「6日前、堂本から連絡があつた…5日の内に借金を返済出来なければ、屋敷を引き渡せと…これ迄一切催促等して来なかつたのに、今更何故と思つていたが…。」

「そんな事は、俺達には関係ねえ…だがなあ榊さん、あの折にも言つたが、そろそろ潮時なんじゃねえか？いつ迄も『榊の女』に頼つてもいられねえだろ？」

「…乃良さんは、まだ16歳です。わかつておられると思いますが、貴方のなさろうとしている事は、児童虐待になります。」

兄貴の言葉に、連城が追い討ちを掛けると、大善はギリギリと歯を食い縛つた。

「お父様…乃良は…。」

「おらんっ！！」

大善の言葉に俺は立ち上がり、屋敷の中を探し回つた。

「ネコっ！！どこだ、ネコっ！！？」

沙夜が廊下に出ると、無言で俺を導いた。

邸内の奥まつた所にある土蔵…変わった造りだ…屋敷の中央に造られた中庭に、かなり大きな土蔵と、それに対になる様に神殿が建てられていた。

「…多分、この中です。」

「此処が、座敷牢なのか？」

「加代：鍵を。」

「いえ、お嬢様：鍵は、旦那様が…。」

いつの間にか沙夜の後ろに控えた老女が、申し訳無さそうに言った。
「ネコっ！？居るのか！？居たら返事しろ！！」

土蔵の入口を叩きながら俺が叫ぶと、背後から冷たい声が掛けられた。

「無駄じゃ…誰もおらん。」

「お父様、鍵を…。」

「鍵は無くした…そこは、お前が出て行ってから、使われておらん。」

「あくまでも、しらを切り通すつもりか！？」

「知らんモノは知らん！！」

「仕方有りませんね。」

俺達の話聞いていた連城は、そう言うのと携帯を取り出してどこかに電話を掛けた。

「…もしもし、私だ…ああ、仕方無い…裏の方が近いだろう…宜しく頼む。」

そう言いながら、裏の庭の方に歩を進めた途端、屋敷の外から何か近付いて来る音がする。

「な、何だ！？」

驚く大善が連城の後を追うと、やがて屋敷を囲うの白壁の塀が物凄い音を立てて崩れ去った。

そこに現れたのは、巨大な蟹の爪の様な圧碎機を付けた油圧ショベル…バキバキと容赦無く白壁を壊すと、裏庭にその巨大な車体を現した。

「何なんだ、一体！？人の屋敷に何をしている！？」

青ざめた大善に、連城は胸ポケットから一枚の紙を引き出し大善に渡しながら言った。

「屋敷の解体に付いては、堂本組長より委任状を頂いております。」
「何だと！？」

「因みに：貴方が『榊の女』を提供しようとしていた政界の方々ですが：彼女が未成年と聞いて一様に驚いていらつしやいましたよ。あの方々には、スキャンダルはご法度ですからね。今後もし『榊の女』に頼って来られる方は、皆無かと思えます：私が、絡んでしまいましたが、

」。

「まだ鍵を出して頂けない様なら、このまま建物も解体致しますが？」

「：好きにするといい。」

大善の言葉に、連城と俺は眉を寄せて顔を見合せた。
何か：嫌な予感がする。

直ぐ様指示がなされて、母屋の一部を圧碎機が破壊してゆく：そして、中庭の土蔵の壁に巨大な蟹の爪で穴を開けていった。

人が通れる程の穴が広がった所で、俺は土蔵の中に入り込み、声を限りに叫びながらネコを探した。

2階建ての土蔵には、明かり取りの窓の光しか届かず薄暗い：その1階の半分に太い組み木で牢が拵えられ、中には畳が敷いてあり、箆笥や机等一通りの生活用品が揃えられている様だった。

だが、肝心のネコの姿が見当たらない：何故だ：此処以外に監禁出来る場所は無いと聞いていたのに：。

穴から出て来た俺に、連城と兄貴が不審な目を向けた。

「：中は：蛻の殻だ。」

その言葉を聞いて一番に反応したのは沙夜だった。

青白い顔を余計に青ざめさせ、目を吊り上げて大善に食って掛かった。

「お父様：まさか：まさか、神降ろしをしているのでは無いでしょうね！？」

「神降ろし？何だ、それは！？」

「巫女の躰に：神を：でもあれば、あれば：拷問以外の何物でも無い：恭順させる為だけの拷問に：。」

「何を言う…あれは、神聖な儀式だ。あの娘は気が強い…恐らくは神が…。」

「何日になります！？神室かみむろに入って、何日経つんです！？」

「…今日で5日。」

「そんなに…いけない…狂ってしまう！！」

沙夜は縛れる様な足取りで神殿に入り込み、祭壇裏に回り込んだ。そして床下の隠し扉を開けると、置いてあつた燭台を手に俺に付いて来る様に言つた。

「…此処は？」

「神室と申します…先程お話しました、巫女の神降ろしをする場ですが、本来は…歴代の巫女の墓所です。」

「墓なのか？だが…。」

「榊家は代々巫女の家系…『榊の女』が家を守り継いで来たのに…その女達には、戸籍が無いのです。」

「え？」

「表面上は存在してはいけない者…だから、榊の戸籍では代々養子を迎えている事になっているんです。死して尚密葬される。何故だかわかりますか？」

「…いえ。」

「それは『榊の女』の出自が…不明だからです。要は婚外子という事では神聖な巫女には相応しく無いのでしょうか。」

「だからですか、貴女方夫婦の婚姻届と、乃良さんの出生届に拘つたのは？」

「乃良が話しましたか？私の戸籍は、主人が手を尽くしてくれました。あの子だけです…生まれながらに戸籍を持つ『榊の女』は…。」
地下に下る階段を下りた所に有る、大きな門の付いた鉄の扉の前で沙夜は言つた。

「中は暗闇で…音も何も無い…1日過ごすだけでも耐えられません。もしかしたら、本当に壊れてしまっているかもしれません。」
「…構いません。」

「音にも光にも、全ての感覚が敏感になります。どうか…優しく呼び掛けてやって下さい。」

「承知しました。」

門を開けて中に入ると、すえた様なカビ臭い様な何とも言えない籠った空気が流れ出した。

蠟燭の揺らめく光にぼんやりと映し出された部屋は、思いの外広さがあつた。

部屋の中に整然と並べられた柩…中には朽ちて中の骨が見えている物もある。

そして棚の様に掘られた壁には、無数の髑髏が並んでいる…中には髪が生えたままの物や、明らかに子供と思われる小さな髑髏が物言わぬ瞳を向けていた。

部屋の入口に水の入ったペットボトルが数本転がっている。

沙夜は、燭台を翳して部屋を照らした…何かが動く気配がして目を凝らす。

「ネコっ!？」

「行つてやって下さい…呉々もそつと…」

柩の並べられた部屋の隅に、薄汚れた浴衣姿のネコがうずくまっていた。

「…ネコ…大丈夫か？」

そつと声を掛け隣に膝を付いた。

何も反応しないネコの頬をそつと撫でてやると、ピクリと反応し膝に埋めた顔をユルユルと上げた。

「遅くなって済まなかったな…ネコ、俺がわかるか？」

「……し……ば……。」

俺は上着を脱いでネコの躰に掛けてやり、その上からそつと華奢な躰を抱き締めた。

「迎えに来たぞ、ナオ。」

ネコは俺の胸に躰を預けると、大きな息を吐いて意識を飛ばした。ネコを抱き上げて沙夜と共に神室からでると、大善は憎々しげに俺

を睨み付けたが、やがて力尽きた様にその場に崩れ落ちた。

「僕は、諦めて切れん…その娘なら…。」

「拉致監禁遺棄も罪状に付けますか？」

連城の冷たい声を、兄貴が遮った。

「なあ、榊さん…ウチか堂本か、どちらかの傘下に入っちゃくれねえか？無用な争いをして、互いに傷付くのは得策じゃねえ。今なら、手下丸ごと引き受けるぜ？」

「…しばらく…考えさせてくれ。」

そう言つて頂垂れる大善を残し、俺達は榊邸を後にした。

申込む

救出されたネコは、脱水症状や検査等で3日程入院した。

「脱水は大した事は無いんですよ…ただ精神的ストレスが酷くてね。暗闇を怖がる、夜も寝れないじゃ、体力も奪われるばかりだし…反応もしてくれないしね…。」

精神科の医師は、そう言つて柔らかな笑みを見せた。

「彼女の母親は、心臓を患つて余り芳しく無い…負担を掛けられない状態だし、誰に相談しようかと思案していたら、弟が貴方の名前を出したものだから…。」

「弟？」

「ああ…先日お会いしたと…鷹栖小次郎、覚えていらっしゃいますか？」

「はい。ご兄弟なんですか？」

「ええ、鷹栖武蔵です。宜しくお願いしますね、柴健司さん。」

「宜しく願います。」

「で…彼女とは、どういうご関係になるのかな？」

「え？」

「本来は病状等も含めて、ご家族の方にしかお話し出来ないんだけど…柴さん、ご親戚では無いんでしょう？」

「違います…私はナオの身元引受人です。」

「ふうん…それだけ？」

「それだけって…。」

「彼女の反応見てるからね…で、彼女に何があつたか、話して貰えるかな？」

「それは…。」

「いったいどこから話せばいいか、全てを話すには憚られる事が多過ぎて、俺は逡巡した。」

「…面倒だね、全く…ちょっと待ってて。」

溜め息を吐きながら、武蔵は受話器を持ち上げてどこかに連絡を入れた…15分、20分も待たされただろうか、ようやく受話器を置いた時、武蔵は再び溜め息を吐いた。

「はい、だいたい把握出来た…大変だったんだね、乃良ちゃん。」
「あの…どこに？」

「え？ああ…連城だよ、連城仁。ここに運ばれて来た時、一緒だったって医局の人間が言ってたから。事件絡みだなんて…。」

「お知り合いですか？」

「昔からのね…高校の後輩なんだよ。それよりも…。」
武蔵は俺に向き直り、俺を睨み付け激しい剣幕で捲し立てた。

「連城の知り合いらしいし遠慮無く言わせてもらっけどね！俺達医師は患者の事しか考えて無いんだよ…背後に何があったか、どんな目にあつたかを聞くのは、全て患者の為にやってる事なんだ！特に精神科っていうのは、心のケアが仕事なんだから…患者の為を思つて、本当に治してやりたいなら、全てを話してもらわなきゃ治療出来ない！わかつたか！？」

「…はい。」

「…宜しい。当然守秘義務があるから、患者の秘密は漏らさないから安心しなさい。で、恋人と一緒に暮らしてるって？」

コロリと態度を豹変させて、武蔵は再び柔らかな笑みを見せた。

「…はあ。」

「いいなあ、あんな若い子と…最近、歳の差カップル流行りなのか？何歳差？」

「あ…倍です。16歳。」

「そっかあ…いいねえ。可愛いでしょ？」

「あの…。」

「ああ…慣れてるんだよ。連城の所に嫁に行く子ね、俺の親友の妹なんだけど14歳差だね。」

「そうなんですか…。」

「独り身としては、寂しい限りさ。所で治療の話…看護師や医師は

勿論、母親にも反応を示さないのに、君にだけ反応する理由は理解出来た。で、結論的には、退院させて君の手元に置くのが最良の策だろうね。」

「わかりました。」

「住環境は？」

「え…事務所兼自宅ですか？」

「じゃあ、人の出入りが激しいよね…ん。」

「静かな環境の方がいいですか？」

「しばらくはね…手も掛かると思いますよ。まずは、安心させてやらないといけない。」

武蔵の忠告を素直に聞き入れ、兄貴の家の離れに生活して3日、ネコは昼も夜も俺の懷から離れない。

暗闇を極端に嫌がり、瞼を閉じる事すら恐怖を感じる。

ただ俺の温もりだけを頼りに、虚ろな生活を続けていた。

ようやく懷から啜り泣きが漏れたのは、4日目が終わろうとする頃だった。

「ネコ？」

「…ごめんね…柴さん。」

「何謝ってる？」

「色々…いっぱい…。」

俺は、懷から顔を上げたネコを抱き締めると、こめかみにキスを落としながら尋ねた。

「怖かったか？」

「…うん…でも、柴さん助けてくれるって思ってた…だけど、あの地下に閉じ込められて…骸骨いっぱい…暗くて…息が…。」

「もういい、もういいんだ…もう大丈夫だから。」

「柴さん…お母さんは？」

「ああ…病院に居る。心配無いから。」

「…良かった。」

数日後沙夜の病室で、親子の涙の対面が実現した。

しかし、それは感動から来るものではなく、互いの謝罪の会見だった。

「何故でしょうか？沙夜さんが、ナオに対して済まないと思う気持ちはわかるんですが…何故ナオ迄母親に対して、そんな感情を表すのか…？」

「本人に聞いてみた？」

「何も言いません。済まないと泣くばかりで…。」

そうかと言いながら、カウンセリングルームで武蔵は俺に珈琲の入ったカップを差し出した。

「自分のせいだと…思ってるんだろうね。」

「何がです？」

「母親が凌辱されて入院する羽目になったのも、父親が死んだのも…今回、祖父が組を潰す事になったのも、自分の責任だと思ってるんだろうね。」

「そんな事は…。」

「あるだろ？」

「…。」

武蔵は俺の肩を叩きながら、二の句を告げなくなった俺に視線を投げ掛けた。

「当時は幼くて、逃げるのに必死で考えられなかったのかもしれないが、逃亡生活の中でずっと思っていたんじゃないかな？今後は、君がフォローしていつてあげなきゃね。」

久々に帰った事務所の有り様に、俺とネコは驚きを隠し得なかった。

「鉄、どういう事だ！？」

「申し訳ありません、総長！いらっしやらない間に、手が足りなくて…その、色々お手伝いを頼んでおりました。」

留守を預かっていた河田鉄也は、申し訳無さそうに頭を下げる。

事務所には自警団の連中ばかりで無く、数人の派手な女達が寝室に迄入り込んでたむろしていた。

「新しい依頼も入っています。しばらくは、人手が必要になります

ので……」

俺はネコを見下ろして、眉を寄せながら窺った。

「……佐久間に戻るか？」

ネコはフルフルと首を振って、ニツコリと笑った。

確かにネコが拐われてからこちら、俺自身の仕事も自警団の仕事も、鉄也を初め仲間達に頼り切っていた。

それからしばらくの間、俺は慌ただしい生活に追われ、ネコは出入りする人間に揉まれ所在無さげに病院の沙夜と事務所を往復していた。

「柴さん、お願いがあるの。」

沙夜がようやく心臓の手術を承諾したと兄貴から連絡があった翌日、ネコは真剣な面持ちで風呂上がりの俺に言った。

「私、アルバイトしたいの。」

「事務所で働いてるだろう？」

「人手足りてるし……駄目？」

「……何かあったか？」

最近の少し寂し気な様子が気になっていた俺は、ネコの隣に座ると頬を撫でた。

「ううん……違うの。お金稼ごうと思ってね……。」

「金？お前、まさか……母親の手術代か？そんな事、気にする必要は……。」

「気にするよ。私のお母さんだもん。」

「兄貴が、言ってたろう？」

「うん……お兄さん、入院費も手術代も出してくれてるって言ってた。でも、少しずつでも返したいし、それに……退院した後の生活もあるし……お金稼ぎたいの。」

「……ネコ……出て行くつもりか！？」

「お兄さんがね、もう誰も追っかけて来ないって言ってくれたの。だからね……お母さん退院したら、一緒に暮らせるでしょ？お母さん手術しても働けないだろうから、私が頑張って仕事して……。」

「俺に、面倒見させてくれねえのか？」

「え？」

「お前と…母親と…俺に面倒見させろって言っただよー!!」
じつと見上げるネコの瞳が、不安気に揺らめく。

「惚れてるって、言っただろ？」

「…柴さん。」

「全部寄越せって…俺の物にするって言っただろ？」

「…。」

「結婚しよう、ナオ…俺の嫁に來い。俺が全部…。」

「…駄目だよ、柴さん。」

「ナオ？」

「…駄目。」

「何故だ、ナオ!？」

寂しさを滲ませた笑みを浮かべて、ネコは俺の躰を押しやった。

「俺の事嫌いになっちまったのか？それとも、俺とは…考えられないって事か!？」

「違う…違うよ、柴さん。柴さんの事、大好きだし…すっごい嬉しい!」

俺の胸に抱き付きながら、頬を擦り寄せてネコは言った。

「だけどね、今一番しなきゃいけない事…違うと思う。」

「…ナオ。」

「私ね、自分の力でお母さんの事、幸せにしたいんだあ。」

「俺と一緒にじゃ…駄目なのか？」

俺はネコを胸に抱き込んで、静かに尋ねた。

「…ごめん、柴さん。」

「待てばいいか？1年か？2年か？」

「…。」

「わかった…お前の気の済む様にすればいい。それ迄、俺は待つから。」

「…柴さん、あの…。」

「お前は若い…結婚なんて考えられる年齢じゃねえのはわかってる。だから気にするな。」

「でも…。」

「今迄通りに、俺の手元に置いて待ちたいと思うのは、俺のエゴだ。だが出来れば、俺の目の届く範囲に居てくれ。」

ネコは何も言わずに俯いて、俺の胸から身を離れた。

「お前、俺が居なきゃ働く場所も、住む場所借りるのも出来ねえだろうが？」

黙って頷くネコの顎に手を添えて持ち上げると、ネコは泣き出しそうに寂しい笑顔を見せた。

「お前…いつからそんな笑い方しか出来なくなっちまったんだ？」

「え？」

「もう追われる事もねえ、母親との再会も出来て、母親の手術も決まって…本来なら、幸せ一杯の筈だろうが？」

顎に添えた手を真つ直ぐに下ろし、心臓の上を指で軽く突く。

「ここに…何溜め込んでる？」

「何も…何も無いよ。嬉しい事しか無いもん。」

「じゃあ、何で泣いてんだ？」

ポタリポタリと落ちる涙に気付き、慌てて拭いながらネコは笑う。

「柴さんが泣かせたんじゃん…優しい事ばかり言ってさ。」

「…ナオ…愛してる…。」

ネコの口唇を奪う様に唇を落としながら押し倒し、パジャマのボタンの手をかけると、ネコは嫌だと言って胸元を掻き合わせて恥じらった。

「今更だろう？佐久間の家で、着替えも風呂に入れたのも俺だろうが？覚えてねえのか？」

「…覚えてるよ。」

「じゃあ…。」

「…柴さん…アレは無理だよ…。」

「何がだ？」

「だからさあ…。」

ネコは起き上がった布団に正座をすると、赤くなりながら俺の股間を見詰めた。

「…無理だつて。」

何を言わんとしているか理解して、俺は笑いながらネコの正面に胡座をかいた。

「風呂に入った時に見たのか？」

「…いや…あのさ…。」

「初めて見たのか？」

「…そうじゃないけど…無理矢理見せる奴もいたし…。」

「本番は、あんなモノじゃ無いんだがな？」

ゲツと言う様な顔をして俺を窺うネコを見て、俺は久々に大爆笑した。

「あのなあ、大丈夫なんだ。女の躰は、大丈夫な様に作られてるんだつて！」

「だあつて…。」

「お前、子供がどうやって産まれるか知ってるか？」

「…柴さん、馬鹿にしてるでしょう？」

膨れるネコの頭に手を置くと、俺は笑いながら続けた。

「じゃあ、どこから産まれるかもわかるな？」

「…うん。」

「子供の頭が出て来る場所なんだぞ？俺のナニのサイズが幾らデカくても、子供の頭の大きさには敵わねえだろ？」

「……そつか…そうだね。」

「しかし…女抱くのには性教育するとは、流石に思わなかったな。」

「…ごめん。」

赤くなつて俯くネコの頭をポンポンと叩きながら、腰に手を回して引き寄せた。

「で…説明が終わった所で、実習するか？」

「えっ！？…いや…それは…。」

「つれねえなあ…大丈夫、無理強いしねえって言っただろう？今日も添い寝だけ…」

「…ごめんね。」

「気にするな。その内、お前の方から欲しくて堪らなくしてやるから。」

「…そういうもの？」

「ああ…そういうものだ。」

腕枕をしてやり、ネコの躰を抱き寄せて撫で擦りながら、実際にネコがそうなった時の事を想像する。

躰をくねらせながら欲しがるネコの前にしたら…理性も何も吹っ飛んでしまうに違いない。

「…柴さん…足に…」

「…気にするな。」

こういう時は、理性の利く年齢と前職の戒めが有難いと思いながら、ネコの躰を抱き込んだ。

俺の紹介で、昼の掻き入れ時に近所の蕎麦屋のバイトを始めたネコは、慣れて来ると常連客達のツテを頼りに空いた時間帯に違うバイトを入れていった。

母親の見舞いとバイトの生活を続け、沙夜の手術が無事成功し退院時期を検討する頃には、小さな部屋を借りれる位の蓄えが出来ていた。

引越す

「この部屋、幾らで借りたんです？」

「4万だよ。」

「格安ですね！いいなあ…俺も越して来ようかな？」

「隣に空いてた部屋も、埋まっちゃったよ。」

「敷金礼金は？」

「敷金だけだ。こんなボロアパート、礼金なんか取らせるか！？」

ネコの引越しの手伝いに駆り出された鉄也は、6帖にキッチン、バストイレ付きの角部屋の窓を開けて羨ましそうに言った。

「本当に近いんですね…殆ど斜向かえじゃないですか！？」

窓の外に見える事務所の入ったビルを見て、鉄也が笑った。

「たまたま直ぐ近くのアパートに空き部屋を見つけ、知り合いの不動産屋が管理しているのをいい事に、格安で借りれる様に交渉したのだ。」

「此处だと、何かあっても直ぐに飛んで来れるからな。」

「…過保護ですね、総長。」

「何もないよ、柴さん…。」

2人の冷たい視線を浴びて、俺は事務所に残った衣装ケースを取りに戻った。

「……だろ？済まない、ネコちゃん。」

「ううん、鉄さんが気にする事無いよ。」

「だけどね…。」

「平気だよ、慣れてるんだよ。」

衣装ケースを持って部屋に戻った俺の耳に、ネコと鉄也の会話が聞こえた。

「何が慣れてるって？」

「そう言いながら部屋に入った俺に、ネコが笑いながら答える。」

「独り暮らしだよ。ずっと、独りで暮らして来たから。」

「母親が退院する迄、俺の所で暮らせばいい。」

「折角借りたんだもん、今日からコッチで暮らすんだあ。」

そう言いながら、ネコは包装紙をバリバリと剥いで、布団袋に入つたままの布団を押入れに納めた。

「後は何か有りますか、総長？」

「事務所の入口に置いてある、カラーボックスだけ運んでくれるか？」

「わかりました。」

そう言つて鉄也が部屋を出た途端、素早くネコの躰を抱き締めて唇を奪つと、少し膨れる顔を覗き込んだ。

「鍵、寄越せよ。」

「鍵？」

「合鍵、貰つたんだろ？」

「貰つたよ。」

「1本寄越せ。」

「強引だなあ、柴さん。」

「いいいから……夜這いに来てやるから。」

「嫌だよ、上げない！」

ドタンバタンと息を上げてふざけあう俺達の姿を見て、玄関から呆れた様な声が掛かった。

「アンタ達、いい加減にしなさい！下のお宅にご迷惑でしょ！？」

「京子さ〜ん、柴さんが虐めるよ〜！」

俺に組み敷かれたネコが笑いながら声を上げる。

「しい〜ばあ〜！！アンタがそうしてると、狼が子羊襲つてる様に見えないから、止めなさい！！」

俺はネコの手から奪つた鍵を、すかさず自分のキーホルダーに付けながら言つた。

「早かつたな。」

「行くんでしょ、病院？車用意して来たわ。」

世話になった京子に是非会いたいという沙夜の希望で、俺達は揃って病院に向かった。

病室には、先に来ていた兄貴が沙夜のベッドの横に座っていた。

今迄居た部屋とは違い、大きな応接セットの置かれた広い部屋で俺達がソファ―に座ると、兄貴は沙夜に手を添えてエスコートし対面のソファ―と一緒に腰を下ろした。

一通りの挨拶と京子に対する礼を沙夜が話す間も、兄貴が甲斐甲斐しく背中クッションを当ててやりたりする姿を見て、俺と京子は目配せしあっていた。

「お母さん、あのね…。」

ネコが話を切り出した時、沙夜が静かに遮った。

「乃良…話があるの。」

「なあに？」

「お母さんね…退院したら…」

ネコはうつすらと頬を染め、瞳を煌めかせて次の言葉を期待していた。

「…佐久間さんのお宅で、お世話になる事にしたの。」

俺と京子は顔を見合せ、2人の間に座って色を無くしたネコを見下ろした。

「お母さん、退院しても直ぐには動けないし…乃良の世話もしてあげれない。佐久間さんがね…離れがあるから、そこでゆくり養生すればいいって…何なら乃良も一緒につて仰って下さってるの。」

「…そう。」

「乃良？」

「…私もね…。」

膝に乗せたカバンの下で、ネコが手をギュツと握るのがわかった。

「…少しお世話になったんだ…とっても素敵な離れでね…いい所なんだよ。」

「しばらく、お母さんと一緒に来ないか、仔猫ちゃん？その方が、

お母さんも安心するが…。」

兄貴は、いつに無く優しい声音でネコを誘った。

「…私は、いいよ…私は…柴さんの所がいいから。お兄さん、母の事…宜しく願います。」

「いいのか、ネコ!？」

俺が堪らずネコを見下ろして問いただすと、ネコは俺に手を重ねて寂しさを堪えて笑った。

「いいんだよ、柴さん…お兄さんの家大きいし、お母さんのお世話してくれる人も沢山居るし…お兄さん優しくしてくれると思う。したら、お母さん幸せだしね。」

「…ネコ。」

ネコは無言で何も言わないでくれと俺に懇願し、震える手で俺の手を握ると、努めて明るく言った。

「遊びに行くね、お母さん!! 美味しいお菓子沢山…持って行くから…。」

「…乃良。」

「私、もうすぐアルバイトの時間なんだあ。そろそろ行くね。」
立ち上がったネコに続いて、京子が一緒に立ち上がった。

「私もこれで失礼します。送って行くわ、ネコちゃん。」

京子は俺を制して、ネコと一緒に病室を出て行った。

「…無理強이었다かな？」

ボソリと兄貴が言うのを聞いて、俺は堪らず唸り声を上げた。

「…話してあったろうが…アイツの行動も、想いも…。」

「健司…だからこそだ。」

「何だと？」

「柴さん…佐久間さんからお話を聞いて…私が…お願いしたのです。」

「」

「何故です!? ナオは…。」

「乃良の世話になる事は…出来ません。」

沙夜は、涙を溜めながら俺を見詰めた。

「先程話した様に…退院出来たからと言って、私の躰が直ぐに動ける訳ではありません。乃良と一緒に暮らした所で、日々の生活も私の世話も…全て乃良に頼る事になってしまう。それでは、あの子が…あの子が余りに不憫です。」

「…沙夜さん。」

「アルバイトも私の為にしている事でしょう？昔からそう…あの子は、私の為にずっと我慢のしどおしなんです。私は…あの子に普通の子供らしい生活をして欲しい…あの子に幸せになって欲しいんです！」

「親心だ…わかってやれ、健司。」

「…子供の心は…どうなります？ナオは…自分の力で貴女を幸せにしたいと思って…」

「無理させた所で、生活が破綻すれば辛い思いをするのは仔猫ちゃんなんだぞ！？それに、沙夜だって…折角手術して良くなったのに…負担を掛けねえだろうが！？」

「柴さん…きっと乃良は、全てわかった上で何も言わないでくれたのだと思います。」

「そつとしておいてやれ、健司。」

「…失礼します。」

俺は沙夜に一礼して、病室を出た。

「待て、健司！！」

兄貴の呼び止める声に、俺は振り向かず歩を止めた。

「…わかってやってくれ。」

「わかってたなら、何で俺に言わなかった！？ナオは…今朝、引越し済ませちまったんだぞ！？」

「…そうか。」

「兄貴…沙夜さんの事…」

「お前達にも相談してからと思ってな…聡にはもう話した。別に構わないとよ。」

「沙夜さんには？」

「まだ…仔猫ちゃんさへO・K・してくれたら…な。」

「ナオには、まだ言わないでくれ…動揺が大き過ぎるだろうが!？」
「お前達は…どうなんだ？」

「申し込んださ!…だが、結婚より先に自分の手で母親を幸せにしたいと言っただんだ!…」

「なら、母親は俺に任せると言っただけでいい。」

「そんな簡単な話じゃねえだろうが…。」

俺は今度こそ兄貴を置いて、病院を後にした。

12時を過ぎても、ネコの帰って来る気配は無い。

俺は溜め息を吐きながら、ネコのアパートの部屋の前に座り煙草を燻らせていた。

「泣いてたわよ…。」

夕方、京子が電話を掛けて来た。

「何も言わないで、景色を眺めて涙だけ流して泣くのよ…佐久間さんの気持ちも、気付いたみたいよ。」

「あれだけ、あからさまじゃな…。」

「本気だつて？」

「そうみてえだな…。」

「兄弟揃って…まあ、兄弟だから好みも似てるのかもしれないけど…沙夜さんって幾つなの？」

「確か…41かな？」

「反則だわね、あの若さ!？同じ位かと思っただわ!…庇護欲をそそのめるのも遺伝かしらね？」

「さあな…。」

「聞き捨てならない事…言っただわよ。」

「何を？」

「『私、又捨てられちゃったのかな?』って…不味いわよ、柴!？」
明け方、階段を登る音に顔を上げると、少し驚いた様な顔をしてネ

コが帰って来た。

「…来てたの？」

何事も無かった様に鍵を開けながらネコは言った。

「…中に入ってたればいいのに…鍵持ってるでしょ？」

スルリと部屋の中に入ったネコを追い掛けると、何も言わずにいる俺を振り向かずに、ネコは言葉を紡いだ。

「大丈夫だよ、柴さん…私、案外平気かも。」

「ネコ…この部屋、解約しよう。戻って又一緒に暮らそう！」

「何言ってるの、柴さん…契約したんだから駄目だよ。それに、私この部屋出る気無いいよ？」

「…ネコ。」

俺は、後ろからネコの肩と腰を抱き締めた。

「お前の居場所、俺の所だろう？お前の帰って来るのは、俺の腕の中だろうが？」

「…そうだね…柴さんの腕の中にいられたら…それでいい…それだけいいよ。」

腕の中でクルリと振り向くと、ネコは自分から抱き付いて来た。

「…柴さん…ギュッとして…キスして…」

「ああ…お前の望むだけしてやる。」

俺はネコを抱き締めたまま腰を下ろすと、膝に乗せてやりわりと唇を重ねた。

いつもより切羽詰まった様なネコの舌使い…幾分熱をもった唇は、少し塩辛い。

絡める舌も口腔内も、縋り付く軀も直ぐに熱を増し、息を上げたネコが潤んだ瞳で俺を見上げた。

「…柴さん…私…」

「ネコ…お前は後悔しないのか？寂しさを紛らわす為に俺に抱かれて…それでいいのか？」

見合せた瞳が揺れて、ネコはスンと鼻を鳴らして俺の胸に顔を埋めた。

「…ごめんなさい、柴さん…。」

「謝るな…わかってるから…。」

もう一度唇を重ねる…先程とは違い、穏やかな甘える様な柔らかな唇と息を呑み込むと、ネコは俺の頬に擦り寄り首に腕を回して囁いた。

「…好き…柴さん…大好き…。」

「…ナオ…。」

やがて腕の中で穏やかな息を立てて眠るネコを撫でながら、俺は白々と明ける朝焼けに溜め息をついた。

「ちょっと貴方…あの2階に住んでる女の子の、お知り合い？」

アパートの前で、俺は2人の中年女性から棘の有る声を掛けられた。

「そうですが、何か？」

「…あの子、どういう子なの？学校にも行って無いみたいだけど？」

「独りで暮らしているみたいだけど、親御さんは？」

「事情があつて、親とは別に暮らしていますが、彼女はちゃんと働いています。」

「実は私達…困ってるのよ…ねえ？」

「そつ…何か…ねえ？」

「何か有りましたか？」

「いえね…実は…。」

「止めましょう？今日だつて、あんなモノ…報復されても怖いし…。」

「」

「それもそつね…問題起こさない様に言つて貰える？頼んだわよ！」

何だと、慌てて退散する女達を訝しく思いながら、俺はアパートの外階段を上がつて行った。

「よう。」

「柴さん！どうしたの？」

「休みだろ？昼飯でもどうかと思つてな…掃除か？」

玄関のドアを雑巾掛けしていたネコは、嬉しそうに笑いながらバケツの水を排水溝に流した。

「夕方からバイト入ってるから、それ迄ならいいよ?」

「夕方から? 聞いてねえぞ。」

「紹介して貰ったの。ちゃんとした所だから、心配無いよ。」

「何の仕事だ?」

「ビルの掃除…あんまり大きくないビルなんだけど、オーナーさんがいい人でね。紹介して貰ったの。」

「誰だ?」

「柴さんの知らない人…大丈夫、出版社の入ってる2フロア分だけなんだあ。働いてる人達もいい人ばかりだよ!」

「…遅くに、そんな会社員が居る様な環境…若い女が危ないだろうが!？」

「大丈夫だつて…大丈夫な環境だからつて、オーナーさん紹介してくれたの。それにオーナーさん女の人だし…。」

「本当に大丈夫なのか?」

「心配性だなあ、オーナーさんも同じフロアで仕事してるから、平気だよ!」

ネコは遣る気満々な笑顔を見せて、ガッツポーズを決めた。

「そういえば、アパートで何か有ったか?」

「えっ!？」

「さっき下で、ここの住人らしきババア共が、何か言ってたが?」

「そう? 別に何も無いよ。」

そう言つて、ネコは部屋に入った。

聞く

「何やってるんだ、お前はっ!？」

曖昧な笑みを浮かべるネコを見下ろし、俺は真剣に怒っていた。

「大丈夫だつて…心配無いよ。私、若いしい。」

「そういう事言つてっから…。」

「…平気だつて。」

エヘへと笑いながら見上げたネコの目の下には隈が出来、足元もおぼつかない。

明け方の5時に帰宅したネコをアパートの前で捕まえて、強引に部屋の玄関を開けると、部屋のムツとした空気がドアから溢れた。

「お前…今、バイト幾つ掛け持ちしてる？」

ネコが何も答えずに窓を開けると、明るくなって来た空の光と幾分涼しい空気が部屋に流込んだ。

「…幾つだ？」

「…4つ。」

「何だとっ!？」

「柴さん、声大っきいよ。」

「お前がデカくさせてんだろうがっ!？」

怒りの治まらない俺に、ネコはごめんなさいと言いながら頂垂れた。

「何やってんだよ、お前…駄壊しちまうだろうが？」

「大丈夫、寝る時間も小まめに取ってるし…。」

「小まめにつて…どんなスケジュールで…。」

ネコの部屋には、カラーボックスと鉄也が家から持って来た折り畳み式のテーブル、それにへたれたクッションが1つきり…。

折角買った布団も、母親が来た時に使わせようと、布団袋に入ったままだ。

本人はクッションを枕代わりに雑魚寝でしか眠らない…先日訪ねた折りには、靴も脱がずに玄関で倒れ込む様に寝ていた。

「…昼前から昼過ぎ迄お蕎麦屋さんでしょ？それから夕方迄がコンビニで…夜中迄、ビルの掃除してえ…朝迄が朝刊の広告差し込み…」

「頼むから…ネコ…。」

「え？」

目の前で正座しながら指折り数える手をグイと引き寄せ、驚いた様に目を見開くネコの唇を奪う。

「…何…。」

突然の事に驚くネコが抵抗を見せるのを、俺は力付くで押さえ付けながら尚も唇を重ねる。

口腔内で絡める舌迄逃げようとするネコに、俺は思わず舌打ちをした。

「…嫌あ…柴さん…。」

「うるさいっ！！」

半泣きのネコを押し倒し、足を絡め上から覆い被さる。

抱き締めた軀は痩せ細り、肋が浮き出ているのがわかる…何故そんな無茶な生活をするのか…。

「…馬鹿野郎が…。」

嚙り泣き始めたネコの首筋に悪態を吐き、顔を埋める…苛ついているのだ…俺は…。

ネコの無茶なバイトと俺自身の仕事のサイクルが合わず、なかなか会う時間が取れない…俺が明け方に待ち構えて捕まえない限り、顔を見る事も出来ずにいた。

そして…どんなに誘っても、ネコは事務所に顔を出さなくなってしまうのだ。

真夏の暑さと湿度の高さ…昼間に照り付ける太陽で煮えた屋根のせいで、閉め切っていた部屋は、窓を開けてもサウナの様だ。

俺に組み敷かれ、とうとうしゃくりあげ始めたネコに、ぐったりとのし掛かり俺は言った。

「…事務所に戻ろっ、ネコ…暑くて死にそうだ…。」

泣いていたネコは、慌てて躰の下から抜け出すと、台所の流しで勢いよく水を流し始め、しばらくすると濡れタオルを2本持つて戻って来た。

「大丈夫、柴さん!？」

「…ああ。」

ゴロリと仰向けになった俺の額にタオルを乗せると、ネコは細い指で俺のシャツのボタンを外し始めた。

「どうするんだ？」

「ん…ちよつと顎上げて。」

言われた通りに顎を上げると、ヒヤリとした感触が首筋を覆う…そのまま項、胸とネコは丹念に俺の躰をタオルで拭いていく。

「…気持ちいい。」

「そう？良かった…。」

だが本当に気持ちいいのは、タオルを持つ反対のヒヤリとした手が、俺の素肌を撫でる様に異動する事だ。

堪らずその手を引き寄せると、今度は抵抗せずに俺の胸に躰を預けた。

「暑いつて言った癖に…。」

「なあ…夜と明け方のバイトだけでも、辞めれないか？」

「何で？時給いいんだよ？」

「…会えないだろうが。」

「そうだけど…。」

「俺は、当たり前前に夕飯を共にして、夜お前を腕の中に抱いて寝ただけだ。」

「暑いつて…。」

「夏の間だけでも、事務所に戻って来い…此処じゃ熱中症になっちゃう。」

「…。」

「お前、何で事務所に来るの嫌がるんだ？誰かに、何か言われたか？」

「…そんな事無いよ。」

眉の間を指で撫でてやりながら問うと、ネコは眠そうな声で答える。

「…事務所帰るぞ…今日は、抱いてでも連れ帰る！」

「何でえ？今日に限って…」

「昼の便で九州に飛ぶ。1週間程出張だって、この前話したろ？」

ネコは観念した様に、わかったと言って戸締まりをした。

事務所迄の短い道程を、腕を絡めて嬉しそうに甘えるネコに目を細めながら、入口の鍵を開ける。

途端に寝室から白いモノが飛び出して来て、俺の胸に抱き付いて来た。

「やあつと帰って来たあ！！健司い、お帰りい！！！」

虚を付かれ、立ち竦む俺に対し、ネコは絡めた腕を振りほどき後ろに下がった。

「あれえゝ、ネコちゃん居たのお？何してんのよお、そんな所で！？」

咎める様な口調の女に、ネコは何も言わずに俯いた。

「…何なんだ、お前？」

やつとの思いで言葉を発した俺に、女は己が身を俺に悩ましく擦り寄せる。

「もう、やあだあゝ健司ったら…自分が待つてろって言ったんじゃん！ねえ…さっきの続きい、早くしてよう…私もう焦れちゃって待ちきれないよおゝ。もっ回してくれるんでしょゝ？」

素肌に俺のYシャツだけをまとった姿でしなだれ掛かる女を見て、背後でボソリとネコが呟く。

「……何だ…そういう事か…」

「えっ！？」

「…人が悪いなあ、柴さん……それならそうと…言ってくれたら…」

スルリと入口のドアをすり抜けるネコの後を、胸の女を引き剥がして追う。

「ナオっ！？待てっ、ナオっ！！」

階段の踊り場で追い付いて肩に手を置いた途端、ネコの躰が硬直し小刻みに震えているのが伝わる。

「……この為に……わざわざ事務所に呼んだの？」

「お前、何言ってる！？」

「こんな……見せ付ける様な事しなくても……一言…………終りだって……言って…………くれたら……」

「いい加減にしろよ、お前っ！？俺の事が信じられねえのかっ！？」
下から上がって来る足音が止まり、不意に呼び掛けられる。

「総長？」

「鉄っ！！事務所の中の女、何とかしろっ！！」

鉄也は顔を歪めて、事務所に駆け上がった。

俺はネコの肩を引き振り向かせると、俯く顔を覗き込む様にして問い掛けた。

「答える！俺の事が、信じられないか！？」

「……」

「答える、ナオ！？」

俯いたまま肩を震わせて大粒の涙を流すネコを、覆い被さる様にして抱き締める。

「……答えるよ……ナオ……」

「……信じたい。」

「なら、俺の言葉だけ信じてろ……他に耳傾けてんじゃねえよ……」

鉄也に連れ出された女が、悪態を吐きながら階段を下りて来る。

「全く！！何なのよ！？拾われた捨て猫の癖して、いつまでも甘えてんじゃ無いわよっ！！」

何も言わずに俺のシャツを握り締めるネコを庇う様に女から距離を置くと、鉄也に引き摺られながら尚も女は捲し立てた。

「アンタとなんかじゃ、釣り合わないんだからっ！！とつとと、目の前から消えて無くなっちまえばいいのよっ！！いつまでも目の前うろついてたら、新宿の街に沈めるわよっ！？」

「…テメエ…いい加減にしろよ！？誰が、新宿の街に沈めるだとい！？」

ネコを抱く手を離し、鬪志を剥き出しにして女に掴み掛かろうとするのを、鉄也とネコが必死で止める。

「止めて、柴さん！もういいから…。」

「総長、相手は女です…！」

「…テメエ…そのツラ、俺の前に二度と見せんじゃねえぞっ！？」

「何よ、いい子ぶって…覚えてなさいよっ！？」

捨て台詞を吐きながら階段を下りて行く女を憎々しげに見下ろし、俺の腹に腕を回して背中に縋り付くネコの手をギュツと握った。

「…心配すんな。」

「…ウン。柴さん…私、帰る。」

「寄って行かないか？」

「今…事務所行きたくない。」

腕を解き歩き始めるネコの躰が、いつもより一回り小さく心許なく見える。

「ナオ…帰ったら引越すぞ。」

「え？」

「引越した…2人で暮らせる部屋に引越す…いいな？」

「柴…さん…？」

「アルバイトも…やりたかったら昼間だけに絞れ。わかったか？」

「だって…事務所から離れたら…柴さんだって、みんなだって不便になるよ？」

「みんなって誰の事だ！？鉄か！？自警団の奴等か！？」

「…みんな…仲間の人達の迷惑に…なりたく無いよ。私は平気だって…今迄通りでいいよ…。」

寂しさを堪えた様な笑顔をさせるネコの躰を、今一度覆う様にして抱き締める。

「…俺が堪らない…俺が我慢出来ない…わかれよ…それ位…。」

「で…誰なんだ、あの女!？」

「アキって娘で…俺達の次の代のヘッドの…自警団の取りまとめをさせてますが、妹です。昔から我儘で…仲間の事も顎で使うんで困って…。」

「何で、そんな奴に入り込まれてる!？」

「…父親が…佐久間のお身内なんです…ご存知ありませんでしたか?」

「知るか、そんな事!!」

鉄也は、やつぱりと溜め息を吐いた。

「ネコちゃん、半年程前から嫌がらせ受けていた様で…まあ、あの娘に限った事ではありませんが…。」

「嫌がらせ?」

「俺も気を付けていたんですが、結構激しかったみたいで…ネコちゃんも引越しを決めたのも、1つにはそれが要因だったと思われる。」

「何だと!?!何故言わなかった!?!」

「絶対知らせ無いでくれと…泣かれました。仲間の結束を壊したく無いと…自分はよそ者として疎まれるのは慣れていないと…。佐久間にいらつしやる、母親の事も気にしてまして…。」

「何だつて…そんな事に…。」

「ネコちゃんの事件の折り、総長が掛かりきりになっていた事に…不満を持つ仲間の居た事が発端でしょうが、女柄みになって来て…何というか俺達では踏み込めない雰囲気になってきまして…。」

「はあ!?!」

「そもそも…総長のお相手は、お京姐さんだと誰もが思っていた訳で…。」

「お京とは、そんな仲じゃねえって、散々言つて来たろうが!?!」

「しかし、一番身近な女性だった事は事実ですよね?」

「まあ…そうだが…。」

「そのお京姐さん公認で、しかも一緒に暮らし始めた…ネコちゃん
が子供だという事もあって、最初はただ面倒見ているのかと…誰もが
が思っていました。」

「…。」

「その内に、総長の態度で、総長の女だと皆が気付いた。面白く無
いと思っていた女達は多かったと思いますよ。お京姐さんには怖く
て手を出せないが、ネコちゃんは子供で…しかも総長に告げ口する
様な子では無かった。」

「そんなに…酷かったのか？」

「アパートに引越して治まると思ってたんですが…アパートやバイ
ト先にも嫌がらせされてたみたいで、何度かバイト先に迷惑を掛け
られてクビになってる筈です。」

「アイツ…一言もそんな事…。」

「言えなかったんだと思います…子供の様で、気配りの出来る子で
すから…。」

「鉄、出張している間…宜しく頼む。」

「ですが、自分も明日から東京を離れます。」

「いつまでだ？」

「今の所、5日間の予定です。」

「帰りは同じ頃か…仕方ないな。鉄、帰ったら俺は引越すから、そ
のつもりでいてくれ。」

「わかりました。必要なら、俺が事務所に引越しますか？」

「それも含めて、帰ったら話し合おう。じゃあ、そろそろ行って来
る。」

「お気を付けて。」

事務所を出た俺は、そのまま機上の人間になった。

まさか…そのままネコに会えなくなる等と…この時は微塵も考え無
かったのだ。

「いつから連絡が付かなくなっただんですか？」

「5日前だ…電話にもメールにも反応しない!!」

鉄も仕事で東京を離れ、京子も大きな事件で手が離せない状態が続
き、俺が事務所に帰ると時を同じくして戻った鉄也と2人で、ネコ
のアパートに向かった。

妙な胸騒ぎと嫌な予感…何かがあったと、刑事の頃の勘がピリピリ
と耳を襲う。

鍵穴に鍵を入れた途端、フツと手応えの軽いノブにゾワリと悪寒が
走る。

「総長？」

ポケットからハンカチを出してノブを握る俺を、鉄也が訝しむ。

ドアを開けた途端に流れ出す、凄まじい臭気…。

「鉄：お前、下でパトカー来るの待つとけ。」

「総長!？」

「行けっ!!」

転がる様に駆け出す鉄也を見送り、俺は携帯を取り出した。

「お京、俺だ。今すぐ鑑識連れて、ネコの部屋迄来てくれ。」

「何かあったの!？」

「まだ確認して無いが…凄まじい腐敗臭がする。」

「わかった、直ぐに行くわ!!」

消える

「酷でえ顔してるが、休めてるのか、健司？」

鉄也が入れた珈琲を啜りながら、兄貴が俺の顔を覗き込んだ。

「沙夜さんには？」

「言えるかよ…避暑地にバイトに行ってるって事にした。連絡は、一切来てない様だ。」

「…そうか。」

「死体が出た訳じゃねえ…生きてるさ。身の危険を感じて、逃げ回ってるんだろ？逃げるのは得意技だし…今は夏だ…外で生活していたとしても、凍え死ぬ事も無い。」

「ああ…。」

気の無い返事を返す俺を見詰め、兄貴は鉄也に話を振った。

「仕事の方は、大丈夫なのか？」

「一応、前から依頼があつた分に関しては、全て捌けました。今は、自分が回れそうな都内の小さな依頼のみ受けています。」

「済まねえな…当分使い物になりそうにねえし…宜しく頼むわ。」

「承知致しました。」

「所で健司、問い合わせで来たアキって娘だな…。」

「何かわかったか!？」

「チビ政の所の、戸越の妹の娘だと。」

チビ政とは、兄貴の組の本部長…その身内の姪という事か。

「チビ政が恐縮してなあ…沙夜の娘でも有るし、戸越の首持つて来そうな勢いだつたんだがな、俺が止めといた。チビ政と戸越が、お前の所に詫びに来るっていうのも、お前に殺されっから止めておけと言つといたぞ。」

「で、娘は？」

「結構なアバズレでな…遊び歩いてるらしくて、母親も行き先は知らないだよ。まあ、直に見付かる…ウチと警察、自警団も動いてん

だろうが？」

「…。」

「でもまあ、今回はお前が悪い…何故乃良の身分をちゃんと示してやらなかった!？」

「身分って？」

「お前が嫁に貰う予定の女だと、皆に言って置けば防げた話じゃねえのか？」

「それは…。」

「お前は自覚がねえのかも知れねえがなあ…組の中でも、お前の嫁にどうだって話を持って来る奴は、掃いて捨てる程居るんだ…特に正月からこつち、お前にロリコン趣味が有るってんで、今迄諦めてた小学生の娘を持つ奴等からも話を持って来られて、俺は大変なんだぜ!？」

「何だそれ…。」

「それだけ次期組長に望まれてるってこつた。本物の身内になりたい奴はごまんと居る…娘達の方で暴走する今回の様なケースも、今後起きる可能性が有るってこつた。ちゃんと公表した上で守ってやるんだな。」

「だが、本人はまだ…。」

「いいじゃねえか？お前の気持ちが固まってるなら…乃良がどうしても嫌なら、お前が振られて終いになるだけの話だろうが？」

事も無げに言い切る兄貴を見ながら…呆氣にとられながらも、俺は感動していた。

「俺達みたいな立場の人間はなあ…そうやって、大事なモノ守って行くしかねえんだよ。」

「ああ…。」

「何かあつたら連絡して来い。こつちも情報入つたら知らせるから…。」

兄貴はそう言つと、颯爽と事務所を去って行つた。

「失踪人届けは、きちんと受理されてたわ。」

「そうか。」

「放り込まれていた猫の死骸：死後5日って事は、12日に事件が起こつたと考えていいみたいね。」

「事件になつたのか!？」

「一応ね：色々出て来たから。」

「…何が出た？」

京子は眉を潜め、俺を窺うとポツリと問う。

「柴：冷静に聞ける？元刑事として聞くか、ガイシャの縁者として聞くか：どっち？」

「大丈夫だ：元刑事として。」

「…わかつた。玄関のドアの鍵は壊されてたわ。土足で踏み込んでたから、下足痕も取れた。ホシは、女1名を含めた4人組。1人はパンプス、残りはスニーカー痕だった。付近の聞き込みでそれらしい男女が目撃はされているけれど、身元もホシなのかも不明。12日はお盆の初日で、下の部屋の住人も帰省していて無人だった。隣の住人は会社に泊まり込みで留守だったそうよ。隣の人の会社で、ネコちゃんバイトしてたって知ってた？」

「いや、そうなのか？」

「ええ。夜に会社の掃除のバイトしてたらしいわ。12日も来る予定だったのが連絡も無く休んだんで、携帯に連絡を入れたらしいけど、繋がらなかったって。」

「隣なら、家に訪ねなかったのか？」

「出版会社でね：校了前で今も泊まり込んでいて、家には戻って無いらしいわ。目撃証言もバツチリ。」

「そうか：続けてくれ。」

「聞き込みで、嫌がらせの話もアパートの住人から出て来たわ。玄関前に煙草を吸いながら若者がたむろしていたり、生ゴミがぶちまけられたり：猫の死骸置かれて、玄関に血文字書かれた事もある

みたいよ？」

「…。」

「バイト先に大挙して押し掛けて、あの子のツケで飲み食いされたり、商品を滅茶苦茶にされてクビになったりね。」

「…そうか。」

「部屋に散らばってた洋服や布団を裂いたのは、鋭利な刃物であるのは間違い無い。猫の死骸から、多分ナイフだろうって…それと…。」

「

「何だ？」

京子は幾分顔を歪め、一息置いて話を続けた。

「血痕が見付かったわ…畳と血染めのタオルが数本…調べた結果ガイシャの物と判明した。で、傷害事件に格上げになったの。」

「怪我してるって事か…。」

「それだけじゃない…少量だけど肉片と体液、焼け焦げた跡が発見された。」

「体液？」

「主にはリンパ液…それらが発見されたのと同じ場所で、サラダ油の容器も発見された…。」

「…焼かれた…って事か!？」

「範囲は小さいけれど、多分間違い無い…彼女、失禁してるのよ…。」

「

「!？」

「…拷問…受けたのかもしれない…。そのまま拉致されたか、自ら消えたか…鋭意捜査中よ。」

「…続ける。」

腹の底から響く様な声に、京子は一瞬たじろいだ。

「…柴やバイト先の人にも確認して貰ったけど、ガイシャの荷物…いつも持ち歩いてたドラムバックから無くなっているのは、財布と携帯電話、通帳と、多分印鑑も紛失してる。部屋からも見付からなかったしね…バイト代を狙っての犯行って線も上がってはいるけれ

ど…怨恨が有力ね。本人が持ち出した線も捨て切れないけど…。」

「それなら、バックごと持って行ってるだろう？」

「情報貰ったアキって娘の行方と、連んでた仲間の身元と行方を洗い出してるわ。多分、族仲間の名前や自警団の連中の名前も上がる…自警団の方には、聞き取りに刑事が向かうわ…いいわね？」

「ああ…徹底的にやってくれ。」

「柴…大丈夫？」

「…お京…お前、気付いてたか？」

「虐めの話？」

「ああ…。」

「まあね…女の嫉妬は怖いから…。情が絡むと、女って生き物は時に残酷な事も平気でやってのける…私は昔から、ごまんと見てきたわ。」

「いつの間にか…寂しい顔してしか笑わなくなってた…わかったのに…全く気付いてやれなかった。」

「我慢強いのも考えものだわ…泣き言一つ言わなかったんでしょ？」

「氣いばかり遣いやがって…。」

「鉄也から聞いたわ…2人で引越す予定だったって？」

「ずっとすれ違いの生活してたしな…あの女の嘘の芝居で…俺が別れたい為の画策をしたと誤解された。」

「それで？」

「一緒に居られない事に…俺が堪えられないと…。」

「それ、ちゃんと伝えた？」

「ああ…。」

「そう…アンタ昔から言葉足らずだから…でも伝えたならいいわ。」
「これから、どうする事になってる？」

「付近の病院には、治療に来る事を想定して連絡を入れてあるわ。後は、交友関係を洗い出してる。逃げ込める場所とかね…。」

「…お前、伊庭鈴って知ってるか？」

「誰、それ？」

「向こうはお前の事を刑事だと知っていた。ネコは『リンさん』と呼んでいたが、新宿でバーを経営してると言っていた。」

「ああ…『Bell』のマスターね。知ってるけど…アンタ、会った事有るの？」

「一度な…俺の甥と結婚すると言っていた。」

「嘘お！？聡さんって、柴の身内！？」

「知らなかったのか…佐久間の…兄貴の息子だ。」

「…世間って…案外狭いわ。さっき話した、ネコちゃんのバイト先の出版社…夜の掃除してたっていう。」

「それがどうした？」

「私、その社長と飲み仲間でね…名前が上がった時には驚いたんだけど…『Bell』は、彼女のビルの地下に有るのよ。」

数日後、俺と京子は『Bell』のカウンターに座っていた。

「申し訳ありません。」

鈴は俺の顔を見た途端、カウンターの中で頭を下げた。

静かにスタンダードジャズが流れる店内は、照明を幾分落としてあり大人の雰囲気漂わせている。

店内の奥に広がるバーカウンター、店の壁面をぐるりと巡らせた力ウンター席。

中央には小さなソファ―席が幾つか置かれ、そこかしこに置かれたモニターには、昔のハリウッド映画が無音で流されていた。

客は、京子以外は全員男性客…それもその筈で、『Bell』は新宿ではちよつと知られたゲイバーなのだそうだ。

「…3日程、此处に居ました。」

「今は！？」

「わかりません…買い出しに出ている間に、居なくなっちゃって…。」

兎に角、ネコが生きている…しかも自分の意思で逃げている事がわ

かり、俺と京子は顔を見合わせて安堵した。

「どういう状態だったか、教えて貰えるか？」

「…申し訳ありませんが…絶対に話さないと約束しましたので…。」

「怪我の具合は？」

「…命に係わる怪我では無いと思います…丸2日間は…高熱を出していました。」

要領を得ない鈴の答えに、苛々が募る。

「何故俺に連絡しなかった！？聡に聞けば、連絡先は知れたらうが？」

「約束したんです…それに、彼女の気持ちを考えると…貴方に一番知られたく無いだろうと判断しました。」

「リンさん…警察に来てもらっても駄目？」

「申し訳ありませんが、黙秘権を行使させて頂きます。」

「そう。」

その時カウンターの奥に続くバックヤードから、幽霊の様にフラフラと歩く女が出て来た。

「リン、飯食わせて…ガツンと腹に溜まるヤツ。」

「真、仕事終わったの？」

京子が、女に向かって声を掛けた。

「…京子さん、来てたの？まだ駄目…今日で3日寝てないよ…口から魂が抜け出そう。」

「大変ね…いつなの、校了明け？」

「上手くいけば、明日の夕方…ずれ込むだろうけど…明日中には終わる。そしたら飲もうよ？」

「そうね…疲れてる所悪いんだけど、紹介したい人がいるのよ。」

「なあによ…イイ男連れちゃって…彼氏？」

「私のじゃないわ。ネコちゃんの彼氏。」

カウンター内のスツールに座り込み、死んだ様にカウンターに突っ伏していた女は、ガバリと起き上がると俺の顔をマジマジと見詰めた。

「嘘おっ！？マジ！？噂の柴さん！？…イイ男じゃない…じゃなくて、はじめまして！私、ラピュタ書房の天宮真です。」

「はじめまして、柴健司です。ナオが、お世話になっていましたそうで…。」

「いえ…こちらこそ。ネコちゃん、まだ行方不明だそうで…ご心配ですね。」

「その後、連絡ありませんか？」

「京子さんにも話したんですが…こちらには何も…。」

「…そうですか。」

「あの…。」

真は、俺の顔を覗き込む様にカウンターから身を乗り出した。

「１１日に…ネコちゃんが最後に来た日に、夜の掃除のバイト辞める事になるかもしれないって言ってたんです。何かあったのって聞いたら、嬉しそうに笑ってたんですけど…関係あります？」

「あ…いえ…それは、関係無いと思います。」

「そうですか…まあ、嬉しそうにしましたしね…。」

２人で暮らす部屋に引越す事を、ネコは受け入れて夜のバイトを辞めようとしていたのだ…。

鈴が出した Pasta に手を付けながら、真は話し続ける。

「高い所が好きで、よくウチのビルの屋上に登ってました。何か少し…自分を見失ってたみたいで。」

「自分を見失う？」

「そう…大きな目標が無くなって安心出来たのはいいけど、この先自分が何をしたらいいのか、わからないって。」

「…。」

「貴方の事を好きにだけに、迷惑掛けなく無いって…健気な子ですね？」

「そうよね…今時珍しいわ。」

「学歴も無いし、何をしたらいいのか全くわからないって言うから、何ならウチの会社手伝ってみる気ないかって誘ったのよ。」

「掃除のバイト？」

「違う違う…出版の方。掃除は、出版の仕事がどういった物か、見
学がてらのバイトだったの。収入も入って、一石二鳥って喜んでた
んだけど…」

「そうでしたか。」

「戻って来たら、真剣に出版の仕事考えてみないかって聞いて貰え
ます？」

真はパスタを食べ終えて、ニヤリと笑って見せた。

通話する

ネコの通帳から足が付き、新宿を徘徊している若者が2名逮捕され、彼等の証言で首謀者の戸越亜季と、自警団の北川悟の名前が上がった。

12日未明からネコが帰るのを待ち構え、帰って鍵を開けた所を4名で進入、猫を殺害し部屋を荒らした後、北川を見張りに出して残りの3名でネコを脅したという。

「戸越亜季も、先日逮捕されたわ。北川は…現在に入院中よ。」

「どこが悪いのか？」

「精神を病んでるんだって。…戸越亜季に言われて、暗証番号の情報を得る為にネコちゃんの携帯を持っていたらしいんだけど、ネコちゃんが持つてるって見せ掛ける為に、電源を切らずに管理してたんだって。…その携帯の、毎日毎日鳴り響くコール音に…堪えられ無かったそうよ。」

京子がチラリと俺を窺い、フンと鼻を鳴らした。

確かに、ネコが携帯を持っているかもしれないという思いから、日に何度も電話を鳴らした…留守録も何度も登録し、メールも何度送ったかしない。

「鑑識と捜査員が…呆れてたわよ…。」

「見たのか？」

「まあね…証拠品だし。でも柴の名義で借りてるし、生きてる携帯だから直に帰って来るわ。」

「アキや他の仲間は、犯行を認めたのか？」

「それがね…家宅侵入や器物破損なんかは認めたんだけど、傷害をね…認めないのよ。」

「…誰かの、入知恵か？」

「ご明察。若者の1人が、金持ちの馬鹿息子でね、親が少年法に強い弁護士を雇ったのよ。」

「…肝心の被害者が居ないでは、当然討って来る手だろうな。」

「警察としては、北川に吐かせたいんだけど…話を聞ける状況じゃ無いのよね。」

「…そうか。」

手に持ったグラスが空になり、氷がカランと音を立てた。

「何か、胃に入れるものをご用意致しましょうか？」

鈴が新しいウイスキーの入ったグラスを差し出しながら、心配そうに声を掛けた。

「お願い出来る？この馬鹿男、あれから酒量ばかり増えちゃって、ネコちゃんが見付かる頃には肝硬変になってないか心配なのよ！」

「かしこまりました。」

北川が事件に関与しているとわかった時点で、俺は自警団と手を切る決心をして事務所も閉鎖した。

今迄見棄て切れずにいた仲間達の中にも、ネコを疎ましく思い、バイト先に乗り込んでいた若い奴等が居る事を鉄也が調べ出てきたからだ。

「今、何してんのよ？」

「新しい事務所の立ち上げ準備だ。」

「今度は、何するの？」

「調査事務所…。」

「探偵？」

「まあ、そんなもんだ。警察崩れなんて、潰しがきかねえもんだ。」

「SPの話…断ったの？」

「連城さんの所のか？ガラじゃねえだろ？SP兼運転手なんて…然も奥方のだぜ！？」

「…アソコなら安定してるのに…。」

「まあな…暇だろうって、時折呼び出されて運転手してる。アソコの奥方も駄が悪いらしくて、主に病院の送迎だが。」

「物凄い美人だって聞いたわ。」

「確かにな…ハーフだろ、ありゃ。医師免許持つてる秘書が付き添

うんだが、そいつじゃ抱いて運べないってんで駆り出されてる。連城さんが居る時は、あの人抱いて運ぶらしい。」

「…それって、車椅子かストレッチャー替わりって事？」

「そうだな…偏愛してるからな。」

「…理解出来るんだ？」

「……今度の調査事務所も、出資を申し出てくれている。というか、連城さんはアソコの調査部として立ち上げたい意向なんだが…。」

「そうなんだ？ イイ話じゃない！？…って、不満なの？」

「あのビルの中で事務所を持って欲しいと言われてな…。」

「問題あるの？」

連城本人に不満は無い…彼の周囲の人間もかなり癖が強いが、連城と強い信頼関係に結ばれているのは、見ていて気持ちがいい。自分もその仲間に入る事に、憧れを感じるが…それにしても、住む世界が違いすぎる。

話を聞くと、連城は昔施設で育ち、大変な苦労の後に今の生活を手に入れたらしい。

歳の離れた奥方にしても苦労人という事で、金持ち特有の偉ぶった所等微塵も無い人物だ。

だが…あのビルの中は眩しすぎる。

ビルの中にある住居に鉄也と一緒に暮らしていたが、先日鉄也は堪え切れずに引越した。

「で、鉄也との蜜月は、終わりを迎えたって？」

「気色の悪い事言うな！ 鉄が、堪えられないんだと。」

「あんなセキユリテイのビルに、ハンバーガー買って帰れませんって、涙目で訴えてたわ。」

「確かにな…。」

「所でね、さっきの携帯電話だけ…。」

「ネコのか？」

京子は、空になった自分のグラスを鈴に渡しながら、俺に視線を送った。

「アンタ、自分の携帯以外から掛けた事って有る？」

「事務所から数回掛けたかもしれないが…殆ど携帯からだな。それがどうした？」

「ネコちゃんの携帯…最初の頃、公衆電話から数回掛かって来てるのよ。最近は、非通知の番号から時折掛かって来る。アンタの所に居た頃には無かった事だから、少し気になってね。」

「…お京、携帯いつ頃戻って来る？」

「だから直につて…。」

「出来るだけ早く返してくれ！」

「ナオ…ナオ、愛してる…戻って来い、俺の腕に…。」

コツコツと2回、電話口を叩く音がする。

確信があつた訳では無い…ただ携帯電話を持つ様になって、人は他人の電話番号を覚えなくなったと依然何かの情報番組で見た事が有つた。

しかし、自分の番号だけは他人に尋ねられたり、書類に書く事も多いから覚えるものだ。

ネコの携帯電話が返却され、常に充電をフルの状態にして、その電話が鳴るのをひたすら待った。

初めて掛かって来た時には、興奮の余り捲し立て、電話の向こう側の物言わぬ相手に苛立つたが、最後に聞いた言葉の反応にネコだと確信した。

「……ナオ…ナオなのか？」

そう尋ねた途端、電話はプツリと切られた。

それから俺は、時折掛かって来る電話を待つ様になった。

変わらないのは、相手が一言も喋らない事…それでも俺の声を聞いて啜り泣く様に鼻を鳴らす相手に、ネコだと確信を強くしながら語り掛けた。

犯人が捕まつた事、皆が心配している事、事務所を閉鎖し新しい事

務所を立ち上げる準備をしている事、それに伴い引越した事…。

一方的な近況報告を、相手は黙って聞いている…そして、堪らずに
啜り泣くのだ。

対話をしたいという思いから、イエスなら1回、ノーなら2回、わ
からなければ3回電話口を叩くという合図を決めて、色々と質問を
してみた。

「ナオ…ナオなんだろう？」

少し躊躇する様な間の後、コツンと1回電話口を叩く音がした。

それから色々と質問を重ねた結果、少しずつではあるがネコの置か
れた状況が把握されて来た。

軀は元気だが、声が出ない状態である事、誰かと共に暮らしている
事、酷い扱いはされていないが、どこかわからない場所に監禁状態
にある事…そして、逃げ出したいと思っているが、俺の元に戻る気
が無い事…。

「何故だ？もう俺の事は嫌いになっちまったか？」

コツコツと断続的に2回叩く音が響く。

「なら何故だ？お前を守ってやれなかった事を…仲間達の仕打ちを
許せないからか？」

再び、コツコツと2回叩く音がする。

「ナオ…言つたろう？俺がお前と離れる事に堪えられない、我慢出
来ないって。必ず見付け出す…だから、俺の元に帰って来い！」

グスグスと鼻を啜りながらコツコツと2回叩かれる。

最後は、いつも同じ様な遣り取りが続くのだ。

「帰れない理由が有るんだな？」

躊躇の末にコツンと1回合図が送られた。

「俺が取り除いてやる！！お前の不安な事、全て取り除いてやるか
ら…ナオ…帰って来るんだ！」

グスグスと鼻を啜りながら、荒い息遣いをするネコに、俺は毎回懇
願している。

「ナオ…ナオ…愛してる、結婚しよう…。」

何も合図の無いままに、いつもと同じ様に突然プツリと通話が切れた。

「携帯電話のキー局は青梅方面、奥多摩でしょうね。電波の届かないエリアも有るので、絞り込みが難しですね。」

連城の個人事務所の所長室で、俺は秘書の山崎の報告を受けた。

「ありがとうございます。早速幸村に連絡して、青梅署に搜索の協力を要請して貰います。」

「その辺りで、1年近く監禁出来る施設を所有し、尚且つ監禁している人間に携帯電話を与えるなんていう酔狂な事やって退ける人物…一体どんな人物なんだかな？」

「興味がお有りですか、クローネ？」

「そうだな…。」

そう言いながら、連城はニヤリと笑って俺を窺う。

「飛んで行きたい所だろうが…範囲が広過ぎて絞り込みが難しいだろう？」

「まずは、周辺に別荘等を持っている人物、地元で大きな屋敷を持つ人物等の洗い出しを始めようと思っています。」

「そうだな…もうじき1年になるが、焦りは禁物だ。大事な事を見落とさない様に、慎重にな。」

「ありがとうございます、クローネ。」

俺は一礼すると、所長室を出た。

「リストアップは、済んだの？」

「一応はな。付近の聴き込みを掛けている最中だ。」

「そう…その後、電話は掛かって来る？」

「このひと月程、掛かって無い。」

「何かあったのかしらね…。」

溜め息を吐く俺と京子を見て、隣に座った聡が心配そうに窺った。

「溜め息は、吐く程に老け込むそうですよ？」

「アラ、それどういう意味！？私が、老けてるって事！？」

「そんな事は、ありませんよ。京子さんは、いつも澁刺としていてお若いじゃありませんか？」

鈴が、熱り立つ京子をやんわりと宥めた。

「何騒いでるの？」

いつもの様にバックヤードから現れた真が、カウンターに座る面々に挨拶を交わした。

「見て欲しいモノって何なの、真？」

「そうそう、京子さん…西嶋康生って画家、知ってる？」

「ゴメン、そっち方面全く明るく無いのよ。」

「西嶋画伯は洋画家の大家で、若い頃には日展の総理大臣賞を取った程の方ですよ。」

「詳しいのね、リンさん！？」

「鈴は、美大を出てるんですよ。」

聡が、柔らかな笑みを湛えて説明した。

「その西嶋画伯、つい先日亡くなったのよ。で、今度遺作展をするって聞いて、ウチの人間が取材に行ったの。」

「ゲイ雑誌で、美術特集！？」

「ああ、馬鹿にして…ウチは元々はコミュニティ誌作ってたって言っただでしょ！？今も細々と続けてるのよ！」

「ゴメン、ゴメン…。」

「話戻すね！その遺作展に出品される人物画に、今注目が集まっているんだって。」

「人物画？西嶋画伯は、風景画を好んで描かれていた筈ですが？確かに昔は、亡くなった奥様を描いていたと聞いた事がありますが…。」

「鈴が不思議そうに、話に加わった。」

「そうらしいわね…だから注目されるって事。この1年程、1人の

女性をずっと描き続けて来たんだって…中には、連作も有るって話よ。」

「そんなに凄い事なのか？」

真や鈴の興奮する訳がわからず、俺は質問した。

「画家の大家が、今迄のスタイルを変えるっていうのは…普通考えられませんからね。価格的にも法外な値が付くでしょう。然も最晩年の作品となれば…幾ら位の価値が出るのかな？」

聡の説明を聞きながら、全く興味の無い俺はフンと聞き流そうとした。

「西嶋画伯のマネージメントをしていた息子が、画廊と結託して企画した展覧会らしいんだけど…どうも顧問弁護士と揉めてるみたいでさ。」

「何で？」

「それは、わからない。ただ、刷り上がって来たばかりのチラシをウチの人間が持って帰って来たのを見て、驚いて連絡したのよ！」
興奮する真が、俺達の前にチラシを置いた。

「見て、コレ！？」

若葉に埋もれる様な東屋に柔らかな光が降り注ぐ美しい画面に、白いドレスを来た若い女性が床に座り込みベンチに腕を乗せて俯せ、こちらを窺う様に顔を向けている。

その微睡む様な、泣いている様なアンニュイな表情に、瑞々しくもアンバランスな大人の色気を感じる…。

「……ナオ！？」

「やつぱり！？ネコちゃんよね？私もそうじゃないかと思って、連絡入れたの！」

カウンター内で興奮する真に、京子と聡が2人でストップを掛ける。
「ちよつと待つて、似てるだけかもしれないでしょ？」

「それに写真じゃ無く油絵ですし、画家の想像の域を出ないのでは？」

その時、少し顔を強張らせた鈴が、俺を窺い静かに言った。

「西嶋画伯は…潔癖な迄の写実主義の画家な筈です。ネコちゃんじや無いにしても、そっくりなモデルが居るのは間違い無いでしょう。」

鑑賞する

『西嶋康生遺作展』と銘打った展覧会が、有楽町マリオンで開催されたのは、11月手前の土曜日だった。

S Pの堀川が運転する連城専用の黒いセンチュリーで、連城と妻の椿と共に会場に赴いた。

「まずは、一通り見て確認するべきだろう。柴、椿と一緒に回って来るといい。俺は足止めを食うだろうからな。」

「承知致しました。」

俺の前に立っていた薄明るい髪の女性が振り返り、宜しくと微笑んだ。

「連城様、宜しければご案内致しましょうか？」

受付に控えていた、画廊の人間である案内嬢に付いて会場に入る。入口付近に展示してあるのは、少し前に描かれた作品だそうだ。

秋の紅葉の美しい木立や、凍てつく風の感じられる様な冬の寒村。

「何か物悲しい感じがするわね。」

「15年前に奥様を亡くされてからの西嶋画伯の画風は、少し寂しいトーンの物が多かったですね。」

次のブースには、優しい雰囲気的女性が微笑みを浮かべこちらを窺う人物画と、穏やかな色合いを好んで使われた風景画が並ぶ。

「こちらが奥様かしら？」

「はい…とても優しく、理解の有る方だった様です。まだ無名だった頃の画伯の生活を支えていらしたそうで、その無理が祟って躰を壊されたと窺っています。」

「優しい色に溢れてるわ…幸せな結婚生活をしてらしたのね。」
絵を見入る椿の横顔に、思わず見とれる。

余り女性の顔をマジマジと見るのは失礼だと思う…初対面でも無いのだが、目を奪わずにいられない美しさ…視線に気付かれ、椿にクスリと笑われた。

「…申し訳ありません。」

「いいの…慣れてるから。」

「絵は、詳しいんですか？」

「私ね、以前広告代理店に勤めてたのよ。専門知識も何も無いんだけど、クリエイターの作る作品は結構見て来たの。絵やデザインを見るのが好きなのは、その影響かしらね？」

歩を進めながら次のブースに進むと、案内嬢が少し興奮気味に説明する。

「ここから先が、今回初めて発表される、この1年に画伯が描かれた作品です。」

このブースだけ先程迄とは違い、人が溢れていた。

「これが、ポスターやチラシに使われていた絵ね？」

東屋に俯せる女性の30号の絵の回りには、人だかりが出来ていた。

「…綺麗…光が溢れて、浮き上がって来る様だわ…。」

チラシで見た時とは迫力が違う…俺は少し離れた位置で、目を細めた。

「どう、柴さん？」

椿の鳶色の瞳が、俺を窺う。

「…わかりません。少し離れてますし。」

案内嬢が、すかさず声を掛ける。

「あちらに、今回の目玉である連作がございます。100号の大作ですので、こちらよりは鑑賞しやすいと思いますよ。」

「1年で、かなりの作品数を作られたのですね？」

「そうなんです…画伯は最近、年に2作品程度と、なかなか描いて頂けなかったのですが…余程モデルの方が気に入ったんでしょうね。亡くなった時も、絵筆を握ったままだったとか。」

「絵筆を握ったまま？」

「ええ…連作は本来4枚の予定で、描かれた順に『秋』『冬』『春』となりまして、画伯は最終作『夏』を描かれている時に倒れられたと聞いています。…こちらが、連作『四季』になります。」

描かれた順に秋から春迄の作品が並ぶ。

『秋』は、燃えるような落葉が舞う中を、右手を高く上げながら天を仰ぎ見る、横向きの白いドレスの女性。

『冬』は、白い布を被り、顔を半面だけ出した半透明の女性の後ろに、冬の雪景色が広がる。

『春』は、一面の花畑の中に、半裸の女性が俯せる様な構図で、横向きの顔の視線だけがこちらを窺っていた。

「…凄いわね…今迄と違って、何か不思議な雰囲気。愛情と哀しみと、寂しさ…色んな感情が押し寄せて…胸が痛いわ。ね、柴さん？」

食い入る様に絵を見詰めていた俺は、しばらく椿の呼び掛けに気付かなかった。

「このモデルさんは、プロの方なの？」

椿の質問に、案内嬢がいえと微笑んだ。

「素人の方だと思いますよ。画廊のオーナーの話では『ある日突然天から舞い降りた』と、画伯が話されていたそうです。たしか、アトリエと一緒に暮らしていらっしゃるとか。」

「何という方かしら？ウチのモデルをお願いしたいのだけど、調べて頂ける？」

「少しお待ち頂けますか？直ぐにお調べ致します。」

「それにしても、1枚も笑っている絵が無いのね？」

「……泣いています…どの絵も……」

俺がポツリと呟くと、椿がポンポンと俺の腰を叩いた。

「何か、違和感が有るの…気にならない？」

「何がでしょうか？」

「彼女の笑顔が無いのもそうだけど…この構図…ほら、これも…何かしら？」

会場に展示された絵は、小さな物も含めて油絵が6点、その他に風景のスケッチや、女性の全体像のデッサン、各パーツのデッサン等がかなりの数展示されていた。

「意図的…みたいね。」

デッサンも詳しく見ていた椿が、俺に耳打ちした。

「彼女に間違い無い？」

「はい…間違いなく、ナオです。」

「そう…あのね、柴さん…。」

椿がそう言い掛けた時、先程の案内嬢が戻って来た。

「お待たせ致しました。モデルの名前ですが、安寿さんと仰るそうです。」

「安寿？」

「ええ、画伯はそう呼んでいらしたとか…芸名なのかもしれませんね。」

案内嬢がフッフと笑うのを見て、椿は合点がいった様に頷いた。

「成る程ね、『ある日突然天から舞い降りた』アンジュ…天使の事ね。彼女にコンタクト取れるかしら？」

「ポスターやチラシに掲載された後、問合せが頻りなのだそうですが…画伯と一緒に暮らしていたという以外に、何も情報がありません。マネージメントをされていたご子息の敏文氏か、顧問弁護士の先生にお尋ね頂くのが良いと思いますよ。でも…。」

「何かあったの？」

「こんな事は、申し上げてはいけ無いんですけど…先日からずっと揉めていらして…。」

「あらあら…原因は？」

「何か、今回の遺作展も、顧問弁護士の先生が反対していらした様で。先程、ご主人様とご一緒でしたので、詳しくは直接お尋ね頂けますか？」

「そうね、ありがとう。柴さん…もう少し鑑賞する？」

椿が気遣ったが、俺は襟を正して答えた。

「いえ、もう十分です。」

「なら、連城の所に戻りましょう。その顧問弁護士の先生が、まだいらっしやるといいんだけど…。」

「こちらが西嶋画伯の顧問弁護士をしていらした、松原弁護士だ。これは妻の椿と、仕事のパートナーの柴健司です。」

互いの挨拶を済ますと、松原は苛ついた様子で連城に話を続けた。

「先程お話しした様に、相続人の許可無く遺作展をする事になってしまつて…敏文氏は、当然の様に自分が相続人で有ると主張されるし、遺作展が決まつたのは遺言書の公開前だつた訳で…。」

訳がわからずに聞いていた椿が、連城を見上げた。

「何の話なの？」

「描かれていた人物は？」

「間違い無く、彼女だそうよ。今は、安寿と呼ばれてるそうだけど…。」

「そうか…柴、今回の遺作展に展示された彼女の絵…油絵もデッサンも、彼女を描いた全ての絵は、モデルである安寿こと、音戸乃良に相続されるらしい。」

「何ですって!？」

俺と松原は、同時に声を上げた。

「彼女の名前、判明したんですか!？間違い無いんでしょうか!？」

「その確認の為に、彼女に会わせて頂けますか、松原さん？」

「わかりました…敏文氏とも相談し、早々にご返事致します。」

「その折りには、私は彼女の弁護士という立場で立ち会わせて頂きましょう。松原さんも、西嶋画伯の顧問弁護士という立場上、その方が宜しいでしょう?」

「是非、お願い致します。私は西嶋家側の立場ですし、何かと難しく。彼女の取った行動で、敏文氏も態度を硬化しているのです。」

「ナオが、何かしたんですか？」

「連作である『四季』の最終作…完成間近の『夏』を、彼女は切り裂いたんだそうだ。」

呆氣に取られる俺と椿を見て、連城は苦笑いしながら言い、引き続

いて松原が説明した。

「勿論、勝手にという訳ではありません。画伯が、自らパレットナイフを彼女に手渡され、『好きにして構わない』と仰ったのです。その場に、私も敏文氏も居りましたので、間違い無いのですが…。」

「何か、問題が!？」

「西嶋画伯の作品といえば、それだけでも凄い価値だ。然も最晩年の作品で連作となれば…少なくとも見積もつても、億は下らない。」

「画伯は、海外でも高い評価を受けています。現存している作品の取引額を考えると、法外な値が付くでしょう。然も彼女が描かれた作品は皆…画伯の代表作になり得る程の物です!!既に問合せも多数来ているというのに…。」

「彼女は、全て燃やしてしまいたい意向らしいぞ?」

「はあ!？」

「考えられません…確かに彼女が相続すべき物ですが…あの作品は皆、文化遺産だ…それを…。」

松原は、頭を抱えて溜め息を吐いた。

「松原先生、少しお尋ねしたいのですが…。」

椿が柔らかな笑みを湛えて、松原に話し掛けた。

「モデルの安寿さん、何か…障害が有るのではありませんか?」

途端に、松原の顔が曇る。

「声が出ないのは、承知しています…その他に…何か有るのですか!？」

俺は、松原と椿の顔を見比べた。

「作品の…デッサンも全て…顔の左側半面と、左手首から先だけはどこを探しても描かれていませんでした。敢えて避けていた…そうですね?」

椿の言葉に顔を歪める松原を見て、俺は封印してしまいたい記憶を思い出した。

「…傷か…火傷の痕か!？」

観念した様な松原は、目線を斜め下に向けたまま語り出した。

「画伯が彼女を拾ったのは、今年の夏です。彼女は…画伯の乗っていた車に、文字通り落ちて来たのです。」

「落ちて来た？」

「歩道橋から…飛び降りて。」

「自殺未遂かつ！？」

頷いた松原は、顔を伏せたまま話を続けた。

「その時の怪我は大した事は無い、打ち身と擦り傷だけでした。それでも驚かれた画伯は、気を失った彼女をアトリエに連れて帰られた。目覚めた彼女を見て、画伯は再び驚かれたのです…物言えぬ彼女の左手は…火傷を負って開かれぬ状態でした。それに彼女は左頬に…。」

息を殺して聞き入っていた俺は、堪らずに低く唸る様な声で松原を脅した。

「…どうだというんだ！？」

「…左…頬に……10センチ程の…刃物で切られた傷が…。」

「畜生っ！！」

拳を握り締め、何度も己の足を殴り付ける。

その様子を見て、松原が恐る恐る連城を窺った。

「彼は、そのモデルの安寿…音戸乃良の恋人で…婚約者です。」

目を見張る松原に、連城は言った。

「彼女は未成年で、捜索願いが出されている。西嶋画伯は…彼女を監禁していたではありませんか？」

「…そうとも言えるでしょうね。捜索願いの件は知りませんでした。画伯が、画伯が彼女の魅力に取り付かれてしまったのは事実です。画伯は…ご自分の寿命をご存知でした。その命の灯の消える間に、創作意欲を掻き立てるモデルに出会った…だから彼女を安寿と呼んで、命を削って彼女の絵を描き続けたのです。しかし、彼女は嫌がった…アトリエに居る事も…何より自分を描かれる事を極端に嫌がった。結果、彼女は囚われの天使になってしまつて…あの作品は、画伯の偏執的な愛の結晶です。だから、画伯は彼女にあの作品達を贈った

のですよ。」

「…そんな…勝手な…そんな理由で、1年以上拘束したというのか!？」

俺がギリギリと奥歯を噛み締めるのを、松原は申し訳なさそうに窺った。

「松原さん、搜索願いが出ている理由は、彼女が家出しているばかりでは無い…彼女が障害事件の被害者だからです。もしこれ以上彼女を拘束したり、彼女の身柄を隠したりした場合、貴方や敏文氏だけでなく、西嶋画伯も事件に関与されたと疑われます。呉々もその事、敏文氏に釘を刺して置いて頂きましょう。」

「わかりました。」

「お伺いする時には、警察関係者も同行させて頂きます。宜しいですね?」

「承知致しました。敏文氏と相談の上、早急にお返事致します。」

松原は俺達に一礼すると、そそくさと会場を後にした。

「良く気付いたな、椿。」

連城が、椿の髪をクシャリと撫でて微笑んだ。

「構図に違和感があったから、確認したの。可哀想に…若い女の子が傷なんて、辛いでしょ…」

「柴、幸村刑事に連絡しておけ。」

「了解致しました。」

見付ける

青梅署のパトカーに先導されて、新宿署の京子達の乗った車、連城の車と、3台が連なつて青梅街道をひた走る。

「綺麗ですね。やはり、この辺りは下界より時期が早いのかなあ？」
助手席に座る七海が、のんびりとした声を上げた。

奥多摩に入ると、辺りは色付き始めた紅葉が益々美しさを増して来たが、俺には車窓の景色等を楽しむ余裕は無かった。

「緊張してるのか？」

不意にそう尋ねられ、咄嗟に言葉に詰まる。

「堀川に運転を任せて正解だったな。」

「全くです。柴に任せて、事故でも起こされては堪りません。」
クツクツと笑う連城の言葉に、運転中の堀川が慚然と答える。

警視庁警備部出身のこの先輩と仕事を共にしたことは無いが、政府の要人や海外からのVIPの警護を担当し、何度も修羅場を潜り抜けて来たベテランだった筈だ。

「…申し訳ありません。」

「先ずは、本人確認だ。それから、俺を弁護士として承認させなければな…。今、幾つだ？」

「17です…あと数日で、18になります。」

「17歳は…女の厄年なのか？」

「違いますよ、クローネ。女性の厄は、19、33、37歳だった筈ですよ。」

助手席から七海が振り向いて笑った。

「…気にし過ぎです。それより、見えて来ました。あの鉄柵の向こう側が、西嶋画伯のアトリエとして使われている別荘の敷地だそうです。」

先頭のパトカーが、門番の男に話をする、大きな扉がギギギという音を立てて開かれた。

「広大な敷地ですね…何でも旧華族の別邸を、そのまま使っているそうですよ。」

吸い込まれた3台の車は、敷地の木立を通り抜け、大きな洋館の前に止まった。

「随分と…先客がいる様ですね。」

屋敷の前にずらりと停められた乗用車を見て、連城は眉を潜めた。車を降り立った俺に向かい、京子が目配せをする。

「新宿署生活安全課少年係の幸村と申します。西嶋敏文さんは、ご在宅ですか？」

玄關に出て来た使用人に付いて、俺達はゾロゾロと広間に入った。

「又か…お前達は一番最後だ！大人しく待ってる！！」

「全く…どこから聞き付けて来たんだか…一体何人やって来るんだ！？」

「何の話です？西嶋敏文さん、若しくは松原弁護士はいらっしゃいませんか？」

広間の先客達は、苛立つて言葉を返す。

「だから、安寿の所だよ！！お前達も、大人しく順番待ちしてる！！」

「順番待ち？」

眉間に皺を寄せた連城は、先客に鋭い視線を投げた。

「…だから…彼女の相続する絵を…取引しようとして…」

踵を返す連城の背中に、広間の男達の声が絶える。

「おっ、おいっ！？」

「警察です。」

京子が男達に警察証を提示すると、男達は目を見張り追撃を止めた。使用人の案内で彼女の部屋に着くと、連城は俺と2人だけで先に入る許可を京子に取り、ドアをノックし入室した。

「松原さん、これはどういう事です！？」

「…連城さん、いい所に…」

「誰だ、お前！？」

中に居た男達はベッドを取り囲み、俯せて寝ている女に詰め寄っていた。

「弁護士と申します。」

「ああ、松原さんの言ってた…。」

「西嶋敏文さんですね？ 扉の向こうに、刑事が話を窺いたいと来ていますよ。」

「何だ、もう来たのか…面倒だな。」

敏文はそう言つて、案外と素直に退室した。

「貴方も出て頂こう！！」

「しかし、私はまだ交渉の最中で…。」

小太りの画商は、汗を拭きながら粘ったが、連城がひと睨みするとコソコソと鼠の様に退散した。

「しばらく、この部屋には誰も近付け無いで下さい。」

「わかりました。」

そう言つて松原も退室した後、連城は俺に囁いた。

「1時間で、説得出来るか？」

俺が無言で頷くと、肩を叩いてニヤリと笑った。

「何かあつたら、電話しろ。」

背後でパタンとドアの閉まる音がして、俺は静かにベッドに近付いた。

俯せて枕を抱き込む様にして顔を埋める女性の隣に座ると、ベッドの軋む音と共に女性の躰に緊張が走った。

「…ナオ。」

ビクリと彼女の躰が痙攣し、小刻みに震え出す。

緩いウェーブの掛かった柔らかい髪を掻き上げ、クシヤリと頭を撫でて遣りながら再び声を掛けた。

「ナオ…迎えに来た。…顔を見せてくれないのか？」

枕に顔を埋めたまま被りを振るネコの肩に手を置き、背中にゆっくりと覆い被さる。

「…ナオ…。」

「……嫌あ。」

「お前…話せる様になったのか!？」

「…嫌だあ…会いたく無いって…合図したのに!」

愚図るネコの背中に腕を回し、やんわりと抱き込む。

「俺の事、嫌いになつて無いって…まだ好きだって、合図したろう?」

「でもっ…会いたく無い…。」

「何故?」

「…もう…好きでいて貰えない…。」

「ナオ…。」

「……捨てられるの…やだから…逃げたのに…。」

「捨てる訳無いだろうが!! 惚れてるって、愛してるっつつたろう!？」

「もう駄目なんだもんっ!!」

ハッキリと拒否するネコを力一杯抱き締めて、耳許で囁く。

「傷の事なんて…俺は何とも思つて無い…。」

途端にガクガクと震え出したネコは、唸り声を上げながら叫び出した。

「ナオ…ナオ…落ち着け、大丈夫だから…。」

「ヤダっ!! ヤダっ!! 中も外もグチャグチャで汚くて醜くて…絵と一緒に燃やしちゃえいいっ!! 私もっ、あの絵もっ!! みんな燃えて灰になっちゃえっ!!」

悲痛な叫び声を上げ続けるネコを、無理矢理仰向けにすると、その左頬にはベツタリと布製のガムテープが張られ、左腕には包帯がグルグル巻きにしてある。

「しっかりしろ、ナオ!？」

目の焦点が合わず泣き叫ぶネコに舌打ちをし、強引に唇を合わせると下唇を強かに噛まれた。

暴れるネコを押さえ込み、合わせた唇の鉄の味が口腔内に広がると、ネコはやつと力を抜き始め舌の侵入を許した…ゆっくりと味わい尽

くす様に舌を絡めると、怯える様におずおずと応える。

どの位の時間そうやっていたのか…ようやく唇が離れた時、ネコはハウと溜め息を吐き、毒気を抜かれた様な表情を見せた。

「何だ？キスだけで達っちまったのか？1年3ヶ月ぶりだからな。」

「…柴さん…痩せた？」

トロンとした目を細め、右手で俺の頬を撫でながら尋ねられる。

「…そうかもな。」

「何か…違う人みたい…スーツにネクタイなんて…髪型も…」

「そうか？お前も…大人になった…」

「…ごめん、柴さん。」

「全くだ！…ただだけ心配したと思ってる！？」

「…ごめんなさい。」

「約束も破ったろうが！？」

「約束？」

「歩道橋から…飛び降りたって…」

「何で知って…」

「約束したろっ！？」

「だって…もう絶対駄目だって思って…何も考えられなかったんだもん。」

再び涙を流してしゃくり上げ出したネコに再び覆い被さり、耳許に馬鹿野郎と囁いた。

「済まない、ナオ…この傷は俺の罪だ。」

「…違うよ、柴さん。」

「俺が、お前に負わせたも一緒なんだ…許してくれ。」

「…柴さん。」

「なあ…責任取らせろよ…」

頬に貼られたガムテープの上からキスを落としながら囁くと、

「いいって…傷見て無いからそんな事言えるんだよ。」

と、むずがる。

「こんな物貼ってたら、被れちまうだろうが！？」

「いいよ…どうせグチャグチャになったって、どうって事無い…」
「お前、いい加減にしるよっ!？」

俺が本気で怒りを表すと、ネコはビクリと固まって怯えた。

「お前…俺が、お前の容姿だけに惚れたと思ってんのか!? 馬鹿にするんじゃないぞっ!！」

「……だつて…」

「だつてもヘチマもねえ!! それに…全部寄越せつつたろ!？」

「……言つた。」

「じゃあ、お前の躰は俺の物だ…粗末に扱っんじゃないよ…。」

「…ごめんなさい。」

「わかりやいい。」

そう言つて顔中にキスを降らす。

「少し…熱っぽいな？」

「…そうかも。」

「風邪か？」

「…違うと思う。」

曖昧な笑みを浮かべるネコに、俺は眉を潜めた。

「何だ!? ちゃんと言えよ！」

ネコは黙つて、俺に包帯を巻いた左腕を差し出した。

慌てて包帯をほどくと、左手は熱を持ち、腕迄赤黒く腫れ上がっていた。

「医者に診て貰わなかったのか!？」

「診て貰つたけど…手術しなきゃいけないって。画家のおじいさん、時間が無かつたんだよ。だから…」

「クソっ!！」

俺は携帯を取りだし、連城に連絡を入れた。

「あ…。」

ネコは、その携帯に釘付けになり、通話が終わった途端に俺から取り上げた。

「コレ…付けててくれたんだ…。」

嬉しそうにストラップを撫でながら、頬擦りをする。

「ああ…そういえば、お前の携帯には、付いて無かったな。」
「持ってるよ、ちゃんと。」

ネコが嬉しそうに答えた時、ノックの音がした。

部屋に招き入れた連城と七海の姿を見て、ネコは途端にガクガクと震え出し、その様子を見た連城は眉を潜めた。

「柴、抱いて安心させてやれ。」

連城が声を掛け、俺は慌ててネコの軀を抱き込んで言った。

「安心しろ、この人達はお前を守ってくれる。」

「初めまして、僕は医者の方です。七海です。ちょっと腕を診せて貰うよ？」

震えるネコが頷くのを確認し、七海は左手と腕を診ると、連城に向かって首を振った。

「かなり化膿してますね…フレグモ―ネです。多分掌の傷から来るんだと思うんですが。」

「フレグモ―ネ？」

ほうかしきえん

「蜂窩織炎と言って、進展性の化膿性炎症の事です。普通は1、2週間の抗生物質の投与で済みますが、ここ迄酷いと入院を余儀無くされるでしょうね。掌も…癒着してますし。多分、爪で表皮を傷付けてるんだと思いますよ。痛くて寝れなかったんじゃない？」

ネコは俺の胸に縋り付き、不安気に見上げて言った。

「手、切り取っちゃう？」

「心配するな、手術すれば治るから。」

「治らなくてもいいから…中の物だけ綺麗なままで取れる？」

「お前、又そんな事…。」

「中って？何か握ってるの？」

ネコは何も答えず、照れた様な笑みを見せた。

「ナオ、こちら弁護士の方です。連城さん。榊の家からお前を助ける時にもお世話になった。」

「そうなんだ…ありがとうございました。」

「今回も、お前の弁護士としてお願いする事にした。」

「何の？」

「君の相続する、西嶋画伯の遺産について…松原弁護士に聞いた。この屋敷も君の相続に入ってるそうだな？」

「そうなんですか！？」

俺は、驚いてネコを見下ろした。

「松原弁護士に確認した。この広大な別荘の敷地、建物と家財や美術品一切、彼女が描かれている絵とデッサン…一体幾らになるんだか…ざっと見積もっても30億は下らんだろう。」

「それは凄いですね…敏文氏が躍起になるのもわかる。」

七海が感心した様に言うと、ネコは事も無げに言つてのけた。

「いらないよ、こんな家…。」

「放棄するのか？」

連城が方眉を上げてネコに尋ねながら、俺の顔を窺った。

「ナオ、落ち着いて…ゆっくり考えた方がいい。」

「柴さん、欲しい？欲しいなら、柴さんに上げる。」

「そういう問題じゃ無い…。」

困って連城を見上げると、口端を上げて楽しそうに様子を窺っていた。

「君は、借金があつたんじゃ無かつたか？」

「あ…そう！柴さんのお兄さんに上げたらいい！？」

「ナオ、だから…幾ら何でも払い過ぎだ。」

「直ぐに決める必要は無い…その為に私が居るんだ。」

「わかりました…でも、一つだけお願いしたいです。」

「何かな？」

「絵は…全部欲しいの。全部焼いちゃいたい！！」

「油絵も、デッサンも？」

「下絵も、切り裂いた『夏』も、全部焼きたい！！」

その話を初めて聞いた七海が、驚いて声を上げた。

「凄い価値が有るんだよ？文化遺産なのに…。」

「みんなそう言うの…全国で展示会するとか、海外に持って行くと

か。美術館や画商の人達が沢山来て……嫌なの……あんな汚い絵……誰にも見られたくないのに……」

「……ナオ。」

ネコは俺の胸に縋り付いて、再び泣き始めた。

「クローネ、鷹栖に連れて行った方が宜しいですね？」

「そうだな……連絡してくれ。」

「承知致しました。」

七海が退室すると、連城はベッドの横にしゃがみ込んで、ネコの頭を揉む様に撫でた。

「君の気持ちはわかった。取敢えず、私に任せてくれるか？悪い様にはしないから。」

ネコは、俺の胸に顔を埋めたまま頷いた。

「ナオ……お京も来ている。会えるか？」

やっと顔を上げると、ネコは笑った。

諦める

鷹栖総合病院の一般病室、カーテンに囲まれたベッドでネコは静かに寝息を立てている。

西嶋画伯のアトリエからネコを連れ帰り、そのまま入院し手術をするに当たり、6日前から沙夜が娘の面倒を見ていた。

しかし今朝病院から連絡が入ったのだ…沙夜が倒れ、ネコが暴れていると…。

慌てて病院に駆け付けた俺は、担当医師に説明を求めたが要領を得ない。

ただ、当初入っていた個室を母親に明け渡し、自分は直ぐに退院をすると言ったのを、武蔵が宥めずかして一般病室に入れたらしい。

鎮静剤を打たれて眠るネコの枕元には、手術の承諾書が置いてある。同意者の欄には、既に沙夜の名前と住所が書かれてあった。

しかし…患者本人の欄は空白のままだ。

左頬のガムテープは綺麗に取られ、今はガーゼが貼られていた。

「さて困った…どうした物かねえ…？」

此处に来る前に立ち寄った精神科のカウンセリングルームで、武蔵は溜め息を吐いた。

「退院するって、一体どういう事ですか!？」

「担当医が、不用意な事言ったらしくてね。沙夜さんが倒れた責任を感じたんだろうが…物凄い勢いで怒り出したんだ。いや、本当に申し訳無い…。それにしてもね…ちょっと困ってるんだよ。」

「何がです？」

「入院当初は、人を怖がるのも、相続する絵を醜い物として認識するのも、傷を付けられた事から来る、PTSDだと思ってただけだね…。」

「違うんですか？」

「確かにそれも有るんだよ…絵を醜いと思い込んで、燃やしてしま

いたいと思っているのは、そうなんだろうけど…。沙夜さんに会わせたのは…不味かったかなあ？」

「どういう事です!？」

「あの母娘、関係性が複雑だから…母親の想いを受け止めると、あの娘は自分の辛さも想いも全て飲み込んで諦めてしまう。然も相続の件は…金銭的な事が絡むから、医者は立ち入れない領分だしね。」

「相続の件、何か言ってたんですか？」

「全て放棄するって言ってた…沙夜さんに何か言われたのかもしれないね。」

「…そうですか。」

「何かに、追い込まれている様でね…手術も嫌がってるし、目が離せないかな…。」

俺はその瞬間、背筋が凍り付いた。

ネコの睫毛が微かに動き、ゆっくりと瞼が開く。

「ナオ…気付いたか？」

「…柴さん…何で…仕事は？」

「大丈夫だ。」

「…嘘…武蔵先生に呼び出された？」

「気にするな。」

「気にするに決まってる!!」

「ナオ…。」

「…ごめんなさい。」

カーテンの外から、咳払いが聞こえる…面会時間前に特別に入室を許可されて、他の患者は迷惑しているのだろう。

「…柴さん、外に行こっか？」

「お前、躰は平気なのか？」

「平気だよ…多分。」

そう言つとネコはベッドを降りて、他の患者の目を逃れスルリと廊下に逃げる。

そして、自動販売機で飲物をねだりながら窓の外を眺め、天気がい

いから屋上に行こうと誘った。

「気持ちいいね…でもあそこは、空気の匂いが違う。建物も車も…人もいっぱい居るからかな？」

「…何があつた？」

屋上の一段高くなつた段差の上に腰掛けたネコは、ウーンと伸びをしてゴロリと上半身を倒した。

「武蔵先生に聞いたんでしょ？」

「詳しく話せよ。」

「…担当の先生が、お母さんの事…虐めたの。」

「虐めた？」

「手術の為の検査してたらさ、結果があんまり良く無かつたらしくてね…路上生活してたからしょうがないのに…先生、お母さんの事責めるんだよ。何でこんなになる迄放つといたんだって…監督不行き届きだつてさ。」

「…。」

「…お母さん、ずっと先生に謝るんだあ。お母さんが悪い訳じゃ無いのに『申し訳ありません』ってずっと謝り続けて…お母さん、倒れちゃった。」

「だから怒つたのか？」

「…お母さん、何も悪くない…悪いの私なのに…あんなお母さんの姿、見たく無いよ。」

ネコは遠い瞳で青空を見詰めて、まるで他人事の様に吐いた。

「私、お母さんの事も…柴さんの事も…迷惑掛けてばかりだね…。」

「」

「ナオ？」

「私さあ、物知らずだから…知らなかつただけどさ。遺産つて相続すると、お金掛かるんだって。あの屋敷なんていらぬ。敏文つて人、お金に困つてゐる…本宅は借金で取られちゃうつてさ。」

「抵当に入つてゐるって事か？」

「何か、そんな事言つてた。画家のおじいさんの絵も売つてたみた

いで、よく親子喧嘩してたから…だからおじいさん、私に呉れる気になつたんじゃない？」

「そうだったのか…。」

「でも、絵もね…貰うとお金掛かるんだって。燃やしたいだけなのね…。」

「いいのか、お前…あんなに嫌がつてたのに。諦めるのか？」

「払えないよ…凄い金額になるんだって。それに連城さんにも、お金払わなきゃいけないし、此処の支払いも有るし…又頑張つて働くよ。」

「ちよつと待て！？弁護士料や入院費は、俺が…。」

「嫌だよ、柴さん。」

「何故!？」

ネコは話しながら、一切俺に目を合わせなかった。

「お母さんの入院費は、柴さんのお兄さんをお願いするね。お兄さん…お母さんと結婚するんでしょ？」

「…。」

「お兄さんなら、お母さんの事お願いしても安心だしね…お母さんも幸せになれると思うんだ。お互いに、好きみたいだし。」

「お前、自分の事は…俺達の事は、どうするつもりだ!？」

「お母さんさあ…。」

ネコはスンと鼻を鳴らし、目を細めた。

「私が近くに居ると…幸せになれないんだよ。ずっと、ごめんねって…私に遠慮して、お父さんの事死なせたのも、自分だつて責めてる。榊の家の事も、病気の事も…私の傷の事も、自分のせいだつて思つてる。それに、今迄お兄さんと結婚しなかったのも、私の為でしょ？ずっと我慢してさ…。」

「ナオ…我慢してるのは、兄貴や沙夜さんだけじゃ無い…わかつてるだろうが!？」

「柴さんもさ…私に拘わつてから、気持ちザワザワして落ち着かなくて…仲間の人達とも別れちゃつて…迷惑掛けてばかりでごめん

ね。」

「ナオ!？」

ネコはチラリと俺を見て、寂しそうに笑った。

「お母さんに聞いたの…『榊の女』って、昔は巫女だったんだって。昔から神様の声を聞いたり、『氣』を操って病気を治したり、占いしてたんだってさ。」

「それがどうした？」

「私ね…見える様になったの。榊から帰ってから、色んな物に流れる『氣』が見える…人や物や、森羅万象の『氣』が見えるの。人に流れる『氣』位なら、操ることも出来る。」

「…え？」

「『氣』ってね、それぞれ違うの…色も濃さも、強さも違う。柴さんののは、白くてサラサラしてて…とても強い。渾々と溢れてて…とっても綺麗。」

目を細めながら、ネコは憧れを込めた視線を寄越し、直ぐに寂しそうに俯いた。

「『氣』を操る者は、強い『氣』を発するモノに引寄せられるんだって。…私が…柴さんと一緒に居たいって思ったのも…本当は『氣』に引寄せられたのかもしれないって思ったらさ…何か凄く悲しくて、申し訳無くて…惨めでさ…一緒に…居られないって思ったの…。」

「そうと決まった訳じゃないだろう!？」

「吸い取るんだって…何かさ…蛭とか…寄生虫みたいで…気持ち悪いよね。…気持ち悪いの…もう無くなっちゃえばいいよ…このまま空に溶けちゃえばいい。そしたら、あの絵だって見ずに済むし…」

「

俺は慌ててネコの腕を掴むと、屋上の出入口に向かって歩き出した。

「痛いよ、柴さん!」

「病室に…いや、カウンセリングルームに行くぞ!」

「柴さん、私狂った訳じゃないよ!？」

「そんな事は、わかってる!!今は、お前を1人にしたくないだけ

だっ！！」

半ば叱り付ける様にしてネコを引き摺り、精神科のカウンセリングルームで武蔵に説明をしてネコを預けると、俺はその足で沙夜の病室を訪ねた。

「…お待ちしました。」

沙夜はベッドの上に座ると、開口一番でそう言った。

「乃良に、お聞きになったのね？」

「貴女は…何故、ナオが不安になる様な事ばかり吹き込むのですか！？ナオは、貴女の娘でしょう！？」

「だから…言わなくてはなりません。あの子に伝えて遣れるのは、私しかないのです。それに、今なら貴方がいらっしゃる…貴方があの子を支えて下さるでしょう？」

「逆効果だ…ナオは貴女の話聞いて、俺から離れようとしています！！」

「それは…それはいけません！！あの子は目覚めてしまった…神降ろしは成功し、あの子は巫女になってしまったのに…。」

「一体、何を話したんです！？」

俺が一通りネコの話した事を伝えると、沙夜はハラハラと涙を流しながら被りを振った。

「違います！そんな積もりで話したわけではありません！！知って置かなくては…あの子の命に係わる事だから…。」

「どういう事です！？」

「私の祖母は、とても強い力を持つ巫女でした。しかし母は普通の…少し『気』を感じる程度の『榊の女』でしか無かった。母は自分に無い力に…祖母の力に強い憧れを持ち、独自に古い文献等を色々と調べ研究していました。父が『榊の女』に拘ったのは、多分に母の影響が強かったのです。やがて兄が生まれて…母は落胆しました。男に力は宿らない…ましてや次に女が生まれたとしても、力は削がれているだろうと。実際、私にも母と同様の力しか授からなかったのです。」

「ナオには？」

「あの子の力が強いのは…乃良の小さな頃から予感していました。だから逃げる様に言ったのです。もしも力が発動してしまったら、乃良は死んでしまいかもしれません。」

「何故です！？」

「強い力は大量の『気』を消費します。ですから代々『榊の女』には、『気』を補充する者が付き従っていました。小柄な乃良自身の『気』は、決して大きな物では無い。しかし大きな力を持つ巫女には、大きな慈悲の心が宿ると言います…弱っているモノに、自然と力を放出してしまう。」

「そんな…。」

「あの子は、今迄も人からの『気』を吸収せず、自然界の『気』を吸収し生活して来た…だから、貴方を選んだのかもしれない。貴方の『気』は、とても強く清浄ですから。」

「どうやって与えればいいのです！？」

「同じ空間に居ても与える事は出来ませんが、触れ合う事が一番でしょうね。『榊の女』と床を共にすると、運氣が上がり幸運が訪れるという話を聞いた事はありませんか？」

「以前、兄がその様な事を…しかし…。」

「強ち、間違いでは無いのですよ。『榊の女』は、房中術が出来るのです。」

「房中術？」

「身体を強健にし、生命力を高め、身心に潜在する力を開発し、不老長生、智慧の果を得て、運命を超克する事を可能とする…。」

「不老長寿という事ですか！？」

「普通の性行為とは一線を画するのですが、そうとは知らぬ方々が多くて困ります。ともあれ『榊の女』は、『玉女採戦』が出来るのです。」

「何ですか、それは？」

「本来、互いの『気』を巡らせ交わりを持たせるのが房中術なので

すが、片方が一方的に『氣』を与える『玉女採戦』が出来るのです。しかし、奪われる側は体をひどく損ねてしまふ…だから、補う為に強い『氣』を持った男達から与えて貰っていたのです。」

「房中術で？」

「そうなりますね…一番確実で、多くの氣を巡らせ注ぎ込む事が出来ます。」

「しかし…。」

「まだ…交わりを持たれていませんか？それどころか、触れるのも儘ならない…というか、あの子は貴方の『氣』を受け取る事を…拒んでいる様ですね。」

「わかるのですか？」

「私には、読み取る位しか出来ません。乃良の中に貴方の『氣』は少ししか感じられない…でも、貴方の中には感じるのです。乃良は…貴方に施術を行っていたでしょう。」

「えっ!？」

「躰が楽になったり、軽く感じたり…具合が悪いのが、突然平氣になったりした事が…乃良と暮らし始めて、そんな経験はありませんか？」

「…それは。」

「無意識に施術していたのかもしれませんが…貴方が近くに居るならそれもいいでしょう。しかし、離れるなら…乃良は命を削る事になります。慈悲の心が強いだけに、何とかしてやりたいと命を削ります。然も『氣』が弱れば、己が病になり心も弱る…人は癒せても、自分に対しては何も出来ません…与えて枯れるだけの存在なのです！」

「そんな…。」

「健司さん、どうか…あの子の手を離さないでやって下さい!!」

沙夜は悲痛な叫びを上げて、俺に取り縋った。

受け入れる

カウンセリングルームに戻ると、1人で珈琲を飲んでいた武蔵が俺に向かつてカップを上げた。

「飲むかい？」

「ナオは？」

武蔵は珈琲を注ぎながら、黙って奥の部屋の椅子を指差した。

「リラクゼーションチェアでね…風の音を聞いている。」

「風の音？」

「人にはね、それぞれ心地好いと思われる音が有るんだよ。心象風景に繋がりがある場合が多いんだけど、乃良ちゃんの場合は風の音…風が葉を揺らす音が、心地好いと感じるみたいだね。」

「路上で生活していた時も、よく木に登っていたそうですから。」

「成る程ね…この間迄、自然の中で生活していたのも有るのかな？」

「面白い話をしてくれたよ？」

「何ですか？」

「西嶋画伯の目を、治したって…。」

「えっ!？」

「症状を聞いたら、多分白内障だね。画伯は癌で余命1年だと知っていた様で、死ぬ前に思いきり絵が描きたいと願ったらしい。目を治したら、喜んで彼女を描き始めたらしいんだけど、それは乃良ちゃんには有り難迷惑だったみたいだね。」

「…信じますか？」

「僕も一応医者だから…科学的で無いものは信じてない積りなんだけどね。」

そう言って、ニヤリと武蔵が笑う。

「彼女が言っただ。『武蔵先生は、どこも悪くないから治せない。』って…それで、慢性の肩凝りを治して貰った。」

「…どうでした？」

「連れて帰りたい位だよ。」

アハハと武蔵は笑い、急に真面目な顔になった。

「無闇矢鱈と人に見せてはいけないと、釘を刺して置いたよ。利用されてしまいかねないからね。」

「…施術は、ナオの命を削る事になりかねません。」

「それは…申し訳無かったかな。疲れてそうだったから、あつちに座らせたんだけどね。」

俺は隣室に置いてある、スピーカーの内蔵された細長く黒い繭の様な椅子に近付いた。

膝の上に置かれた右手に触れ、そのヒヤリとした冷たさに驚く。

「…柴さん？」

薄っすらと目を開けるネコの頬をスルリと撫で、そのまま顎の下を撫でると、ネコは俺の手の甲に頬を寄せながら右手を差し出し、顔を近付けた俺の首に腕を回して引寄せた。

「…柴さんだったんだね…。」

スピーカーから流れる風が葉を揺らす音…どこか懐かしいその音と、ネコの心臓の音が重なり心地好い。

ネコの手がスルスルと首から下りると、俺の背中を優しく撫でる。

「…私の…好きだった公園の人。柴さん、気付いてたんでしょ？」

ドキリとした…だがそれ以上に、その何とも言えない心地好い感覚に蕩けそうになりながら、床に膝を付きネコの腰に腕を回しその華奢な臍に縋った。

「…ああ。」

「やつぱり馬鹿だね、私…何でもっと早くに気付かなかったのかな…こんなに近くに居たのに…。」

それはしょうがないんだ、ネコ…何でも屋を始めてからは、スーツ等着る機会は殆ど無かったのだから。

「…臍…大事にしてね、柴さん。」

「…ん？」

「煙草…程々にして…お酒も…飲み過ぎちゃ…駄目だ…よ…。」

「え！？」

俺の背中を撫でていた手が、ストンと落ちる。

心なしかゆっくりとなったネコの心臓の音に思わず顔を上げると、浅く喘ぐ様な息をする蒼白い顔…。

「…冗談じゃねえぞ…おいっ！？ナオっ！？」

抱き起こすと、力を無くしグニヤリとなった躰が腕に沿う。

「どうかした？」

武蔵が顔を出し、眉を寄せた。

「ベッド…個室無いか、先生！？今すぐ『気』を送り込んでやらな
いと、コイツ死んじまう！！」

「『気』を送り込むって…どうやって！？」

「房中術って言うらしいが…抱いてやるのが一番らしい。そこまで
じゃ無いにしても、抱き締めてやるうにも、今の相部屋じゃ何も出
来ねえ！！」

「房中術って…。」

驚き目を丸くする武蔵の前で、俺はネコを抱き起こすと唇を覆った。
しかしネコは歯を食い縛ったまま、微かに首を振る。

「受け入れる、ナオ！？俺の『気』じゃ不満だっというのか！？」

薄く目を開けると、悲し気な眼差しを送るネコに、俺は叫び続けた。
「許さねえぞ、ナオ！？…俺が…どんだけ待ったか、お前ちつとも
わかつちやいねえだろ！？？2人で暮らすんじゃ無かったのか！なあ
っ、ナオ！？答えろっ！！」

「…い…ば…。」

喘ぐ様な息を吐き、瞳を潤ませたネコが俺を見上げる。

「許さねえ…お前は俺のモノだ！！金輪際離さねえからな！？」

無理矢理顎を挟じ開けて舌を浸入させ、どうすれば良いのかもわか
らぬままに、想いだけを溢れさせ、まるで蹂躪する様な口付けを与
えた。

ネコが白い喉を仰け反らせゴクリと嚥下する毎に、その蒼白い顔色
に色が差す。

「…部屋の確保が出来た。連れて来れるかい？」

武蔵が背後から、遠慮がちに声を掛けて来た。

ネコを抱き上げて、本館病棟の最上階、一番奥の『Mルーム』とプレートの掛かる部屋に武蔵と共に入る。

「此処は？」

「ああ、身内がね…入院する時に使う特別室なんだ。個室は一杯だったし…此処ならベッドも大きいし、2台あるしね…。」

まるでホテルのスイートルームの様なその部屋は、以前沙夜が入っていた部屋とは比べ物にならない位に豪華でゆつたりとしていた。

「いいんですか、お身内用でしょう？」

少し臆して尋ねると、武蔵は何を今更と言う様にニヤリと笑った。

ネコをベッドに寝かせると、武蔵は様子を窺う様に脈を取った。

「本当に、大丈夫なんだね？」

「その筈です。」

「確かに、さつきよりは安定してるが…様子がおかしくなったら、直ぐにナースコールするんだよ？それと…此処は病院だって事を忘れない様にね。まあ…外に音が漏れる心配は無いけど…。」

「ありがとうございます。迷惑掛け序でに、ナオの母親に来て貰えないですかね？」

「止めた方がいい…乃良ちゃんの為にね。」

武蔵は眉を寄せるとネコを見下ろし、溜め息を吐いた。

「この子には、親離れが必要だ…普通の親に依存する様な物じゃなくてね。精神的に…独立した人間としての幸せを歩ませないと…自我って物が無いだろ？」

「人の為にばかり動いてます。自分は何をしたらいいかもわからず、悩んでいたらしいんです…。」

「じっくり考える時間を与えてやればいい。それまでは、君の庇護の下で甘えさせてやればいいんだ。本来は、甘えん坊なんだと思うよ…時々、凄く人恋しい素振りを見せる。我慢してるんだろうねえ。」

「

「…そうですね。」

「明日は9時に回診に来るよ。食事は後で差し入れる。一応人払いさせておくから。」

「申し訳ありません。」

「連城夫妻も、以前この部屋に入院してたんだよ…色々あって、今の幸せを手に入れたんだ、あの2人もね。」

そう言つて、武蔵はニンマリと笑った。

「…ナオ…。」

覆い被さる様にして何度口付けても、ネコは眉を寄せながら本気で『氣』を受け入れ無い。

浅い息を繰り返し、グツタリとするネコを目の前に、このまま『氣』を送り込むのが良いのか、医療的な施術を行うべきなのか判断に迷う。

しかし、もし医療的な施術を選べば、俺が直接『氣』を注ぎ込むのは難しくなるだろう。

此処は『氣』を充満させた上で、医師に引き継ぐべきだ…その為には、可及的速やかに『氣』を送り込む必要がある…。

「ナオ…聞いてくれ。今から、お前を抱くから。」

ネコは、ぼんやりと俺を見上げながらも、微かに被りを振った。

「これしか方法が無い！房中術と言つて、これがお前に『氣』を送り込む一番確実な方法なんだ。本来なら…お前が受け入れる迄待つ積りだったか…。」

そう言いながら俺は自分の上着を脱ぎネクタイを引き抜くと、素早くシャツを脱ぎ捨て、ネコのパジャマを脱がせた。

「…済まない、ナオ…。」

華奢な軀に覆い被さるうとすると、俺の胸に手を付いてネコが抵抗する。

「ナオ…仕方無いんだ、堪えてくれ。」

「…や…だ。」

「ナオ、お前を助ける為だ！」

「…やつ…や…やだ。」

「ナオ!？」

ネコの膝に分け入り、自分のベルトに手を掛けると、その力チャ力チャという音に、ネコは全身を震わせて怯えた。

「…ナオ…愛してる。お前の為だ、受け入れてくれ…。」

何も言わずに涙を流し、ただ震えて見上げるネコの瞳を見て、俺は背筋が凍り付く程ゾツとした。

それは、いつも俺を見上げる信頼と愛情を湛えるものでは無く…ただ強姦魔に襲われて、恐怖に怯える少女の瞳だったからだ。

こんな状態で軀を重ねて…本当に房中術が成功するのか？

ネコの信頼を裏切り、二度と触れ合う事も、言葉を交わす事も出来ず、今度こそ本当に姿を消してしまふんじゃないのか!？

「畜生っ!! どうすればいいんだっ!？」

俺はネコの胸に崩れ落ち、その身を掻き抱いて叫んだ。

「何故だ!？何故受け取らない!？お前が死んで、誰が喜ぶってんだ…何でそんな風に考える？」

薄い胸が、短く上下しながら震えている。

「お前が死んでも、誰も幸せになんてならない…沙夜さんも…俺も…生きて行けない!!」

言葉尻が震え、思わずネコの胸に顔を押し付ける。

ネコの右手が俺の頭を撫で、指が髪を撫で梳いた。

「俺を置いて行くな!お前は、俺を捨てるのか!？」

「…そんな事。」

「有るだろう?俺はお前を捨てようと思った事等、ただの一度も無いぞ!？捨てるのは…お前だ、ナオ…お前が、いつも俺を置いて行く…。」

髪を撫で梳く指が、ピクリと止まった。

「俺も連れて行け…お前の行く所に…これ以上離れるのは、堪えら

れ無い…。」

「……泣かないで。」

「泣いて無い。」

「胸が…熱いよ…濡れてる…。」

物心着いてから泣いた記憶なんて無い…極道の子と揶揄されても、母親の手前泣く事は出来なかった。

父親譲りの体格と強面で恐れられ、肉親の死にすら涙する事を我慢して来たというのに…。

「私…柴さん…苦しめてる？」

「ああ…凄く苦しい…。」

「ごめんなさい…やつぱり、私…。」

「違う！！俺が苦しいのは、お前が俺から逃げるからだ…何故わからない！？」

「…迷惑掛けたく無い。」

「迷惑なんて思っただけ！それに、迷惑を掛けられているのは、お前の方だろう？ 柵から逃げる事を強要され、俺の事で傷付けられて…。」

「平気だよ、そんな事…。」

くるりと寝返りを打ち、身を丸める様にして横向きに縮こまるネコを、俺は背中から抱き寄せる。

「平気じゃ無い…お前は自覚が無いかもしれないがな、お前はとても傷付き易く弱い…だから、毎回トラブルがあると逃げ出していたんだろうが？」

腕の中で、ネコが益々身を丸くする。

「弱い癖に我慢して、身も心もボロボロにして壊れちまつてる…俺が、放つとけると思ってるのか！？弱い奴はな、ナオ…強い奴に護らせる！！俺が護る…一生護ってやるから。」

俺は、ネコを撫でながら頬に貼られたガーゼに手を翳した。

「…傷、見せろ…ナオ…。」

「…嫌だ。」

「お前、この傷付けられた時、奴等に何か言われたる？」

ピクリとネコの躰が痙攣する。

「俺から離れる、新宿から出て行けって言われたのか？」

コクンと頷きブルリと震えながら、ネコはキュツと瞼を閉じた。

「他には？何言われた？」

「……相応しく無いって…こんな醜い傷…もう、柴さん…私の事撫でてくれないって…」

そつとガーゼを貼ったテープを剥がす…ネコは小刻みに震え、身を固くして俺の腕に爪を立てた。

目尻の下、頬骨辺りから真っ直ぐに下ろされたナイフの痕…10センチは有るその傷は、薄暗い部屋の中でもハッキリとわかる。

既に傷が塞がっているにも係わらず鮮やかで…艶かしい程の紅い傷…「良かった…思った程酷く無い…」

そう言いながら、傷に口付けを降らしながら舐めてやると、薄つすらと目を開けたネコが躰の緊張を解く。

「…ホント？」

「ああ…それより、ガーゼはもう貼るな…テープの痕が被れてる。」
水蜜桃の様な頬を舐めると、ヒクンと肩が揺れた。

「肌、弱いんだな…敏感で…」

「…柴さん…駄目え。」

カクカクと震えながら甘い息を上げるネコに、俺は驚いて身を起こした。

「どうした、ナオ!？」

「駄目え…そんな…一気に流し込んだら…」

「えっ？」

潤んだ瞳で見上げるネコが、恍惚とした表情を浮かべて喘ぐ。

「いやあ…溢れちゃう…」

「全く、お前は…反則だつて言つたろう!？」

気を許した途端に『氣』を受け入れたのか、首に腕を回し艶かしい声を上げ続け、ネコは俺の腕の中で果てた。

手術する

久々に夢を見た：夢の中で、何故か俺は大きな白い獣で…ある日、人間から供物と共に、貢物として1人の少女を献上された。

白い着物を着せられ祭壇に座らされた少女は、俺の姿を見上げると驚いた様に目を丸くした。

今迄献上されて来た女達は、ここで皆泣き叫び逃げ惑う…だから鬱陶しくて皆食ってやった。

だが少女は違った：『大きい』と言って笑ったのだ。

変な奴だと思つたが、泣き叫ばなかった褒美に、その場に捨て置いた。

しかし2日経つても3日経つても、少女は祭壇の上に座り続けている。

5日目、気になって仕方がない俺は、とうとう堪らずに声を掛けた。

「何をしている？」

「ぬしさま主様を待つてた。」

「何故？」

「主様の所に行けと言われた。」

「何故逃げぬ？折角捨て置いてやったものを…。」

「逃げる場所も、帰る場所も無い。」

「変わった奴め…名は？」

「無い。」

「何だと？」

「私は捨て子故、名を付けてくれる親も無い。籠に乗せられ川に流されたのを拾われた故、村人は皆好きな様に私を呼ぶ。」

ハアと溜め息を吐き、その小さな少女を見下ろした。

ぞんざいな口をきくが、真っ直ぐに俺を見詰める目が気に入った。

「儂と共に来るか？」

「どこに？」

「山の上じゃ。」

「主様の家か？」

「家…とは呼べぬが、住処じゃな。」

「行く！」

そう言つて、少女は嬉しそうに笑った。

「それでは、お前に名を付けてやろう。お前の名は…。」

ブラインド越しに射し込む朝の光が、柔らかに病室を照らす。

俺は、腕の中で息衝くネコのしなやかな軀を、今一度抱き込んだ。

どれだけこの時を待ち焦がれただろう…この軀を腕に取り戻す為に、この2年近く悶々とした日を送り続けて来たのだ。

なのに、この小悪魔ときたら…。

昨夜も、あのまま俺の首に腕を回し、艶かしい声を上げ続けて果ててしまった。

その色香たるや…絶対に誰にも見せたく無い。

思い切りこちらを欲情させておいて、満たされてさっさと幸せそうな寝息を立てる。

ネコがキスをしたり、愛撫を施すと眠くなるのは、多分『気』が満たされるからだろう…とすると、これからの生活に支障は無いのか！？

それとも、自覚の問題なのだろうか？

一人前の気配りを見せ、震い付きたくなる様な色香を漂わせる癖に天然で、考えたり行動したりする時には、中学生並みだったりするこのアンバランスな少女に…首ったけなのだからしょうがない。

頬に走る傷痕をネロリと舐めると、夢の中の獣になった様な心地がした。

あの少女はネコだ…あの後、少女と獣はどうなったのだろうか？

舌で辿る肌の感覚が心地好い…何となく甘く感じるのは気のせいかな？
そういえば、度々結婚を申込んでいるが…昨夜も答えてはくれなか

った。

焦り過ぎなのは重々承知しているが、ネコが16歳の時からプロポーズしているのだ。

嬉しいと言いながら引き延ばされ、自殺を考えて断られ、今又受け入れて貰えた気がする…だが、例え断られ様と、今度こそ離す気は無いのだ。

あの楼閣の様なビルは、指紋認証と掌型、静脈認証が無ければ入り込めないし、出る事も不可能だ。

いざとなったら、あのビルの自室に閉じ込めて…。

「…柴さん…くすぐりたいよ。」

腕の中で、ネコが肩を竦めてむずがる。

「何してるの？」

「…舐めてた。」

「何で？」

「甘い様な気がして…。」

「変なの…夢の続きだと思ったよ。」

「夢の？」

「…大きな白い…神様に舐めて貰ってる夢…。いつもの夢だよ…。」

「神様？獣か？」

「知ってるの？…あの昔話…悲しいから、あんまり好きじゃ無い。」

「どんな話だ？」

「好きじゃ無いの…馬鹿な女の子の話。ところでさ…此处、どこ？病院…だよな？」

「覚えて無いのか！？」

「何か…ぼんやりして…屋上から、武蔵先生の所に行ったよね？」

「そこから先は？」

「ん…あんまり…でも、駄々漏れしてる柴さんが、山の神様に見えた…だから、あの夢見たんだよ…きつと。」

そう言つて、ネコは笑った。

「駄々漏れつて、お前…。」

「今も、漏れてるよ…凄いいね…。」

そう言いながら、いきなり俺の顎をぺロリと舐めると舌舐めずりをする。

全く、コイツは…。

「お前：今の状況、わかつちやいねえだろ？」

「何が？」

「俺とお前は、今どういう状況に居る？」

「え？」

「マッパで誘うなっつたろうが！？」

ギョツとして口をへの字に曲げて俺を睨んだネコは、次の瞬間ニヤツと笑い、自分だって舐めてた癖にと俺の胸に抱き付いた。

「今だけ…柴さんの胸で寝るの久し振りだし…柴さん、凄くいい匂いするし…。」

「匂い？」

「うん…何か甘い様な匂い…駄々漏れだから？光ってるし…。」

「『気』が、匂ったり光ったりするの？」

「わかんないけど…多分。」

スリスリと胸に頬を擦り寄せ、見上げたネコの顎を捉えて口付ける。歯列をなぞり、口腔内に舌を浸入させると、ネコの小さな舌が俺を迎え入れた。

おずおずと絡める毎に、腕に抱く躰がぼんわりと熱を持ち力が抜ける。

腰を強く引寄せると、甘い呻きを漏らすネコの頬に手を触れた時、それは突然に起こった。

いきなり顔を離すと躰を硬直させ、目を見開き酷く怯えた表情を見せ…次の瞬間的目を伏せて視線を泳がせた。

「ナオ…。」

「…何でも無い…。」

熱を孕もつとしていた躰は、冷水を被った様に冷たくなり、緊張を解こうとしない。

堪らずに抱き締める俺に向かって、ネコは儚い抵抗を試みる。

「何でも無いったら！」

「ナオ…武蔵先生のカウンセリングを受けよう。」

「必要無い！」

「心が悲鳴上げてる…わからないか？」

「平気だっと言った！」

優しく抱き込み、時間を掛けて髪と背中を撫でてやり、緊張を解く。

「武蔵先生の部屋に行ったら、珈琲飲ませてくれるんだろう？」

「…ん。」

「あの黒い椅子で、風の音聞くの好きだろう？」

「…好き。」

「じゃあ、ナオの好きな事だけすればいい…話したく無ければ、話さなくていいんだ。」

「…ん、わかった。」

撫でられて、幾分トロンとしたネコの頬を舐めてやると、ネコは嫌がる素振りも見せず、ゆっくりと目を閉じた。

「手術だけは、受けるよ、ナオ。」

「…手術？左手の？…私、別に…」

「受ける…受けてくれ、手術。俺の為に、受けてくれないか？」

「柴さん…又舐めてる。」

「ああ…舐めるのは、怖くないんだろ？」

「…うん。」

「元々は動物は、舐める事で愛情表現を行って来たからな…人間が撫でるのと、同じ行為だから…」

「…そっか…そう…だね。」

「ナオ…それより。」

「わかった…受けるよ、手術。」

「やっと同意してくれたんだ、良かったよ。」

朝の回診時にネコの荷物を持って来た武蔵は、引き続きこの部屋を使う様に言った。

何でもネコの使っていた相部屋のベッドは、新たな入院患者で埋まってしまうたそうだ。

病院側の都合だから個室料は必要無いと言う武蔵に、ネコは何度も何度も念を押して確認していた。

手術の同意書にサインをさせてナースステーションに提出すると、訪れていた武蔵が笑顔を見せた。

「さつき、音戸沙夜さんの所に行つて来たよ。佐久間さん…君のお兄さんにも会つた。」

「来てたんですか。」

「そっくりだね…まるで、君達を見てるみたいだったよ。」

「それは…。」

「しばらく、乃良ちゃんに会つのは控えてくれと頼んだら、泣かれてね…佐久間さんが居てくれて助かった。」

「そうですか…。」

「佐久間さんが、全て心得たと…此方から用が有る時には、弟に連絡を入れる旨伝えて欲しいって言われたよ。沙夜さんの事は心配するなつて…素敵な人だね。」

「極道ですがね。」

「いや…何か、大人の器の大きさを見せ付けられたつていうか…正直そういう職業の人は、もっと横柄だと思つてたから。沙夜さんに対して、細やかというか…。」

「昔から艶福家で、女の扱いには慣れてますし…それに、ベタ惚れしてますからね。」

「やっぱり似てる!」

武蔵はゲラゲラと笑い、羨ましいと散々冷やかした。

「乃良ちゃんの担当医は替えたから、安心して手術に臨んで下さいつて伝えて上げて。そうだ…事前の検査で撮つたレントゲン見たんだけど、やっぱり何か握つてるね。」

「何でした？」

「わからない…何か細長い様な不規則な形の物だね。検査の度に、綺麗に取り出して欲しいって…自分の手よりも、そっちを優先して欲しい旨要望が出てるんだよ。何だかわかるかい？」

「いえ…。」

3日後、ネコの手術は行われた。

傷付けられた時の再現にならない様な配慮から、特別に全身麻酔で手術は行われた。

手術中、心配して手術室の前で待機していた沙夜は、無事に成功した事に安堵して、呉々も娘を頼むと言い残し佐久間の家に帰って行った。

麻酔が覚めた後病室に戻り、再び寝入ったネコの枕元には、先程形成外科の医師が持参したガーゼにくるまれた物が置いて有る。

「癒着も少なく、無事に取り出す事が出来ました。少し腐蝕しますが、彼女との約束を果たせて良かった。しかし、何故こんな物を握っていたのでしょうか？」

そう言いながらいぶかしむ医師の後ろで、武蔵が眉を寄せた。

形成外科の医師が退室した後、俺の顔色を窺いながら武蔵はガーゼにくるまれた金属を見詰めて言った。

「乃良ちゃんが拘った心当たり…有るんだね？」

「…これは、ナオの携帯に付けてあった物です。」

「ああ…金具も無くて、何かと思っていたんだけど…そうか、ストラップだったのか。」

「多分、手を焼かれた時に握っていたのでしょうか。」

「携帯を…取られまいとしたんだね。」

「それに…。」

顔を歪める俺に、武蔵が眉を寄せた。

「何だい？」

俺は黙って自分の携帯を見せると、武蔵は合点がいった様に溜め息を吐いた。

「そうか…女の子なんだなあ。君との絆を、ずっと握り締めてたんだね…。」

病室のドアを閉めると、ネコの腕に手を添えて目覚めるのを待つ。そつと左手に触れると熱を孕み、頬も幾分赤味が強い…熱が出て来たのだろうか？

少し呻くネコの額に口付けると、俺の名を呼びゆつくりと瞼を開いた。

「大丈夫か？辛く無いか？」

「平気…少し痛いけど…お水飲んでもいいのかな？」

抱き起こしペットボトルを渡してやると、音を立てて一気に飲み干す。

「…さつき、先生が持つて来た。」

ガーゼに包まれたままのストラップを渡してやると、ネコは嬉しそうに受け取ってそつと撫でる。

「ずっと…握つてたのか？」

「…うん。携帯は取られちゃったけど…油垂らされても離さないからって、火付けられちゃった。」

自虐的な笑いを浮かべるネコに、俺は思わず声を荒げた。

「何で！？そんな物の為に！？」

「そんな…物？」

「そうだ…！離しさえすれば、手を…手を焼かれるなんて事は無かったんだぞっ！？」

何も言わずに黙ってストラップを撫でていたネコが、顔を上げずに静かに言った。

「…柴さん、もう帰っていいよ。」

「えっ？」

「帰って…明日も仕事でしょ？忙しいんだから、毎日来なくても大丈夫だし…。」

「ナオ？」

「帰ってー!!」

ストラップを握り締めるネコが、肩を震わせ大粒の涙を溢す。
慌ててベッドに上がり抱き寄せると、ネコは腕の中で何も言わずに泣きじゃくった。

「悪い…傷付けたか？」

「手術なんて…するんじゃ無かった…。」

「何言ってる！？何だ…何を傷付けた？言ってくれ、ナオ…。」
被りを振り続けるネコに、俺は焦りを覚えて言った。

「なあ、ナオ…心の中の物、吐いちまえよ…我慢するなって言うた
らう？」

しばらくすると、ネコは大声を上げて泣き始めた。

「……宝物だったのに…このストラップがあったから、我慢して来
れたのに……柴さんの馬鹿あー!!」

ネコはオンオンと泣きながら、俺の胸を叩き続ける。

「悪かった、そんなつもりで言ったんじゃ無いんだ…だかな、ナオ。
例えそれがお前の心の支えでも、お前の身を傷付ける物なら、俺は
排除しようとするし、疎ましく思ってしまう。それは、仕方無いだ
らう？」

「…。」

「お前が大事だ、何よりも…物には代わりが利くが、お前の代わり
は誰もいないんだ。大事にしろ…身も、心も…。」

涙の跡を舐めてやりながら、俺は黙ってネコを撫で続けた。

与える

最近見る夢は、いつも同じ…ドラマの様に続きを見るのが、何となく楽しみになりつつある。

出てくるのは白い獣の俺と、ネコと思われる小さな少女だけだ。

俺は少女に『ナギ』という名を与え、山の上にある住処に連れて行った。

共に生活を始めて気付いた…人間とは存外に手間が掛かる。

水や食料を与えないと倒れてしまうし、濡れたまま放置すると病気になる。

普段はよく喋り、俺にまわり着いているナギは、具合が悪くなる
と途端に静かになり、住処の隅で横になったまま動かなくなる。

「お前は何故、助けを求める事をせぬのだ、ナギ？」

「…主様に助けて欲しいと願う人は、沢山居る故…。」

「お前は、厄介な童よのう…。」

病魔を食らい、気を満たしてやりながら俺が呟くと、ナギは済まぬ
と言って笑った。

この少女は、よく笑う…その笑顔を、喜ぶ顔を見たさに、俺はナギ
の世話を焼く。

「ほれ、こっちに来て休め…そんな所で寝て居ると、又病魔に巢食
われる。」

己の身に添わせる様にナギを寝かせ、大きな尾を被せてやると、ナ
ギは暖かいと笑って穏やかな顔をして寝入る。

時には川に、花園に…ナギを背に乗せて山を飛び越えると、歓声を
上げて喜んだ。

「村で、いつも主様が空を駆けているのを見ていた。」

「いつも？」

「空ばかり見上げておった故…だから主様がこんなに大きな方だと
は、思うても見なかった。」

そう言つてナギは笑つた。

この穏やかな日々が続くといい…俺とナギと、永遠に…。

「やつぱり、アンタ馬鹿でしょ!？」

「何だと？」

「乙女の気持ちちを、何も理解して無いって言つてんのよ、朴念仁!」

仕事の合間に久々に顔を合わせた京子が、ネコの様子を報告した途端に呆れて大声を上げた。

苦虫を噛み潰した様な顔をする俺に、京子は盛大な溜め息を吐く。

「で、どうなのよネコちゃんの様子は？」

「少し…鬱いでる。」

「まあね、親とも会えない、外に出る事も怯える、頼みのアンタと喧嘩したとあつちやあねえ？」

「喧嘩に等、なつて無い。」

「でも、大嫌いつて言われたんでしょ？」

「そりや…まあ…。」

「気に病んでるじゃ無いの?初めてでしょ、柴に感情ぶつけたの。」

「そうだったかな。」

「とりあえず、これ…頼まれてたネコちゃんの洋服や、必要な物一式ね。」

ガサガサと大量の袋に入つた荷物を俺に押しやると、京子は心配そうに尋ねた。

「一緒に暮らす事には、O・K・した訳？」

「…迷つてる風ではあるな。」

「何よ、それ…。」

「だが実際問題、あの状態で一人暮らし等出来ないだろうが？」

「まあ…そうかもしれないけど。気持ち、納得させてからの方がいいんじゃないの？」

「なら、一先ず俺の家で落ち着いてから、考えればいい。」
そうじゃ無くてと、京子が俺を覗き込む。

「大丈夫なの？そんな状態で、あそこに引き取って？」

「どういう意味だ？」

「だって…下界から隔離されるのよ？柴が仕事してる間は、1人ぼっちでしょうよ？」

「大袈裟だな。」

「やっぱり、わかつちやいないわ…。」

京子は、呆れて頭を振った。

仕事を終えて病院に向かうと、ネコは病室のテラスに出てぼんやりと月を見上げていた。

「どうした、そんな格好で？風邪を引くぞ？」

「…柴さん、仕事終わったの？」

「ああ…こんなに冷えて…。」

「平気だよ、この位。」

何となく覇気の無いネコに、自分の上着を脱いで着せると、暖かいと言って薄く笑う。

「何考えてる？」

「別に、何も考えてないよ？」

「嘘付くな…話せよ、なあ。」

「本当だって…月が綺麗だなんて、見てただけだよ。」

疑い深いなあと言って笑うネコに、何となく釈然としないものを感じながら、俺はネコの肩を抱いて室内に誘った。

「ナースステーションで、言われたぞ。お前、食事殆ど取って無いのか？」

「食欲無かったただだよ。」

「お前、一体…。」

「柴さん、どうしたの？」

「え？」

ネコは俺を見上げると、少し眉を寄せて尋ねた。

「何かあった？誰かに、何か言われたの？」

「…何故？」

「仕事忙しいの？疲れてる？どこか辛い所有るの？」

「ちよつと待て、どういう事だ？」

「だって…柴さん、少し変だよ…。」

「俺が！？」

「そう…。」

変なのは、俺じゃ無い…ネコの方だ！

何か心に抱え込んだまま、口を閉ざしているのはネコじゃないか！！

「ナオ…まだ、俺の家で暮らすのを渋ってるのか？」

又その話しかと言う様に、ネコは少し剥れた顔をして俺を睨んだ。

「嫌だなんて言ってないもん…ただ、鉄さんの話聞いて、そんな上等な所って住み慣れないから…だから、本当に行かなきゃ駄目って聞いただけだよ。何怒ってるの、柴さん？行くなって事になったんでしょ？いいじゃん、それで…！」

「ナオっ！？」

「…行かないって言ったら怒る癖に…何で行くって言っても怒るの？私…どうすればいいのよ…。」

そう言っただけで泣き出したネコを、俺はやんわりと抱き込んだ。

「怒ってる訳じゃ無い。俺は、お前が本当はどうしたいのか知りたいだけだ。住む場所にしたらって、あそこが嫌なら他を探したっていい…だが、お前が自分の目で見ない内に嫌がるから…。」

「嫌じゃ無い…柴さんと一緒なら、どこでもいいもん…。」

「最近はお前を泣かせてばかりだ…折角一緒に住めるのに…。」
「何かが違う、何かがおかしい…狂った歯車は、直らないのか…？」

元麻布のビルの地下2階にある駐車場に車を停めエントランスに入

つた途端、その物々しい警備とセキュリティにネコは怯えた。
無理は無い…此処のセキュリティは、警視庁を上回る。

連城の弁護士事務所には、政財界の名だたる面々が依頼に来る…特に連城個人への依頼は極秘である事が多いと言っのだから、この警備とセキュリティは必要だと言っ事だろう。

「大丈夫だから…」

怯えた表情を見せるネコの背中に手を添えてエレベーターの指紋認証を行うと、目を見開いてじっと窺う。

エレベーターに乗り込み、コンソールパネル掌を翳し29階のボタンを押す。

「…何なの…此処…」

「お前の弁護を引き受けてくれた、連城さんのビルだ。事務所や会社や飲食店なんかが沢山入ってる。俺の事務所も、このビルに入ってるんだが…」

「此処で仕事してるの？」

「そうだ。仕事場も住居も、このビルに有る。連城さんの家も、このビルに有るからな…弁護士事務所には、偉いさんも沢山来るから、それで警備もセキュリティも凄いいんだ。」

「…何か、怖いね。」

「大丈夫だ。お前の事も守ってくれる。」

「何から？もう、誰も追って来ないんでしょ？」

「そうだな…だが、此処だと不審者も入って来れない。安心だろう？29階に到着し廊下を進むと、幾つものドアが並ぶ…その中の一室のドアの前に立ち、ネコに鍵を渡した。

「此処が、俺達の家だ。」

ネコは渡された鍵でドアを開けると、お邪魔しますと中に入った。2LDKにしてはゆったりとした間取の部屋を珍しげに見て回るネコは、リビングに広がる眼下の景色に驚きの声を上げた。

「…高いねえ。」

「高い所、好きなんだろ？」

「え？」

「ラピュタ書房の社長に会った。お前が、高い所が好きだと言っていたぞ？」

「ちよつと…高過ぎて怖いよ。こんなに高い所、初めてだもん。」

「東京タワーや都庁は？登った事無いか？」

「無いよ…。」

「昼間よりも、夜が綺麗だ。光の絨毯みたいだぞ。」

「へえ…窓は…開かないんだ。」

「そうだな…風が強いからだろう？落ち着いたら、上に挨拶に行こう。」

「上？どこ？」

「連城さんの自宅だ。奥方も居る…西嶋画伯の件では、奥方にも世話になった。ちゃんと挨拶するんだぞ？」

「わかった。」

ネコは緊張しながらも、小さく笑った。

「いらつしゃいませ。」

迎え入れた縁無し眼鏡の固い表情の男に、ネコは緊張の色を濃くする。

「ナオ…連城さんの秘書の山崎さんだ。」

「…初めまして。」

「中で、クローネがお待ちかねです。」

「クローネ？」

「側近の人達は、連城さんの事をそう呼ぶんだ。」

「柴さんも？」

少し笑って頷くと、ネコは目を丸くした。

「遅くなりました。」

「ああ…待ってたぞ。いらつしゃい、躰はどうだ？」

「ありがとうございます。」

ネコは連城に向かつて深々と頭を下げ、隣に立ち上がった美しい女性に驚いて少し震えた。

「初めまして…音戸乃良です。この度は色々とお世話になり、ありがとうございます。…」

「いえ、此方こそ。退院した所なのに、躰は辛く無い？大丈夫？」

「はい…ありがとうございます。」

語尾が震えるのを気にしつつ、ネコは左側の髪をしきりに触って傷を隠そうとしていた。

俺達の話している横で、所在無さげに俯き目を泳がせるネコを見て、連城は眉を寄せ俺に囁く。

「対人恐怖症は、治って無い様だな。」

「申し訳ありません…今日は外に出て、知らない人間と顔を合わす事が多かったので、些か緊張が強くて…。」

「無理させるな、抱き込んでやればいい。」

手を差し伸べると、ネコは嫌だと被りを振り、小刻みに震えながら膝の上の手を握り締めた。

「西嶋画伯からの相続の件だが…。」

「その事は…もういいです。…何も…要らない。」

「放棄するのか、全て？絵は？」

「絵も…もういいです。私、相続税なんて払えないし。」

ネコを見詰めていた連城は、視線を俺に移して少し眉を寄せた。

「連城さん…手続きのお金と、連城さんに払うお金……柴さんじゃ無くて、ちゃんと私に請求して下さい。」

「え？」

「だから、ナオ！それは…。」

「嫌だつて言った！病院のお金も…ちゃんと払う！連城さんへの支払いも…一気には払えないけど、少しずつちゃんと払います。それでいいですか？」

「…柴、ちよつといいか？」

連城は席を立ち、俺と共に書斎に入った。

「どういう事だ？上手く行っていないのか？」

「申し訳ありません。色々抱え込んで、少し意固地になってます。」

「絵は、いいのか？あんなに頑なに嫌がってたんじゃ無いのか？」

「母親に、相続するには金が掛かると聞いたそうで…諦める様に諭された様です。」

「それで…しかし本心は？まるで、以前の椿みたいな顔をしている…心が壊れそうな。お前も…」

その時、リビングからガシャンと何かが碎ける音がして、俺達は慌てて戻る。

「大丈夫よ、平気だから…」

「…ごめんなさい…ごめんなさい…」

床に碎け散った珈琲カップの欠片を拾い集めるネコと、それを押し留める椿が、共に床に座り込んでいた。

「どうした？」

「乃良さんが、カップを落とされただけです。大事ありません。それより、乃良さんの指が切れています。」

「あら、大変！」

山崎が床に散らばった欠片を掃除し、椿はネコをソファーに座らせ傷の当てを始めた。

傷を消毒する為に椿に手を取られたネコは、ギョツとした顔を椿に向けると、泣き出しそうな声を上げる。

「…何で…どうして？」

「何？どうかしたの？」

「…貴女みたいに綺麗で…幸せな、恵まれてる生活してる人が…どうして、そんなに薄いのか？」

「何の事？」

椿は訳がわからず、ネコの顔を見詰めている。

「連城さんの奥さんなんでしょ？連城さんは、あんなに濃いのに…そんな薄い『気』だと、死んじゃうよ？」

「何だっ！？」

「…止める、ナオ!？」

連城が叫ぶ横で、俺が叫んで止めるのも聞かずに、ネコは椿に抱き付いた。

「…大丈夫、私が分けて上げる…。」

「…ああ…。」

恍惚とした表情を浮かべる椿の背後から、連城が彼女を抱き込んだ。

「椿っ!？大丈夫か!？」

「…平気よ、ジン…何か…暖かい物が流れこんで…。」

「ナオ、止める!! 離れる!!」

「どういう事だ、柴!？」

「ナオが、椿さんに『気』を送り込んで…このままでは、ナオの命に関わります!!」

思い切りネコの軀を引き剥がした時には、既にネコは喘ぐ様な息遣いでグツタリしていた。

「馬鹿野郎!! 無茶な事しやがって!？」

驚く面々の前で、俺はネコに口付けて『気』を送り込む。

山崎に呼び出された七海が、俺に抱かれたネコの脈を取る。

「弱いな…救急車の手配は？」

「必要ありません。今ナオに必要なのは、俺の『気』を注ぎ込む事です!!」

俺はネコを抱き上げ、自分達の家に戻った。

監禁する

ナギと暮らし始めて、どの位経っただろうか？

ある日山菜を取りに山に入ったナギが、病に苦しむ男が倒れているのを見付けた。

聞けば、東国から流れて来た獵師だと言う。

俺と長く時を過ごし神気を浴びたナギは、身に巢食う病魔を取り除き、氣を与える術を得ていた。

病を癒して貰った獵師は、美しい娘に成長したナギを見初めたらしい。

「こんな山奥に、娘の一人暮らしは忍びない。一緒に山を下りようナギ！」

「私は主様と共に有る。行く訳にはいかぬ。」

「何を言う？あの岩室で、お前は一人で暮らしておるでは無いか？」

「貴方には、主様が見えぬのか？」

獵師には、俺の姿は見えないらしい。

「お前のその力、人の為に役に立てたいとは思わぬのか？」

「わからぬ…この様な力、有ることも私は知らなんだ。」

「病で苦しむ者を救いたいと思わぬか？癒された者は、皆お前に感謝するだろう。」

「感謝？私が…有難がられるのか？私の力が喜ばれる？」

「そうだ、ナギ…皆がお前の力を喜ぶ。」

山で起こる事は、どんなに小さな事でも俺の耳に届く…それが、どんなに小さな会話でも…。

「主様、獵師が私と共に山を下りようと言うて来た。」

「ナギ…お前の力は人外の物。人間は、お前を恐れるやもしれぬ。」

「獵師は、私の力が人を救い、人に感謝されると言うた。」

「お前は、どうしたいのか？」

「わからぬ…私は主様と一緒に居たい。だが、疎まれ続けて来た私

に、人が感謝するという事等、本当に有るのだろうか？」

「ナギ…お前は、人里が恋しいのか？人間は、お前を捨てたのだぞ！？」

「主様…私はどうすればよい？」

ナギは泣き出しそうな声を上げ、俺の腹に縋った。

ナギを手元に置きたい…いつまでも、永遠に…

だが、俺では人としての幸せは与えてやれ無い…人として夫婦になり子を作る、当たり前前の生活は与えてやれ無いのだ。

「…お前の…好きにすればよい。」

「主様！？」

「人としての幸せを追うのも、良いかもしれぬでな。」

「主様は良いのか？私が御山を下りても、何とも思わぬのか？」

「儂は元々一人で暮らしておった故…又元の気楽な生活に戻る迄よ…。」

三日三晩ナギは住处の隅で泣き続け、翌朝早くに獵師と共に山を下りた。

それから何年の月日が流れただろう？

ふらりと訪れた東国の神が、酒の肴に人里の噂を話して聞かせた。

東国の社に、人外の力を持つ巫女が居た…神託を行い、病を癒し力を与えるその巫女は、榊の生い茂る社の奥深く、逃げ出さない様に座敷牢に囚われていたという。

社の神主は、巫女の御業で大金を儲けていたが、先日巫女は力尽きて亡くなった。

巫女の力は娘が引き継ぎ、新しい巫女になったその娘も又、座敷牢に囚われていると…。

「馬鹿な娘よ…どこぞで神気を浴びたのだろうか…いいように弄ばれ利用された挙げ句、我子に迄禍根を残すとはのう…。」

獵師が見初めたのはナギでは無く、ナギの力だったという事か！？俺は傍らに置いてあった酒樽を、思い切り壁に叩き付けた。

じつとりとした寝汗を掻き、痙攣して目覚める。

何だ…今の夢は!?

あれは…『榊の巫女』の話だったのか!?

「…柴…さん?」

俺が痙攣した事で目覚めたのか、ネコは早鐘を打つ様な俺の心臓の音に眉を寄せて見上げた。

「どう…したの?…苦しい?…大…丈夫?」

「その言葉、そのまま返す。大丈夫なのか、お前!?」

「…へえ…き。」

「平気じゃねえだろ!? そんな苦しそうな息遣いしやがって…だいたい、今日退院した所なんだぞ!? 無茶な事しやがって…。」

「ごめん…ごめんね…又…迷惑…。」

「そんな事は、どうでもいい…もう少し休め。」

言いたい事、聞きたい事は山の様にあつた。

だが先ずは『氣』を満たし、体力を回復してやらないと…俺はネコの軀を再び抱き寄せた。

翌日、元氣になったネコに近所を案内する為、2人で外出した。

地下2階のエントランスでは、相変わらず怯えた素振りを見せる。

「あそこ、どうしても通らなきや駄目なの?」

ビルを出た途端に、ネコは俺を見上げて尋ねた。

「そうだな…プライベートスペースに上るエレベーターは、あの1基だけだからな。」

「…そうなんだ。」

「怖いか? 慣れて貰うしか無いが…。」

ムウと口を尖らせるネコの鼻を摘まむと、痛いよと言って笑った。

広尾駅の周辺を案内して昼食を取り、明治屋で買い物をし帰路に着くと、ネコは突然俺の腕に縋り公園を指差した。

「柴さん、あそこに行きたい!!」

広大な敷地を誇る有栖川宮記念公園は、元々陸奥盛岡藩下屋敷の跡

地を明治になつて宮家の敷地とし、後に公園として東京都に寄贈したものらしい。

多くの木々が茂り四季の移ろいを味わえ、湧水が溪流となつて西南側の池に注いでおり、園内には図書館も配されている。

「気持ちいいね…木も水も…。」

「お前は、本当に公園が好きだな。」

「前はさあ、あんまりわからなかったんだけどね…木や水や土が有る所つて、やっぱり『氣』が満ちてるからなんだよね…。」

「…そうか。」

風が揺らす木の音を、ネコは空を見上げ気持ち良さそうに聞いている。

「ナオ…お前、絵の事…本当にいいのか？」

「ん？いいよ、もう…どうでもいい。」

「お前…。」

「ああ、そういう意味じゃ無くて…嫌いだし、燃やしたいと思うよ？でも、あの絵見ても、誰もこんな汚い奴がモデルだなんて思わないでしょ？」

「いや…悪いが、それはどうか？実際、あの遺作展のチラシを見て、お前を見付けたんだから。」

「そう…でも、払えないもん。しょうがないじゃん？」

「何なら、相続税の代金も分割払いにするって手も有るんだぞ？」

「誰かに借りるって事？お兄さんか…連城さん？」

「ああ…頼むとしたら、どちらかだろうな。」

「嫌だよ、どっちも。お兄さんに借りるかもしれないって思ったから、お母さん諦める様に言っただと思うし…連城さんには、もっと借りたく無いかな。」

「何故だ？」

「何故つて…仕事絡みの付き合いなんですよ？やりにくいじゃん！ネコはハハハと笑いながら、

「それにねえ…払わなきゃいけない物を払えないって事は、分不相

応って事だよ。」

そう言って、遠い目をして水面を見詰めた。

「弁護士や手続きの金も、自分で払うつもりか？」

「そう、少しずつだけど…ちゃんと働いて返すよ。」

「何故、俺を頼らない？」

「何言ってるの？頼ってばっかじゃん！？」

「金の話だ！！」

すこし声を荒げると、ネコは口端を上げて気だるそうな視線を投げる。

「何怒ってるの、柴さん？」

「水臭いって言ってるんだ！」

「親しいのと、お金の問題って…別だよ、柴さん。」

「ただ親しいってのと違うだろうが！？」

「結婚の事？」

ストレートに質問され、俺は言葉を飲み込んだ。

「…拘るね、柴さん。」

「…嫌…なのか？」

「そうじゃ無い…でも私は…お母さんみたいには、拘って無いかな。柴さんは…。」

「俺は拘る。俺の母親は妾だったから…俺は…お袋の苦勞も見て来たし、自分が婚外子としてしか戸籍に記載されない悔しさも知ってるからな。」

「コンガイシ？」

「そう。結婚して子供が生まれると、その夫婦の『長男』とか『長女』と記載されるが、結婚せずに生まれた子供の戸籍には、ただの『子』としてしか記載され無い。」

「…悔しかったの？」

「まあな…子供の時も『極道の子』『妾の子』と呼ばれて悔しい思いをしたが、大人になっても味わうとは正直思わなかった。」

「私も前はね…自分の出生届の事、嬉しかったんだあ。私の出生届

の為に、お父さんとお母さん婚姻届出してくれたのも知ってたから。
『榊の女』には、戸籍無いからね…。」

「じゃあ…。」

「でもね…その役所に提出した書類の為にずっと逃げ回って、挙げ
句お父さん殺されちゃったんだよ？…たかが、紙切れの為に…。」

「…ナオ。」

池の畔に有るベンチに腰掛けると、ネコは俺を見上げて隣に座る様
に促した。

「路上で生活してた時もね…色んなホームレスの人と知り合ったの。
中には、結婚して子供も居るのに、家族と別れてホームレスしてる
人沢山居た。…帰りたい人、帰りたい人…家で待ってる人…紙
切れに翻弄されてる人、沢山見たんだあ。」
「…。」

「どれが正しくて、どれが正しく無いのか…私にはまだ正直わかん
ないけどさ。今確実にわかるのは、私このままでも十分過ぎる程幸
せだって事…。」

視線を上げて俺を覗き込むと、ネコはニッと笑って見せる。

「そりゃもう、怖い位にね！」

「…子供は、どうする？」

「子供お？」

「一緒に暮らしてたら、出来るだろうが！？」

「……欲しくない…特に女の子はね…。」

その声と瞳が、瞬間暗闇に飲まれたと思う程の冷たさを孕む。

「だからか？俺との事を拒むのは？」

「あ…違うよ！それは違う…！…違うと思います…柴さんと、そう
なってもいいって…思ってます。」

急に赤くなつて恥じらうネコの頭を、俺は優しく撫でてやった。

「ただ子供は…私と同じ様な事になったらさ、可哀想だよ。」

「もう誰も追って来ない…榊は潰れたからな。」

「でも、あの時みたいに乗りに乗って来る男達だって居るし…力の方

だつて…消えて無くなつた訳じゃ無い。」

「…お前、変な事考えてんじや無いだろうな?」

「変な事…つて?自殺するとか?」

「ナオっ!?!」

「考えてたよ、ずっと…消えて無くなりたいつて…画家のおじいさんの家でも、ずっと考えてた。でも寂しくなつて、直ぐに柴さんに電話して…ズルいんだよ、私…。」

「そんな事は無い!!」

「柴さん…幾つになつた?」

「え?」

「34歳だつて?本当は、そろそろ結婚した方がいいんだよね…柴さんも、結婚したいつて思つてるし…。」

傾き始めた陽の光が、水面に反射して柔らかな光が揺らめいた。

「私…最初に柴さんと出会つた時、まだ15だつたんだあ…もうすぐ18になるけど、まだまだガキでさあ…。」

「…。」

「結婚しなよ、柴さん…誰かいい人見付けて、結婚して子供作つて…私、それまでの繋ぎでいいからさあ。」

「繋ぎ?」

「そう…結婚相手見付かる迄の繋ぎ…。」

「……仮に俺に結婚相手見付かつたとして、その後お前は…どうするつもりだ?」

「何とかなるよ、きつと。18になるし…仕事出来る場所も増えるしね…。」

「…昨日みたいに、人の事助けて…倒れちまうだろうが!?!」

「ああ…人の役に立って死んじやうなら、それはそれで価値が有る事だと思つけど…。」

俺を窺い、申し訳無い様な顔を見せたネコは、視線を空に向けると感情を押し殺した様な声音で言つた。

「誰にも…迷惑掛けたく無いんだよ…。そうだなあ、人の余り住ん

でない山奥で、静かに暮らすってのもいいかもね。スローライフっていつの？」

「…帰るぞ。」

ベンチから立ち上がると、無言でネコの手首を掴み、俺は自分達の家が強引に連れ帰った。

「…お前の考えてる事はわかった。」

玄関の鍵を掛けると、静かに俺は言った。

「だが、納得したなんて思うな…。」

「柴さん？」

ネコの躰を担ぎ上げ、ベッドの上に放り投げると、俺は鬼の様な形相で捲し立てた。

「ふざけやがって…何が繋ぎだっ！？誰と誰が結婚するってっ！？」

「…柴さん…。」

「お前は、俺が誰でもいいから結婚したいと思ってるってでもいうのか！？ふざけんなっ！！」

「…。」

「挙げ句、人の役に立って死にたいだとか、山奥で隠遁するだとか…いい加減にしろよ、ナオ！？」

怯えるネコを追い詰める様にベッドに上がり、小さな胸倉を掴む。

「俺を翻弄する為に吐いてる言葉なら…どんなにいいか！？だが、

お前にそんな計算が無くて吐いてる言葉だとわかるだけに、始末が悪…。」

「…柴…さん…。」

「…今日からお前を…この部屋に監禁する。」

「えっ！？」

「お前も知っての通り、このビルは出入りに幾つもの認証システムを通らなきゃいけない…幸いお前の登録は、まだされていないからな…エレベーターは動かない。因みに、非常階段での脱出も無理だぞ…途中鉄格子が填まつてる。解除には、下の警備システムからの操作が必要だ。残念だったな…。」

悲しげに瞳を潤ませるネコを、俺は尚も追い詰める。

「逆らうな…この上お前を縛りたくは無い…。」

俺は、乱暴にネコの唇を奪った。

歩み寄る

「マジでさあ…アンタが、こんなに馬鹿だとは思わなかったわよ！」
電話の向こうで、京子が呆れた声を上げる。

「アンタ…私に、拉致監禁で引つ張りたい訳じゃ無いでしょうね？」

「そんな訳があるか！」

「まあ、私に自由に連絡取らせてる位だから、大丈夫だとは思ってるけど…」

「俺は、ナオの安全の為にしてるだけだ！」

「嘘だわね！アンタ、ネコちゃんが自分から離れそうで、怖かったんでしょ！？」

「五月蠅い！！！」

「柴…ネコちゃんより、アンタがカウンセリング受けた方がいいんじゃないの！？仲良くなったんでしょ、武蔵先生と…。話、聞いて貰ったら？」

「…必要無い。」

「意固地は、お互い様って事なんだ…とつと襲って、仕込んでやえば良かったのよ！」

「お前がそれを言うか！？ナオは、まだ１７で…トラウマだってあるんだぞ！？」

「アンタのは単に、及び腰！！！」

ガチャンと切られた電話口を呆然と眺める…京子の奴、署内から掛けて来たんじゃないな…。

全く…警察官で少年係りの刑事が、１７歳の少女を押し倒して孕ませるとは、何という言い草だ！？

とはいえ、自分のやっている事が誇れる事では無い事は、百も承知しているのだ。

ネコはあれ以来、家で大人しく過ごしている。

昼間はインターネット等をして、時間を過ごしているらしい。

寢室を別にしたいという希望は、言語道断と却下した…相変わらず添い寝の日々だが、毎晩絡み付く様にして眠る。

しかし、以前の様な充足感を得られない…苛立ちが募り、少し悲し気なネコをいたぶり、その罪悪感に又落ち込む日々が続いていた。ある日、仕事中に珍しくネコの携帯から電話が入った。

「…どうした、ナオ？何かあったか？」

「柴…俺がわかるか？」

ネコの携帯から男の声が聞こえて来た事に、俺はたじろいだ。

「誰だ、お前っ!？」

「俺だよ…佐伯だ。以前、新宿署で一緒だった佐伯啓吾だ。」

「佐伯…警視正…でありますか？」

「お…知ってたのか？そうそう、その佐伯だ。久し振りだな。」

軀の大きなギョロ目の先輩が目には浮かんだ…が、何故ネコの携帯で話しているのか!？」

「ナオは!？何かあったのですか!？」

「落ち着け、柴…彼女なら隣に居る。何も心配無い…変わろうか？」

「いえ…何故、ナオと一緒にいらっしゃるのか、お聞きしてもいいですか？」

「ああ、彼女とは廊下友達でな。お前の部屋の隣、俺の隠れ家なんだよ。ここ数日、廊下デートを楽しんでたんだが…。」

「はあ!？」

「最初は、かなり怖がられたんだが…お前とも幸村とも知り合いだと話したら、一気に仲良くなってな。それで、さっき幸村に電話して…事情を聞いたんだ。」

「…はあ。」

「今から彼女をデートに誘いたいんだが…駄目か？」

「…佐伯さん？」

「どこか行きたい所があるかと聞いたらな…公園に行きたいと言つてな。連れて行ってやりたいんだが…不味いか？彼女、お前の許可

が無いと駄目の一点張りでなあ……」

見掛けに寄らず世話焼きで誠実なこの先輩の性質は、昇進して手が届かぬ存在になっても変わらないらしい。

俺は溜め息を吐いて、受話器の向こうの佐伯に頭を下げた。

「宜しく願います、佐伯さん。申し訳ありませんが、夜迄付き合ってやって頂けますか？今日は、仕事で遅くなりそうなんです……」

「じゃあ、夕食を共にしてもいいんだな？」

「お願いします。」

「お前、何時頃上がれる？」

「10時には、何とか……」

「じゃあ、その後俺に付き合え。いいな？彼女はそれまでに、キチンと送り届けるから。」

「……わかりました。ナオに代わって頂けますか？」

携帯の向こう側で話声が聞こえ、ネコの少し不安そうな声が聞こえる。

「……もしもし、柴さん？」

「ナオ……出掛けて来ていいから……夕食も、佐伯さんと食べて来い。」

「え……いいよ、夕食は柴さんと一緒に食べる。」

「いや……今日は遅くなる。佐伯さんに、旨い物食わせて貰え。その人、金持ちだから。」

俺が笑うと、ネコは安心した様にわかったと言った。

「一つだけ、約束……」

「何？」

「……ちゃんと、戻って来い……」

「大丈夫だよ、柴さん……ちゃんと帰って来るよ。私の帰る場所、柴さんの所だけだから。」

少し安心して、楽しんで来る様に言つと、ネコは行って来ますと言つて電話を切った。

10階に有るジャズ&シガーバーに入店すると、既に来ていた佐伯がカウンターで杯を上げて笑った。

「お待たせ致しました。」

「いやいや…お疲れさん。どうだ、此所での仕事は？」

「基本的には今迄と変わらないんですが、クライアントや調査する対象が大物揃いで…。」

「だろうな…連城絡みだと、仕方が無い。」

アハハと笑いながら、佐伯は俺のオーダーが来たのを期に再び杯を上げた。

「可愛いな、乃良ちゃん。17だつて？」

「もうじき18になります。」

「公園で森林浴して…次にどこに行きたいか聞いたら、悩んじまつて…シヨッピングも必要な物は何も無いって言うし、カラオケも行つた事が無いって…そもそも、音楽を聴く機会が余り無いって言なんだ。…ちよつと、今時の若者とは違う雰囲気の子だな？」

「ナオは…少し前迄、有る事情で路上で生活していました。それ以前も、ずっと逃亡生活を余儀無くされていたので、生活を楽しむという感覚が無いというか…。」

「…えらくハードだな？とりあえず、ボーリングに連れて行つたんだが、初めてだつてはしゃいでなあ…可愛かつたぞ？」

「そうですか。楽しめたなら、良かった…。」

「食べたい物は？って聞いたら、ハンバーガーとかラーメンって言うんだ。それは柴に食わせて貰えって言ったら、又悩むんで…バイキングに連れて行つた。驚いてたぞ？あんなに沢山の食べ物、初めて見たつて…っていうか…お前、どんなデートに連れて行つてるんだ？」

「殆ど…そんな余裕はありませんでした。そういう生活を教えてやるうとした矢先に…拉致監禁されたり、事件に巻き込まれたり…。」

「話してみるよ…愚痴も含めて…。」

問われるままに、佐伯にネコとの出逢いからの事を話すと、グラス

を傾けながらフムフムと聞き入り、時折質問された。

「お前といい、連城といい…何でそんなハードな経験してるパートナーを選ぶかな？」

「椿さんもなんですか？」

「聞いてないか？彼女も…かなりハードな経験を積んで来てる。」

「そういえば、連城さんとは…やはり検事時代からのお知り合いなんですか？」

「いや…奴とは、大学が同期で…学生時代は、ずっと連んできた。検事時代は事件絡みでの付き合いしか無かったし、その後も連絡を絶つてたんだが…去年、ある事件がきっかけで再会したんだ。」

「新宿のヤク絡みの事件ですか？」

「知ってたか？連城というより、椿ちゃんが巻き込まれてな…まあ無事に解決して、2人もめでたくゴールインしたんだ。」

「椿さんとも、知り合いなんですか？」

「ああ…彼女の兄貴が、俺達の先輩に当たる人で…連城は、彼女をずっと育ててたんだ。」

「育ててって…ああ…確か14歳差だと病院で聞きました。大学の頃っていうと…」

「椿ちゃんが5歳。可愛かったなあ…今も別嬪だけだな。去年のクリスマススイブに、連城がこの店でプロポーズしたんだ。あの2人も紆余曲折あったから…信頼しあっている癖に、素直になれなくて大変だった。」

「…連城さんに…何か頼まれたんですか？」

「まあな…」

カランと氷を鳴らし、佐伯は新しい酒を注文した。

「あそこも、連城が椿ちゃんにベタ惚れだから…椿ちゃんの事となると、奴は暴走するんだ。」

「度々…ナオと2人で自宅に来る様に誘われています。」

「断ってるんだろ？」

「…来る様に、説得しろとも言われましたか？」

「いや…ただ、こういう事なのか知りたがってる。結婚後、椿ちゃんの体力が落ちてるのは、奴の悩みの種だ。病院で検査をしても、何も出ない。それが先日、乃良ちゃんと接触した途端に調子が良くなった…まあ、3日程で戻ったらしいがな。」

「…。」

「乃良ちゃんの言った言葉にも拘ってる…なあ、説明だけでもしてやってくれないか？」

「お断りします！」

「俺は構わないが…連城は多分諦め無いと思うぞ？」

「俺じゃ説明出来ません。だが、ナオを連れて行くと…アイツは又椿さんに施術して…命を危険に曝す。…ナオは…それで自分が死んでもいいと思っています。そんな事はさせられません…絶対に…。」

「柴…。」

「俺がナオを閉じ込めているのは、外に行かない様にする為だけじや無い…上の階に上がせない為でも有るんです！」

「…なら、それも含めて説明してやってくれ。そんな事情なら連城だって、何が何でも治療してくれとは言わないだろうからな。」

家に帰りベッドルームに入ると、微睡んでいたネコが目を開けた。

「…お帰り、柴さん。」

「ああ…起こしたか？」

スルリと右頬を撫でると、その手を追って顔を擦り寄せる。

「今日の…怒ってる？」

「いや…行って来ていいと言ったろ？楽しかったか？」

「うん。公園行って、ボーリングに連れて行って貰った。佐伯さん、上手だったよ！一気に全部倒しちゃうんだよ。」

「ストライクな…ナオは？上手く出来たか？」

「直ぐに、横の溝に填まっちゃうの…佐伯さんが、玉の持ち方や転がし方教えてくれんだけど、なかなか上手く行かなかったよ。」

「今度、連れて行ってやる。あちこち…一杯行こうな…。」

「…監禁は、おしまい？」

「…。」

ネコは俺の掌にスリスリと頬を寄せ、フワリと笑った。

「…いいよ、私…ずっと監禁されてても…。」

「…ナオ。」

「だって、柴さん…私の事抱き締めて、ずっと『悲しい、悲しい』

『寂しい、寂しい』って思ってるでしょ？私…柴さんが、そういう

風に思うの嫌だし…柴さんの事、抱き締めてあげたいって思うよ？」

「…怖くは…恐ろしくは無いのか？こんな、監禁する男の事を！？」

「そりゃ、最初は少し怖かったけど…柴さん、私の嫌がる事しない

し、私の事大事で…凄く好きだから…だから…。」

「…ナオ。」

ネコに覆い被さり、赤い唇を熱い吐息ごと奪う。

「ナオ…愛してる…。」

「知ってるよ。沢山…沢山愛してもらってる。」

「もう…死のうとなんてするな…誰かの為にならいいなんて…絶

対に思うな…。」

「…。」

「繋ぎでいいなんて、悲しい事言うな…俺が、お前意外に結婚等考

えられないのは、わかってるだろう？」

「…柴さん…私…。」

「ナオ…もう少し歩み寄ろう。俺は、自分の思いばかりをお前に押

し付けるし、お前は自己完結ばかりしてるだろう？」

「…うん。」

「互いに、もう少し歩み寄って…お前は、もっと…俺に甘える事を

覚える。」

「…私だけえ？」

プウと膨れて、俺を見上げて睨んで見せるネコに笑いながら、額にキスをしてそのまま視線から逃げて言った。

「もつと俺に甘えて…頼って、我儘言えよ。迷惑なんかじゃ無いんだ…男は、惚れた女を甘えさせてやりたい、甘えて貰いたいんだ…わかるか？」

「…沢山、甘えてるのにい。」

ネコが胸に顔を埋めて抱き付くのを、全身でその小さな軀を絡める取る。

「もつとだ…もつと甘えろよ…。」

ネコの肩と腰に腕を回しグイッと引寄せると、ネコは甘い呻き声を上げた。

互いに驚き、顔を見合わせ…次の瞬間ネコは恥じらい、もがいて俺から逃げようとするのを再び絡め取る。

「…ナオ…ナオ…。」

…時が…満ちたか？

怖がらせ無い様に口付けを与えながら、緩やかに大人の愛撫を与えてやると、ネコは甘い息と共に鼻に掛かった喘ぎ声を上げる。

パジャマの裾から手を入れて、その素肌を辿ろうとした時、突然俺の携帯とネコの携帯、2台が同時に鳴った。

ビクリと互いに痙攣し、熱い視線を絡ませたのは、ほんの数秒だったのだろう。

互いにアタフタと携帯を掴み、上擦った声で電話に出る。

「…もしもし？」

「健司か！？乃良も出たな！？」

「兄貴！？一体どうしたんだ、こんな時間に？っていうか、3台同時に？」

「ああ…沙夜と俺の携帯、2台で話してる。悪いが2人揃って、直ぐにこっちに来てくれ！」

少し焦った様な兄貴の物言いに、俺とネコは顔を見合わせた。

「どうした、何があった？」

「乃良、落ち着いて聞けよ？沙夜が、倒れた…妊娠したらしい。」

妊娠する

兄貴の電話でビルを飛び出した俺達は、兄貴の差し向けた車の後部座席に並んで乗り込んだ。

「…大丈夫か、ナオ？」

母親の妊娠を聞いたネコは、固い表情で膝の上の手を握り締めている。

その手に自分の手を重ねる…包み込んでやった固く握られた手は冷たく、小刻みに震えていた。

東新宿駅に程近い場所に有る兄貴の自宅に到着した俺達は、直ぐ様兄貴の待つ座敷に駆け込んだ。

「どういう事だ、兄貴！？沙夜さんが、倒れたって！？」

勢い込んで捲し立てる俺と反対に、ネコは静かに兄貴の前に座り頭を下げた。

「…ご迷惑を…お掛けしました。」

「何を言っている？謝らなくてはならないのは、俺の方だ。済まない、乃良…。」

「…命は…取り止めたんでしょ？」

その言葉を聞いて、俺はギョツとした。

「気付いていたか…大丈夫だ。すんでのところだな…。」

「どういう事だ…ちゃんと説明してくれ、兄貴！？」

兄貴のこんな表情を見るのは久し振りだ…親父が亡くなった時以来だろうか？

「…ここんとこ体調が優れなくてな…今日病院に行ってわかった。3ヶ月と言われたそうだ。俺が帰った時には、鬱いだまま寝込んでてな…子供は産めない、乃良に申し訳無いと泣き崩れて…目を離れた隙に、以前病院から処方されてた睡眠薬を飲んだ。幸い発見が早く、胃洗浄をして今は休んでいる。」

「…子供は？無事なのか！？」

「今の所はな…ただ、精神状態が不安定だ…妊娠初期には危ない状態では有る。」

「お兄さんは…お母さんと、結婚するつもりなんですよ？」

ネコは、兄貴を正面から見据えて言った。

「乃良さへ、承知してくれたらな。」

「お母さんは？」

「沙夜も、同じ考えだ。」

「子供は？欲しいの？」

「ああ、欲しい！！組の為に、絶対に欲しいのも事実だが…それよりも、俺は沙夜との間の子供は諦めていたから、嬉しくてしょうがねえ！！」

「…それが…女の子でも？」

「…男でも女でも、関係ねえぞ？」

じつと兄貴を見詰めるネコの瞳が揺らめいた。

「…それが…『榊の女』でも？」

「違うぞ、乃良。『榊の女』じゃねえ…『佐久間の女』だ。例え力を持った子供が生まれたとしても、佐久間の家の娘であれば、護つてやる事が出来る。そう思わねえか？」

「…そうだね。」

ゆっくりと頭を下げたネコが、膝の前に手を着いて身を屈めた。

「母と結婚して…籍を入れてやって下さい。」

「いいのか？」

「お願いします。」

「…お前達は？」

その質問に、ネコは顔を上げて小首を傾げる。

「私達？お兄さん、その事とは…別問題だよ。」

驚いてネコを見詰める兄貴が、俺に視線を移した。

「何だ、健司！？…説明して無いのか！？」

「…もう少し、時間をくれ。」

「沙夜が妊娠した以上、これ以上引き延ばす気はねえぞ！？」

「…もう少し待ってくれって!!」

「説明だけでも、しておくべきだろうがっ!？」

「止める、兄貴!？今は何も言っ!？」

「…何?…何の話?」

兄弟の激しいやり取りに怯えながらも、ネコは眉を寄せ俺を窺った。

「…実はな、乃良…。」

兄貴が説明しだすと、俺は堪らず席を立ち、驚くネコを残して座敷を出た。

兄貴や沙夜が、俺達の結婚に拘るには理由が有る…兄貴達が結婚すると、兄貴と兄弟である俺と、沙夜の娘であるネコの関係は、義理とはいえ戸籍上叔父と姪の関係になってしまうからだ。

実際に血縁関係には無いので、法律的な婚姻は問題無いのだが…それでも、義理とはいえ叔父と姪の結婚となれば世間体はかなり悪い。兄貴達は、そうならない様に、俺達の結婚を見届けた上で自分達の結婚話を進めようとしていたのだ。

結婚という…婚姻届に縛られたく無いというネコの気持ちを聞いてしまった後なのだ。

出来れば、今はこの話を聞かせたくは無い…やっと、歩み寄ろうと気持ち傾き掛けた矢先なのに…。

「…柴さん?」

背後から小さく呼び掛けられ、俯いていた視線を上げた。

目の前に広がる庭に、無造作に置かれた庭石や灯籠がボンヤリと浮かび上がる。

「…聞いたか?」

ネコは何も言わずに背後に近付き、俺の腰に腕を回した。

「焦る事は無い…世間体なんかも気にしないでいい。お前が納得する迄考えて、答えを出せばいいんだ。」

「…ん。」

俺の背中に顔を擦り寄せたネコの手を、俺はやんわりと包み込んでやった。

「お母さんの所…一緒に来てくれる？」

「ああ…。」

俺達は揃って、離れの沙夜の元に行った。

「…お母さん。」

「乃良！？」

ネコの姿を見た途端、沙夜は娘に抱き付いて涙に暮れ、ネコはそんな母親を優しく受け止めた。

「乃良…乃良…どうしよう？…お母さんね…。」

「おめでたなんでしょ？良かったね、お母さん。」

「良くなんか…良くなんか無いわ！？どうすればいいの！？」

「心配しないで、お母さん。お兄さん…佐久間さんが、お母さんの事も、お腹の赤ちゃんの事も幸せにしてくれるよ？」

ネコが沙夜の背中を優しく撫でると、沙夜はむずがる子供の様に頭を振って啜り泣く。

「まさか…子供を授かるなんて…もう嫌なのよ！あの時の様な、あんな不安な日々は…。」

「お母さん？」

「…女の子かもしれないと怯え…力が有るかも知れないと心配し…貴女が生まれた時、私がどんなに…どんなに…。」

何を言っているんだ…この女は…自分の産んだ娘を全否定する様な…。

それでもネコは、母親の背中を撫で続け…何度もごめんねと謝り続けた。

「怖いわ…恐ろしくて仕方が無いの…。」

「大丈夫…大丈夫よ…佐久間さんが約束してくれたの。男でも女でも関係無いって！お母さんとの間に子供が出来て嬉しいって言うてくれたんだよ。大丈夫、今度は護って貰えるから…お母さんも…赤ちゃんも…ちゃんと佐久間さんが護ってくれるよ。」

「本当に？…産んでも大丈夫なの？女の子でも？」

「大丈夫！『榊の女』じゃ無い『佐久間の女』だって言うてくれた

よ！佐久間さんの事…好きなんでしょ？」

「…それは…」

「護る事の出来なかったお父さんより…好きなんだよね？」

「…そう…あの人は…私を連れ出してくれたの。でも…」

「知ってたよ、私…お父さん、弱かったもんね…でも、一生懸命だったでしょ？許してあげてね？」

「乃良っ！！許して貰えるかしら…あの人にも、貴女にも…。幸せになる価値が有るのかしら…私達は…？」

「お父さんも、佐久間さんと結婚するなら、許してくれるよ…今度こそ幸せになつてね。佐久間さんとお母さんと、赤ちゃんの…3人で、幸せになれる…大丈夫、大丈夫だから。」

ネコは沙夜を寝かせ目を閉じさせると、頭先从足先迄スルスルと撫で…腹から胸に手を当てて、円を描く様に何度も撫で続け、布団を被せた。

「休んで、お母さん…」

「…な…お…」

「…大丈夫だよ…これからは、佐久間さんが居てくれる。」

沙夜は大きな息を吐き、穏やかな顔をして眠りに着いた。

付き添いの家政婦にお願いしますと挨拶をしたネコは、そのまま静かに部屋を出た。

離れから母屋への渡り廊下で追い付いた俺は、ボンヤリと庭石を見詰めるネコに声を掛けた。

「…ナオ…」

「ごめんね、柴さん…お母さん、興奮してたんだよ。柴さん居たのに…悪かったね…」

「大丈夫か？」

「…あの庭石…取っ払って、あそこ池造つたらいいのに…。きっと元気な子供が生まれるよ。お兄さんに、教えて来て上げれば？」

「…わかるのか？」

「何となくね…早い方がいいよ…」

「一緒に言いに行こう。」

「私…しばらく此所に居るよ…風が、気持ちいい。」

ネコは柱にもたれ、震える瞼を閉じた。

俺はネコをその場に残し、兄貴の待つ座敷に戻ると、沙夜との会話の全てを話した。

「沙夜は、弱い女だ…誰かに護られなければ、自分の足で立つ事も出来ねえ。」

「あれじゃ…どっちが母親なのか、わかりやしない。自分の産んだ娘を、生まれる前から疎ましいと言ったも同じ事だぞ。」

「普段は、娘の事を考えて涙する優しい母親だ…『榊の女』にとって子供を産むという事は、それだけデメリットが強いつて事なんだろうよ。」

「ナオも…欲しくないと言った。特に女は嫌だと…。」

「…だらうな。大丈夫なのか、乃良は？」

「…多分、今頃は逃げ出してるだろう。」

「おいっ!？」

「大丈夫だ。GPSも有るし…多分、行き先は決まってる。」

「健司…。」

「一人で思い切り泣きたい時だつて有る…大丈夫だ。ちゃんと迎えに行く。」

「そうか…。許してやってくれ、沙夜は…乃良に許して欲しかったんだろう…大丈夫だと言つて欲しかったんだ。」

俺は立ち上がつて、座敷の障子を開けながら言った。

「今回限りだ、兄貴…これ以上ナオを傷付けるのは、許さねえからな。」

「わかつてる。籍は…子供が生まれるギリギリ迄待つ。」

「ああ…それと、ナオから伝言だ。庭石退けて池造つたら、元気な子供が生まれるとよ。」

「…直ぐ様、造らせよう。」

照れた様な顔で笑顔を見せる兄貴を残して、俺は座敷を辞した。

兄貴の家の玄関先で、佐久間組の若頭に声を掛けられた。

何でも屋敷を飛び出そうとしたネコを、深夜で電車も動いていないからと説き伏せて、車で送り届けたという事だった。

「悪かったな…。」

「いえ…様子がおかしかったので。先程、広尾駅の前で下ろして欲しいと言われて下車されたと、連絡が入りました。」

「そうか…悪いが、俺も同じ所迄送ってくれ。」

「承知致しました。」

思っていた通りだ…GPSで確認を取り、広尾駅の前で車を降りてコンビニに寄り、俺は有栖川宮記念公園に向かった。

迷わず以前ネコと座った池沿いのベンチに向かうと、暗闇の中で小さな影が座っていた。

「…やっぱり此所に来てたのか。」

俺を見上げて驚いた様に見開く目は、既に涙で赤く腫れていた。

「…何でえ？」

「ん？それだけ、お前の事を理解してるって事だろ？」

そう言つてネコの隣に座ると、コンビニの袋から肉まんを取り出してネコに見せた。

「食つか？」

ネコは何も言わずに受け取ると、大きくガブリと食い付いた。

「…お母さんね、一つ考え出すと…他は見えなくなっちゃうんだ…。」

「

「そうみてえだな？」

「お父さんはね…ずっとお母さんの事が好きだったの…だから、お母さんを連れて逃げたんだよ。でも、お母さんは…連れ出してくれるなら…誰でも良かったんだ…。」

「沙夜さんに聞いたのか？」

ネコは首を振り、お父さんと答えた。

「お父さん、いつも『乃良は、お父さんがお願いして、お母さんに産んで貰ったんだ』って言ってた…お母さん私の事産むの、ずっと怖かったんだね…」

「ナオ…。」

「お父さんがね…『お母さんを頼んだよ』って、最後に言ったの。救急車に乗る時に…。でも、もうお兄さんにバトンタッチしていいんだよね？」

「ああ…沙夜さんの事は、兄貴に任せればいい。」

「お母さんも…赤ちゃんも、幸せになれるよね？」

「…お前…あの時、何故自分を人数に入れなかった？」

「え？」

「沙夜さんと、腹の子と、兄貴の3人でって言っただけ？」

急に黙り込んで肉まんを食べるネコに、ペットボトルのお茶を開けて渡してやる。

ゴクゴクと半分程飲み干すと、蓋を閉めながらネコはボソリと吐く。

「…よく聞いてるね？」

「ナオ…幸せになる価値は、お前にも有るんだぞ？」

「…。」

「お前を幸せにするのは、兄貴じゃ無く俺だっただけの話だ。」

「…ん。」

ネコの肩に腕を回し、冷え切った小さな軀を抱き寄せた。

「…甘えろって言っただけ？一人で泣いてんじゃねえよ…」

胸にコトンと頭をもたげるネコの体温が、フワリと上がる。

「何かね…私…疲れちゃった…」

「休めばいい…俺の胸で休めばいいから…」

ネコは俺の胸で囁き上げ、やがて声を上げて泣き出し、俺はその背中と髪を撫で続けた。

どの位の時間そうしていただろうか…やがてネコの手を引いて、ゆっくりとビルに向かって歩き出した。

「今度の休み、横浜行くか？」

「…横浜？」

「中華街に、旨くて大きな肉まんが売っててな。店先で蒸籠蒸ししてるのを、並んで買っんだ。皆、それをかぶり付きながら街を散策する…お前の顔ほどデカい肉まんだぞ？」

ネコはクスリと笑いながら、いいね…食べ切れるかなと小さく呟いた。

対峙する

翌日から、ネコは昏々と眠り続けた。

熱が高い訳でも、『氣』が足りていない訳でも無い様だが、起きていても軀に力が入らないらしい。

七海に診察を受けても、特に問題は無いという事だった。

「内科的な疾患では無く、精神的な疾患なんじゃないかな？武蔵先生に、相談した方がいいかもしれないね。」

「本人が嫌がりまして…。」

「そつか…直ぐにどうこうなる様な状態では無いけど…うん、少し様子を見るのもいいかもね。」

12月に入り誕生日が来ても、ネコの状況は変わらない。

穏やかな顔をして寝入るネコの髪を撫で、その唇にそつと口付けると、ゆつくりと瞼を開けた。

「…おはよう、お姫様。」

「…おはよ…どうしたの、柴さん？」

照れた様に顔を赤らめるネコに、尚も口付けながら俺は言った。

「今日は、姫の誕生日だからな…やつと一緒に誕生日を祝える。」

「…ああ…そうだね…でも、いいよ…別に。誕生日なんて祝って貰った事無いし…。」

「…無いのか？一度も？」

ネコは、天井を見上げて記憶を辿っている。

「ん…無いんじゃないかなあ…子供の頃は、お父さんが『おめでとう』って言うてくれて…プリン買って来てくれたよ！あれは嬉しかったなあ…。」

「ナオ…体調は？良ければ食事に行かないか？」

「ごめん、柴さん…まだ出れそうに無いし、それに今日は平日だよ？仕事でしょ？」

「有給貯まってるんだ…。」

「仕事して下さい！私、出れそうに無いし。」

アハハとネコは、久し振りに笑い声を上げた。

「何か、食べたい物有るか？帰りに買ってきてやる。」

「じゃあねえ、プリン食べたい！」

嬉しそうにねだるネコの頭を撫でてやり、俺はポケットから小さな機械を取り出した。

「…プレゼントだ。」

「なあに？」

イヤホンを片耳だけ填めてやりボタンを押すと、サワサワという音が流れる。

「音楽プレイヤー…どんな曲が好きなかわからなかったからな。武蔵先生の所で使ってる風の音のCDを教えて貰って、ダウンロードしたんだ。」

ネコは瞳を潤ませて、両手で俺の首に抱き付いた。

「…嬉しい…ありがとう、柴さん！！」

それから、昼間ずっとプレイヤーで風の音を聞いていたらしい。ようやく体調が戻り、ビル内にあるイタリアンレストランへ繰越していた誕生日ディナーに連れて行くと、ネコは喜んではいだ。

「結局、体調が悪かった原因って、何だったんだろうな？」

テーブルに置かれたパスタを取り分けてやりながら尋ねると、ネコは曖昧な笑みを溢した。

「多分だけどさ…『気』が乱れてたんだと思うよ？人のは直ぐにわかるけど、自分のはさ…てんでわかんないんだもん。嫌になっちゃうよねえ？」

ネコは、皿に盛られたサラダを食べながら、コレも美味しいと言って喜ぶ。

「あの時、沙夜さんに施術したからか？」

「バレてた？そうかな…多分、違うと思うよ？」

「もう、本当に大丈夫なんだな！？」

「本当に心配性なんだから、柴さんは…。」

ウフフと笑いながら、ジュースの入ったグラスを口に付けるネコを見てドキリとする。

相変わらず小柄だが、時折見せる表情が随分と大人びて来た…そういえば体型も少し女らしくなって来たか？

だが、普段はまるつきり幼い中学生のままなのだ…相変わらずアンバランスな奴め！

そういえばあの日、時が満ちたと感じた…ネコも受け入れてくれたと思ったのだが…

「…柴さん？聞いてる？」

「ん？ごめん、何だ？」

「…私、そろそろ外に出掛けてもいい？」

「一人でか？」

「そう。昼間、スーパーに買い物に行ったり、公園行ったり…図書館も行ってみたい。」

「…まだ、バイトするつもりなのか？」

「何れはね…まだ駄目？監禁続行する？それならそれで、構わないけど…。」

「いや…外出は構わない。だが、バイトにはまだ早い。もっとちゃんと体調が戻ってから、俺も納得する所でじゃ無いと駄目だ。」

「…相変わらず過保護だね、柴さん。私もう、18になったんだよ？」

「お前は、直ぐに無茶をし出すから…以前の様に、事務所で働くならしいが…。」

「柴さんの所じゃ、給料出ないじゃん！？」

「なあ…俺が連城さんに一旦支払って、お前は俺に支払って行くつてのじゃ駄目なのか？」

「嫌だよ…なあなあにするつもりなの、見え見えだし。」

「頑固者！」

「お互い様でしょ？はい、アーン…。」

ネコは自分の口をポツカリと開けたまま、俺に長いグリッシーニを

差し出す……全く……自覚の無い色気を垂れ流しやがって…。

ガブリとかぶり付き、ガリガリと噛み砕きながら俺は言った。

「バイトの件はお預けだ！その前に、お前の情報を認証システムに登録しなきゃならない。」

少し眉を寄せる俺の顔を見て、カリカリと半分になったグリッシー

二をがじっていたネコは、不思議そうに尋ねる。

「何か……あつたんでしょ？」

「少しな……大丈夫、俺も一緒に行くから。」

翌日、俺とネコは連城の個人事務所の所長室に座っていた。

認証システムの登録が済むと、連城は俺では無くネコに笑いながら話し掛けた。

「もう体調は良いのか？」

「はい……もう平気……です。」

「緊張しなくてもいい。佐伯に話す様に、普通に喋っていいから。」

「……わかった。」

「相続の件、そろそろタイムリミットなんだが……本当に、絵も放棄していいのか？」

「構わないよ。払えないって、この前も話したでしょ？」

「……乃良、俺と取引きしないか？」

連城がニヤリと笑いながら、俺を横目で窺った。

「何を？」

「ん……その前に、説明して欲しい事が有る。」

「説明？何の？」

「椿の事だ。お前、この間ウチに来た時、椿の事を死んでしまうと言っただろ？」

「……連城さん、怒ってるの？」

「いや……こういう事なのか、説明して欲しただけだ。」

連城の厳しい表情に怯えたのか、ネコは隣に座る俺のスーツの上着

を握り締めた。

俺はその手を自分の膝に乗せて握り込み、大丈夫だとネコに頷いて見せた。

「『氣』がね…物凄く薄くて、びっくりしたの。だから、私のを分けて上げたんだよ。」

「…薄いと…駄目なのか？」

「臆、弱く無い？疲れやすいとか…氣力が出ないとか…。病院に行っても治らないと思うよ？」

「治るのかっ！？どうすればいいっ！？」

「クローネ、落ち着いて下さい！！」

物凄い形相と勢いに、俺の方が慌てて止めに入る…だが、ネコは黙って連城を見据えて言った。

「治るか、治らないか…ちゃんと診てないし…やってみないと、わかんないよ。」

「治せるのか！？」

「ナオっ！？」

「わかんない…多分『氣』を補充して、流れを正常にしてやれば大丈夫だと思うよ？後ねえ…此所に住むのは、ちよつとね。」

「この場所に、何か問題が有るのか？」

「場所…ん、場所はいいんだよねえ。たださあ…高過ぎるんだよ。」

「高さに…問題が有るのか！？」

「高過ぎて、地の『氣』がね…上がって来れないんだと思うよ？お姉さん、何年此所に住んでるの？」

「1年半程になる…。」

「ふうん…それ迄は？」

「芝浦に住んでいた。」

「芝浦？」

「芝浦埠頭だ。」

後ろに控えていた山崎が、スッと東京都の地図を差し出した。

連城が芝浦周辺のページを出して指差すと、ネコは俺に視線を向けて尋ねる。

「此所って、昔から有る所？」

「埠頭だからな…港はあったかもしれないが…」

「地面は？」

「え？地面？」

「それは…埋め立て地かという事でしょうか？そういう事なら、答えはノーですが。」

「そう…なんだ。ちゃんと、地面の上に住んだ方がいいよ…あのお姉さん。」

「だが、俺は長年此所に住んでいるが、何とも無いぞ？」

「そりゃあ…連城さんは…」

そう言つて、急にネコはゲラゲラと笑い出した。

「柴さんもさあ、駄々漏れしてるけど…連城さんは、噴火してるもん！」

「何の話だ？」

連城がいぶかしむのを、俺は補足して説明する。

「『気』が…溢れていると言っています。」

「金色でねえ、凄く濃くて…ハチミツみたい。飛び散ってるよ、ほら…」

そう言つてネコは指で掬う仕草をすると、ペロリと舐めて甘いと笑った。

「だから、不思議なんだよね…連城さんこんなに濃くて噴火してるのに、何でお姉さんあんなに薄いんだろ？仲いいんだよねえ？」

「…それはもう。」

連城の背後から、山崎が答える。

「やっぱり、診てみないとわかんない。本当は、連城さんの『気』を分けて上げるのが一番いいんだよ…好きな人のが、一番元気になると思うよ？」

「椿を…治してやってくれないか？」

「…お断りします、クローネー！佐伯さんから、お聞きになつていらつしるでしょう！？」

「柴…お前が乃良を大事に思う様に、俺にとつても椿は掛け替えの無い存在だ。だから…取引きしようと言つてゐる。」

「クローネー！？」

「乃良…西嶋画伯の絵…相続税は、全て俺が持つていい。何なら、あの別荘も手に入れてやる。だから…椿を…治してやつてくれないか？頼む…この通りだ。」

床に跪く連城を、ネコは醒めた瞳で見詰め、硬い表情を見せた。

「…私…要らないつて言わなかったっけ？絵も放棄するつて…況してや別荘なんて、端から相続する事なんて考えて無いしっ！！」

「…ナオ？」

「金持ちつて、だから嫌いっ！！何でもお金積みめば、思い通りになると思つてっ！！連城さんも、あの男達と一緒にゃん！？自分の欲望の為に大金積んで…『榊の女』を買いに來た奴等と一緒にだ！！」

「落ち着け、ナオ！」

俺はネコを抱き込むと、興奮して泣きじゃくる小さな軀をそつと撫で続け、大丈夫だと諭した。

「クローネ…俺だつて…貴方に金を借りて、絵を手に入れる事も考えた。だけどナオが止めたんです！貴方と仕事がしづらくなると考えて、ナオは…俺と貴方が対等で居られる様に…。」

「…済まない…だが、どんなに罵られ様が、蔑まされ様が…俺は椿を治してやりたい！その方法が有るなら…どんな汚い事だろうがやつて退けるだろう…。」

睨り上げながら俺の胸に縋り付いていたネコは、視線だけを連城に投げ掛けて言つた。

「…なら、何で取引きなんて言つての？何で、命をお金で買つみたいな事言つてのよ？」

「それは…。」

「私…お医者さんじゃ無いし…治せるかどうか、わかんない…。」

「それでも…可能性が有るなら、どんな事でも試したい!!」

「なら…頼めばいいじゃん。」

「え?」

「一言、診てやって欲しいって…言えればいいじゃん!？」

「ナオっ!?それは…」

俺は慌ててネコを連城から隠す様に抱き込もうとしたが、ネコはその腕を解いて涙を拭い、居住まいを正して連城と対峙した。

「知り合い…って言うより、友達としてなら…私は連城さんのお願い、聞いて上げてもいいよ?」

「本当かつ!？」

「但し…私一人では無理。」

「どういう事だ?」

「私一人の力じゃ無理なんだよ…柴さんの協力が無いと…無理だと思う。私の『気』が持たないから。」

連城は、ネコから俺に視線を移し懇願した。

「頼む、柴…椿を…救ってやってくれ!その為なら…」

「嫌だよ、連城さん!」

ネコは、再びピシヤリと連城の言葉を遮った。

「私…柴さんの『気』を、売る様な事したくない!!お金に代えられる物なんかじゃ無い!!」

「そうだったな…。改めて、柴。頼めないだろうか?」

「…ナオ…大丈夫なのか?」

「治せるか?やってみないと…」

「違うっ!!お前自身の事だ!!この前みたいに…人の役に立てるなら死んでもいいなんて…考えてるんじゃないだろうな!？」

連城がギョツとした顔で俺達を見詰める中、ネコはフワリと俺に笑顔を見せた。

「柴さん…」

「許さねえからな…そんな事考えてるんなら…」

「違うよ、柴さん。大丈夫…。大事な人の為に…出来る事をやりた

いだけだよ。でも、柴さんの力に頼らなきゃ、私何も出来ないからさあ…柴さんが駄目だって言うなら、止めるよ?」

「……お前は…ズルいな?」

「何で?」

「俺が…お前に惚れてて…断れない事、わかってるだろうが?」

「そんな事無いよ…柴さん、頑固だもん!!」

アハハと笑うネコに根負けし、俺は連城に向き合った。

「承知致しました。但し、ナオの躰を優先させて頂きます。宜しいですね?」

「承知した…宜しくお願いします。」

連城は俺達に深々と頭を垂れ…ネコはニツコリと俺に笑い掛けた。

施術する

鷹栖総合病院の精神科カウンセリングルームでは、3人の男達が頭を寄せ合っていた。

「僕としては…やはり、きちんと証明されない物を信じるっていうのは…だからこそ、データを残したいって思うんですよ。音戸さんの施術前と後のデータをきちんと見て、その上で判断したいですね。」

「どうかなあ…七海先生の気持ちもわかるけど…連城と椿ちゃんの主治医だしね。」

「それって、ナオを信用して無いつて事ですか？」

「ん…僕も医者の方だからね。武蔵先生の精神科ってのは、心の問題も有るから、目に見えない物でも受け入れられるかもしれないけど…僕は内科医だから、データ優先主義なんだ。」

「もしさあ…その連城のデータで結果が出なければ、七海先生はどうしたいのかな？」

「僕としては、椿さんの施術は反対するでしょうね…。」

「それで連城が納得すると思う？」

「怒る…なんて物じゃ無いでしょうね。クローネは、椿さんの事になると…。」

「狂うからな、アイツは…。」

ネコが椿の施術を了解するに当り、先に連城を施術したいと言ったが、これに七海が反発したのだ。

七海にしてみれば、主治医としてネコに領海侵犯を許してはプライドも許さないのだろうが、怪しい施術を主に受けさせる訳に行かないのだろう。

ネコはその遣り取りを聞いて、自分は遣らなくても別に構わないがと七海に気遣いを見せた。

途端に機嫌が悪くなる連城を見かねて、山崎が武蔵に相談してはど

うかと助け船を出したのだ。

病院に着いた途端に頭を寄せ合って相談する男達を尻目に、ネコはさっさと自らリラクゼーションチェアに潜り込み、風の音を聞いている。

「データで結果が出たとしても…それはそれで問題なんだよね。」

「どういう事です？」

「だって…医者必要性なくなるでしょ？手術も薬も必要無いって…これ、医者にとっては脅威だよ？もし、データが流出でもすれば、世間も黙って無いしね。」

「正に神の御業ですね…。」

「冗談じゃ無い！！やっと平穏な日々が送れる様になったんですよ！？そんな事なら…。」

「そうならない様に、細心の注意を図らないといけないって事だね？」

「彼女は…音戸さんは、どう考えているんでしょうか？」

「あ…言わない方がいいよ？」

「そうですね…面倒な事からは、極力逃げたがりますから、ナオは…。」

そう武蔵と俺が笑った時、背後から声が掛かった。

「私が…何？」

「いや、何でも無い。」

「…感じ悪うい！！武蔵先生、このCDって他にもシリーズ有るの？」

「有るよ。見てみるかい？」

うんと答えて、ネコは武蔵と共に資料棚を漁っている。

「柴さんは、正直どう思われます？」

「実際に俺は、ナオに施術をされている人間ですから…調べた訳ではありませんが、駄が楽になったのは事実です。それに、西嶋画伯の件もありますし…。」

「ああ…白内障を治したっていう？」

「武蔵先生に聞いて気になったので、西嶋画伯の通院していた眼科に確認を取りました。かなり進行した白内障だった様で、とても遺作の様な絵が描ける状態では無かったと…殆ど見えない状態であったのは事実の様です。」

「よく、その医者が話したね？」

「そこは…昔のツテが有りますから…。」

「成る程ね…。」

腕を組み難しい顔をした七海の前に再びネコが姿を見せると、心配そうに尋ねた。

「まだ、難しい話…してるの？」

「…音戸さん、ちょっと聞いてもいいかな？」

「なあに？」

「君…どこまで病を治せるのかな？」

パチクリと目を見開くと、ネコはクスクスと笑いだした。

「七海先生、私…何でもかんでも治せる訳じゃ無いよ？」

「出来る事、出来ない事…わかってるのかい？」

「少しならね。生まれた時から悪い所は無理なんだよ。あと、心の病気も無理。それから…癌みたいに、軀に巣食ってしまった物も無理だった。おじいさんで試したんだけどね…駄目だったよ。」

「後は？」

「ん…取るのは得意だけど、軀に飲み込むから苦しくて、上げるのは苦手だけど、疲れるだけって事？一番楽なのは、乱れてるのを治す事かな？」

「どういう事？」

「……わかんない。」

俺が鬼の形相で睨み付けるのを見て、ネコは小さく肩を竦めると後退りする。

「待てっ！？どういう事だっ！？」

逃げ出そうとするネコの腕を掴むと、怯えた様に嫌だよと振り切ろうとする。

「駄に…飲み込むって！？どういう事だ、ナオっ！？」

「わかんないもん！！痛いよ、柴さん！！」

「わからない訳があるかつ！？お前の施術とは…病を自分に移して癒す事なのか！？そんな事をすればっ！？」

「平気だもん！！平気なんだもん！！ちゃんと…消えて…無くなるもん…。」

半泣きになりながら訴えるネコの様子を離れて見ていた武蔵が、七海の肩を叩いて部屋を出る。

部屋のドアが閉まる音と同時に、俺はネコの駄を抱き込んだ。

「止めよう、ナオ…そんな事迄する必要は無いんだ。」

「大丈夫なんだって、柴さん…本当に消える…浄化されるんだよ。」

「お前が…施術をする度に苦しむのを見てるんだぞ！？苦しいんだろ？が…消えて無くなる迄は、その身で…病を受け止めるんだろう？そんな事…させられる訳がねえじゃねえか！？」

俺の身が震えるのをネコは優しく労ると、小首を傾げて見上げた。

「…嫌なの、柴さん？」

「ああ、嫌だ！！絶対させたくねえ！！」

「困ったね…もう連城さんと約束したし…私、あのお姉さん助けてあげたいよ？それに、病気じゃ無いかもしれないでしょ？」

「…嫌だ。」

「わかった…今度で終わりにする。今度だけ…ね？今度だけ、力貸して下さい。」

「…本当だな！？」

「うん。」

「約束だからな！？」

ネコは俺に抱き付いて、何度も頷いて見せた。

溜め息を吐いて、ドアの外の人を招き入れて事の次第を説明すると、驚いた七海がネコに質問をぶつけた。

「じゃあ、本当に病を吸い取るっていうのかい！？」

「ん…例えばね、熱中症の人が居たとして…私が出るのは、駄に

溜まつてる熱や痛みを取り去って飲み込んで上げると、乱れた『
氣』を治して、足りない『氣』を与えて上げる事だけなんだよ。水
は与えて上げられないの。ちゃんと水を飲んで貰わないと、助から
ないんだあ。他の病氣もそう…私には『氣』しか与えてあげられな
いから、躰が足りない物は、薬や食べ物で取り入れないと無理なん
だよ。」

「その『氣』を与えたり、治したりすると…どうなるんだい？」

「躰が、自分で治してくれるよ？元々自分で持つてる力を少しだけ
手助けしてあげるんだって、お母さんが教えてくれた。おばあちゃ
んの本に、書いてあつたんだって。…自然…ち…。」

「自然治癒力だね？」

「そうそう、それ…。お医者さんの薬を飲んで、よく効く様に手助
けしてあげたりね。昔は、薬なんかも作って飲ませたらしいよ？『
榊の巫女』って、お医者さんもしてたんだってさ。」

「成る程…ね。如何にも原始的かつ合理的な方法だが…一番人の躰
には…。」

「何？どういう意味？」

「いや…凄い事だけど、やはり秘密にした方がいいな…リスクが大
き過ぎる。」

「今回限りです…二度とさせません！！」

「その方がいいな…うん。」

七海が頷いて、武蔵と顔を見合せ苦笑いするのを、ネコは理解出来
ずに不思議そうに見上げていた。

連城の施術では、高血圧気味な結果しか出なかった様で、相変わら
ず『氣』が濃くて噴火しているとはしゃいでいたネコも、椿の躰を
診た途端に眉を寄せた。

「…どうなんだ？」

「薄いというか…何でこんなに少ないかな？それに…。」

ネコは微妙な顔をして、椿の耳元に何かを囁いた。

「…ああ…大丈夫よ。ジンも七海先生も知ってるから。でも、よくわかったわね？」

「何だ！？」

焦る表情を見せる連城に、椿が笑いながら答えた。

「避妊手術の事よ…内緒にしているかもしれないって、気遣ってくれたの。」

「影響が有るのか！？」

「女の人…力の源だからね。自分で作るには、限界が有るのかも…。」

「椿、やはり…。」

「駄目よ、ジン…これだけは、譲れないわ。乃良ちゃん、何か別の方法が有る？」

そう言つて椿が微笑むと、ネコは真っ赤になりながら答えた。

「連城さんから『気』を貰えばいいんだけど…お姉さんね…下手なんだよ。」

「下手？何が？」

「自分の『気』は、連城さんに与えてるのに…他の人や…自然からも、『気』を取り入れるの、物凄く下手なんだよ。それに…ね…。」

顔を茹で蛸の様に真っ赤にして俯くと、ネコは消え入りそうな声で小さく囁いた。

「…本当はさ…エッチするのが、一番ね…効果が有るらしいんだけどさ…お姉さん、手術してるから…なかなか…ねえ？」

「他に方法は！？」

「…スキンシップ、してる？」

「ああ…。」

「…どこに…一番してる？…あ、キス以外で…。」

そこまで言つと、ネコは真っ赤になった顔を手で覆い、床に座り込んだ。

「もう…超恥ずかしい！！なんでこんな、他人のエッチな事迄、

リアルに聞かなきゃなんないのっ！？信じらんないっっ！！」

居合わせた大人達は、啞然としてネコを見下ろし…やがてクスクスと笑い出した。

「柴…お前、一緒に暮らしてて…乃良とまだ…。」

「…ご想像にお任せします。」

「あれ？そんな事言っていいんですか、クローネ？柴さんも、貴方程じゃ無いと思いますよ？」

「七海！？」

そうよねと、隣で椿もコロコロと笑った。

「で、一番スキンシップする場所は…何処なんです、クローネ？」椿と顔を見合せた連城も、眉を寄せる。

「どこかしら…特につて考えた事無いから…。」

しゃがみ込んでいたネコは、ようやく立ち上がり椿の手を握った。

「遣り方覚えたら、きつと…自分で出来るから。全身で…取り込める…から…。」

手を握っていたネコの眉が、苦し気に寄る…俺は慌てて、背後からネコの軀を抱き締めた。

「柴さん…そのまま抱いててね…。」

ネコの顔は益々の歪み、息を荒くする。

最初は平気そうだった椿も、やがて顔を赤く上気させ、

「…手が…熱いわ…。」

と、恍惚の表情を見せ出した。

「ナオ…そろそろ…。」

「…もう少し…もう少しだけ…。」

様子を見ていた連城が、そっとネコの頭に手を置き、頭を揉む様に撫でた。

「…乃良、無理するな。一気に治す必要は無い…徐々にいいんだ。」

「ネコは頷いて、ようやく椿の手を離すと、俺の腕の中に崩れ落ちた。それから日を空けずに、ネコは連城宅を訪れて施術を行った。」

数日すると、朝からいそいそと荷造りを始め、俺が出社すると同時に30階に訪ねる迄になった。

「俺が夜に行く迄、絶対に施術始めるんじゃないぞ？」

「やらないよ。柴さんの仕事中に倒れて、呼び出したら困るでしょ？」

フフンと鼻を鳴らし、腕の中でネコは大威張りで答えた。

「何して過ごしてるんだ？」

「家に居る時は、お料理教えて貰ったり、お喋りしたり…連城さんが一緒の時は、出掛けたりもするよ？今度、家を見に行くの付き合っつて言われた。」

「外出…平気になったか？」

「うん。あの2人と出掛けると目立つちゃって…嫌でも視線に曝されるから、大分慣れたよ。この分なら、近い内にバイトも出来そうだなって思ってるんだあ。」

「それは、まだ先…椿さんの施術が終わってからだな。お前の体力が持たねえだろ？」

施術の後はグツタリするネコを、毎日抱いて帰り『氣』を送り込む日が続いているのだ。

「それにしてもさあ…連城さんって…子供だよな？」

「はあ！？」

「お姉さんと仲良くしてたらさあ…焼きもち妬いて、意地悪するんだよ！？」

「意地悪？」

「美味しい物ご馳走してくれるのはいいんだけど…デザートのカレーに付いてるチョコとか、フルーツとか…後で食べようと思って避けてたら、わざと横からかつ掠うんだよ！」

「…連城さんが…か？」

「アイスクャンディー食べてたら、私の腕掴まえてかじるしっ！！」
連城は…余程ネコを気に入って、からかっているのだろうと、頬が緩む。

「施術の方の調子は？」

「『気』を取り込む事にも、大分慣れたみたい。連城さんの『気』を受け入れる練習も順調だしね。」

「…いつ頃迄かかる？」

「え？…そうだなあ…2月位？3月には、もう自分達で循環出来ると思うよ？」

そうかと答えて、俺はネコを抱き締めた。

パーティーする

週末のクリスマススイブに自宅でパーティーをしようと連城が言い出し、ネコと椿は連日準備に走り回っている。

京子や真、鉄也達と集まる予定だったとネコが話すと、佐伯も参加するからまとめて皆でやろうと、連城はサラリと言って退けた。

今日はクリスマスツリーを買って飾り付けをした、明日はケーキを注文しに行くと、毎日愉しそうに報告するネコを見ていて、やっと人並みの楽しみを味あわせる事が出来ているのかとホッとしていた。そんな穏やかな日常が過ぎる中、事務所に一本の電話が入った。

「よう、柴。元気でやってるってなあ？」

「堂本か！？お前、何で此所の番号！？」

「そんな事より、訃報だ。榊の組長…亡くなったぞ。」

「！？」

「ウチの組で引き取ってたんだがな、昨夜心筋梗塞で亡くなった。畳の上で死ねたんだ、大往生だったんじゃないか？」

「葬儀は？」

「ウチで取り仕切る。さつき佐久間組長と、それから連城とも話したんだがな…お前、来るなよ。」

「何故だ？ナオにとっては祖父だぞ！？」

「だから…相談したんだよ、あの2人に！！公に組長の娘として知られてるのは、沙夜さんだけだからな。その沙夜さんは佐久間に入って、懐妊したってな？まあ、そうなると誰も手は出せねえし、葬儀も欠席させるとよ。んで、お前の所に居る娘…乃良だったか？」

「ナオが、どうした！？」

「存在は知られてても、顔はバレてねえからな。そこへノコノコ、孫だと名乗って葬儀になんぞ出席させてみる！？『榊の女』の跡継ぎの顔を、世間に公表する様なもんだろぅが？」

「確かに…。」

「まだなあ…諦めて無い馬鹿な野郎が居ないとは限らねえだろ？まあ、爺さんには好い感情持ってねえだろうし、時期を見て知らせてやりやあいんじゃねえか？」

了解した旨を話すと、堂本は今度こそ会わせると笑って電話を切った。

「凄い家だわね…って、住んでるのがあの2人じゃ納得って感じだけど…」

「まあ…だが、あの2人も多分近い内に引越すぞ？」

連城宅の驚く程広いリビングには、ネコの話していた大きなクリスマスツリーが、窓辺にはキャンドル等が飾られている。

テーブルには椿とネコが作ったカナッペやオードブル、佐伯が買ってきたフライドチキン等が所狭しと並んでいた。

俺の隣でシャンパンを飲んでいる京子が、愉しそうに椿や佐伯を慕うネコを見て、安心した様に笑う。

「ネコちゃんも、すっかり馴染んだみたいなのに…勿体無いんじゃないの？」

「いや…金持ちの相手は、俺の性に合わない…それに今の部屋は、ナオの躰に良く無いのはわかってるからな…」

「それ、高収入蹴る程の理由？」

「金持ちが、連城さんみたいな人ばかりじゃ無いのは、お前だつてわかってるだろう？あの人の持つて来る依頼は、今迄通り受けるつもりだが…後は、庶民の依頼で充分なんだよ。」

「どこで事務所探すの？新宿に戻るの？」

「そうだな…土地勘は有るが…まあ、焦らず探ささ。」

チャイムの音が鳴り、外出していたホストの連城が帰って来ると、一同は改めて乾杯をした。

「柴、ちよつといいか？」

隣に来た連城に誘われ、書斎に入りドアを閉める。

「この間の話：決心は変わらないか？」

「申し訳ありませんが、やはり事務所は辞めさせて頂きます。しかし、今の事務所に残りたい人間も沢山居りますので、事務所自体の存続には問題無いと思いますが？」

「俺はお前を信用して事務所設立の援助も、仕事も頼んで来たんだぞ？残った人間に援助するつもりは無いが…。」

「事務所も軌道に乗って来ましたし、折角着いたクライアントを逃すのは得策ではありません…金持ち相手に、上手く立ち回れる人間も沢山居ります。誰か良い人物を、所長に据えて存続して下さい。」

「…そんなに嫌だったか？」

「俺の性に合って無かっただけの話です…正直、クライアントを殴らなかつたのが不思議な位ですよ。」

そう言つて、俺は苦笑を漏らす連城に笑つて見せた。

「先日話した様に、クローネからの依頼は受けますが、他は庶民相手の…自分の納得行く仕事を選ぶつもりです。それに…。」

「…何だ？」

「前にナオの話していた事が気になったので…。」

「え？」

「椿さんの施術を決めた時、ナオは此所が高過ぎて地の『気』が届かないから良く無いと言いました。それは…椿さんばかりで無く、ナオの為にも良く無いと思いましたので…。」

「そうか…いつ頃を考えている？」

「まだ事務所も、住む場所も決めていません。春頃にはと、漠然と考えていますが…。今の事務所からは、河田鉄也を連れて行きます。ご了承下さい。」

「わかつた。…榊大善の話、聞いたか？」

「先日、堂本から電話が有りました。葬儀は…。」

「無事に済んだ。榊の自宅で執り行われた。」

「まだ、残つてたんですか!？」

俺が驚いて尋ねると、連城はニヤリと笑つて答えた。

「というか…手が付けられなかったと言うべきだな。歴代の『榊の女』の墓…あれが有る限り、あそこを無闇に掘り返せなかったんだ。一番新しい遺体が沙夜さんの母親だが…あれだけの遺体が出てくれば、警察のみならずマスコミも大騒ぎだろうからな…。」

「…そうですね…。」

「沙夜さんは、前のご主人が戸籍を復活させ、書類上は遺棄児童として記載されている。だから、戸籍上榊の家は絶えた事になる。堂本の若頭である森田が、榊大善が亡くなる迄あの土地に手を着けなかったのは、山程出て来る遺体を知らぬ存ぜぬで突き通す為だ。」

「成る程…。」

「マスコミが騒げば、乃良の耳にも入る…対処してやれ。」

「わかりました。」

「榊の土蔵だけは、取り壊したそうだ。あの座敷牢は、人の目に触れさせない様にしてくれた。中に有った『榊の巫女』に関する膨大な資料は…全て佐久間組長が引取った。」

「…そうですね。」

兄貴と沙夜さんがその資料を引取ったのは…沙夜さんに生まれて来る子供の為だけじゃ無い…ネコの為だろう。

「柴…今日、西嶋敏文氏と松原弁護士に会って来た。」

「え？」

「相続の件、正式に断って来たぞ。」

「…ありがとうございます。」

「まあ、あつちは喜んでいた…相当金に困っていたらしいからな。」

「ナオも…そんな事を言っていました。画伯の生前から、親子で揉めていたそうです。」

「…此所から先は…俺の独り言だ…。」

「え？」

胸元から赤い箱を取り出し、中の煙草に火を点けると、連城は紫煙を吐き出した。

「画伯の遺作に関して、モデルの女性より肖像権の侵害を訴えるに

はどうすればいいか、相談を受けている。画伯はモデルの承諾無しに絵を描いてるし、画伯の絵が写真並みに潔癖な写実主義なのは周知の事実だ。しかも、そのモデルに遺作を相続させるという遺言状が公開された後で、モデルの承諾無しに遺作展を行っている。この精神的な辛さは筆舌に尽くし難い…どうすればいいかと相談に来られている…。」

「クローネ…。」

「まずは、肖像権の侵害を訴える手続きをし、今後その絵を世間の目に触れさせない様にすれば如何かと、私は進言した。そうすれば、展示は勿論、販売する事も出来無くなる…私には、それを勝訴に持つて行くだけの自信が有る…。」

「…。」

「結果、敏文氏は…何とか穏便に事を収めて欲しいと懇願して来た。」

「」

「しかし…。」

「柴…遺作は…全て、俺が買い取った。」

「クローネっ!？」

「俺の手元に有る限り、あの絵が世間の目に触れる事は無いからな。」

「」

「…一体、幾らで…。」

「それは、お前が知る必要は無い。まあ、脅しが利いて思ったより安く手に入った。俺にしてみれば、いい財産が手に入ったってだけの話だ。」

「しかし…。」

「乃良には言うなよ？少なくとも10年は寝かせる積りだ。その頃、乃良の気持ちが悪えていたら、どこかに展示するかもしれんがな。それ迄は内緒にしておけ…又物凄い勢いで怒り出すからな。」

「アハハと連城は笑うと、席を立ち俺の肩を叩いた。」

「…ありがとうございます、クローネ…。」

「条件が有るが…いいか？」

「…何でしょう？」

「施術が終わって、互いに引越した後も…乃良と椿が付き合いを続ける事を許して欲しい。」

「それは…『気』を与え続ける為でしょうか？」

「その必要は無い…乃良がそう言ってくれた。施術が済み、椿が俺の『気』を受け取れる様になれば、通常の生活を送れるそうだ。」

「…そうですか。」

「俺が乃良に求めるのは、椿の友人としてあり続ける事…乃良の姉貴分として、今後も付き合う事を許して欲しい。」

「…それは、本人達が決める事でしよう？」

「だが、お前が反対すれば、乃良は…。」

少し不安気な表情を見せて、立ったままの連城が俺を窺った。俺は溜め息を吐いて立ち上がり、連城の前に手を差し出した。

「こちらこそ、宜しくお願い致します。」

「ありがとう、柴…。」

連城が、俺の手を力強く握った。

「酷いよ、連城さん！？又私のチョコ食べた！！」

「コレが、一番旨いんだ。」

連城がネコの手に持ったチョコレートを半分かじり、ニヤリと笑って見せた。

「全く子供みたいな奴だ…だが、乃良ちゃんを苛めなくなる気持ちは、少しわかるな？」

佐伯が笑いながら、俺のグラスに酒を注いだ。

「そうですか？」

「お前は、そんな事無いか？」

「どうでしょう…俺の兄貴も、ナオと出会った当初はよく苛めて泣かせてましたが…。」

「そうだろう…少し苛めて、膨れっ面をさせてみたくなる…そんな

キャラだな、乃良ちゃんは…。」

アハハと豪快に笑った後、少し優しい目をして2人を見詰め、佐伯は続ける。

「あの年頃の椿ちゃんと…ああやって過ごしたかったんだろうな、アイツは…。」

「え？」

「高校1年迄は、長い休みになる毎にああやって過ごしてたんだ…その後、結婚する迄は…擦れ違いや、事情が許さない事もあって、あんな風なやり取りを出来なかったから…連城も椿ちゃんも、乃良ちゃんを介して思いを繋げてるんだろうよ。勿論、充分に楽しんでいる顔だがな、ありや…。」

そう話す佐伯の視線を追うと、ずっと移動して目の前の影に止まる。…どうして助けてくれないかな、柴さんは!？」

ネコがプウと膨れ面を見せると、隣で佐伯が爆笑した。

「どうしてって…助けなくても、お前強いだろう?」

「そういう事じゃ無いもん!」

「何を怒ってる?」

「そりや、怒るわよ。」

京子と真が、グラスを持ってネコに加勢する。

「わかって無いですね、柴さん…。」

「そうよ、朴念仁!!」

「あ、それは俺も思います、総長!!」

「お前迄加勢するのか、鉄!？」

「いえ…総長が、時々…もどかしい位に…その…。」

「ハッキリ言ってやりなさい、鉄!？アンタの総長様は、肝心な所でニブチンなんだからっ!!」

「わかる〜!!柴さんって、そんな感じ!!」

京子と真の大虎コンビに溜め息を吐き、俺は鉄也に声を掛けた。

「鉄!!お前、この2人ちゃんと送って行けよ!？」

「えっ!?!自分がですか!？」

「当たり前だ！天宮さんは兎も角、お京は曲がりなりにも刑事だぞ？帰りに何か仕出かしたらどうする！？」

「そうだ！！忘れてた…幸村は放って置くと、交差点の真ん中で泳ぐ様な奴だった！！」

佐伯がギョツとした顔で、既に目が据わってニタリと笑っている京子を見詰めた。

「お京…お前、佐伯さんにも迷惑掛けてたのか！？」

「あれは、初めて佐伯さんから一本取った時です！！一本取れたら…浴びる程飲んでいいと…」

「本当に…浴びたんだ、幸村は…」

ワアワアと言いつ出した京子に呆れ、鉄也に耳打ちする。

「お京は…何かあったのか？」

「さあ…ですが、昨日は完徹だと言っていました。」

「馬鹿野郎っ！！直ぐに連れて帰れ！！」

鉄也が京子と真を引き摺って帰ると、俺は連城と椿に頭を下げた。

「申し訳ありません…お騒がせ致しまして。」

「いいえ…賑かで楽しかったわ！ねえ、ジン？」

「そうだな。」

「本当に五月蠅いばかりで…」

「私ね、柴さん…クリスマス祝うのって、これが2回目なの。去年は、ジンと啓吾君と3人で食事したんだけど…」

「…食事だけじゃ無いだろう？」

連城が、椿に優しく微笑む。

「でも、大勢でクリスマス会なんて初めてだったから…凄く楽しかったわ！！ありがとう、柴さん！！」

椿は、嬉しそうに微笑んだ。

再び貰う

翌日、ネコを誘って街に繰り出した。

この時期の街は、クリスマスと正月のディスプレイが混在し、人出も多く賑かな事この上無い。

普段は全く化粧等しないネコが、今日はうつすらと化粧をしている。聞けば、顔の傷を上手くカバー出来る方法を椿に習ったらしく、試してみたくなったらしい。

カフェで珈琲を運んで来ると、席に着いていたネコに数人の男達が話し掛けていた。

俺に気付いたネコがニツコリ笑って手を振ると、男達は引攣った顔を見せスゴスゴと退散する。

「何だっただんだ？」

席に着いた俺が暖かい珈琲の前に置くと、エヘへと嬉しそうにミルクを入れながらネコは笑った。

「ナンパされちゃった。」

「え？」

「だからあ、今から一緒に遊びに行かないかって、ナンパされたの！」

ブラック珈琲を啜りながら、俺は黙って目の前のネコを見詰めた。

俺の回りに居る女達…椿は別格としても、京子や真はキリリとしたキャリアウーマンで、いい女の部類に入るだろう。

沙夜も男の庇護欲をそその容姿だという事は、いい女という事だ。ネコを容姿云々で見た事は…正直言っただけ…最近娘らしくなったとはいえ、小柄でアンバランスで…可愛らしいと思っていたのは、正直惚れた欲目だと思っていた。

「彼氏と来てるんだって言っても、なかなか信用して貰えなくてさあ…柴さんが睨んでくれて、助かったよ。」

「睨んでたか？」

「うん…眉寄せて凄い顔してたよ？」

アハハと笑いながら珈琲を飲むネコを見て、マズイと思った…コイツを可愛いと思うのは、俺だけでは無いのだ。

今から大人に成るに従って、あの色香が隠せ様も無くなった時…どれだけの男達がネコに群がるのか…まるで発情期の雌猫に群がる雄猫の如く…。

「どうかした？柴さん？」

「…いや。」

訝しげに覗き込むネコに、俺は違う話題を振った。

「連城さんの家は、決まったのか？」

「まだだよ…場所が良くても家が気に入らなかったり…警備するのに不向きだったりって…連城さんと堀川さんがワァワァやってる。」

「椿さんは？」

「お姉さんは…笑って見てるよ。自分はどこでもいいんだって…連城さんの気に入った所でいいって…連城さんねえ、お姉さんの洋服迄選ぶんだって！」

自分がネコに執着するのも度が過ぎると思うが、連城に比べたらまだまだ可愛いものだと思う。

「ナオ…春頃に、引越そうと思う。」

「…どこに？」

「まだ決めてない。」

「仕事は？事務所と遠くなったら、不便にならない？」

「あそこの仕事も、手を引く事にした。」

「…何かあった？」

不安そうに眉を寄せるネコに、俺は笑い掛けた。

「何も無い…連城さんも了解してくれた。引き続き、連城さんの依頼には応える積りだしな。」

「そう…新宿に戻るの？」

「どうするかな…お前は、どこがいい？」

「私？」

「あそこから離れるのは嫌か？」

「そうじゃないけど…引越すなら、前みたいに新宿にアパート借りようかなって思ってた…」

「…俺と離れたいのか…新宿に戻りたいのか…どっちだ？」

俺の冷たい視線と声に驚いたネコは、ブンブンと頭を振った。

「言葉…間違えた？えっとね…説明するから…えっとね…」

そう言いながら、ネコは涙ぐみ慌てて言葉を紡ぐ。

「昨日ね、パーティーで…真さんからアルバイトに誘われて…出版の仕事のアシスタントやらないかって。前も掃除しながら見てたし、会社忙しいけど…中の人達いい人ばつかだし…だから、柴さんの仕事や住む場所が新宿の近くじゃ無いならさ…前みたくアパート借りようかなって…思ってた…」

真っ赤な顔をして俯くネコの頭に手を置くと、俺は溜め息を吐いた。

「なら…何故新宿がいいって言わない？新宿に住みたいって言えばいいだろう？」

「だって…柴さんは仕事…」

「まだ、どこで事務所を立ち上げるかも何も決めて無い…我儘言っているんだ、甘えろつつつたる？」

「…。」

「それに…俺は、もうお前と離れて暮らす気はねえぞ！？危なっかしくて、放つとけねえからな！」

「…酷い。」

「…堪えられ無い…我慢出来無い…って、言つたる？」

「…ん。」

「新宿で、事務所と住む場所を探す…それでいいな？」

「…うん。」

俯いたまま頷いて、グスンと鼻を鳴らずネコの髪をグシャグシャとかき混ぜて、幾分声を和らげて尋ねる。

「クリスマスプレゼント、何がいい？」

「え…何も無いよ？この間、音楽プレイヤー貰ったし…」

「あれは、誕生日プレゼントだろう？」

謙虚と言うより、この物欲の無さは…時折こちらを寂しくさせる。結局、コイツは甘え方を知らないのだ。

ネコにとって甘えとは、精神的な物だけだと思っている節がある…だが、それさえも俺の立場や仕事を理由に、殆ど自分の腹に飲み込んでしまう事の方が多い。

一緒に街を歩いていても、手を繋ぐ事は疎か隣に並んで歩く事さへ躊躇する…顔に傷を負ってから、それは余計顕著に表れた。

食事等を取る時に同席する以外は、人気の無いのを確認してしか近くに寄って来ない。

昔飼ってた猫に似た様な奴が居た…いつも少し離れた所からじつとこちらを窺っている。

他の猫が寄って来る時には絶対に側に来ないが、誰も居ない時には俺の背中の後ろで丸まっていた…自分からは絶対に膝にも乗らないし、他の猫が来ると飛んで逃げるが、抱いてやるとグルグルと喉を鳴らして顔を擦り寄せる…ネコはアイツにそっくりだ。

カフェを出ていきなり手を繋ぐと、驚いた様に振りほどかれた。

「自分で彼氏って、言っただろ？」

「え…そうだけど…」

「じゃあ、恋人気分味あわせろよ？」

「でもさ…人、沢山居るし…」

「だからだろ？誰も他人の事なんて気にして無いし、こう人が多くちや逸れて迷子になっちまう。」

再び強引に手を繋ぐと、最初こそ恥じらっていたが、直ぐに嬉しそうに擦り寄って来た。

携帯ショッブに足を踏み入れると、不思議そうに見上げ眉を寄せる。

「ボタンの調子が悪くてな…修理に出すんだ。」

店員との話の流れで、修理より機種変更の方が得だと説明されると、隣に座って聞いていたネコの顔色が曇った。

「お前のも、一緒に機種変更するか？」

「でも…私のどこも壊れて無いよ？」

「…一緒のがいいんだろ？」

「…。」

「クリスマスプレゼント…コレにするか？」

「…うん。」

恥ずかしそうに頷いて、ネコは自分の携帯を出した。

2人で機種を選び、食事に行き…ハタと思い付いて立ち止まる。

「どうしたの？」

「…ナオ、ストラップ…。」

「…。」

「嫌か？お前、あれ以来…携帯に何も付けてねえだろ？」

「…柴さんのも、一緒に変えていい？」

「ああ。」

「今度は、柴さんが選んで…！」

苦手なんだが…と呟きながら、以前鉄也が彼女にプレゼントするとシルバーアクセサリーを買っていた店があったのを思い出した。

確か…ストラップもあった様な…。

携帯を受け取り、アクセサリーショップに入ると、ネコは驚いた様に目を丸くして店内を見回した。

「どうした？」

「いや…柴さんのイメージと合わないからさ…ちょっと驚いただけ。」

どういう意味だとネコを睨みながら、奥のショーケースに誘う。

「いらつしやいませ。」

「ストラップが欲しいんだが？」

「当店のストラップは、お客様の好みに合わせてお作りする事が出来ます…先ずはベースとなるベルトかチェーンをお選び下さい。」

「どっちがいい？」

「柴さんに任す…！」

俺が、携帯に合わせた赤と黒の皮ベルトをチョイスすると、店員は

トレーの上にそれを並べて言った。

「このタイプですと、最大3個迄チャームを付ける事が出来ます。ベルトの端には、名前のアルファベットのチャームをチョイスする方が多いですね。」

俺は素直にKとNのチャームをチョイスし、ネコには迷わず目にライNSTOONを埋め込んだ猫の顔のチャームをチョイスした。

楽しそうに横から覗き込むネコが、クスクスと笑いながら呟く。

「流石に、あの犬じゃ可愛らし過ぎるねえ?」

「選んでくれよ。」

えーっと言いながら、ネコは牙の根元にライNSTOONが配されたチャームを選び、黒のベルトの横に置いた。

「何か…あんまり、お揃いっぽく無いね?」

「そうか?」

俺は猫と牙のチャームをもう一組取ると、それぞれのストラップの上に置いた。

「3個付けれるんだろ?」

嬉しそうに眺めていたネコはそっと手を出して、赤いストラップの下にKのチャームを置いた。

「…こつちがいいな。」

店員がニツコリと笑いながらセッティングしている間、俺達は店内を物色した。

「柴さんって、アクセサリー着ける人?」

「いや、着けねえぞ?」

「…前に、誰かのプレゼント選ぶのに、来た事があるの?」
少し口を尖らせるネコを見下ろし、可愛い焼きもちに笑みを溢す。

「鉄がな…前に彼女のプレゼント選ぶってんで、付き合わされたんだ。」

「鉄さん、そんな人居たんだあ!」

「言つなよ…その後、こつぴどく振られたんだからな…。」

出来ましたと店員に声を掛けられ、支払いを済ませると、店員がニツコリと笑って言った。

「オマケに、赤いストラップに鈴付けて置きました。」

「え？」

「彼女さん…あまりに可愛かったんで…。」

どうもと苦笑いし、俺達は店を出た。

ベッドの上でパジャマに着替えたネコが、無心になってストラップを付ける姿を見て、思わずデジャヴユかと目を見張った。

そう…2年前のクリスマス…プレゼントの携帯に同じ様にストラップを付けて…。

「又私から何にもプレゼント無いよ…いつも柴さんに貰ってばかりだね…。」

そう…前にも同じ様な事を言って…。

「来年は、ちゃんと用意するね…まあ、大した物上げれないんだけど…。」

やっぱり…同じ…。

ギシリとベッドを軋ませて躍り寄ると、ネコは驚いた表情を見せた。

「…柴…さん？」

「…ナオ。」

「どうしたの？…溢れて…淹みたいだよ？」

「…ナオ…貰うぞ…。」

そのまま押し倒し、唇を重ねる…驚いたまま固まっていたネコは、慌てて携帯をサイドテーブルに上げようと、腕を伸ばして逃れようとした。

「…柴さん…携帯…。」

「…いいから。」

「……いやあん…。」

ネコの小さな甘い悲鳴を聞いた途端、俺の中の何かがプツリと音を

立てて切れた。

ふつくらとした下唇を甘噛みしながらねぶり、小さな歯を分け入って上顎を擦ると、ネコはピクリと痙攣して息を飲んだ。

怖がらせ無い様に優しくその肌を辿りながら、舌を絡めて吸い上げる。

甘い呻き声と吐息を飲み込んで大人の愛撫を繰り返し、そつと身にまとっているものを剥がすと、薄く敏感な肌は桜色に色付いていた。唇を落とすとその肌に赤い花卉が散る…ネコは臍をくねらせて、甘い息を上げ膝を擦り合わせる。

「…ナオ。」

見下ろすと少し咎める様な視線で見上げられ、思わず口端が上がる…まだ抵抗するか…。

「…まだだ…もつと乱れて見せる…。」

再び与え続けられる愛撫に、ネコは身を震わせて臍全体を仰け反らせた。

焦らす様に優しく臍中に舌を這わせ、ギリギリ迄追い詰めては引く…もう決して逃げる事の叶わぬ様に、光る銀系の蜘蛛の糸で絡めとる…。

甘く蕩ける様な嬌声を上げ、快楽だけを追う事しか出来なくなる迄追い詰めると、ネコは腕を伸ばし潤んだ瞳で見上げた。

「どうした、ナオ？」

「…柴…さ…ん。」

「どうして欲しい？」

ネコの眦から、涙がこぼれ落ちる。

「…柴…さんっ…何とか…してえっ…!!」

ネコの臍を抱え上げ、じわりじわりと己が身を沈めると、嬌声を上げ弓反りになり震えた。

「…いい子だ、ナオ。」

「駄目っ!! 駄目え…。」

「大丈夫だって教えたろ？」

「駄目よう…おつきい…」

「…大丈夫だ…怖くない。力…抜いてろ…」

抱き締めても喉を仰け反らせるネコを首に抱き付かせて、その喉を甘噛みしてやりながら囁く。

「…大丈夫だ…俺は、お前に…快樂しか与えない。」

甘い吐息と声が混じり合う…互いの腕と視線が交差する…

軀の中に流れ込む…押し流され突き上げられる様な奔流。
欲情とは別の、その激しい光の渦。

…そうか…これが…

軀の下で噉り泣く、小さな声が訴える。

「軀の中…柴さんで一杯で…溺れちゃうよう…」

全く…この娘は…

戻る

その躰を手に入れた征服感、安堵感、充足感は、正直計り知れない物だった。

そして手放した途端、己が心と躰が渴望するのだ…まるで10代の頃に戻った様に、飢えた野獣の如く、愛しくて欲しくて堪らなくなる…。

ネコは、最初こそ戸惑いと恥じらいに居たたまれない様子だったが、躰を重ねる毎に必死にこちらの要求に応え、凄まじい色香を振り撒き、快楽に身を任せる事が出来る様になってきた。

腕の中で微睡むしなやかな姿態を愛で指で辿ると、擦ったそうに首をすくめて身を振る。

その反応に目を細め、頬の傷から首筋に舌を這わせると、嫌がる声が猫の鳴き声のようで、竦める肩に歯を立てた。

「…もう！柴さん…エロ親父だ！！」

「何を今更…」

「最近お兄さんに、そっくりだよ！？意地悪だしっ！？」

「そりゃ、兄弟だしな。それに…お前が、猫みたいになやアニヤア鳴くからだろ？」

「鳴かないもん！」

「嘘付け！」

ムウツと膨れっ面を見せるネコの鼻を摘まみ、クスリと笑いながら耳元に囁く。

「ウチの猫の鳴き声はデカイからな…新しい家は、壁が厚い所を探さないで大変だ…」

真っ赤な顔をするネコの耳朶に歯を立てると、やはりニヤアと鳴き声を上げた。

全く…このギャップは堪らない…。

「上手く行つてゐる様で、安心したわ。」

「…相変わらず、お前に連絡してるのか？」

「そおよゝゝ！下手な事したら、筒抜けなんだから！」

「…全部？」

「多分ね。」

頭を抱える俺の横で、京子が腹を抱えて笑った。

「…流石の柴も、私に頭上がないでしょ！？」

「勘弁してくれ…そうだ、俺の事以外も相談して来てるか？」

「母親の事は少しね…心配はしてる。子供の事も有るのに、籍はいづ入れるんだろうつて言ってたわ。」

「…兄貴が、子供の生まれるギリギリ迄待つと言ってくれた。」

「…そう。」

「他には？」

「他？別に…何か有るの？」

「…時々、妙に怯えたりボンヤリしたり、情緒不安定気味でな。相変わらず、自分の事は何も無い…で片付けちまう。」

「まあ、1人で外に出る気になった途端、補導されそうになったり、ストーリーされたりじゃねえ…この間待ち合わせてた時も、男の子からナンパされてたわ。」

「1人で出るのを、楽しみにしてたんだがな。」

「綺麗になったもの…新宿に帰ったら、大変だわよ！？」

「…わかつてる。」

「…家探し…進んでる？」

「いや…家も事務所も…出来るだけラピュタ書房の近くには考えてるんだが…中々思う様な物件が無くてな。」

「ネコちゃん中心に考えるつてのが…笑える。」

優しい眼差しを送りながらもからかう京子に、俺はムツとして言い返した。

「お前だって、さっき言つてたろ！？正直、又あの楼閣にナオを監

禁したいって思いの方が強いんだぞ!？」

「…やっぱり馬鹿だわ、アンタ。」

「何とでも言え…少なくとも、バイトへの送り迎えは、する気でいるんだ。」

「マジっ!？幼稚園児じゃあるまいし…過保護じゃなくて、アンタがストーカーだわ!？」

「んな事は、わかってるっ!！だが、今のアイツを見てみる!？無防備に自覚の無いフェロモン撒き散らして、その上男に声掛けされると、怯えた目して震えんだぞ!？頭の上から食ってくれって言ってる様なもんだろっ!？」

「…確かにね。気になって、おちおち仕事も出来無い…って事が。」

「…ああ。」

「…柴…私、物件に一つ心当たり有るんだけど、良かったら見に行く?」

「どこだ?」

「ん…それは、行ってみてから。話を聞いた時は、正直有り得ないって思ってたんだけど…。少し、お金も掛かるし…。」

「高いのか、家賃?」

「ん…それは、交渉次第だと思う。ただ…まあ、駄目元で見ってみる?」

「家か?事務所か?」

「柴が望めば、両方一気に手に入る…心配事も一気に解決するけど…これが最良の策なのか、正直疑問だわ…。」

躊躇する京子を追い立てて、鉄也に外出する旨を告げると、俺達は揃って事務所を出た。

「おい…ここって…。」

「そ、真のビルよ。」

京子に着いてエレベーターを上がると、会社の中はどこもかしこも慌ただしい。

「真!?!入るわよ?」

京子が奥まった部屋のドアを開けると、中で髪を縛ったスウェット
スーツ姿の真が、段ボールと格闘していた。

「ああ、京子さん…手伝いに来てくれた…んじゃ無さそうね。いら
っしゃい、柴さん。」

「お邪魔します。何だか…凄い状態ですね？」

真はアハハと笑い、応接セツトに俺達を誘った。

「引越準備で、大わらわなのよ！」

「新宿から引越すんですか！？」

「ああ…仮の宿にね。このビル、建て直す事にしたの。古いし、耐
震面でも少し問題があつてね。リホームも考えたんだけど…耐震リ
ホームって高くって…それならいつそ建て直そうって事になってね。」

クリスマスの大虎事件以来、真は俺に対しても、京子同様かなりフ
ランクに接して来る様になっていた。

「そうなんですか…。」

「今度は10階建てにして、下の階は立体駐車場にするのよ！今迄
来客用の駐車スペース確保出来なかったし、この場所立地はいいか
らコインパーキングとしても収入見込めるし…借金もとつと返し
たいしね…。」

「あの…天宮さん、こちらに戻るのには？」

「春の予定よ？あ、ネコちゃんも春からバイト入れるって言うてく
れてたから、当てにして待ってるわね！？そういえば…今日は、そ
の件でわざわざ？」

「違うわ、真！全く…アンタの話が終わる迄待たなきゃならないな
んて…新ビルの件よ。空いた階…もう借り手着いたの？」

「ああ…その件。まあ、色々話しは来てるけど…ちゃんと家賃払つ
てくれる、安心した人に貸したいんだけどね。最近この辺りも物騒
だし…やっぱり、柴さん借りてくれない？」

「はあ！？」

「事務所、探してるんでしょ？なんなら、住居込みで構わないわよ

？そうしてくれたら、同じ階に私の住居持つて来れるし…。」

「真はねえ…柴の事、番犬にしたいのよ!!」

「だって…元警察官で佐久間組の身内なんですよ？流石に女1人で此処に住むの怖いし。私個人だけじゃ無く、会社にとって防犯の意味でも、対暴力団つて意味でも、柴さんに事務所だけでも借りて欲しいんだけど…どう？」

「…此処に…住んでもいいんですか？」

「今なら、設計変更可能よ？柴さんもネコちゃんも、通勤0分！これって、美味しく無い!？」

真が俺を見上げてニヤリと笑った。

荷物を出し終わった部屋を見て、ネコが溜め息を吐いた。

「案外、荷物少なかったんだね。」

「そうだな…備え付けの物が多かったからな。」

「柴さん…お金、大丈夫なの？」

「お前が心配する事じゃ無い。」

そう言った途端、ネコの目がスツと細くなった。

ネコがこういう顔付きをする時は、ろくでも無い事を考えている…肩に回した手を背中を下ろし、そっと抱き込んでやり俺はネコの髪に顔を寄せた。

「そんな顔するな…大丈夫なんだ。新しい事務所も、連城さんが出資してくれる事になった。」

「でも連城さん、こっちの事務所も残すんでしょ？弁護士事務所の人が引き継ぐって…。」

「こっちの事務所の調査対象は金持ちで、新しく開く俺の事務所の調査対象は庶民つて事だ。だから心配すんな…大丈夫だから。」

「本当に？」

「ああ…だから、もう離れようだなんて思っ…わかったな？」

少し目を見張り、ネコは俺の腰に腕を回した。

「…そんな事思つて無い…柴さんが…もう終わりつて言う迄…傍に居る…」

「馬鹿野郎…言う訳ねえだろ!？」

腕の中で、ネコの躰が小刻みに震える。

「…お前…まだ…」

「…何でも無い。」

スルリと腕を逃げ出したネコを、後ろから捕まえ抱き込んだ。

「まだ…まだ駄目なのか? なぁ、ナオ…まだお前は、俺のモノにならないのか?」

「何言つてるの、柴さん!？」

俺は腕の中のネコを反転させ、噛み付く様な勢いで唇を重ねた。

ガチリと齒がぶつかる音がして、口の中に鉄臭い味が広がる…それでも勢いは止まらず、壁に押し付け舌を絡めて吸い上げた。

顔を離れた時、唇を切ったネコが少し困った様に笑っていた。

「…悪い。」

「いいよ…それより、時間平気? 電気もガスも、電話も今日来るんでしょ?」

ネコに急かされ、地下駐車場に停めてあったレンタカーに乗り込む。

「この車も、今日返すんでしょ?」

「ああ…急がないと…」

港区の役所で転出届を済ませ、新宿に急ぐ道すがら、助手席からネコが声を掛けた。

「柴さん、新宿の役所なら私わかるから、手続きして来るよ。序でに郵便局も行つて来る。」

「…。」

「私、荷物運びも役に立たないしさ。車の運転も出来無いからさ。」
「だが…」

「…少し、寄りたい所もあるの。行つてきちゃ駄目かな?」

「…ちゃんと…帰つて来るんだな?」

「信用出来無い?」

二ツと悪戯そうに笑うネコを見て、あの時腕の中で震えていたネコの様に、今度は自分が震えていた。

路肩に車を停めると、俺は黙って財布から金を出してネコに握らせた。

ネコは震える俺を抱き締めて、顎の下にキスして車を降りた。

「少し遅くなるかもしれない…でも、心配しないでね。私が帰るのは…柴さんの所だけだから。」

電話やガス、電気の手続きを済ませ、荷物を運び適当な場所に納める。

ネコの衣類の他には、俺の衣類と少しの生活雑貨、タオルやシーツ等しかない。

以前の事務所を畳む時、全て売り払ったからだ…あの事務所の匂いを引き摺りたくは無かった。

持って出たのは、少しの衣類と鉄也だけだった。

新居には、まだベッドと照明しか置いていない…家具も電化製品も、明日2人で買いに行く予定だが…。

何度も何度もGPSを確認し、ネコの居場所を追う。

役所から郵便局…繁華街からネコが次に向かったのは…多分、榊の屋敷跡だ。

榊大善の事も、その後ワイドショー等で大騒ぎしていた『榊の女達』の遺体発見の事も、ネコは何一つ尋ねては来なかった。

きちんと、話してやるべきだったのだろうか…GPSの地図を指し示す赤い十字の点滅を撫でながら、俺は逡巡していた。

迎えに行った方がいいのでは無いか!?

だがネコは、『信用出来無い?』と言ったのだ…『私が帰るのは…柴さんの所だけだから。』と言ったのだ!!

その後、新宿の街を徘徊している様なネコの足跡を見て、俺は携帯を閉じた。

春は、直ぐそこまでやって来ている筈なのに…何故こんなにも寒いのだろう？

寒いのは躰じゃ無い…心だ…。

このまま、この何も無い部屋で、心も凍り付いてしまつのでは無いかな…そう思った時、玄関で小さな音が鳴った。

「…ただいま…柴さん？居ないの？何で真っ暗？電力会社来なかったの？」

俺は何も言わずに玄関に走ると、帰って来たネコを抱き締めた。

「ごめんね、本当に遅くなって…明日のパンは買って来たけど…柴さん？」

「…遅い。」

「ごめんって…これでも、急いだんだけどね…晩御飯は？食べた？何か買って来ようか？」

「…何故電話しなかった？」

「したよ？帰りにしたけど…繋がらなかった。ごめんなさい、心配した？」

ネコを抱え上げベッドルームに連れ込み、そのまま何も言わず貪る様にネコを求めた。

驚いたネコは、それでも何一つ抵抗せず、少し強張った躰は甘い吐息と喘ぎに溶かされていった。

「…俺のモノだ…この躰も…心も…俺だけの…。」

飛び散る汗と甘い嬌声、誘う様な微笑みに煽られる。

スルスルとネコの指が俺の躰を這うと、得も言われぬ快感に蕩けそうになる。

「…ナオっ…。」

「駄目よ…もう少し…。」

「…や…めろ…。」

「大丈夫…全て受け止めて…後で、少し分けてね…。」

ネコの甘い吐息が吐かれると同時に躰の中に流れ込む暖かな光…やがてその光が渦巻き、躰の隅々迄染み渡る。

…これは『氣』だ…『榊の女』の房中術。

初めてネコを抱いた晩、その流れ込み渦巻く光に驚いた…そして、その後の自分の体調に目を見張った。

躰を重ねる毎にその術を体得したネコが、俺の上で身を仰け反らせる…まるで蓮の花が咲き、中から現れた天女のような姿…。

後から後から送り込まれる光…竜巻の様に逆巻く渦が、躰の細胞迄も活性化させて行く様な感覚…。

「…綺麗だ…ナオ…。」

我が身に納まり切れず噴火する様に噴出する『氣』に慄くと、パタリと胸の上でネコが倒れた。

渡される

気を失ったネコに、俺はひたすら『気』を送り続けた。

あの怒涛の様な『気』の注入…その後一気に体温を下げて気を失ったネコ。

そして何より、己のいつまでも光りで包まれている様な充足感…あれは『玉女採戦』に違いない。

『神の女』が房中術で、一方的に『気』を相手に与えるという『玉女採戦』…だが沙夜は、奪われる側は酷く身を損ねると言っていた。無理をさせない様に優しく抱き続けると、やがて少しずつ体温を上げ顔色が戻っていった。

そして一度だけ目を開けると、ネコは満足そうに優しく微笑み、そのまま穏やかな眠りに落ちた。

腕の中の温かさが心地いい…タベのあの、凍り付いてしまうのでは無いかと思う程の寂しさは、この温もりで無ければ癒せない。

ネコは、まだ出会った時の事がトラウマになっているのだ…そしてあの頬に傷を負った時の事を…まだ…俺に『捨てられるかもしれない』と心の底で怯えている。

思えば最初から、ネコは俺との事を『出会った』とは言わず、『拾って貰った』としか言わなかった。

そして、自分の中で燦る寂しさや怖れ、悲しみを、決して俺に見せてぶつけ様としない。

どうしたらその寂しさを払拭し、安心させてやれるだろう？

スルリと伸びた腕が俺の首に絡み付き、躰り寄ったネコが顎の下にキスをした。

「…ムー。」

「起きたか…おはよう。」

「…おはようじゃ無いんだよ。」

「何で？」

「おめでとう、柴さん！」

「…え？」

「え？じゃ無いよ！お誕生日でしょ！？」

「あ…そうだったな。」

「忘れてたの？あ…オヤジになるの嫌なんだあ…35歳だもんねえ。」

「クスクスと顔の下で笑われて、又顎の下にキスをする。」

「…大丈夫だよ…35になっても、柴さん素敵だから…。」

「…ナオ。」

「なあに？」

「お前、臆平気なのか？」

「…何で？」

「夕べのアレ…『玉女採戦』だろ！？」

「…なあんだ…知ってたんだ。お母さんに聞いたの？効き目…あんまり無かったみたいだね…心配事？…私の…。」

「声のトーンと共にどんどん体温が下がる…俺は堪らずネコの臆を抱き込んだ。」

「ごめんねえ、柴さん。」

「…。」

「私、逃げないから…柴さんの傍に居るって言っただよ？」

「…お前、まだ…俺に捨てられると思ってるのか？」

「瞬時に極限迄体温が下がり、強張った臆が痙攣を始める。」

「…柴さんが…そう…決めたなら…。」

「スルリと腕を解き起き上がったネコの臆が、心許無げに揺れる。」

「…お前は？お前の気持ちは！？」

「…最初に…言った。」

「じゃあ、何故縋ら無い！！何故諦め様とする！？」

「だって…此所は、柴さんの家だもん。」

「違う！！ナオ！！」

「…。」

「此所は俺の家じゃねえ…俺達の家だ！！」

俺は背後からネコを羽交い締めにし、肩口に顔を埋めた。

「…俺達の…家…。」

「そう…俺達の家だ。これから2人で家具も電化製品も選んで…2人の生活を築いて行く…2人の家だ。」

「…2人の…。」

「俺は、お前を決して捨てねえ！！そう言ってるだろうが！？俺を捨てるのは…お前だ…。」

ヒクンとネコの躰が痙攣し、小さなくぐもった声が聞こえる。

「…前も、そう言ってた。」

「そうだ！これ以上離れるのは、堪えられねえ！！俺が苦しいのは、お前が俺から逃げるからだって…何んでわからねえんだ！？」

「…何度も…何度も期待したんだよ…。」

「何？」

低く静かに、それでもはつきりとした口調でネコは続けた。

「その度に…何度も裏切られた。優しくしてくれる人も…強引な人も居たけど、面倒な事や私が怖くて逃げ出したら、皆どつかに行っちゃった。酷い奴は乗り逃げなんだよ…有り得ないよね？」

「…ナオ。」

「親にも結局捨てられてさ…生まれて来たの迷惑みたいに言われて…どこ行っても出て行けって言われて、居場所無くて…正直、どうなってもいいって思ってた。」

ネコが自分の事を話すのは、いつ以来だろう…ようやく胸に溜めた物を吐露してくれている。

「柴さんの事も、最初は気紛れで…女ってバレて、ベッドに入れて犯られると思ったんだよ？ラーメンご馳走してくれたし、それも仕方無いかなんて思った。だけど、優しく撫でて抱き締めてくれて、お粥作って医者に連れてってやるって…そんな事言ってくれる人誰

も居なかった。まあ、松田さんに連絡されて、逃げ出したんだからね。」

フウと息を吐いて、俺の腕から逃れた。

「その後探し出してくれて、引き取ってくれて…好きだって、惚れてるって言うてくれた。私…嬉しくて…でも怖くて…」

「怖い？」

「柵に捕まっても、画家のおじいさんの所に捕まっても、柴さんちやんと見付けてくれて、好きだって、愛してるって、いっぱい優しくしてもらって…でも、アキって人の言ってた通り、私じゃ柴さんに似合わないって思って…いっぱい迷惑掛けるし…遠くで柴さんの事想って生きてくのもアリかなって思ってたらさ…閉じ込められた。」

「…そうだったな。」

「あの頃からだよ…私の怖くて仕方が無い思いが、柴さんに移っちゃったんだねえ。柴さん、ずっと『寂しい』『悲しい』って思ってた…昨日も…そうなんですよ？」

「…。」

「そんな柴さん見てるの、私辛いんだよ…何とか出来ないのかって、あの頃からずっと考えてた。」

「…ナオ？」

「…終わりにしよう、柴さん。」

感情的では無い…凄く冷静なネコの声に、俺の躰の刻が止まった。ネコがスルリとベッドを降りるのを止められもせず、息をするのも忘れてネコが部屋を出て行くのを見ていた。

何をしている、俺は！？

早く…早くネコを追い掛けなければ！？

やはり…駄目なのか！？

どんなに追い掛けても、ネコの心には届かないのか！？

目が霞み、全身が痺れ…視界から色が無くなるのでは無いかと思った時、部屋の入口に再び全裸のネコが立っていた。

「…ナ…オ。」

「はい、コレ。」

ネコが、俺の鼻先に一枚の封筒を差し出した。

「私からの、お誕生日プレゼント。」

震える手で、封筒を持つ腕を引き寄せ、その身を絡め取る。

「嫌だっ！！」

「柴さん…。」

「絶対嫌だからなっ！！」

「柴さん…どうしたの？」

「ぜってえ別れねえ！！」

「柴さん…落ち着いて。」

「…嫌だ。」

「…顔上げて、柴さん。」

ネコが俺の頬を両手で挟み、頬に鼻先に、瞼にキスを落とし、最後に唇を重ねて来る。

その柔かで穏やかな優しいキスが離れた時、俺は放心しながら尋ねた。

「何故？」

「何が？」

「だってお前…終わりにしようって…。」

途端にネコの顔が赤面し、ワタワタと慌て出す。

「又…間違えた？あのね…違うよ…終わりにするのは、柴さんが色々悩む事…だから…。」

「ナオっ！？」

「ごめんなさい、ごめんなさい…誤解した？ごめんなさい…。」

ネコの謝罪に、ガックリと頂垂れた俺は、その場にふて寝した。

「ごめんね、柴さん。」

「…知らねえ。」

「コレ、お誕生日プレゼント…。」

再び封筒を差し出すネコに膨れっ面を見せて、顔をしかめて舌を出

す。

ネコは安心した様にクスクスと笑い、封筒を俺の横に置いて立ち上がった。

「私、シャワーして来る…気が向いたら、見てね？」

そう言つて、部屋を出て行つた。

何だったんだ、全く…一気に躰の力が抜けてしまった…。

誕生日の朝から、まるでフルスロットルのジェットコースターに乗っている様だ…。

寝返りを打つと、カサリと先程の封筒に触れた…手紙でも書いてくれたのだろうか？

中身を取り出すと、薄い紙が折り畳まれて…その中身を見て、俺は慌ててバスルームに飛んで行つた。

「ナオっ！？」

「ふえ？」

頭を洗っていたネコを抱き締めると、泡だらけの躰をワタワタとさせて笑いだした。

「泡だらけになるよ、柴さん！いつその事、一緒に入っちゃう？この風呂広いから、頭も背中も洗って上げられるよ？」

楽しそうにそう言つと、俺にシャワーを掛けて世話を焼きだした。

「なあ…アレ…。」

「見たの？」

「お前…嫌がつてたんじゃ無いのか？」

「ん？嫌じゃ無いって言わなかった？紙切れに拘つて無かつただけだよ…そんな物に拘らなくても、幸せだから…。」

「だが…。」

「柴さん、アレに拘つてたし…だから…私がアレ渡したら、安心してくれるかなつて思ったの。出す出さないは、柴さんに任す。」

「…いいのか、本当に？」

「アレ出したら、柴さん『寂しい』『悲しい』って思わなくなる？」

「効果覲面だ…だが、お前は？一体、何が怖いんだ？」

「わかんないんだよ…。」

俺の頭からシャワーを掛けながら、ネコは言った。

「馬鹿だから…何が怖いんだかわからないのかなあ？ スッゴい嬉しい時とか、楽しい時とかにも、急に怖くなる。今だって…怖いって自覚したら…もう…。」

シャワーヘッドがカランと床に落ち、濡れた床に丸まる様に座り込んだネコが、指を噛み呻き声を上げて震える。

「お前は、何でそうやって一人で耐えようとする？ 何で俺に縋らねえんだ？」

抱き上げてバスタオルで包むと、少し安心した顔で微笑んだ。

「昼から外出するから…今日出すぞ、婚姻届。」

「うん。」

朝食のパンをかじりながら、何と無くボンヤリしているネコに声を掛けた。

「少し寝て来い…まだ、疲れてんだろ？」

「…ヘーキ。」

「いいから…。」

ヘッドで添い寝してやると、ネコは直ぐに穏やかな寝息を立てる。

チャイムの音に、俺は寝室のドアを閉めると玄関に向かった。

「…アンタ達…ちゃんと連絡取れる様にしときなさいよ！」

玄関に入った途端悪態を吐く京子が、玄関に放り投げられたネコの上着やバッグを見て、フンと鼻を鳴らした。

「又…ネコちゃんに無体な事したんでしょ？」

ズカズカと入り込み、ネコのバッグから携帯を取り出し、床に置きっぱなし俺の携帯を合わせて差し出す。

「直ぐに充電する！！何かあったのかって心配したわ！」

「…悪い。」

充電機に携帯を置くと、京子はヤカンに水を入れながら尋ねた。

「ネコちゃんは？」

「さっき寝かせた。」

「誕生日プレゼント、貰った？」

「ああ…今朝貰った。保証人、サインしてくれたんだな。」

「あの子、どうしても松田と私に保証人になって欲しいって、頭下げに来たの。」

「え？」

「私は二つ返事で了承したけど、松田には…土下座したのよ。」

「何故？」

「自分が又新宿に戻る事、これから柴の世話になる事、許して欲しいって。柴を安心させる為に、婚姻届渡して遣りたいって。」

「…。」

「一番付き合いの長い私達に認めて貰わないと、意味が無いんだって…アンタには、過ぎた嫁だわ！？私が貰いたい位よ…！」

「…アレは、俺のだ。」

「今日出すんですよ？」

「ああ…昼から2人で出して来る。」

「夜、集まるから…結婚祝いと、序にアンタの誕生日祝い。」

「場所は？」

「8時に『Beer』で。今日は、貸し切りだって。」

「…わかった。」

「じゃ…おめでとう、柴。良かったわね。」

「ああ…ありがとな。」

珈琲一杯だけを飲むと、京子は口端を上げて帰って行った。

昼前にネコを起こし、用意をするのを待ちながら婚姻届を眺めていた。

「佐久間に…沙夜さんの所にも行ったのか？」

「役所の人だね、私が未成年だから、親のサインが必要だって教えてくれたの。序に本籍地も聞いてきたよ。榊の住所だって。」

「それで…榊に行ったのか？」

「何で知ってるの？お花をね…お供えに行つたんだよ。」

「…知つてたのか？」

「おじいさんの事？週刊誌で書いてあつたの見たの…だから…。榊でね、森田さんつて人に会つたよ？柴さんの事も知つてた。」

「ああ…以前会つた事が有る。」

「堂本さん…つて人の所に、是非遊びにいらっしゃいつて言つてた。お友達？」

「…古い知り合いだ。」

お待たせと言つて出て来たネコを見て、ドキリとした。
淡い水色のワンピースを着て、薄化粧をしたネコは内から光輝く様で…。

「柴さん？」

「…ナオ…キスしていいか？」

顎を引き上げ唇を重ね、その柔かな唇の感触に酔い、ゆっくりと舌を絡め吸い上げた。

「夜は、パーティーだそうだ。」

喜びながら靴を履くネコが、不意に尋ねる。

「そつえばさあ、柴さん。」

「ん？」

「私…柴さんのお嫁さんになつて、何すんの？」

…全く…この娘ときたら…。

【F i c】

渡される（後書き）

思いの外長い作品になって、驚いています。

そして、多くの方にご支持頂いた事に、本当に感謝しています。

作中、色々と矛盾点がありました…敢えて、そのまま突っ走りしました。

例えば、沙夜さんと佐久間さんが結婚しても、ナオを佐久間さんが養子縁組しないと柴さんとナオは叔父と姪の関係にはならないんですよ…（^―^；）

通常は、佐久間さんと結婚した沙夜さんの名字は、音戸から佐久間に変更になりますが、ナオはそのまま音戸乃良のまんまなんです。いやぁ…勉強不足で申し訳ありません。

最後迄、子供の様なナオでしたが…これからどうなるんだろう？（^―^；）

別ね作品で、ちらほら参加させて行きますので、お楽しみに…。それでは、最後迄読了頂き、本当にありがとうございました！又、次回の作品でお会い出来ることを楽しみに致しております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8461t/>

新宿のネコ

2011年7月31日04時38分発行